

紀伊国分寺

—紀伊国分寺跡・西国分廃寺の調査—

昭和 54 年 3 月
和歌山県教育委員会

序

紀伊国分僧寺が所在する那賀郡打田町東国分および尼寺推定地岩出町西国分は紀の川中流地域にあたり、近年、住宅開発等が盛んに行なわれています。

和歌山県教育委員会ではこれら開発に先がけ、紀伊国分寺跡の保存をはかるため発掘調査を計画いたしました。

昭和47年度の基礎調査につづいて、昭和48年度より6ヶ年にわたって発掘調査を実施してきましたが、最終年度にあたる本年度は、これらの資料をまとめ、発掘調査の成果を刊行する運びとなり、紀伊国分寺造営に係わる諸問題を解決する糸口を見いだしました。

ここに刊行する調査報告書は、紀伊国分寺跡保存のための基礎資料として、また広く一般の調査研究資料として、さらには、県民の文化財愛護の糧となれば幸いに存じます。

なお、調査の遂行については、長期にわたり御指導をいただいた調査委員会委員各位、また奈良国立文化財研究所のほか、岩出町、打田町教育委員会などの関係機関および関係者の方々に、さらには種々御協力をいただいた宗教法人八光山医王院国分寺ならびに地元住民の方々に対し心から敬意を表し感謝する次第であります。

昭和54年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 大 浦 善

例 言

1. 本書は、和歌山県教育委員会が昭和48年度から同53年度にかけ、国庫補助事業紀伊国分寺跡確認緊急調査として発掘調査を実施した、那賀郡打田町東国分に所在する紀伊国分寺跡、同郡岩出町西国分に所在する西国分廃寺の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査に際し、紀伊国分寺跡発掘調査委員会を組織し、調査委員会の指導のもとに文化財課技師藤丸詔八郎・桃野真晃が西国分廃寺（昭和51年度から同53年度に調査）を同 藤井保夫が紀伊国分寺跡（昭和48年度から同50年度に調査）を担当し、事業の一部を社団法人和歌山県文化財研究会に委託した。
1. 発掘調査の遂行および本書の作成にあたっては奈良国立文化財研究所ならびに同平城宮跡発掘調査部森郁夫、岡本東三氏の指導・助言を得た。
1. 本報告書は発掘調査に先立って昭和47年度に実施した紀伊国分寺跡基礎調査の成果を小賀直樹が、紀伊国分寺跡の発掘調査成果について藤井が、西国分廃寺の発掘調査成果を桃野が、それぞれ主担当となり作成した。

発掘調査委員

小野山節、羯磨正信、鈴木嘉吉、巽三郎、坪井清足、藤沢一夫（以上、和歌山県文化財保護審議会委員）、林真次（岩出町文化財専門委員）、小栗善行（打田町社会教育指導員）、林清（岩出町長）、鈴木正太（打田町長）、和中金助（社団法人和歌山文化財研究会会長）、榎本勝太郎（岩出町教育長）、坂口正次（打田町教育長）、井上光雄、梅田善彦、大浦善（以上、和歌山県教育長）

目 次

I	紀伊国分寺	1
第1章	紀伊国分僧寺・尼寺の歴史的環境	3
第2章	紀伊国分寺研究史	5
第3章	紀伊国分寺の沿革	7
II	紀伊国分寺跡	11
第1章	紀伊国分寺跡の概要	13
第1節	位 置	13
第2節	創建年代	13
第2章	発掘調査の成果	14
第1節	調査方法	14
第2節	寺域の調査	14
第3節	伽藍配置	16
第4節	遺 構	17
1	金 堂	17
2	塔	20
3	講 堂	24
4	中 門	25
5	鐘 楼	26
6	廻 廊	26
7	南 門	27
8	僧 房	29
9	軒 廊	34
10	その他の遺構	35
第5節	遺 物	36
1	瓦 類	36
2	土 器 類	50
3	その他の遺物	60
第3章	ま と め	61

Ⅲ 西国分廃寺	63
第1章 西国分廃寺の概要	65
第2章 発掘調査の成果	65
第1節 調査方法	65
第2節 遺構	67
1 塔跡	67
2 掘立柱建物・溝およびその他の遺構	69
第3節 遺物	76
1 瓦類	76
2 土器類	82
第3章 まとめ	89

図版目次

図版第1	紀伊国分寺・西国分廃寺周辺の平野部
図版第2	発掘調査前の紀伊国分寺
図版第3	紀伊国分寺金堂址階段部
図版第4	紀伊国分寺金堂址瓦積基壇（一）
図版第5	紀伊国分寺金堂址瓦積基壇（二）
図版第6	紀伊国分寺塔址全景
図版第7	紀伊国分寺塔址礎石
図版第8	紀伊国分寺塔址北階段部
図版第9	紀伊国分寺塔址基壇縁（一）
図版第10	紀伊国分寺塔址基壇縁（二）
図版第11	紀伊国分寺塔址瓦堆積状態
図版第12	紀伊国分寺講堂址瓦積基壇
図版第13	紀伊国分寺中門址
図版第14	紀伊国分寺僧房址全景（一）
図版第15	紀伊国分寺僧房址全景（二）
図版第16	紀伊国分寺僧房址瓦積・雨落溝
図版第17	紀伊国分寺僧房址遺物出土状態

- 図版第18 紀伊国分寺鐘楼址全景
- 図版第19 紀伊国分寺鐘楼址基壇細部
- 図版第20 紀伊国分寺廻廊址
- 図版第21 紀伊国分寺廻廊址細部
- 図版第22 紀伊国分寺軒廊址
- 図版第23 紀伊国分寺南門址・寺域
- 図版第24 紀伊国分寺埋木遺構
- 図版第25 紀伊国分寺軒瓦組合せ（一）
- 図版第26 紀伊国分寺軒瓦組合せ（二）
- 図版第27 紀伊国分寺軒瓦
- 図版第28 紀伊国分寺軒丸瓦細部
- 図版第29 紀伊国分寺軒平瓦細部（一）
- 図版第30 紀伊国分寺軒平瓦細部（二）
- 図版第31 紀伊国分寺道具瓦類
- 図版第32 紀伊国分寺丸瓦
- 図版第33 紀伊国分寺平瓦（一）
- 図版第34 紀伊国分寺平瓦（二）
- 図版第35 紀伊国分寺土師器・黒色土器
- 図版第36 紀伊国分寺須恵器・灰釉陶器
- 図版第37 紀伊国分寺三彩・緑釉陶器と越州窯青磁
- 図版第38 紀伊国分寺その他の遺物
- 図版第39 西国分廃寺航空写真
- 図版第40 西国分廃寺塔跡（一）
- 図版第41 西国分廃寺塔跡（二）
- 図版第42 西国分廃寺C・F区
- 図版第43 西国分廃寺G区、L・K区
- 図版第44 西国分廃寺出土軒丸瓦
- 図版第45 西国分廃寺出土軒平瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦
- 図版第46 西国分廃寺出土瓦のタタキ目
- 図版第47 西国分廃寺F区出土須恵器（一）
- 図版第48 西国分廃寺F区出土須恵器（二）
- 図版第49 西国分廃寺F・B・N・L・K・G区出土土師器・須恵器・瓦器

挿 図 目 次

第1図	紀伊国分寺の位置	4
第2図	紀伊国分寺と周辺のおもな遺跡	4
第3図	紀伊国分寺跡 寺地地割計画図と寺域調査トレンチ位置図	15
第4図	紀伊国分寺跡 寺域調査トレンチ5・7実測図	16
第5図	紀伊国分寺跡 主要伽藍調査図	17
第6図	紀伊国分寺跡 金堂址調査区全体実測図	18
第7図	紀伊国分寺跡 金堂址階段部実測図	18
第8図	紀伊国分寺跡 金堂址基壇南面実測図	19
第9図	紀伊国分寺跡 金堂址基壇南北断面図	19
第10図	紀伊国分寺跡 塔址全体実測図	21・22
第11図	紀伊国分寺跡 塔址南北断面図	23
第12図	紀伊国分寺跡 塔址基壇北面断面図	23
第13図	紀伊国分寺跡 講堂址トレンチ設定図	24
第14図	紀伊国分寺跡 講堂址基壇南面実測図	24
第15図	紀伊国分寺跡 中門址全体実測図	25
第16図	紀伊国分寺跡 中門址基壇版築状況実測図	25
第17図	紀伊国分寺跡 鐘楼址全体実測図	26
第18図	紀伊国分寺跡 廻廊址調査地点位置図	27
第19図	紀伊国分寺跡 廻廊址南西隅実測図	27
第20図	紀伊国分寺跡 廻廊址東北隅実測図	28
第21図	紀伊国分寺跡 廻廊址基壇断面土層図	28
第22図	紀伊国分寺跡 南門址トレンチ設定図	29
第23図	紀伊国分寺跡 僧房址全体実測図	31・32
第24図	紀伊国分寺跡 僧房址基壇北面実測図	33
第25図	紀伊国分寺跡 僧房址掘立柱と延喜通宝埋納位置図	33
第26図	紀伊国分寺跡 僧房址掘立柱位置図	34
第27図	紀伊国分寺跡 軒廊址東西断面図	35
第28図	紀伊国分寺跡 埋木遺構実測図	35
第29図	紀伊国分寺跡 軒丸瓦拓本・実測図(1)	38
第30図	紀伊国分寺跡 軒丸瓦拓本・実測図(2)	39
第31図	紀伊国分寺跡 軒平瓦拓本・実測図(1)	40

第32図	紀伊国分寺跡	軒平瓦拓本・実測図（2）	41
第33図	紀伊国分寺跡	軒平瓦拓本・実測図（3）	42
第34図	紀伊国分寺跡	道具瓦実測図	44
第35図	紀伊国分寺跡	丸瓦実測図	46
第36図	紀伊国分寺跡	平瓦拓本・実測図（1）	47
第37図	紀伊国分寺跡	平瓦拓本・実測図（2）	48
第38図	紀伊国分寺跡	巴文軒瓦拓本	50
第39図	紀伊国分寺跡	土師器実測図（1）	51
第40図	紀伊国分寺跡	土師器実測図（2）	52
第41図	紀伊国分寺跡	土師器実測図（3）	53
第42図	紀伊国分寺跡	黒色土器実測図（1）	54
第43図	紀伊国分寺跡	黒色土器実測図（2）	55
第44図	紀伊国分寺跡	須恵器実測図	57
第45図	紀伊国分寺跡	三彩・緑釉陶器、青磁実測図	58
第46図	紀伊国分寺跡	灰釉陶器実測図	59
第47図	紀伊国分寺跡	その他の遺物実測図	60
第48図	西国分廃寺	調査区全体図	66
第49図	西国分廃寺	塔跡平面実測図	67
第50図	西国分廃寺	塔心礎実測図	68
第51図	西国分廃寺	塔心礎据え石実測図	68
第52図	西国分廃寺	塔跡基壇版築土層図	69
第53図	西国分廃寺	塔復原図	69
第54図	西国分廃寺	B区溝1・2実測図	70
第55図	西国分廃寺	C区実測図	70
第56図	西国分廃寺	F区実測図	71
第57図	西国分廃寺	G区実測図	73
第58図	西国分廃寺	J・K・L区実測図	74
第59図	西国分廃寺	L・N区実測図	75
第60図	西国分廃寺	P区実測図	76
第61図	西国分廃寺	軒丸瓦拓本・実測図	78
第62図	西国分廃寺	軒平瓦拓本・実測図	80
第63図	西国分廃寺	道具瓦実測図	81
第64図	西国分廃寺	丸瓦、平瓦拓本・実測図	83

第65図	西国分廃寺	平瓦叩き目拓影	84
第66図	西国分廃寺	塔跡出土土師器・須恵器実測図	85
第67図	西国分廃寺	F区溝6出土須恵器実測図	87
第68図	西国分廃寺	F区溝6出土須恵器・土師器実測図	88
第69図	西国分廃寺	各地区出土須恵器・土師器実測図	89

表 目 次

第1表	紀伊国分寺跡	軒丸瓦分類表	42
第2表	紀伊国分寺跡	軒平瓦分類表	43
第3表	紀伊国分寺跡	軒丸瓦遺構別出土点数一覧	43
第4表	紀伊国分寺跡	軒平瓦遺構別出土点数一覧	43

I 紀伊国分寺

第1章 紀伊国分僧寺・尼寺の歴史的環境

南北に細長い紀伊国は、その北端を東西に流れる紀ノ川下流域に、古代より政治・文化の中心があった。現在の和歌山市およびそれに隣接する那賀郡の地域である。

紀伊国は、殆んどが山地で占められ、各河川の形成する平野が狭小である中で、紀ノ川が形成する平野が最も広大で、大きな経済基盤となった。特に河口に形成されたデルタ地帯は、肥沃な地帯として、一大勢力である国造紀氏の地盤として政治・経済の中心となった。また、紀ノ川流域は大和・河内・和泉の畿内先進地域と境を接し、それら地域の文化を享受する最も近い位置でもあった。紀伊の古代の交通路は、二つに大別されることが指摘されている。すなわち、中央構造線に浴って流れる紀ノ川に平行して東西に通じるものと、和泉山脈を南北に刻む河谷または構造線に従っているものである。このうち、前者は南海道であり、中央文化はこのルートで紀伊にもたらされる。

南海道については、『続日本紀』大宝2年(702)春正月「始置-紀伊国賀陀駅家-」と見えることから律令機構の整備にともない、大和・紀伊・淡路・阿波への官道として完備されたことが知られる。賀陀は、現在の和歌山市加太で、和泉山脈の先端に位置し、天然の良港として知られ、隣国淡路とは指呼の間にある。南海道はここから、海路淡路の由良に至り、福良から阿波国無養に至るものと考えられている。

この南海道は、大和より出発して、『万葉集』でよく知られる伊都郡真土山より紀伊国に入る。そして紀ノ川の北岸浴いに西下して那賀郡を経、名草郡から海部郡加太に至る。現在の国道24号線にほぼ平行していると考えられが、那賀郡粉河町よりは、加太に至る県道粉河加太線に浴っていたものと考えられる。真土山から加太まで、約60キロの道程である。

その後、この道は『日本紀略』桓武天皇延暦15年(796)2月の条に「勅南海道駅路迢遠、使令難通、因廢旧路通新道」と見えることから、都が山背に移されてから、大和を経由せずに京に至る道に変更されたことが知られる。この新道については、『日本後紀』桓武天皇延暦23年(804)10月の条に紀伊玉津島御幸の帰途について「自雄山道還日根行宮」とあり、和泉国に至る後の熊野御幸道や、伊藤只人の指摘した、真土山の手前、現在の橋本市市脇から紀見峠を越え河内国に至る高野街道に変更されたようである。^{注(2)}

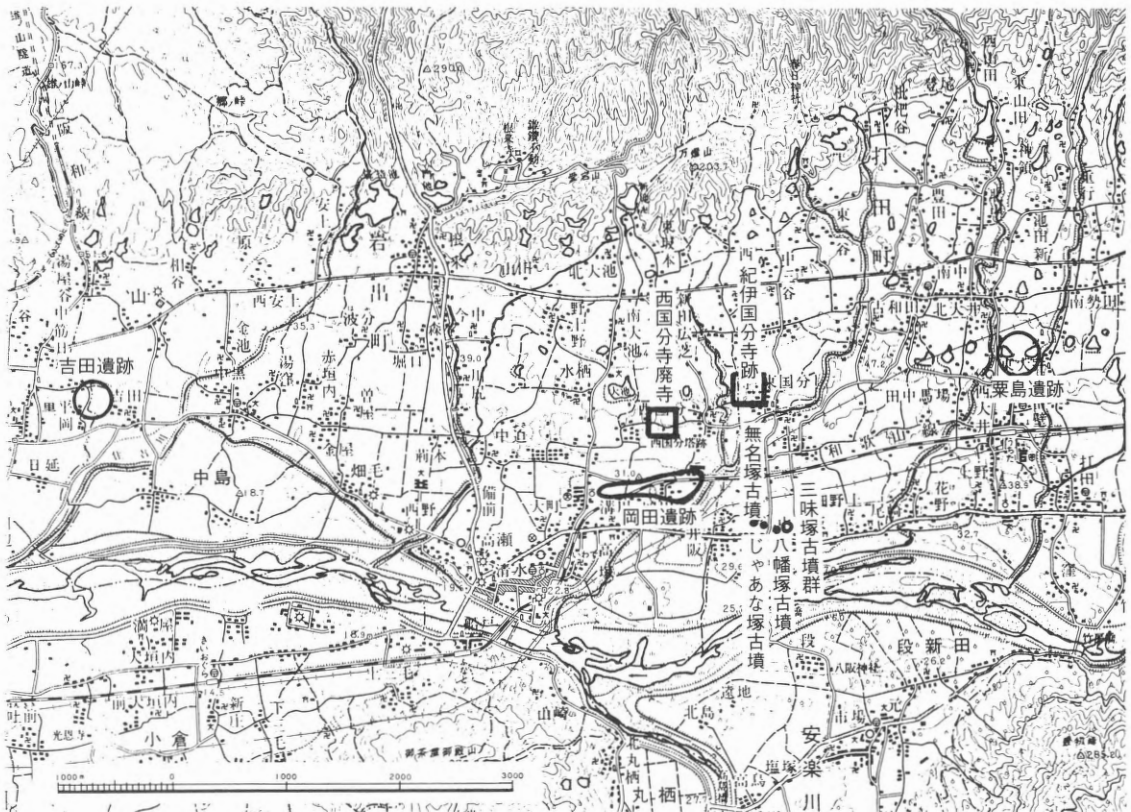
この南海道が、奈良時代における中央文化を紀伊にもたらす大動脈であったことはいうまでもない。それを如実に語るものは、この時代の寺院の建立である。国分寺の建立に先立つ奈良時代の寺院は、紀伊国で12カ所で知られている。このうち、紀ノ川流域には8カ所ある。そして南海道浴いには、橋本市神野々廃寺、高野口町名古曾廃寺、かつらぎ町佐野廃寺(以上伊都郡)、岩出町西国分廃寺(那賀郡)、和歌山市山口廃寺、同上野廃寺(以上名草郡)の6カ寺が点在している(第1図)。これらの寺院は国分寺創建前における紀伊の仏教文化に重要な役割を果し、紀伊国分寺はそれらを基盤として那賀郡打田町東国分の地に建立された。

それでは、紀伊国分寺は何故この地に選定して建立されたのであろうか。

まず立地についてであるが、現在の国分寺周辺は水田地帯として開けているが、ここは紀ノ川が形成した河岸段丘上である。紀ノ川によって形成された段丘を大略三段と考えるならば、下位



第1図 紀伊国分寺の位置



第2図 紀伊国分寺と周辺のおもな遺跡

は氾濫原、中位を沖積地、上位を洪積地と考えることができる。弥生時代・古墳時代は中位の沖積地の微高地（自然堤防）に集落が営まれている。この傾向は奈良時代になっても同様である。ところが国分寺をはじめ、各寺院は上位の洪積台地に位置している。このことから、当時の寺院建立は、農耕地帯を避けて、その上段にあたる洪積台地に土地を選定していたことが知られ、紀伊国分寺も先例に従って選地されたものと考えられる。

次に、周辺の遺跡をみると（第2図）、木積川をはさんで、その西南方に西国分廃寺が、また、その南面には岡田遺跡^{注(3)}があり、国分寺の南方、紀ノ川に近い段丘上には、無名塚古墳、じゅあな塚古墳、八幡塚古墳、三味塚古墳などの古墳群がある。西国分廃寺は、国分寺建立前から仏教文化の華としてこの地に存在したいたことはいうまでもない。また岡田遺跡は縄文時代から奈良時代にわたる遺跡として知られていたが、近年発掘調査が行なわれ、7世紀から8世紀にかけての遺物が多量に出土し、また、大形の柱穴を持つ掘立柱建物が発出されており、極めて官衙的な様相を示している。すなわち、那賀郡衙跡と考えられないこともない。

また、那賀郡岩出町吉田遺跡^{注(4)}は、弥生時代から鎌倉時代に至る遺跡であるが、ここから7世紀から8世紀にいたる、3間×3間、4間×2間、5間×3間など奈良時代に属する掘立柱建物10棟が発出され、この期に属する堅穴式住居2棟も発出されており、国分寺創建時における関連遺跡として注目される。

当遺跡は那賀郡と名草郡の接点に位置し、和泉に至る雄山道と南海道との交差点にあたり、交通の要所でもある。遺物・遺構からみて、官衙およびそれに類する性格のものであることが知られる。

近年、吉田遺跡の所在する那賀郡山前郷に萩原駅の所在を求める考えがある^{注(5)}が、紀伊に置かれた3駅、すなわち、萩原、名草、賀陀の距離的な位置関係から見ると、大和との国境真土山から、伊都郡萩原までが直線距離が19キロ、萩原から吉田遺跡までが18キロ、吉田遺跡から賀陀までが18キロと、『令義解』厩牧令に云う、「凡諸道須置_レ駅、每三十里置_一駅_一」の距離にほぼ合致し、交通の要地である吉田遺跡が名草駅にあたる可能性が十分考えられ、また萩原の駅も伊都郡かつらぎ町萩原の地に求めたい。

なお国分寺の東2.5キロのところ、打田町東大井に奈良時代の瓦が出土する東大井遺跡があり、国分寺と関連する遺跡と考えられるが、このことについては後述する。

第2章 紀伊国分寺研究史

紀伊国の国分寺は、江戸時代には既にその位置が明確でなく、その所在地に対する考察が行なわれている。すなわち『紀伊続風土記』^{注(6)}や『紀伊名所図絵』^{注(7)}は、那賀郡国分荘西国分村にある廃寺跡（同郡岩出町西国分廃寺）が方一町の地域に、堂塔跡の痕跡が明瞭に認められていたことから、両者ともこの廃寺が金光明寺（国分僧寺）であると断定し、同郡国分荘東国分村にある、新義真言宗国分寺八光山医王院の地（同郡打田町東国分国分寺跡）を「法華滅罪寺」すなわち国分尼寺との考え方をとっている。

その後、大正12年になって、和歌山県史蹟名勝天然物調査員であった加納川謙一は、黒板勝美

の現地調査に参加し、東国分の国分寺にも塔跡が所在することを確認し、その調査報告^{注(8)}において従来の西国分塔跡所在地が国分僧寺であることを否定し、東国分の国分寺こそが僧寺であると断定した。

さらに、昭和2年、内務省嘱託として、両寺院跡を調査した上田三平は、内務省への報告^{注(9)}の中で、紀伊国分寺が完成したのは、『続日本紀』神護景雲元年六月の条に、那賀郡大領日置毗登弟弓が国分寺に稲一万束を献上し外従五位下を授ったとある記載から、このころとし、その後屢々火災にあったが、元禄10年5月、那賀郡東国分村の検地帳には、「屋敷壹畝九歩 国分寺」と記載されていることから、現在の国分寺は旧地に再建したものと考え、旧国分寺の規模を見るべきものは塔跡であるとしている。彼は、塔跡に建てられていた弁天堂の床下を調査した結果、四天柱の一部および心礎を発見した。心礎は奈良朝の様式をそなお、塔は一辺35尺5寸の南面する大塔で国分寺の塔として正規のものであること、またここから出土する瓦は、奈良朝通有の形式であり、さらに、鐘樓の周辺に置かれている礎石は旧金堂跡のものではないかと推定し、東国分にある国分寺こそが奈良時代に建立された国分寺であると断定している。

一方、西国分にある廃寺は塔心礎のみであり、この心礎はその形態から奈良朝前期のものであり、国分尼寺とする説もあるが詳かではないとしてその断をさけている。

これに対し、昭和4年、和歌山県史蹟名勝天然物調査委員長であった勝田良太郎は、西国分のものが国分僧寺であると反論^{注(10)}した。その根拠は、『紀伊続風土紀』、『紀伊名所図会』の記載のとおり江戸時代は伽藍の跡が明瞭に存し、僧寺としての伝承を持っていること、さらに東国分のものよりも、礎石、瓦が形式的に古いことを挙げている。また、国府に近きを僧寺、遠きを尼寺とする考えから、当然西国分が僧寺であるとした。その完成期についても、上田か神護景雲元年のころとしたのに対し、天平21・22年までに完成していたとしている。

しかし、紀伊国分寺については、伊藤只人によって、その所在地ならびに概要について一応の結着^{注(11)}がつけられたといえる。

伊藤は、南海道との関係、および立地条件からみて、東国分の寺が僧寺と前置きし、文献の上から検討して、天平勝宝8年に本尊および金堂から完成を見、神護景雲元年以後に塔が完成したのではないかとしている。東国分の塔および出土瓦は時期的に文献と一致するものであることを指摘し、また、文献の上から国分寺は連綿と持続し現在にいたっているものであり、その証拠として、藤原末期の瓦が東国分から出土するのは、元慶3年に紀伊国分寺が焼失した後再建したものであるとした。また僧寺の本尊は薬師如来であり、現在の国分寺が医王院となっているが、薬師と医王が相通ずるもので、このことから、東国分の寺は僧寺であるとしている。一方、西国分の寺の方は、塔心礎および出土瓦からみて、白鳳期のものであり、天平13年の詔勅以前の寺で、紀伊では尼寺を建立せずに、この寺を尼寺に充てたものであると考えている。

その後、紀伊国分寺に関する研究は、後を断っていたが、昭和47年になって、和歌山県教育委員会では、激化する開発に対処するため、国分寺の基礎調査を進めた^{注(12)}。その結果、東国分に所在する現国分寺は、二町四方の寺域を明確に示すことを指摘し、国分僧寺、尼寺についての詳細は発掘調査を委ねることになった。

発掘調査は昭和48年度から53年度にわたって行なわれ、東国分の僧寺であることが決定的となったが、西国分については、尼寺としての決定は今後の検討課題となっている。

第3章 紀伊国分寺の沿革

紀伊国分寺は、『続日本紀』天平勝宝8年の記事にみられるように、この年、一応の建立があったことは後に詳しく述べる通りである。

しかし、『続日本紀』神護景雲元年6月の条に関し、伊藤只人は「紀伊国司も他の国の国司の如く怠慢であるのと、度々の飢饉に依って国分寺造営が遅延がちなので、郡司が造営料として稲一万束を献じ、その完成を早からしめんと計ったのであろう」としているが、発掘調査の結果から見て、各伽藍の補修等にてられたと解する方が良いかも知れない。

『日本三代実録』貞観16年(874)9月の条に、

廿日乙巳、制、諸国所填、旧年未納率分之数、令_上玄蕃寮、移_上於主税寮、先_上是紀伊国司申、檢_上案内、去年所_上納正稅率分二千六百卅五束六把、案_上式、雜稻率分納_上正稅半_上者、仍所_上納千三百十七束八把、即以_上件稻、国分二寺救急池溝公廩地子等五箇帳、各二百六十三束把六分、填納_上了、(後略)

と見え、未納の率分の取扱いが、玄蕃寮から主税寮に移され、紀伊に対しその納入を求められたが、紀伊国司は去年の率分は、国分二寺、救急、池溝、公廩、地子としてそれぞれ263束5把6分ずつ納入済であることを申し立てているが、ここに「国分二寺」と見えるのは僧寺・尼寺を指し、この時点では、二寺が存在していたことが知られる。

つづいて、『日本三代実録』元慶3年(879)2月の条に、

廿一日壬午、紀伊国金光明寺火、堂塔房舎悉成_上灰燼_上

とあり、僧寺の一切が焼失したことを記している。発掘調査の結果でも、堂塔房舎の火災が確認され、この記述に合致することが判明している。そして、火災後再建されたのは、金堂と僧房であり、それ以来の建物は復興されなかったことも明らかになった。

『弘仁式』主税に、

紀伊国、主税公廩各十八万束国分寺料二万束、

と見え、また『延喜式』主税上に

紀伊国正主公廩各十七万五千束、国分寺料二万束、金剛峰寺料五千六百束、同寺燈分并仏聖料二千八百束、祇河寺料四百束、

とあり、他の新興寺院よりはるかに高額を保障され、従前どおり運営されていたことが知られる。

長承元年(1132)10月の『根来寺要書上』紀伊国岡田庄立券文案に

言上御願寺大伝院御領岡田庄事

合

在管那賀郡

四至 限東田仲庄堺 限南長川出合并大河
限西石手庄堺 限北国分寺堺

田十四丁一反二百十

見作十三丁九反三百十

年荒一反百十

島四十丁一反 見作三十八丁五反

右件御庄、任去十月卅日院丁御牒同十一月三日、行宣、御使国使等相共、立券言上如件、謹解
長承元年十一月十三日

郡司介秦在判

国司散位中臣朝臣在判

散位 紀 朝臣在判

院使左官掌 宮道在判

と見え、紀伊国分寺が根来寺の荘園であった岡田庄と北で接していたことが知られる。

治承二年（1178）6月の『壬生家古文書』造日前国懸宮役請文案に、

紀伊国分寺

任配符旨可造擴日前社葺葺參間厩宇事

右 任今月三日配符旨、改先日宛課材已下雜事等、併宛參間厩之用途、守期日可造進之状、
謹所請申、如件

治承二年潤六月廿五日

別當權定印

とあり、このことについて伊藤は、「紀伊国分寺が朝廷より、紀伊日前社の造営にあたり、同社の葺葺三間厩一字の造営を命ぜられた書状である。国分寺が同国とは云いながら、他社の造営の一部を命ぜられる如きは、奈良朝時代における仏教第一主義より神社第一主義になりつつある先述の如き傾向をたどっていることを示しているものである⁽¹⁶⁾」と述べ、また、寛平六年（894）6月『類聚三代格』卷八調庸事「太政官符 応同率神戸官戸課丁事」には、紀伊の神社の封土が多いので、官戸と神戸を同率とするという神社勢力の擡頭に対する措置が取られたことから、当時の神社勢力によって国分寺が日前宮の厩の建設を負担させられる背景があったのではないかと考えている。

『続日本後記』嘉祥2年（849）閏12月の条に、紀伊守従五位下伴宿禰竜男が国造紀伊宿禰高継と争い、国造の更迭を計ったが、国司解却之色に非ずとして国司自身が罪を問わされた事件が記されており、国造紀氏と朝廷との結びつきの強さが知られる。日前宮が紀氏の司祭する神社であることを考えあわすと、国分寺が厩一字を建てさせられたのも、このような背景があったからではなかろうか。ともかく、治承二年には、国分寺は健在であったことが知られる。

しかし、その後の国分寺の様子を物語る記録はとだえる。

寛政5年（1793）の『寺社方差出張 那賀郡 池田組控』には、

1、国分寺八光山医王院 東国分村

1、真言宗新儀流根来寺蓮花院末寺に御座候 寛延四年末年従上被御任付候

1、開基八天平中聖武天皇御勅願行基菩薩七堂伽藍古蹟に御座候と申伝候但縁起日記など根来寺滅亡の節焼失仕候寺内に塔所へ無御座候

とあり、何時の頃にか、新義真言宗根来寺蓮華院の末寺に組入れられてしまい、天正13年（1585）秀吉による根来攻めの際、全てが消滅したと述べている。

そして、文化13年（1813）『風土記調へ役人衆えの文書』⁽¹⁷⁾には、

国分庄国分寺伽藍并鎮守之事

1、国分寺本堂五間四面長棟作

1、本尊葉師如来御長亭丈六尺 座像

一、脇立日光 御長壺丈五尺 立像

一、十二神八祖大師

一、東ノ脇 十一面觀音

一、西ノ脇 開山行基菩薩

一、尼寺堂 三間 不動明王

四間 本尊 阿彌陀

毘沙門天

一、三重塔 三間 本尊 大日如来

四間

一、鐘樓堂 式間

四面

一、牛頭天王社 弁財天社

一、二王門 式間

五間

一、住房 長拾七間ニ横九間ニ御座候

鎮守

一、山王権現 面三開 三棟唐破風中門作

横壱間半 檜皮葺箱棟

一、両脇小宮 雨師ノ宮夷ノ宮若宮

妙見宮 是ハのしふき

天照大神ノ社

熊野権現ノ社

粟嶋大明神社

玉垣 舞台 ちよう 鳥居

右者天平年中聖武天皇依勅願靈場旧跡行基菩薩開基として、七堂伽藍被為遊御建立勅号同十一年尼寺ノ堂被為遊御建立同十二年正月八日本尊入仏供養并自被為遊御加持最勝王經并大般若經転読写五穀成就牛王宝印御加持初会御開伯共国家安全御祈祷御修行被為遊、(中略)天正年年中兵火にて伽藍并倫旨旧記等悉焼失仕候と申伝に御座候へは旧礎于今境内所々に御座候、(中略)大般若經者正徳年中ニ再建仕候得共最勝王經ハ無御座候、去文化八_末九月旧記御尋ニ付以書付申上候、同十一月ニ從殿様御寄附被為遊、(下略)

国分寺堂社再建以来之事

一、新義 真言宗 根嶺 蓮花院 末寺 国分寺

一、本堂 五間ニ 本尊薬師如来座像

是ハ△天正兵火以来仮堂ニ有之候処今之堂者元禄年中再建之由申伝御座候

一、両脇土 日光 立像

月光 十二尊天 弘法大師

興教大師 不動明王

一、両脇壇比沙門天 正観音

魔利支天 誕生仏

開山行基菩薩 大般若經全部

一、御位牌 従

南龍院様御五方様

右御方々様御位牌本尊御厨子之内▽ニ奉安置有之由申伝▽ニ御座候

- 一、弁財天堂 式間 一面
但 本尊并十五童子厨子入
- 一、祇園社 一社 仮殿
- 一、鐘楼堂 式間 一面
- 一、鎮守山王権現社 式間 二面
- 一、同脇小宮 二社 妙雨師宮
- 一、拝殿 一ヶ所 式間 半

右山王権見八往古国分寺御建立刻、伽藍為守護鎮守被為遊御建立候と申伝国分寺より遷宮相整来御座候

- 一、殺生禁御証文并御制札
是、寛文九酉月被成 下置御座候
- 一、住坊 五間 二瓦葺
御寄附御除地
- 一、御高四石五斗也
是、御先代より被為 下置御座候ニ付御調べ、節者御寄状写シ差上御座候
- 一、当時大峰小篠正天先達剋昇寺兼任仕候、右、当時有来之通申上候、以上

とある。現国分寺の本堂は元禄年中に再建されたことが述べられているが、本堂の平瓦に元禄13年銘のものがあることから、この記載のとおりであろう。

いずれにしても、紀伊国分寺の最終の姿がこの文書に記載されている。

註

- (1) 松田 信「街道交通」(藤岡謙二郎編『河谷の歴史地理』第三部紀ノ川 京都 昭和三十三年)。
- (2) 伊藤只人「紀伊国分寺」(角田文衛編『国分寺の研究』〔旧版〕第七章南海道 京都 昭和十三年)。
- (3) 上田秀夫『岩出町岡田遺跡発掘調査概報Ⅰ』(和歌山 昭和三十五年)。
- (4) 林博道・辻林浩『吉田遺跡第二次調査概報』(和歌山 昭和三十六年)。
- (5) 山本賢司「紀伊国府の位置と規模について」(『学芸』二二号 和歌山 昭和三十五年)。
- (6) 仁井田好古編『紀伊続風土記』卷之三十 那賀郡(和歌山 天保十年)。
- (7) 高市志友・加納諸平『紀伊名所図会』第二卷 卷之一(和歌山 文化九年)。
- (8) 加納川謙一「国分僧寺塔址」(『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第二輯 和歌山 大正十二年)。
- (9) 上田三平「紀伊国分寺址」(『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第七輯 和歌山 昭和三年)。
- (10) 勝田良太郎「西国分寺塔跡礎石並に出土の古瓦」(『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第八輯 和歌山 昭和四年)。
- (11) 註(2)前掲書。
- (12) 紀伊国分寺跡基礎調査委員会「紀伊国分寺跡の基礎調査」(『きのくに文化財』第七号 和歌山 昭和四十八年)。
- (13) 註(2)前掲書。
- (14) 『平安遺文』古文書編第五卷二二四五。
- (15) 『平安遺文』古文書編第八卷三八四一。
- (16) 註(2)前掲書。
- (17) 註(12)前掲書。

Ⅱ 紀伊国分寺跡

第1章 紀伊国分寺跡の概要

第1節 位置

紀伊国分僧寺は、那賀郡打田町東国分の地に建立された。すなわち、那賀郡打田町東国分字八光682番地新義真言宗八光山医王院の周囲方二町の地域である（第3図）。

紀ノ川の浸蝕作用によって形成された北岸の狭い開析平野は比高差の小さい数段の段丘よりなり、国分寺は、その上位段丘の南端（標高約38m）を占めて造営されたものである。

奈良時代前期（白鳳期）の寺院が、中位段丘の水田、集落地帯を避けたように、国分僧寺もそれにならって上位段丘に建立された。すなわち「其遺跡之寺 兼為國藩 必取好地 美田 畝久 近人即不欲 曠野而及 遠人即不欲 荒塚帰集」の条件にかなったところであった。つまり、前に述べたように、紀ノ川の形成する河岸段丘上位面にあり、後背には葛城山系を負い南海道がその前面を通り、付近の中位段丘には集落が点在し、その先に紀ノ川を遠望する景勝の地であったのである。そして、その南西約0.8kmのところには、国分尼寺に転用されたと考えられる西国分の寺が既に建立されており、仏教文化の下地が出来上っていたのであった。

国鉄和歌山線下井阪駅を北に400mほど行くと和泉山地に源を発し紀ノ川に注ぐ春日川が西ないし西南に流れ、橋を渡りすぐ左折し、河ヶ畔をとおっていたと考えられる南海道に沿って、西に200m行くと南北に延びる松並木をみることができる。この松並木は医王院への参道であり、奇しくも紀伊国分寺伽藍中軸線にあたる。ここからほぼ北に1.5町のところに方2町の紀伊国分僧寺がある。

第2節 創建年代

紀伊国分寺の創建の時期については、他の国分寺と同様に明確ではないが、少なくとも天平勝宝8年（756）12月には一応寺院としての形態をととのえていたと考えられる。それは、『続日本紀』巻19、天平勝宝8歳12月の条に、

越後・丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・美作・備前・備後・安芸・周防・長門・紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・築後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向等二十六国、別領下灌頂幡一具、道場幡四十九首、緋網一糸、以宛周忌御齋装飾、用丁取置金光明寺、亦為寺物隨事出用云

とあって、灌頂幡と道場幡、緋細を先帝聖武天皇の御周忌に使用するため寺物として下されているからである。この記事に列挙されている26カ国は、北陸道の越後国をはじめ、山陰道8カ国、山陽道7カ国、南海道4カ国、西海道6カ国の計26カ国である。以上の国は、大国が1カ国、上国20カ国、中国5カ国で、大部分は上国である。ほぼ当時の国力の上位の国が多い。勿論領下される装飾具も大量に生産されねばならないので、その生産にも日数を要し、生産量がほぼ予定に達すれば、各国の造寺の進展状況を見て、各地域別すなわち各道別に領下されたものと想像される。なお前文には、山陰道や南海道の場合、除かれた国々がある。すなわち山陰道では、下国の隠岐と大国の播磨、南海道では、下国の淡路である。大国の播磨は、この時にはすでに領下さ

れ、他の中国・下国はこの時期までに領下すべき金光明寺が出来あがっていなかったために除かれたと見るのが妥当な考えではなかろうか。淡路国分寺（僧寺？）では、紀伊国分僧寺に用いられた創建期軒瓦（軒丸瓦 A-1、軒平瓦 a-3）と同範瓦が用いられている。淡路国分寺で創建期に用いられたとみられるこの同範瓦は、紀伊国分僧寺の軒瓦にみられなかった範の損傷が著しい。つまり、天平勝宝8年に伽藍を整えていた紀伊国分僧寺より、その建立が遅れていたことが明らかで、同年の記事を裏づけるとともに、紀伊国分僧寺の中核伽藍で用いられた瓦類が天宝勝宝8年までのものであることを示すものである。

その後、『続日本紀』神護景雲元年（767）6月22日の条に、

紀伊国那賀郡大野女王大野王日置氏等奉獻稲一萬束に因り、
とある。神護景雲元年（767）に紀伊国那賀郡の郡司が紀伊国分寺に稲1万束を献じた功により、位が昇進している。郡司日置氏は、古代的那賀郡の有力な豪族で、帰化系氏族であり、彼等氏族の氏寺が国分尼寺の前身ではなかろうか。^{注(2)}しかしすでに国分僧寺の重要諸建築がほぼ完成して10ヶ年を経過しているので、この献稲は、修理事業や付属設備か又は国分寺の運営費に当てられたと考えられないだろう。^{注(3)}

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査方法

事業の着手にあたっては、昭和47年度に実施した紀伊国分寺跡基礎調査の成果をふまえ、航空写真撮影とこれを用いた1000分の1及び500分の1地形図を作成した地表観察をおこない発掘調査の指針とした。発掘調査にあたっては、こうして作成して測量図の原点を用いて新たに200分の1の測量を実施し、塔跡基礎の中心を座標原点とし地区割りを設定し調査計画を立てた。

主な遺構等の調査計画として、昭和48年度には金堂・講堂等主要伽藍の位置と規模、あるいはその内容を探るとともに、その他の遺構の位置と寺域を限る遺構の検出につとめた。次に、昭和49年度には僧房跡・回廊跡の発掘調査を中心に事業をすすめ、最終年度の昭和50年度は、塔跡・鐘楼跡のほか、前2年度の調査で明確に出来なかった諸遺構の再確認調査等を実施した。

第2節 寺域の調査

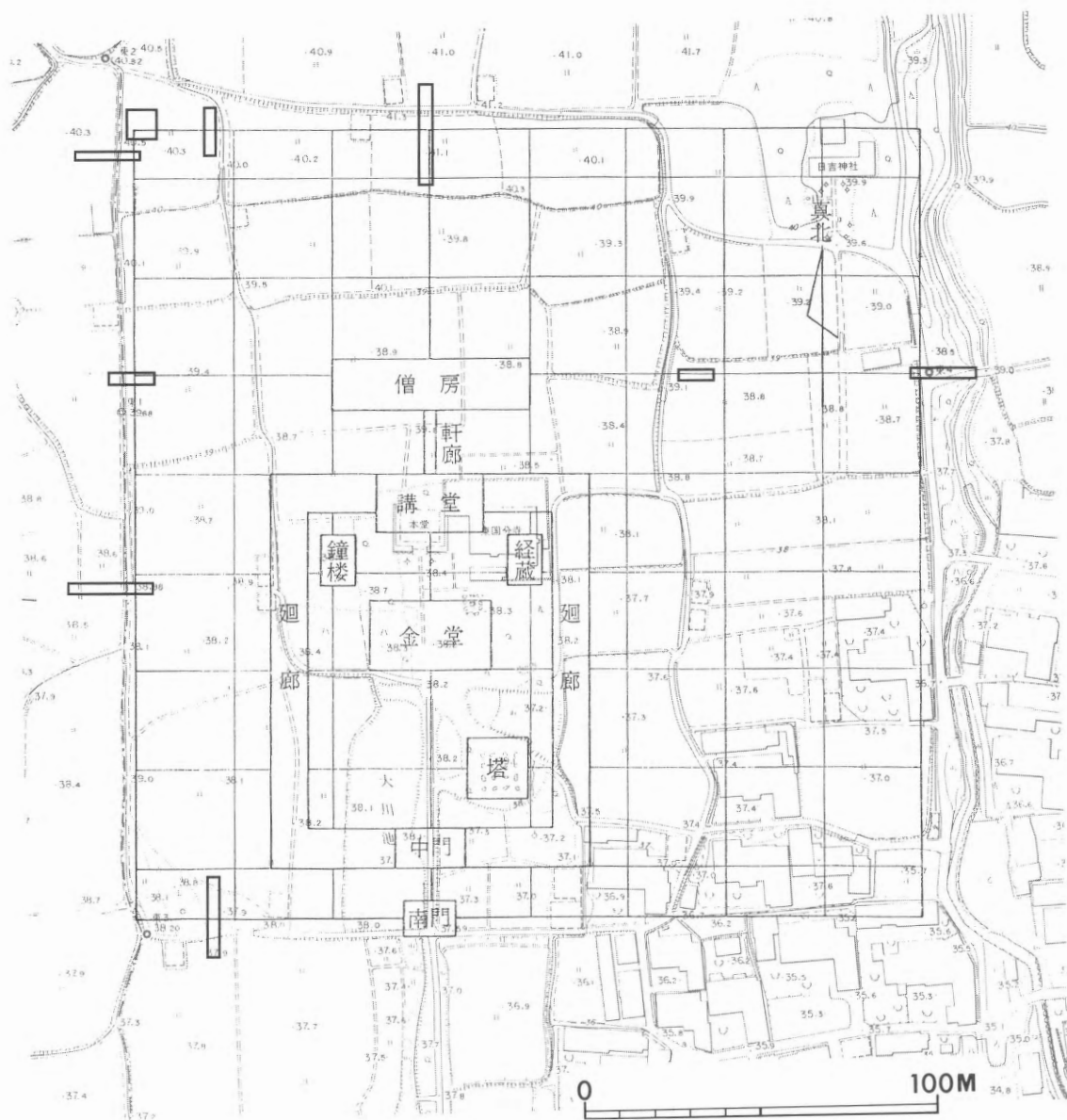
現在の八光山国分寺医王院を中心とする2町四方の土地に、その寺域の名残りを示す土地区割がみられ、その東限には宮川と呼ばれている小河川が南流している。これは、かつて、人工的に河道が直線に変更させられた可能性も考えられ、広い意味における寺域を限るものとみてよいであろう。

寺域を区割する遺構を確認するため10地点13ヶ所にトレンチ等を設定した結果、掘状遺構や土塁等明確な遺構は検出されなかったが、おおよそ次のように考えられる。

南限は南門指定地を東西にはしる畦畔にその名残りを認めることができる。畦畔を断ち切るように設定した第9トレンチでは幅約3メートル高さ約0.3メートルを計る地山の盛り上がりか認

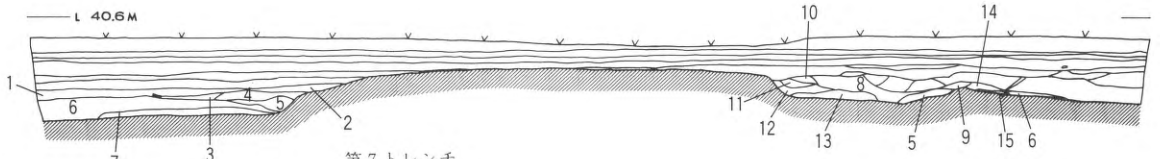
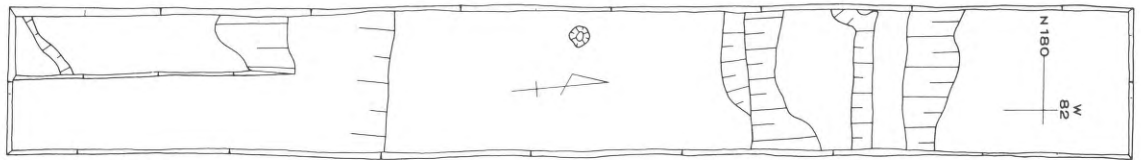
められ、土塁状遺構の痕跡かも知れない。北限については、第1トレンチで、塔心礎より北170～180メートル地点で瓦片などを含む遺物包含層が検出されたので、さらに西方に第5、第6トレンチを設定した。第5トレンチで、幅約6メートル、高さ約0.6メートルの地山の高まりの北外側に砂質土が堆積した溝状の落ち込みを検出した。この砂質土には遺物は含まれていないが第6トレンチでも溝状の堆積状況を呈しているところから寺域の北限を示すものと推定されよう。東限については、前述のとおり、宮川以西が国分寺領とみられるが、第2トレンチでは顕著な遺構は検出できなかった。西限については3ヶ所にトレンチを設定した。真北方向にはしる畦畔が南限のそれと同じく土塁等の痕跡を示すものであろうと考えられるが、東限と同様、顕著な遺構は確認されなかった。

以上、寺域を示す遺構については明確にされなかったが、以下に示す伽藍等の計画的な配置からも、現在確認できる2町四方の地割りが紀伊国分寺の寺域であったことは要易に推察できるものである。



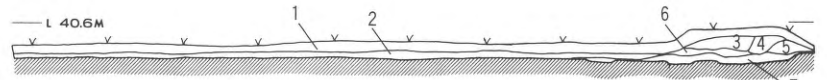
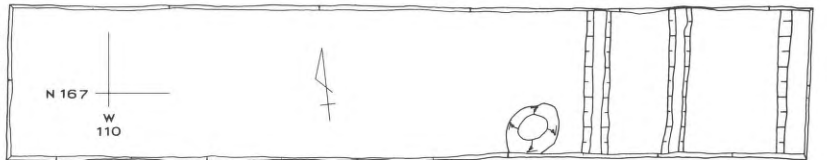
第3図 紀伊国分寺跡 寺地地割計画図と寺域調査トレンチ位置図

第5トレンチ



- 1 黒灰褐色土
 - 2 黄灰褐色弱粘質土
 - 3 白灰黄色弱粘質土
 - 4 灰黄褐色弱粘質土
 - 5 灰褐色砂質土
 - 6 灰白色砂質土
 - 7 灰色砂質土
 - 8 淡灰褐色砂質土
 - 9 暗灰褐色砂質土
 - 10 茶褐色砂質土
 - 11 黒褐色砂質土
 - 12 灰黒褐色砂質土
 - 13 淡灰褐色砂質土
 - 14 灰白褐色砂質土
 - 15 淡灰白色砂質土
- (1~15以外は
攪乱層・耕作土層)

第7トレンチ



- 1 腐蝕土・耕作土
- 2 灰黄色弱粘質土
- 3 黒褐色土
- 4 灰褐色土
- 5 黄灰色土
- 6 灰茶褐色土
- 7 灰黄褐色土(瓦器片を含む)

第4図 紀伊国分寺跡 寺域調査トレンチ5・7実測図

第3節 伽藍配置 (第3・5図)

上記のように、紀伊国分寺は2町四方の寺域を有したことがほぼ明らかとなったわけであるが、それでは、伽藍配置とその他諸施設をどのような計画性に基づいて配置されていたのかを検討してみよう。

次節に示す金堂・塔などの諸遺構の配置から創建時の計画性はおよそ次のようであったと推定される。それは、東西、南北それぞれ2町の寺域を90尺単位で基盤目状に8等分したことが想定され(以下寺域割りと仮称する)、その西側の8分の6の地区を主要伽藍地にあて、残る東側の8分の2の地区については雑舎などの用地にあてたものと考えられる。発掘調査によって主要堂塔の基壇、または柱位置を確認しえたものは、金堂・講堂・塔・鐘樓・僧房・軒廊及び中門の1部である。また、金堂ほかより一時期遅れた軒瓦の組合せが出上したことにより南門址が推定できた。なお、廻廊は、外縁溝の東北隅、南西隅などを確認した。これらにより伽藍配置を考えると、伽藍の中軸線は、寺域を8等分する経線のうち、中央より西へ1単位偏した経線をもって設定され、これを中軸として、東西各3単位を主要伽藍区域としている(第3図)。緯線は、南北寺域を90尺単位で7単位をとり、その南北に2分の1単位(45尺単位)ずつを加えている。

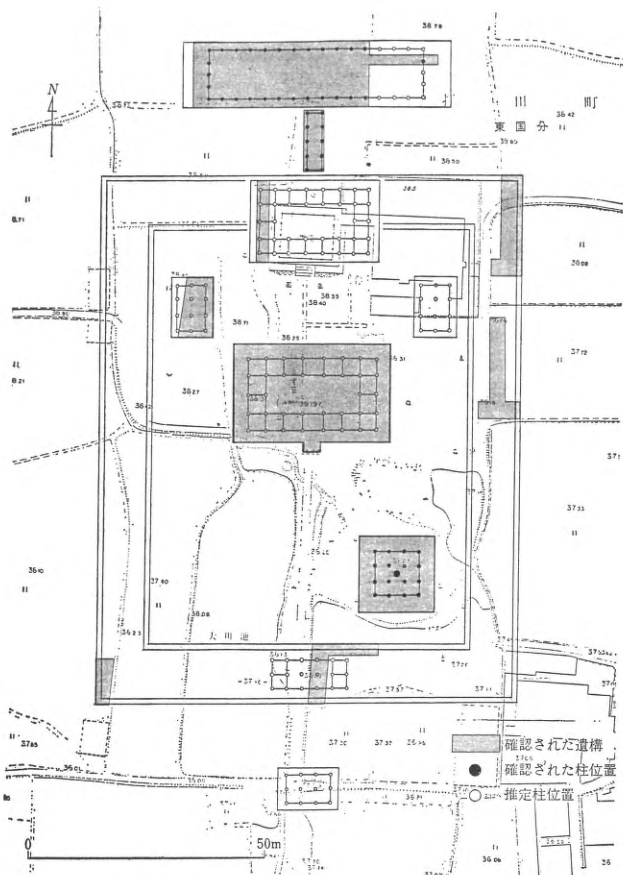
よって、南門は伽藍中軸線上の南端を占め、中門と講堂の左右にとりつく廻廊は寺域南端(南門)より45尺北の中門基壇から左右に伸び、これにより、寺地割4単位北で講堂基壇の後面へつらなるものである。

廻廊によって、寺域割の4単位を占めて区割された伽藍地区を南北に2等分する緯線上に金堂基壇前面を置き、金堂基壇前面と中門基壇前面間を2等分する、つまり、伽藍地区のうち、金堂

前庭を中分する緯線上、かつ伽藍中軸線の交点より東へ60尺地点に塔心礎を配置している。講堂前庭の左右にあたる金堂の斜後方には鐘楼・経蔵を配置している。

伽藍地区内部の東西幅は、伽藍中軸線より東西へ、それぞれ金堂基壇の東西幅をもって、また、寺地割1単位四方の対角線の長さを伽藍中軸線より、それぞれ東西へとることによって伽藍地区の東西幅ともなるべき廻廊の中心線を設定している。

各堂塔基壇規模の関係については、寺地割1単位四方の対角線に等しい対角線をもつ金堂基壇の幅が講堂基壇の対角線に、講堂基壇の奥行きが塔基壇の一辺、また、鐘楼基壇の対角線に等しいなど、堂塔の配置とともに相互の関連をもつものと考えられる。^{注(4)}



第5図 紀伊国分寺跡 主要伽藍調査図

第4節 遺 構

1 金堂 (図版第3～5・第6～9図)

創建期の瓦積基壇の一部と、元慶3年(879)以降に再建された金堂基壇を検出した。また、基壇外では、焼土・灰炭を多く含む、新旧二層の瓦堆積層を検出したが、後代の整地などにより基壇上部を失っており、礎石の配置など建築構造は明確にできなかった。

創建期の基壇は、地山削土を用いた厚さ5～10センチの版築が基壇南部にみられるものの北部では再建期基壇縁化断の瓦積が地山上にのり、削平の著しかったことがうかがわれる。平瓦を用いた基壇縁の瓦積みは基壇南面に約8mにわたって、高さ25cm、平瓦10～12枚が残存しているにすぎない。

東西32.6m、南北20.1mを計る再建期の金堂基壇は、創建期の基壇の瓦積みを補修したものとみられ、瓦積みの最下部などに軒平瓦(軒平瓦k)をはめ込み、丸瓦も多く用いて、創建期の瓦積みとは明確に区別できる。高さ45cm、瓦10～12枚が残存している。

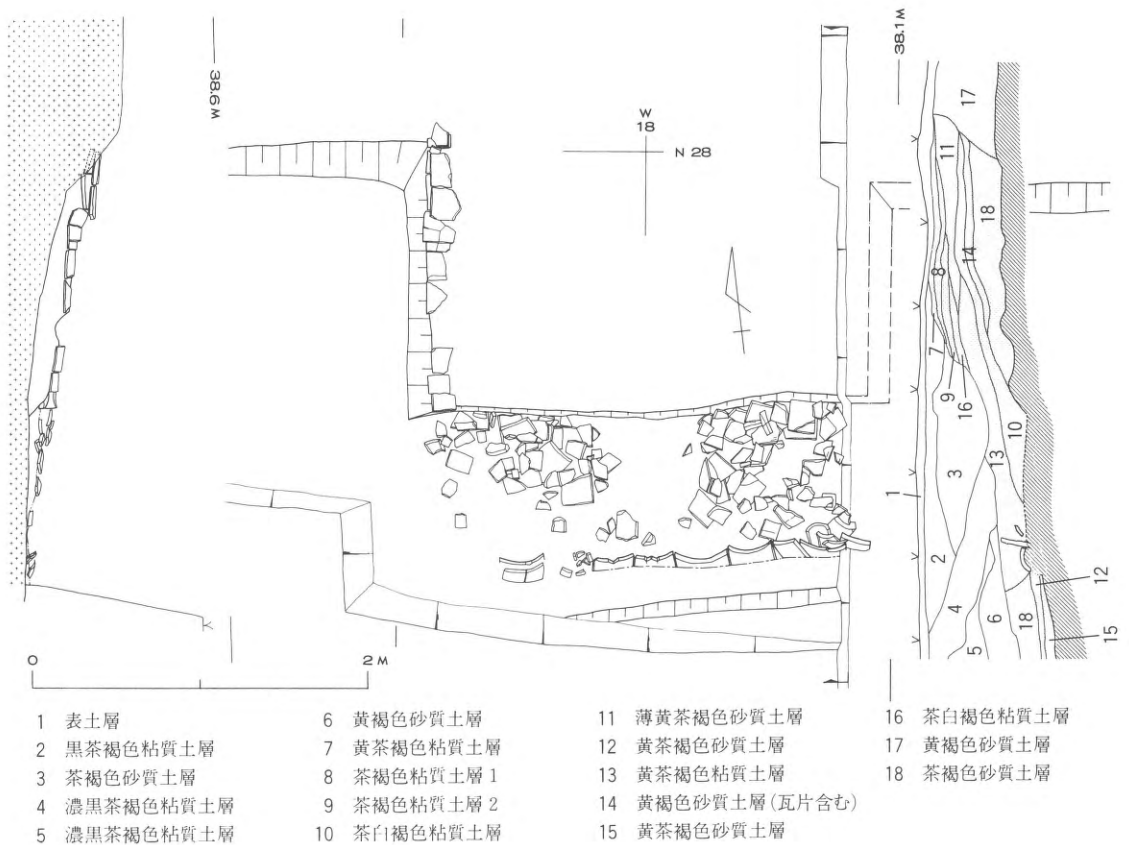
なお、創建期基壇の平面規模は、再建期基壇の補修の状況、基壇外に認められた下層の瓦層の範囲などから、再建期の基壇とほぼ同規模のものとみられる。

再建期の基壇南面中央には、周縁に瓦を積み、内部は地山上を叩きしめた階段(現状ではスロープを呈する。間口約3m、奥行1.6m)を設けている。さらに、これの正面外側に、平瓦を立て並べ階段南面との間に瓦片を敷きつめた遺構を検出したが、創建期基壇に伴うか、また再建期のものであるかは明確にできなかった。

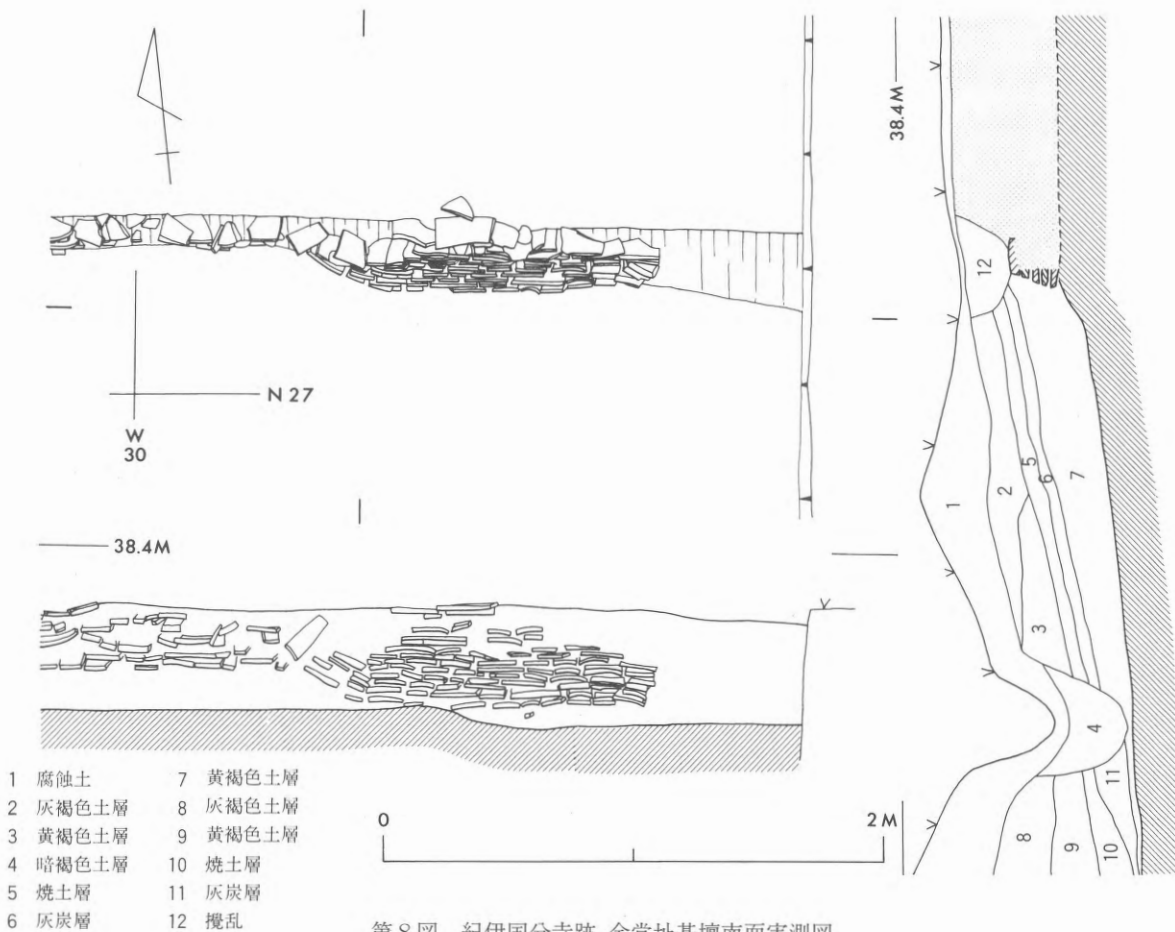
従来から露出していた礎石2基に加え、新たに検出した2基、計4礎石が基壇南側へずり落さ



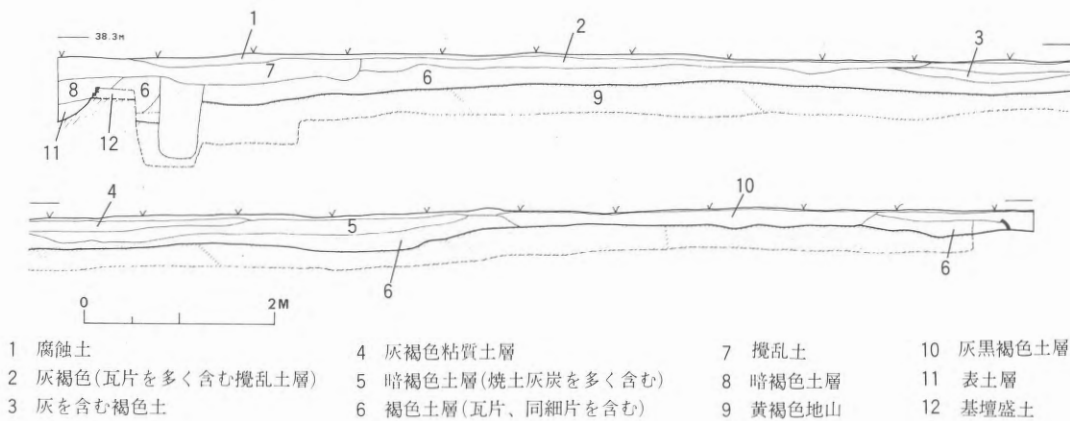
第6図 紀伊国分寺跡 金堂址調査区全体実測図



第7図 紀伊国分寺跡 金堂址階段部実測図



第8図 紀伊国分寺跡 金堂址基壇南面実測図



第9図 紀伊国分寺跡 金堂址基壇南北断面図

れている。これに加え、基壇周辺に集められていた礎石を集計すると14基が現存するが、これらは、片岩系統のもの8基、砂岩系統のもの6基にわかれる。また、現露出面には、いずれも、柄などの加工は認められない。

なお、おもに基壇外の表土層より採集される軒瓦の組合せ、軒丸瓦Ⅰ、軒平瓦Ⅰ（32ページ参照）が認められる。これより下層で検出される瓦堆積層にはこれらの軒瓦の組合せが含まれないことから、金堂は、平安時代後半に再々建されたことが考えられる。

2 塔（図版第6～11・第10～12図）

塔跡には最近まで弁財天を祀る小堂が建てられており、その付属施設などで心礎・四天柱礎石は不明瞭であった。一方、側柱礎石は全てが露呈しており、早くから、塔の規模については知られていた。ただし、東面中央間南側柱の礎石は二つに割れ、一つは弁財天堂の礎石に転用されていた。このような状況の中で、調査は全礎石の確認と基壇の規模・構造を確認するため、礎石部の精査と基壇については南・西・東面にトレンチを設定した。

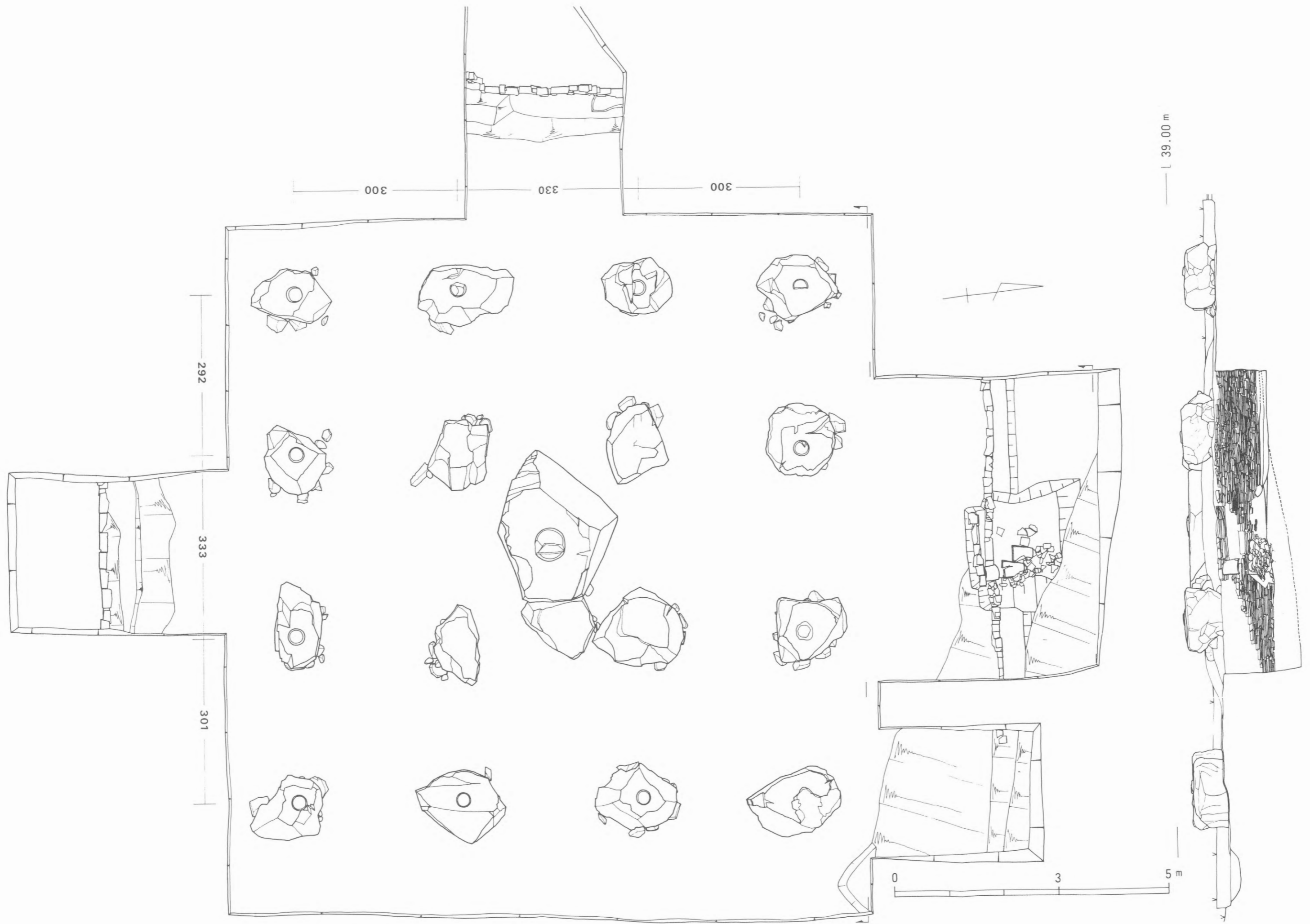
各礎石は、標高38.76メートルに出柄頂を据えた心礎とほぼ同じレベルに据えられている。心礎は東西2.8メートル、南北2.15メートル、厚さ約0.6メートルの結晶片岩、すなわち、紀ノ川の南岸に産するいわゆる青石を用いている。側柱の礎石は平均1.5メートル四方、高さ0.7メートル前後の砂岩あるいは礫岩を用いている。四天柱礎石はこれらよりやや小さめであるが、側柱礎石とほぼ同規模の東北隅礎石は石英質を多く含む河原石で、いわゆる、瑠璃石と呼ばれるもので興味深い。四天柱礎石を除く各礎石は出柄を削り出している。心礎のそれは径約60センチメートル、高さ約5センチメートルで、側柱礎石の出柄は径25～30センチメートル、高さ9センチメートル前後である。

これら礎石の配置から、塔の最下層規模は一辺31尺・方3間で、中央間は330～333センチメートル、石右の脇間は292～301センチメートルを計測するところから、中央間11尺、脇間は10尺で建立⁽⁵⁾されている。心礎は径60センチメートルの出柄周囲には広く平滑な面をもっており、礎石上面に微妙な視覚・触覚で観察される、いわゆる、柱あたりこそ確認できなかったものの、直径120センチメートルは確保できるものであり、塔の高さについても推しはかることが可能である。

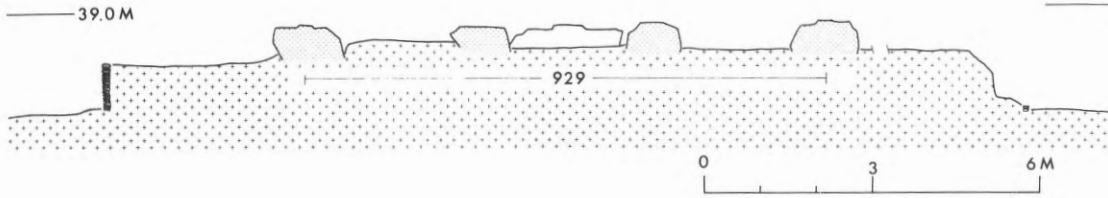
基壇は地山を一部削り出した上に、明黄白色粘質土あるいは灰黄褐色弱粘質土などを厚さ2.5～8センチメートルに叩きしめ版築し、その周縁部を瓦積みで化粧している。基壇そのものの高さは確認できなかったが、基壇北面の瓦積基部から心礎の出柄頂までの高さ135センチメートルを計測した。このことから基壇の高さは約4尺、120センチメートル前後のものと推定される。また、平面規模については、基壇南面と北面の距離は16.39メートル、55尺の規模をもつものである。ちなみに、側柱から基壇縁まで4.2メートルを計ることから、塔最下層の軒の出は15尺以上のものと考えられる。

瓦積みは、まさに創建期の一枚作り平瓦を用いたものである。短棚形に平瓦を2枚に半截し、その側面をおもてにして、いわゆる煉瓦積み状に丁寧につみあげたもので、1メートル四方に平均して半截瓦約84枚を使用している。いま、かりに基壇高を1.2メートルとした場合、瓦積み面積は約78.7平方メートルで、四隅の重複分約0.7平方メートルを差し引いて約78平方メートルと概算した場合、半截瓦の必要数は6552枚、平瓦にして3276枚の尨大な瓦が使用されたことがわかる。

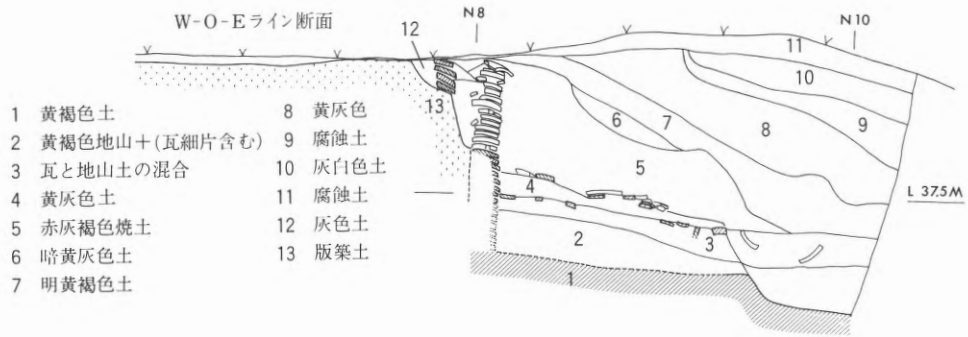
基壇の四方中央には階段が必要であったとみられるが、南・西面は基壇縁が大きく損われており、階段部の有無については明確にする資料は得られなかった。ただ、北面は創建期の基壇縁瓦積化粧の一部をり除き、平安時代初頭に瓦積みによる幅1.35メートルの階段をつくりつけている。そのステップには単一種の軒平瓦g（34ページ参照）を上下逆にして瓦当を基壇側に向けて敷いていた。



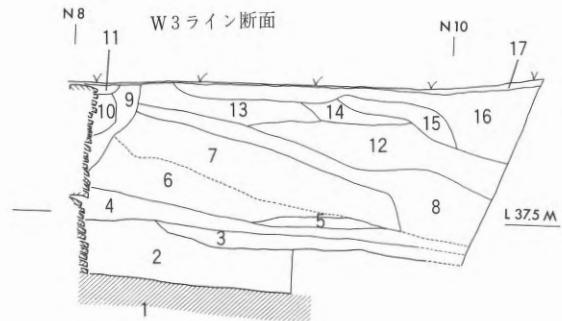
第10図 紀伊国分寺跡 塔址全体実測図



第11図 紀伊国分寺跡 塔址南北断面図

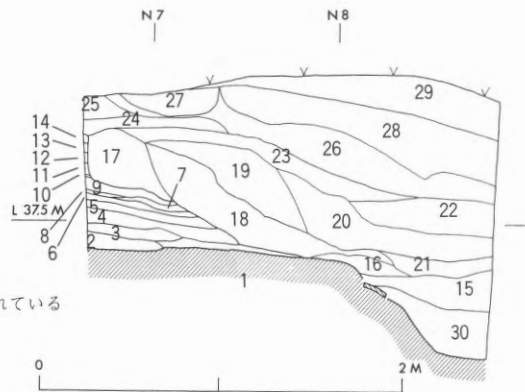


- | |
|----------------------|
| 1 黄褐色粘質土 |
| 2 黄褐色粘質整地土(瓦小破片を含む) |
| 3 砂質灰色土(瓦片を少量含む) |
| 4 焼土、灰、炭、瓦片を含んだ暗灰色土 |
| 5 灰炭層 |
| 6 焼土と瓦大破片層 |
| 7 赤褐色焼土 |
| 8 焼土、瓦片、炭を含む暗褐色土 |
| 9 灰黄色土 |
| 10 暗茶褐色土(焼土、炭が少ない) |
| 11 暗茶褐色土(焼土、炭、瓦片を含む) |
| 12 灰褐色土(瓦を多量に含む) |
| 13 暗灰褐色土(焼土、炭、瓦片を含む) |
| 14 黄茶褐色土(焼土、瓦細片を含む) |
| 15 白濁黄茶褐色土 |
| 16 暗黄茶褐色土 |
| 17 腐蝕土 |



E 3.5ライン断面

- | | |
|-----------------|-------------------------|
| 1 明灰黄褐色粘質土 | 16 灰黄色弱粘質土 |
| 2 明灰白黄褐色粘質土 | 17 灰白色粘質土 |
| 3 明黄白色粘土質 | 18 暗灰色焼質土(瓦を含む) |
| 4 明黄白色粘土質 | 19 黄灰色粘土質(瓦を含む) |
| 5 ③+④砂を若干含む | 20 淡灰白色土 |
| 6 明淡黄褐色粘土質 | 21 淡灰黄白褐色土弱粘土質 |
| 7 淡灰黄褐色粘土質 | 22 ⑳よりは暗い |
| 8 明淡灰黄褐色粘土質 | 23 ㉑弱粘、瓦は含まない |
| 9 ①より明るく粘質が増す | 24 明淡黄色弱粘質土 |
| 10 灰褐色弱粘質土 | 25 ①+灰色が増し炭、遺物を含みよごれている |
| 11 灰黄褐色弱粘質土 | 26 ㉒より砂質が増す |
| 12 黄灰褐色弱粘質土 | 27 ㉓+赤味が強い、粘質がやや弱い |
| 13 明黄褐色強粘質土 | 28 腐蝕土1 |
| 14 暗灰黄褐色弱粘質土 | 29 腐蝕土2 |
| 15 ①よりやややくすんでいる | 30 灰色強粘質土(瓦を含む) |



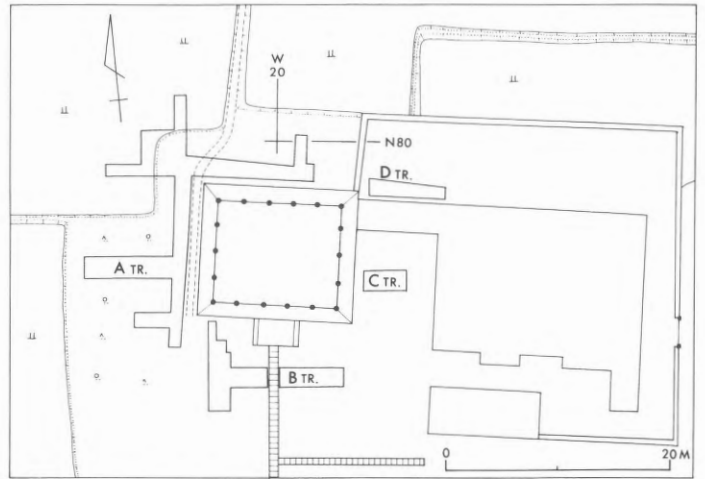
第12図 紀伊国分寺跡 塔址基壇北面断面図

3 講堂(図版第12、第13・14図)

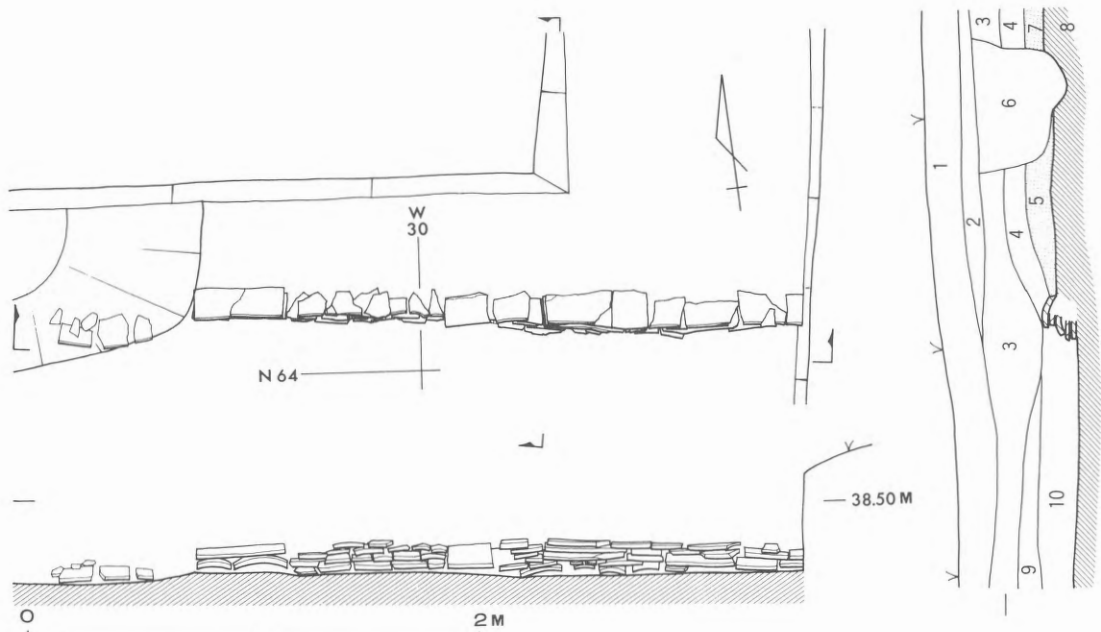
約2.7メートルにわたって南面の一部を検出できたにすぎない基壇は、金堂と同様に瓦積基壇で、約15センチメートルの高さを計測し、平瓦4～5枚が遺存する。基壇の四隅は検出できず、現本堂が元禄年間に講堂の上部に建立されていることなどから、発掘調査は本堂とその付属諸施設を縫うようなトレンチの設定をせざるを得ないうえ、殆んどどの地点が中世以降の修改築による攪乱がいちじるしく規模・構造など明確にできなかった。

瓦積基壇の南面外側には、夥しい焼土・灰炭とともに、良好な鬼面文鬼瓦2(35ページ参照)を含む、おもに創建期屋瓦が堆積していた。この瓦層は、金堂再建時に使用された瓦類はみられないところから、焼失後、再建されずに放置されていたものとみられる。基壇外は創建期の旧状を保つものとみられるが、瓦層の下部には、金堂と同様に雨落溝は検出されなかった。

基壇の規模は実数として把握できなかったが、講堂と僧房の間に設けられた軒廊の南端の掘立柱の位置から、南北60尺・東西100尺前後のものと考えられる。



第13図 紀伊国分寺跡 講堂址トレンチ設定図

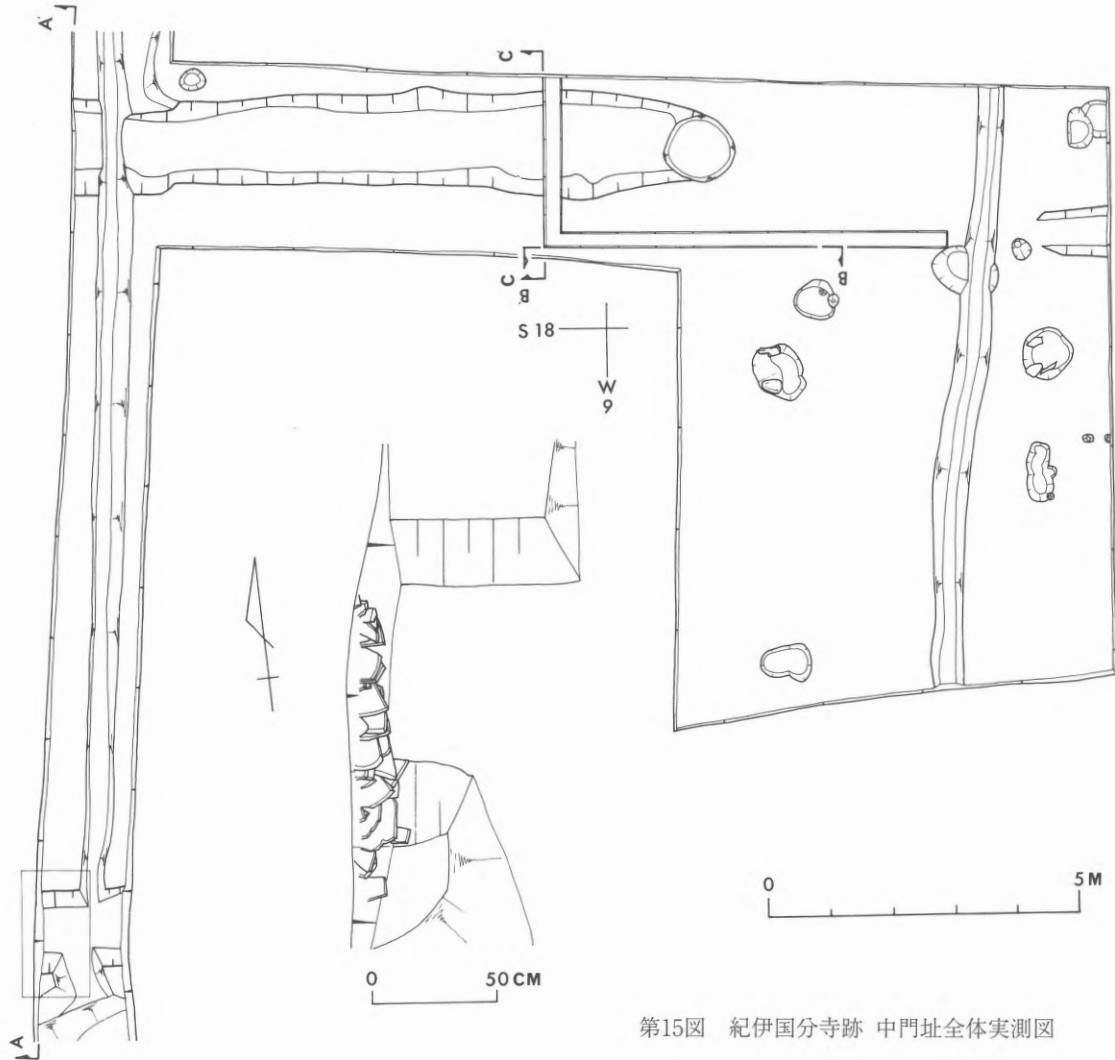


- | | | |
|-----------------|----------------------|------------------|
| 1 灰褐色腐蝕土層 | 4 暗黄茶褐色弱粘質土層 | 7 暗黄茶褐色弱粘質土層 |
| 2 黄茶褐色弱粘質土層 | 5 暗灰褐色土 | 8 黄褐色地山 |
| 3 茶褐色粘質土層(瓦片多数) | 6 黒褐色土(瓦片多数)(中世?～近世) | 9 暗褐色弱粘質土 |
| | | 10 黒褐色粘質土層(瓦片多数) |

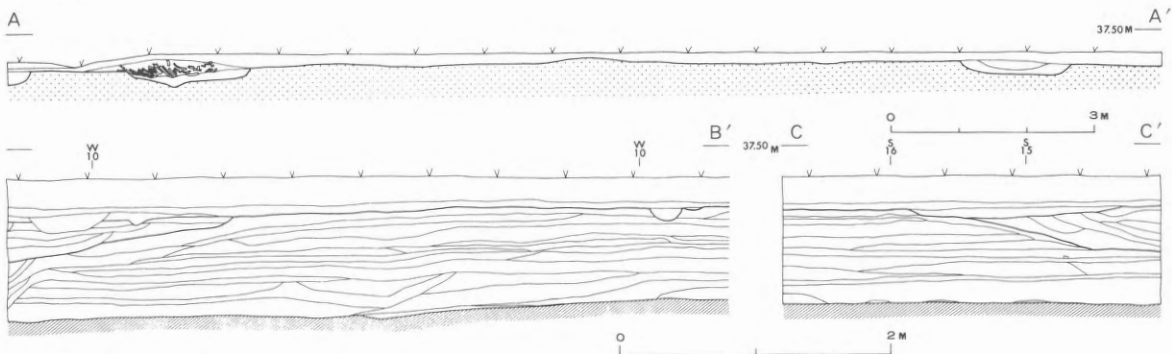
第14図 紀伊国分寺跡 講堂址基壇南面実測図

4 中門（図版第13、第15・16図）

中門の削平はとくにいちじるしく、基壇南北外側の雨落部分とみられる浅い溝状遺構の下部が検出できたにすぎない。幅約2メートルを計測する雨落溝は瓦片・焼土を多く含む暗茶褐色土が堆積している。屋瓦のずり落ちた状態が認められた南溝の深さは30cm残存し、伽藍主軸から東へ14m以上のび、そのまま回廊の側溝となる(?)北溝の深さは20cmを計測した。両溝の中心距離は12.15m、内区は10.2mの幅をもっているが、現在のところ建築構造は不明である。中門部分の地盤は不良だったのか。基壇部分の断ち割りトレンチの観察からは現遺構面から少くとも70センチメートルまでは黄褐色粘質土などを2~10センチメートルに版築地業を行っている(第16図)。



第15図 紀伊国分寺跡 中門址全体実測図



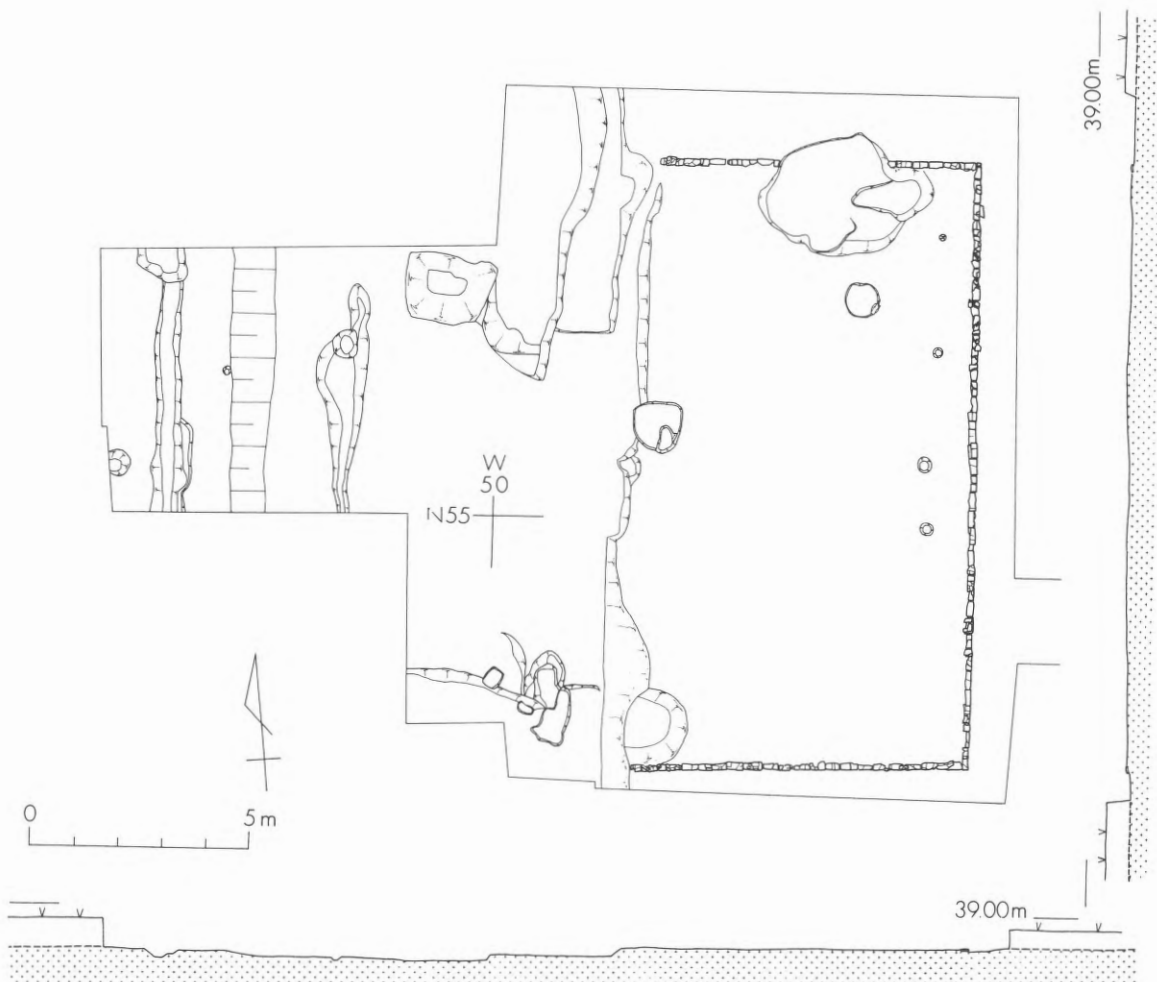
第16図 紀伊国分寺跡 中門址基壇版築状況実測図

5 鐘 楼 (図版第18・19、第17図)

講堂の前庭西側に位置する。やはり半截平瓦を主体とした瓦積基壇をもつもので、南北規模を示す東縁は13.8cmを計測したが、西縁は攪乱のため確認できなかった。南北縁はともに西端部を欠失していたが、焼土灰炭層の拡がりの状態から、基壇東西幅は約10m前後と推定できる。

基壇の削平、または攪乱がいちじるしく、基壇高は約20cmを残すのみであるが、主要堂塔の基壇と変るところがなく、地山の土を版築している。

また、礎石の配置状況の復原も難しいが、基壇規模から桁行3間・梁行2間の東面する建物とみられる。



第17図 紀伊国分寺跡 鐘楼址全体実測図

6 廻 廊 (図版第20・21、第18～21図)

廻廊の東辺及び北東隅・南西隅において外周の側溝を検出した。これにより、廻廊は中門から左右へ拡がり講堂背面にとりつくことが判明した。廻廊の外周側溝の規模は、それぞれの地点において削平がいちじるしく、その残存状況がわるいため正確な規模は計りえない。地山削土を用いて廻廊基礎を形成し、その遺存状況がもっとも良好であった金堂東方の側溝は、幅約150cm、深さ約40cmを計測した。南西隅部で検出した側溝は深さ10センチメートル強しか遺存せず、堆積土は粘質土を主体としていたが、北東隅から東辺の側溝は砂質土の堆積が顕著で排水機能をよく

果していたものとみられる。回廊の東側には雑舎等の諸施設があったものか、溝底には三彩火舎片（第45図）を含む土器類が比較的多く検出されている。

また、内側々溝はいずれの地点においても確認できなかったため回廊の正確な幅は明確にしがたいが、中門基壇の南北幅とほぼ同規模のものとみられ、10.2m前後のものと推定できよう。

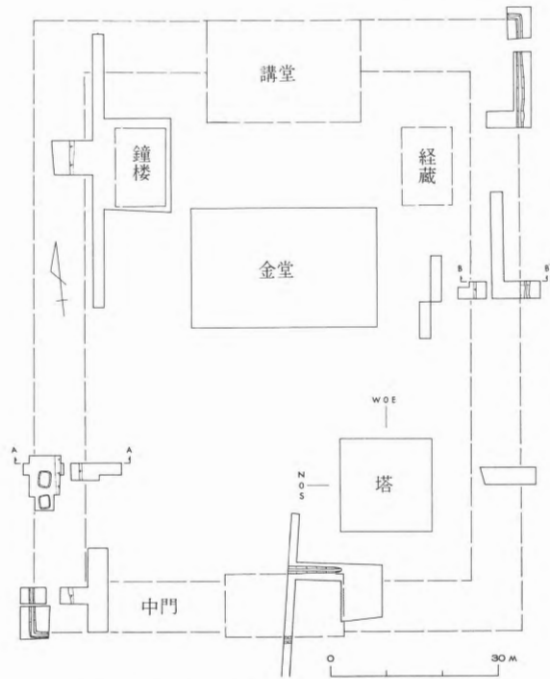
廻廊の基壇部は地山上に地山削土などを版築しており、塔跡西方の西側廻廊で顕著に観察することができた。東西幅約5メートルにわたって版築がみられたが、東西端とも後世の攪乱を受けていたため、回廊本来の幅はつかめなかった。基壇部は地山上に茶褐色強粘質土、黄灰褐色砂質土などを厚さ3～10センチメートル叩きしめ、地山より6層の版築が約35センチメートル確認できたが、その上部は削平を受けており廻廊構築物の基礎遺構は確認できなかった。

このように廻廊の残存状況は各地点においても非常に悪く、廻廊の規構・構造についてははかり知れないが、中門のとりつきや、金堂東部では外周の雨落溝の中心から版築の残存している範囲の幅が10メートル弱を測ることなどから、回廊は複廊の構造であったことが考えられる。

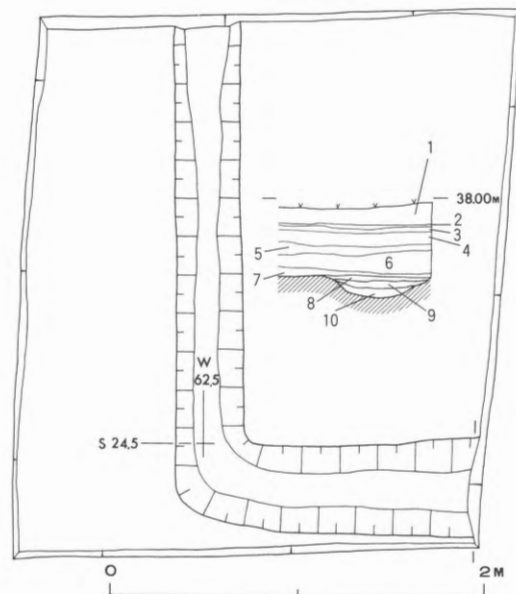
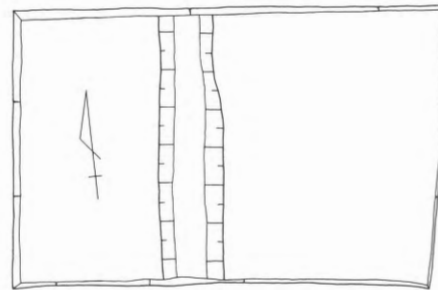
7 南門（図版第23、第22図）

伽藍主軸線と寺域の南限として割り出した南辺との交点を中心に、十字状にトレンチを設定した結果、中近世とくに近世の攪乱がいちじるしく、また、近年の水田化にともなう削平によって南門跡とすべき遺構は検出できずにおわった。

ただ、この地点を中心とする攪乱土中からは多数の瓦片が出土し、その内の軒瓦類を検討した結果、創建期のうちでも先ず建立され

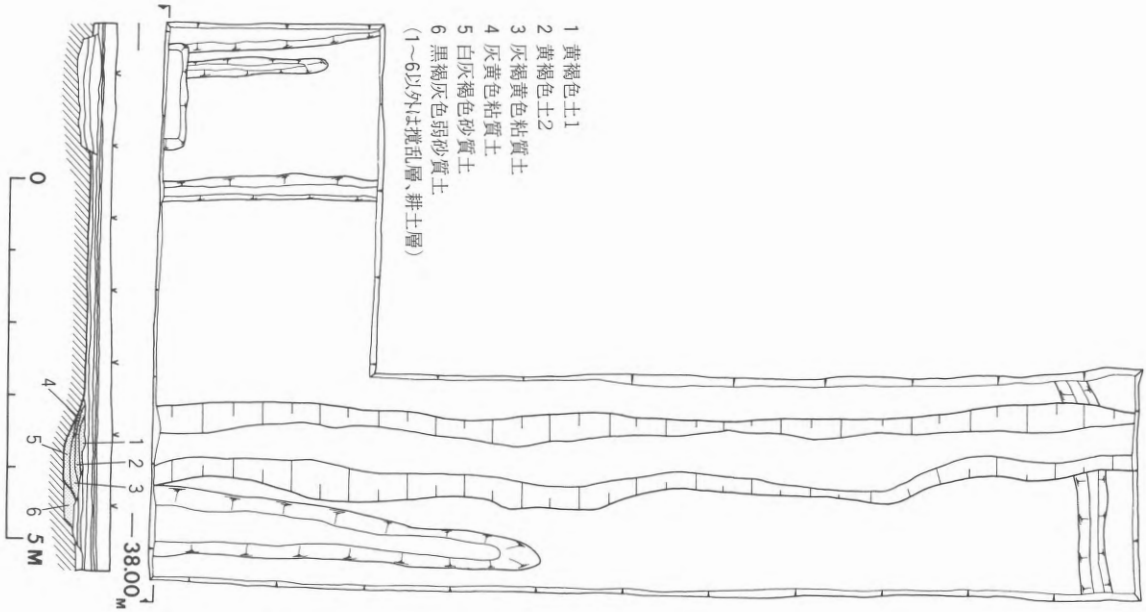


第18図 紀伊国分寺跡 廻廊址調査地点位置図

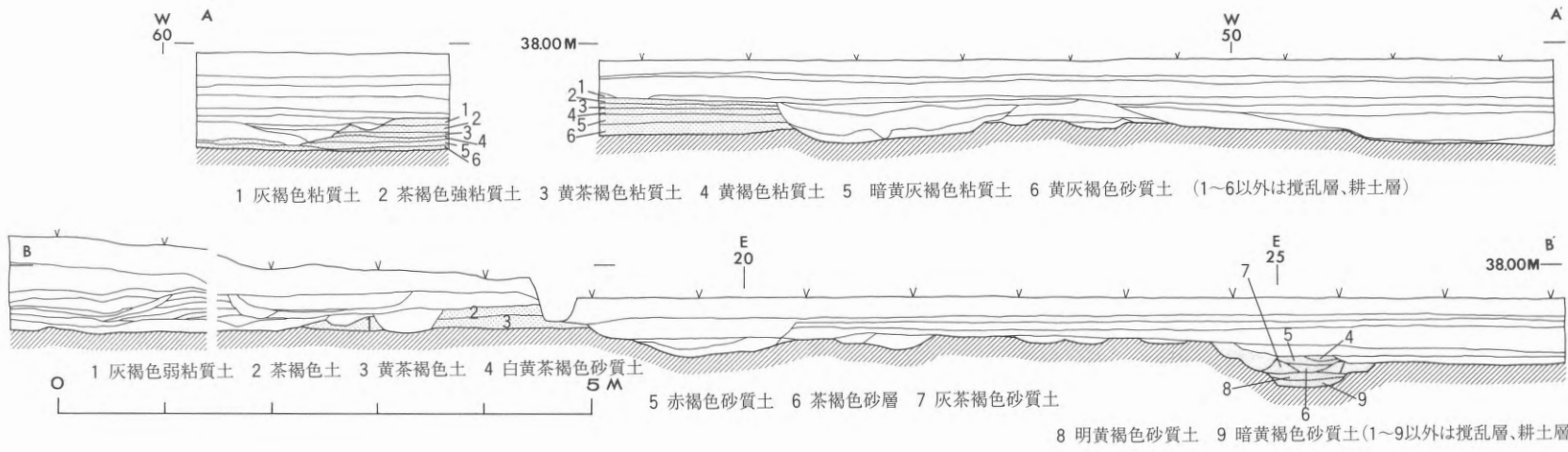
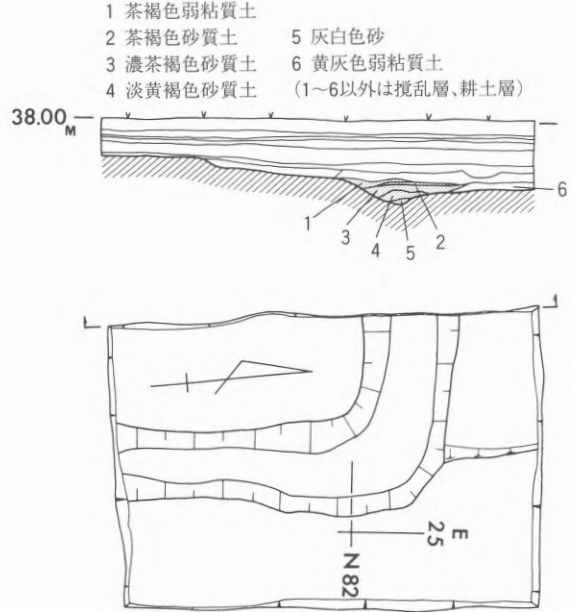


- | | |
|---------------------|-----------------|
| 1 表土層(黒色) | 6 淡黄褐色粘質土(瓦片含む) |
| 2 灰褐色弱砂質土層 | 7 黄灰褐色粘質土 |
| 3 灰黄褐色弱砂質土層 | 8 黄褐色粘質土 |
| 4 灰褐色弱粘質土層 | 9 黄茶褐色粘質土層 |
| 5 灰褐色弱粘質土層(やや黄色がかる) | 10 白茶褐色粘質土層 |

第19図 紀伊国分寺跡 廻廊址南西隅実測図



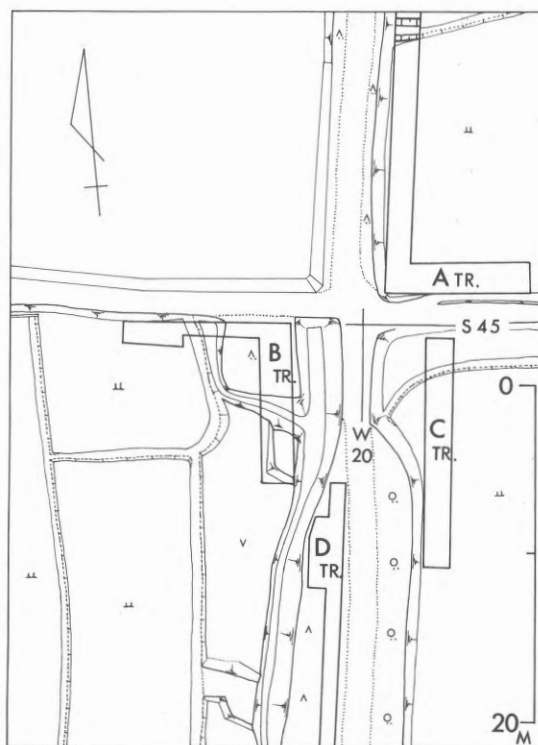
第20図 紀伊国分寺跡 廻廊址東北隅実測図



第21図 紀伊国分寺跡 廻廊址基礎断面土層図 (第18図に位置を示す)

たとみるべき金堂をはじめとする主要堂塔にはみられない軒瓦二種類の組合せ、范割れのいちじるしい軒丸瓦A-1と軒平瓦a-4、軒丸瓦Bと軒平瓦b（第5節参照）が確認できた。このことは、主要堂塔にやや遅れて建立された建築物をこの地点に想定すべきで、ここを南門と推定した。

なお、南門推定地点より南側へ、少くとも42.5mまでは、奈良時代の遺構や遺物は全く検出できなかった。また、南門推定地より南約12メートル地点で拳大の河原礫群が東西・南北それぞれ約3メートルの範囲で検出されたが、これは、現在の参道を整備する際、近世の瓦片などとともに遺棄されたものである。



第22図 紀伊国分寺跡 南門址トレンチ設定図

8 僧房（図版第14～17、第23～26図）

現在の本堂の北側の水田部分に僧房跡が確認された。つまり、講堂跡の北側に位置し、後述する軒廊で講堂とむすばれている。

創建期から中世にかけて再三建立されており遺構の重複が著しいが、ここでは、巴文軒瓦が出現するまでの創建期、再建（第Ⅱ期）、再々建（第Ⅲ期）建物に限って記述する。これら僧房はいずれも掘立建物で礎石は用いられておらず、元慶三年の火災後の再建にあたって旧基壇を大きく削平し再整備したが、掘立柱構造が幸いして、掘立柱埋設施設の痕跡がかるうじて確認することができた。なお、発掘は僧房の西約3分の2を発掘し、東端を確認するため北面の入側柱筋にトレンチを設けた。

創建期僧房 桁行13間、梁間4間の規模を有する。平均1.0×0.9メートルの平面規模をもつ掘立柱掘り方の底部で確認される柱痕跡は直径42センチメートルを計測する。第Ⅱ・Ⅲ期僧房再建期の整備あるいはその後の遺構の重複、またほぼ中央部に掘削された近世瓦の放棄墳などで身舎部分の間どりがいまひとつ不明確なところもあるが、室数は7～8室が想定できる。

間尺は桁行が全体で38.48メートル、梁行が同じく10.36メートルを計測する。桁行は13間等間とみて平均296センチメートル、梁間は4間で248・270・270・248センチメートルであり、天平尺に換算すると、桁行は10尺等間の13間、梁間は8.3尺・9尺・9尺・8.3尺^{注(6)}となる。

基壇は地山上に地山削土を叩き締めて造成しているが丁寧な版築状況はみられない。地盤が西から東に緩やかに下降するため調査区の西半は地山が露呈している。基壇規模は第Ⅱ期僧房建立地の削平のため明らかでない。かるうじて、基壇北面の西端部に瓦積みによる化粧が約5メートルにわたって1～2段遺存するだけである。この瓦積みは僧房西端より西方にあって、さらに西側へのびる素掘り溝の南肩部にみられ、あるいは、第Ⅱ期における溝肩の部分的な補修かもしれない。

第Ⅱ期僧房 元慶三年（879）の火災の後再建されたもので創建期の基壇を70～80センチメートル（推定）削り下げ新たな生活面としそいる。この時、房の南側の雨落溝をかねた排水溝を掘削整備している。また、南北両溝をつなぐ南北方向の小溝を西妻部の柱より西方約7.5メートル地点に設けている。

掘立柱の掘り方は創建期のそれよりもやや小さく、平均約0.8×0.7メートルのプランをもち、深さ約50センチメートルである。ただ、南面の側柱のみ0.55×0.35メートルのプランでその他とは例外で、長辺を桁方向においている。掘り方底に残された柱の痕跡は直径30センチメートルを計る。創建期僧房が桁行13間であったのに対し、第Ⅱ期僧房は桁行32.93メートルを計る12間の偶数間である。梁間は創建期僧房と同じく、身舎部の梁間の広い4間の9.3メートルを計る。創建期と同じく天平尺では桁行は1間274.4センチメートルで約9尺2寸、梁間は225・240・240・225センチメートルでそれぞれ7.5尺強・8尺強・8尺強・7.5尺強である。室数は明確でない。

なお、再建の年代は、北入側柱筋に穿たれた直径15センチメートル、深さ約12センチメートルの小ピット（図版第17、第25図）の中に埋納されていた延喜通宝約70枚が鎮壇あるいは地鎮の意味^{注(7)}をもつものとみられ、延喜通宝が鑄造された延喜9年（909）より後、さほど時間が経過しないうちの建設とみられよう。この小ピットの底から出土した延喜通宝には粟あるいは稗とみられる穀類の殻が青銅成分に置換され通宝に銹着しており、延喜通宝のほか五穀をも埋納した可能性もある。通宝はあたかも紐等に通されていたかのようにそれぞれが銹着していた。これらを埋納した後、ピット上部をうずら鳥の卵大の小礫を充填していた。

前述の房南北の溝のうち、南溝は平均上面の幅1.6メートル、底幅1.0メートル、深さは、基壇側からは0.4メートル、外側では0.2メートルの深さを計測する。北溝の幅も南溝と同規模のもので、基壇側では0.25メートル、外側では0.2メートルの深さを測る。これらの両溝の堆積は焼土・灰炭層をはさみ上下二層に明確に分層でき上層は、次の第Ⅲ期僧房の生活堆積である。

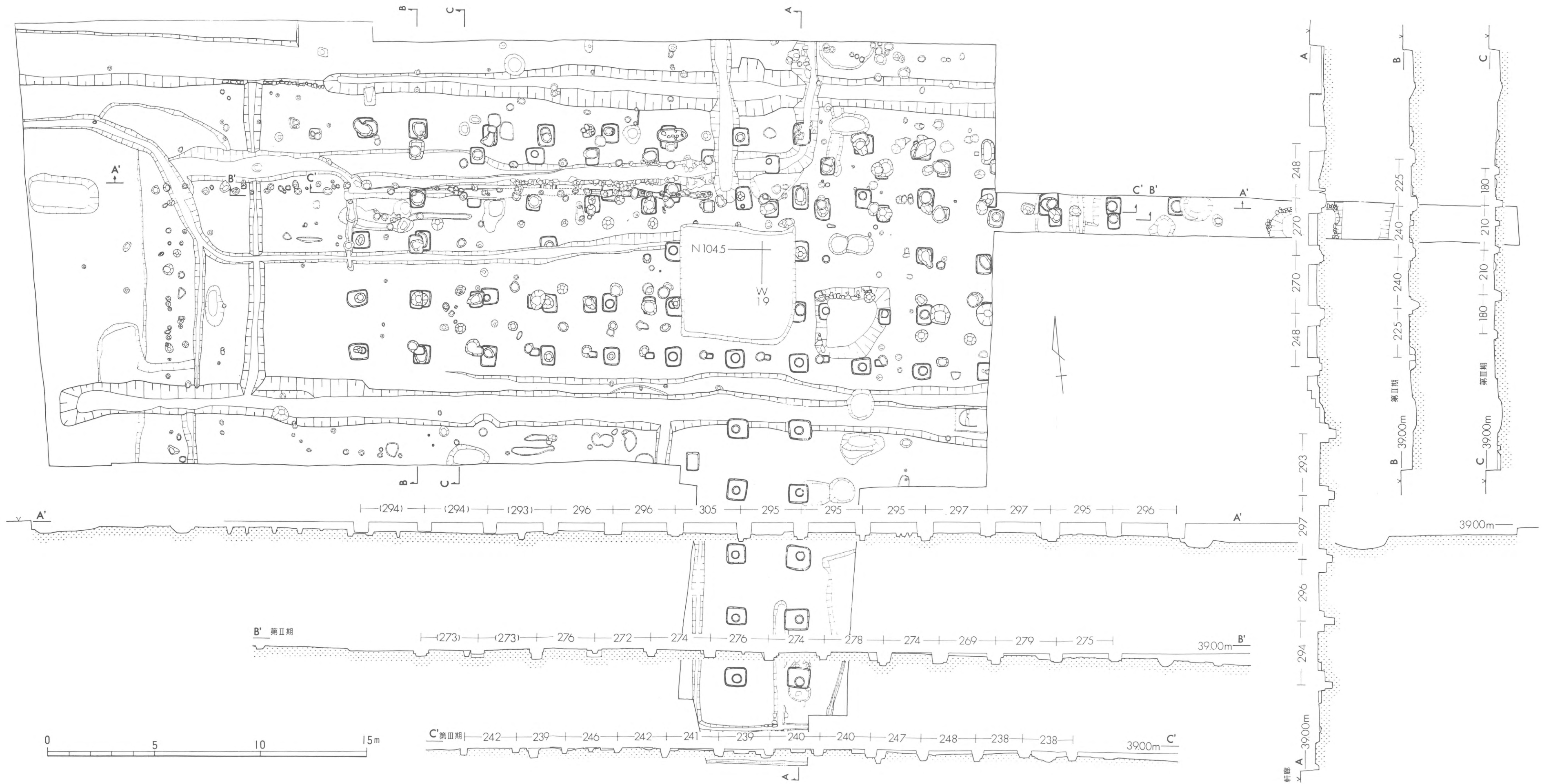
南溝の南側で0.9×0.6メートルのプランをもつ浅い土壌を検出した。深さ、わずかに8センチメートルを計測する土壌内には土師器の大型鉢・椀等が納められていたが（49ページ参照）、遺構の性格など不明である。

掘立柱掘り方あるいは小ピット、南北溝の深さについては、いずれも、第Ⅲ期僧房の生活面からの深さであり、再建僧房が再び焼失した後の再々建時には火災面の整理が考えられ、この時、10センチメートル前後はやはり削平されたものと考えべきであり、諸遺構の深さについては全体にもう少し深いものであろう。

なお、再建僧房の焼失時期のしほり込みは困難で、第Ⅲ期僧房床面より検出された緑釉陶器（図版第37-353、第45図3）が製産された10世紀後半から11世紀前半までの間とせざるを得ない。

第Ⅲ期僧房 創建期・再建の第Ⅱ期僧房の跡地を踏襲して再々建されている。掘立柱は平均して直径50センチメートル、深さ約30センチメートルを計測する不正円形の掘り方をもつ。第Ⅱ期僧房の焼失後の整理時に生活面の削平程度で大規模な地業等は実施していないようである。

桁行は29.00メートル、梁行は7.8メートルを計測する。桁行は第Ⅱ期僧房と同じで12間、西妻部での梁間4間である。これから、各間尺は、桁行241.6センチメートルで8.1尺等間、梁間は180・210・210・180センチメートルで、各々約6尺・7尺・7尺・6尺間となる。この期の僧房は前Ⅱ期の僧房のように身舎を区切る柱がなく、その他にも目立った遺構は検出されなかった。

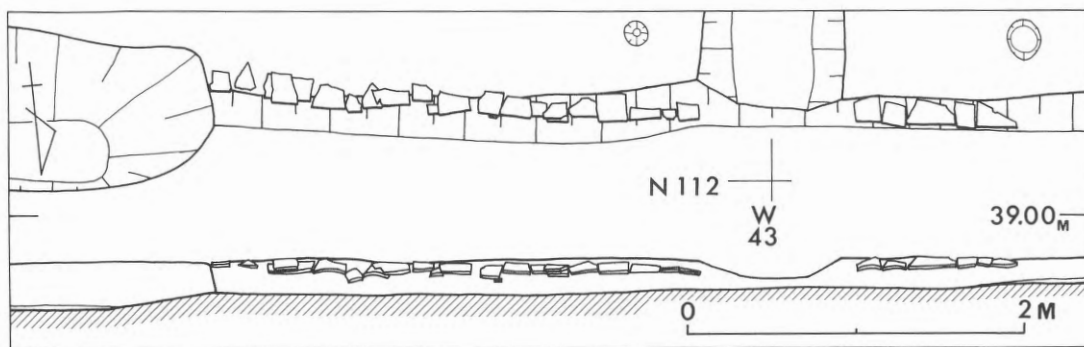


第23図 紀伊国分寺跡 僧房址全体実測図

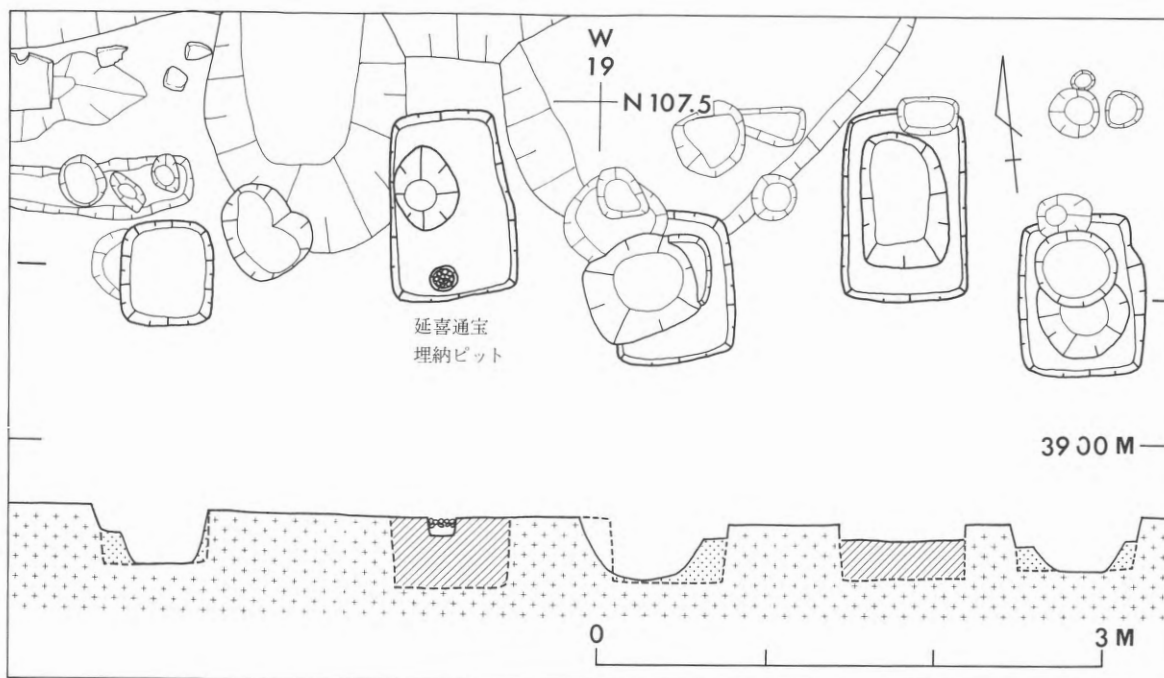
第Ⅱ期僧房と同じように、焼失時期については明確にする資料にかけが、前述の緑釉陶器の生産時期以降で11世紀代には再度焼失したものとみられる。

なお、第Ⅲ期僧房の焼失を最後に、表現は適切ではないかもしれないが、創建期以来の天平様式の僧房の建立は途絶え、その後は小規模な掘立柱建物が営まれたようである。この伝統的な僧房は掘立柱構造のうえ各房の焼失時の整理時の整理廃物のなかには瓦類が全く含まれていないことから上屋は瓦葺きではなく板葺きあるいは草葺屋根の構造であったものとみられる。

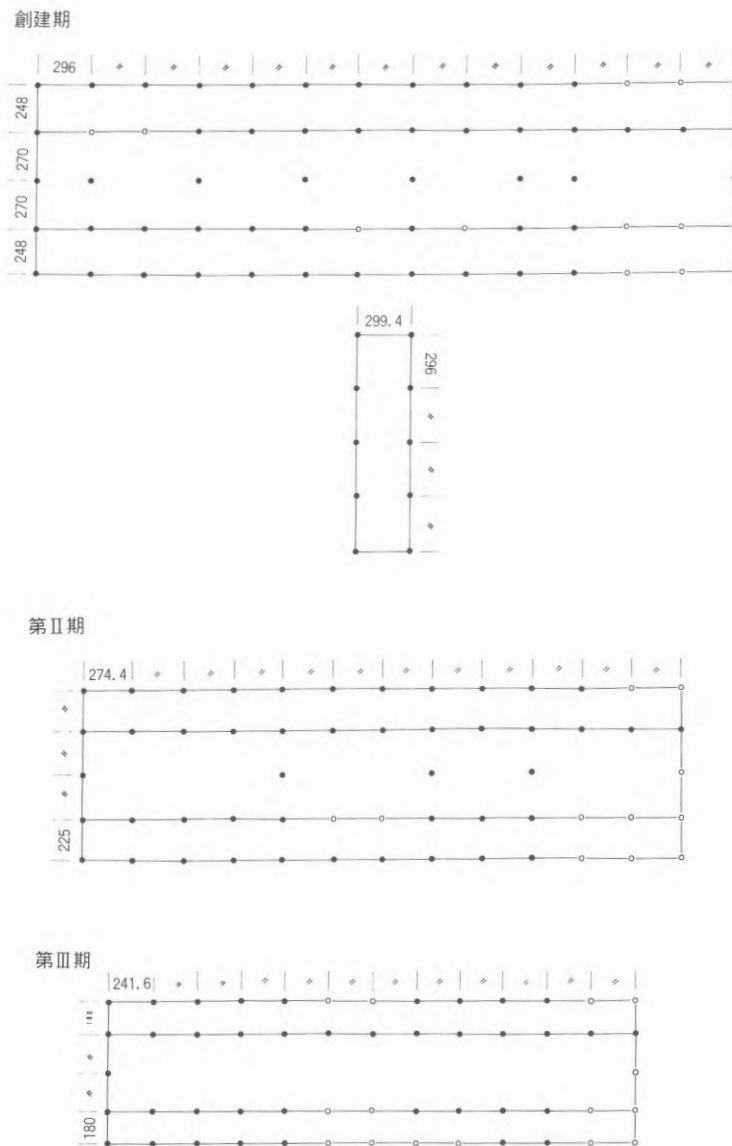
以上、3期の僧房の規模・柱位置を示すならば第25図のとおりである。ただし、大規模な攪乱等で柱の存否の検討できないものもあり、大方の御叱正をいただきたい。



第24図 紀伊国分寺跡 僧房址基壇北面実測図



第25図 紀伊国分寺跡 僧房址掘立柱と延喜通宝埋納位置図



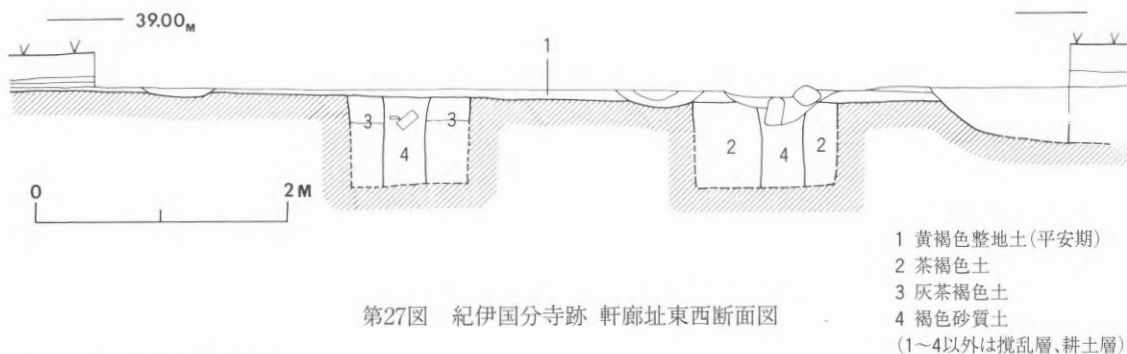
第26図 紀伊国分寺跡 僧房址掘立柱位置図

9 軒廊 (図版第22、第27図)

講堂と僧房との間に認められた掘立柱建物で、梁間11.74~11.84メートルで、1間平均2.935~2.96メートルを計る10尺等間の4間、梁間は平均2.994メートル間つまり10尺1間の単廊である。

創建期僧房の馬道部分にあたる柱すじに合うもので、また、僧房の側柱より南11尺地点から軒廊がはじまり講堂へ連なるものである。

土壇や雨落溝などは検出できず、のちの削平に拠るものかとも考えられるが、柱埋設の掘り形は約70cmも残存するところから、建設当初からそれらの施設は設けられなかったのかも知れない。



第27図 紀伊国分寺跡 軒廊址東西断面図

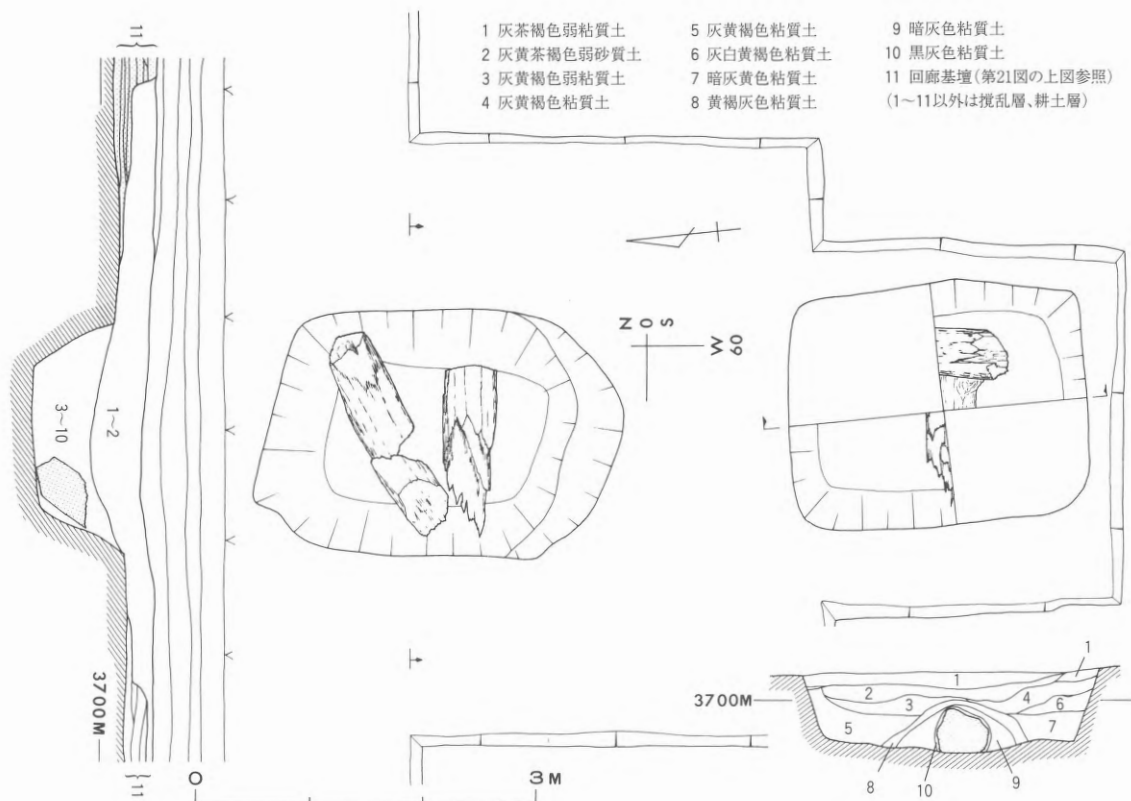
10 その他の遺構

(1) 埋木土壌 (図版第24、第28図)

塔の西方約60メートル地点で西側廻廊を潰して掘削された二基の大型土壌が検出された。土壌は掘り込み部上面では、北側土壌で南北3.0、東西2.2メートル、南側土壌で南北2.6、東西2.0メートルを測る。深さはそれぞれ0.8メートル、0.7メートルである。

土壌内には針葉樹材を鋸などで裁断したものを埋めている。北側土壌には、長さ1.2、径0.6メートルを計測する八角柱のほか2点が、南側土壌には2点の計5点が、それぞれ槽を組むように埋置され、材の周辺は、おもに暗灰色・黒灰色・黄褐色の三種の粘土を厚み10~30センチメートルに巻いて保存を図っているようである。

出土地点が伽藍中軸線を介して塔とはほぼ対称地点にもあたることや、直径60センチメートルという異常ともいふべき太さなどから、よほど大切な材とみられ、塔の芯柱を想定させるのである。



第28図 紀伊国分寺跡 埋木遺構実測図

なお、土壌は他にも存在する可能性はある。また、南側土壌は完掘せず、土壌内の材2点についても現地にそのまま埋め戻した。

(2) 梵鐘鑄造遺構（第6図）

金堂の背後で遺構の一部が検出されたもので、一辺が3.1メートル、深さ1.0メートルの土壌で、他地域の遺構などから、当遺構も正方形を呈する土壌であろう。底部は方2.4メートルの平坦部をもつものとみられ、壁部に接する平坦部の周りには幅0.3メートルの浅い溝状の凹みがみられる。

土壌内には鑄型の中子片や銅分の溶解物が付着したすさ入り粘土塊などが多くみられた。本体の鑄型は鑄造仕上り時に打ち割られるので判断がつかない。

鑄造時期は近世初期の軒瓦やその他の瓦類が赤くやけついたりしているところから、元禄年間に建立されたといわれる現本堂の落慶に関連する時期のものであろう。

第5節 遺物

紀伊国分寺跡より出土する遺物は、その建築材のひとつである屋瓦がおもである。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が圧倒的に多く、道具瓦としては鬼瓦・隅木先瓦などが出土し、また塼の出土も目立つ。

これらの建材のほかに、土師器・黒色土器・青磁・三彩・緑釉・灰釉・滑石製椀などの什器類や、延喜通宝、仏具とみられる漆箱製品など、奈良時代から平安時代にわたる遺物のほかに、中世から近世、近代におよぶ夥しい遺物の出土をみたが、ここでは、国分寺の盛衰を如実に語る瓦類を中心に、その他奈良、平安時代の遺物について説明を加えることとする。

1 瓦類

(1) 軒瓦（図版第25～30、第29～33、38図）

金堂を中心に、創建期から現代にいたるまでの膨大な量の瓦を見出せるが、平安時代後期の巴文軒瓦の出現までに限れば、軒丸瓦12タイプ、13種類、軒平瓦15タイプ、16種類が認められる。

いうまでもなく金堂跡を中心に出土する創建期の軒丸瓦A-1は複弁八葉の蓮華文を飾り、中房には1・4・8の計13個の珠文をもつ。外区には珠文がめぐり直立縁でおわる。ほぼ同時期とみられ塔址を中心に出土する軒丸瓦A-2は、中房の珠文が1・5・8の計14個の珠文をもち、外縁の内側には隆線鋸歯文をもつ。軒平瓦は中心飾より左右へ三反転する均正唐草文を配し、上外区・脇区には長円珠文、下外区には隆線鋸歯文を配している。軒丸瓦・軒平瓦ともに興福寺式と称しうるものである（軒丸瓦A-1・A-2・軒平瓦^{注(8)}a-1・a-2・a-3）。

創建期以後、元慶三年までの軒瓦の中で、創建期にもっとも近い軒瓦の設定は、いうまでもなく廻廊によって圍繞された伽藍中枢部に使用された瓦があげられるが、壮大な伽藍建立は一気に建設されるわけではなく、その中でもおのずと時間差を考えねばならない。出土瓦の組合せによって、範割れのいちじるしい軒丸瓦A-1と軒平瓦a-4を用いた鐘楼が金堂などの建立よりも一時期遅れるもと解せられるのである。また、南門推定地のみから出土するとしてもよい軒平瓦bは軒丸瓦Bとともに、鐘楼跡より出土する軒瓦の組合せをとまなう。これらは、明らかに軒瓦A類・a類組合せに後続することを示すことにより、軒丸瓦B・軒平瓦a-4、bは主要堂塔の軒瓦よりやや時期の下るものと設定できる。

次に軒丸瓦C、軒平瓦eをみると、蓮華文・均正唐草文はやや形骸化しているが、創建期のそれらの特徴をよくとらえており、軒丸瓦F～G、軒平瓦f～jとは大きな差異を示している。この軒瓦の組合せについては、胎土・色調・珠文などの状況から組合せを設定したが、発掘調査によるかぎり、この軒瓦の組合せのみで軒を飾った堂塔はなく、もっとも早い時期の差し替え専用の軒瓦として、第一次差し替え瓦と考えられる。同様に出土点数などから第一次差し替え瓦につづく差し替え瓦とすべき軒瓦は軒丸瓦F～G、軒平瓦f～jが考えられ、塔跡において顕著な出土をみた。組合せとしては、軒丸瓦Fと軒平瓦g、軒丸瓦Gと軒平瓦jが胎土・色調・焼成・生産技法からセット関係をとらえることができる。このほか、軒丸瓦D・Eと軒平瓦fは出土点数が極めて少く明確にし難いが第1次差し替え瓦に後続する第2・3次差し替え用の軒瓦類とすることが可能である。

これら、第2、3次の差し替え瓦とした軒瓦類はそれぞれの特徴や、出土状況、とくに瓦積基壇階段部の化粧として使用されていた状況などから、第2次のものとして、軒丸瓦D～F、軒平瓦f・gが考えられ、第三次のものとして、軒丸瓦F-2～G、軒平瓦h～jが設定できる。

元慶三年以降の金堂再建期の軒丸瓦H-1、H-2は、複弁八葉の蓮華文を配するが、その簡略化・退化がいちじるしい。小さい中房は1・4の5個の珠文をもち、外区には珠文が緊密にめぐらされている。軒平瓦kとも均正唐草文の1種とすることができるが、正確な均正唐草文ではない。外区の装飾は珠文のみで、これを緊密にめぐらしている。

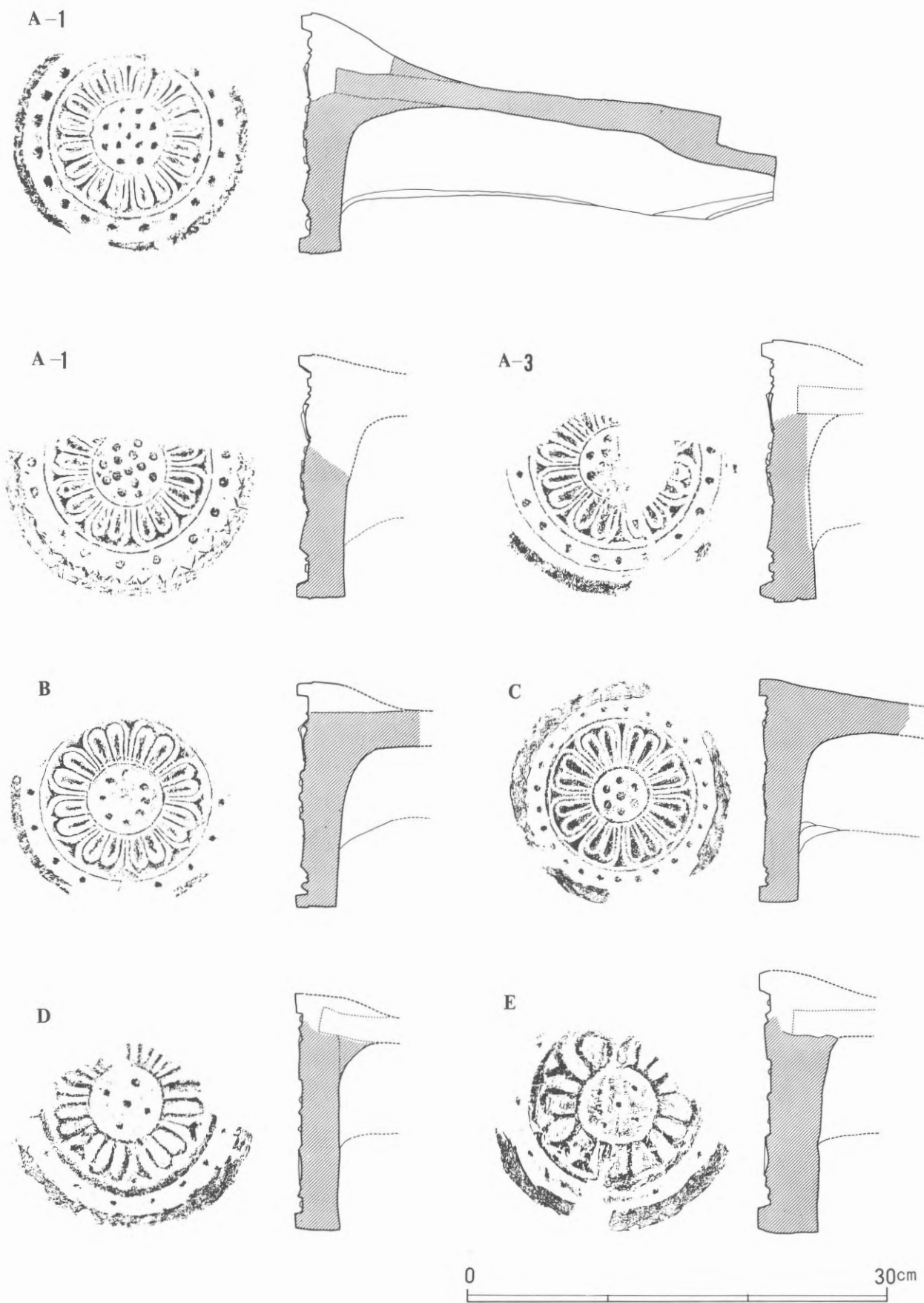
このほか再々建されたとみられる金堂に用いられた軒瓦の組合せがある。金堂周辺の表土層より出土するもので、軒丸瓦Iは中房に蓮座と「佛」をあらわした蓮華文軒丸瓦の一種である。軒平瓦lは、無額に近い形態をもつもので、中心飾はやや形骸化しているが、左右へ秀麗にのびる唐草文をもつ宝相華唐草文軒平瓦である。

平安時代後期の軒丸瓦I・軒平瓦lに続く軒瓦は巴文をその主装飾文とする(第38図)。軒丸瓦は頭の小さな三巴文を配し、その末尾はよく回転し内外区を分ける圏線となる。外区は緊密に珠文をめぐらしている。これと組合せになる軒平瓦は、中心飾に軒平瓦のそれと同様の三巴文おき、左右は均正唐草文を配している。内外区の界線はなく、中心飾・唐草文の上部に珠文を一例におく。

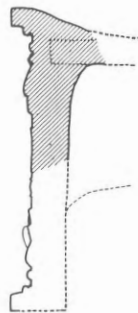
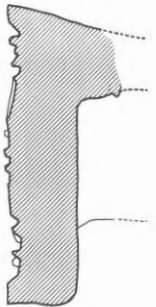
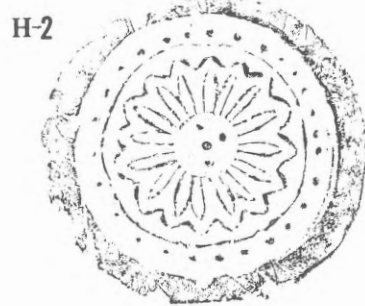
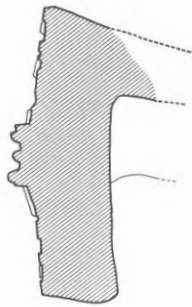
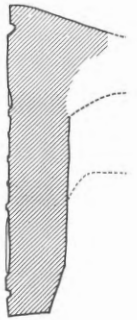
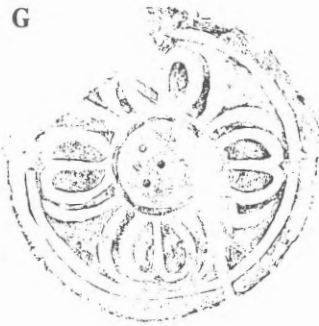
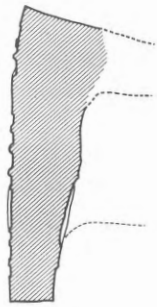
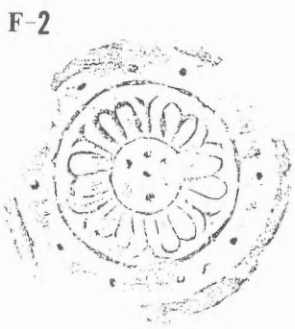
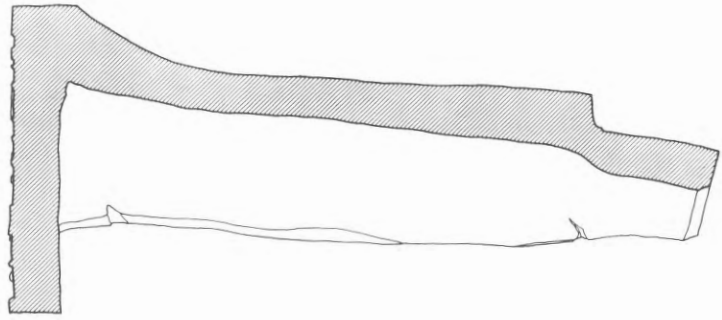
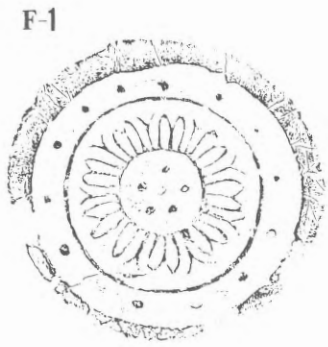
なお、軒平瓦dは一点のみの出土で、むしろ岩出町西国分所在の西国分廃寺で使用されたものが何らかによって、もたらされたものであろう。

(2) 道具瓦及び埴 (図版第31、第34図)

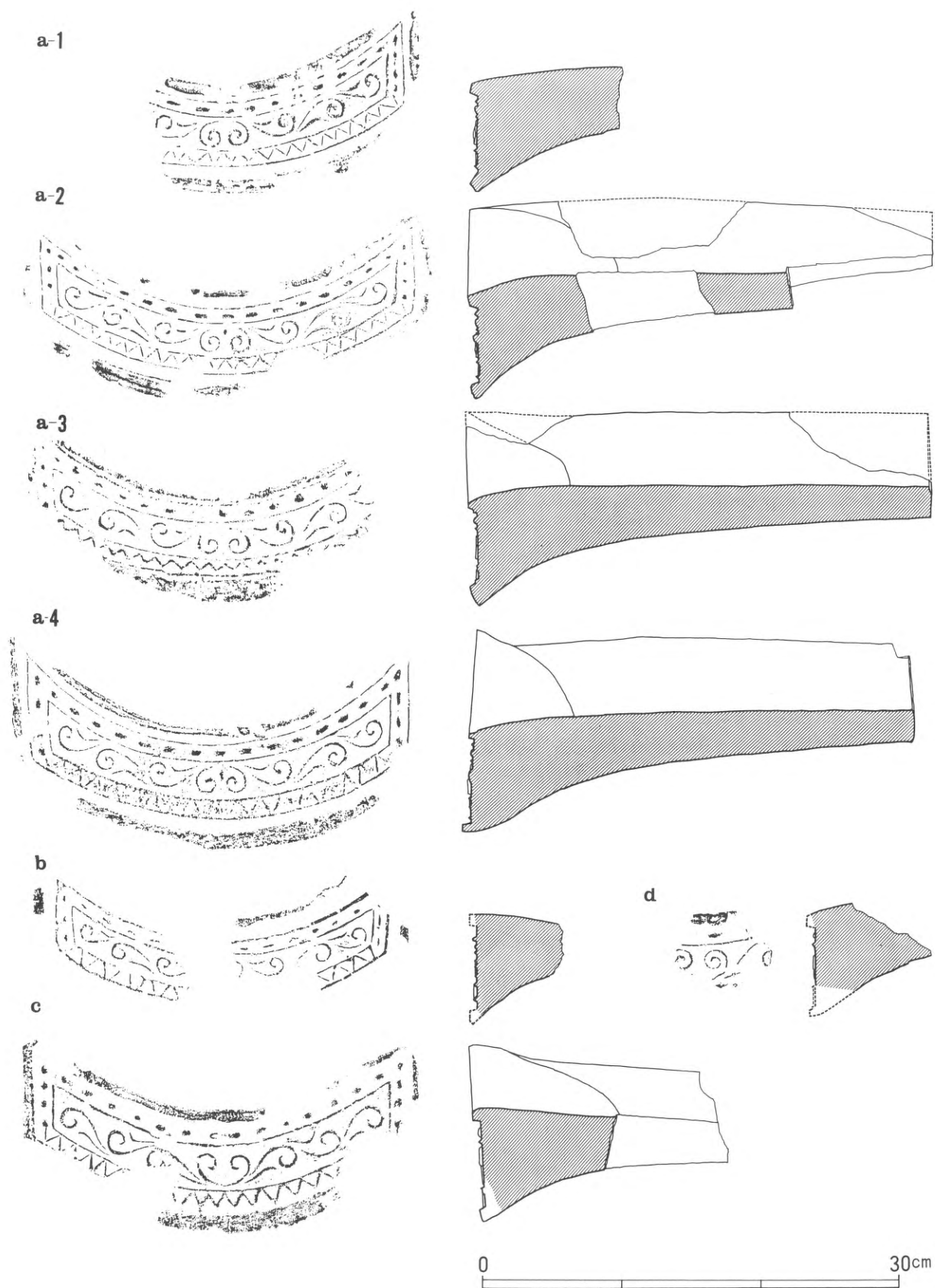
鬼瓦 いずれも鬼面文鬼瓦で5種類が出土した。1は、金堂基壇北側外、講堂基壇北東部外で検出されたもので、高さ約51cm、幅約45cmを計る大型品で、創建期の金堂・講堂の大棟端を飾ったものであろう。2はもっとも小型の鬼面で元慶以降再建されずに了った講堂の基壇南西部南側外の創建期瓦類のみを含む瓦層の最下層、つまり、講堂前庭に接して出土したもので、僧房跡の整地層より出土した中型の3～5とともに扁平な感じを受けとるものである。いずれも創建期のものと考えられ、その鬼面文構成は、中央に鬼面文を配し周辺に珠文をめぐらすものである。このように5種類の鬼面の出土は、それぞれ使用個所によって使い分けたものとみられ、2はその出土位置から、講堂の下り棟端を飾ったものと考えられる。



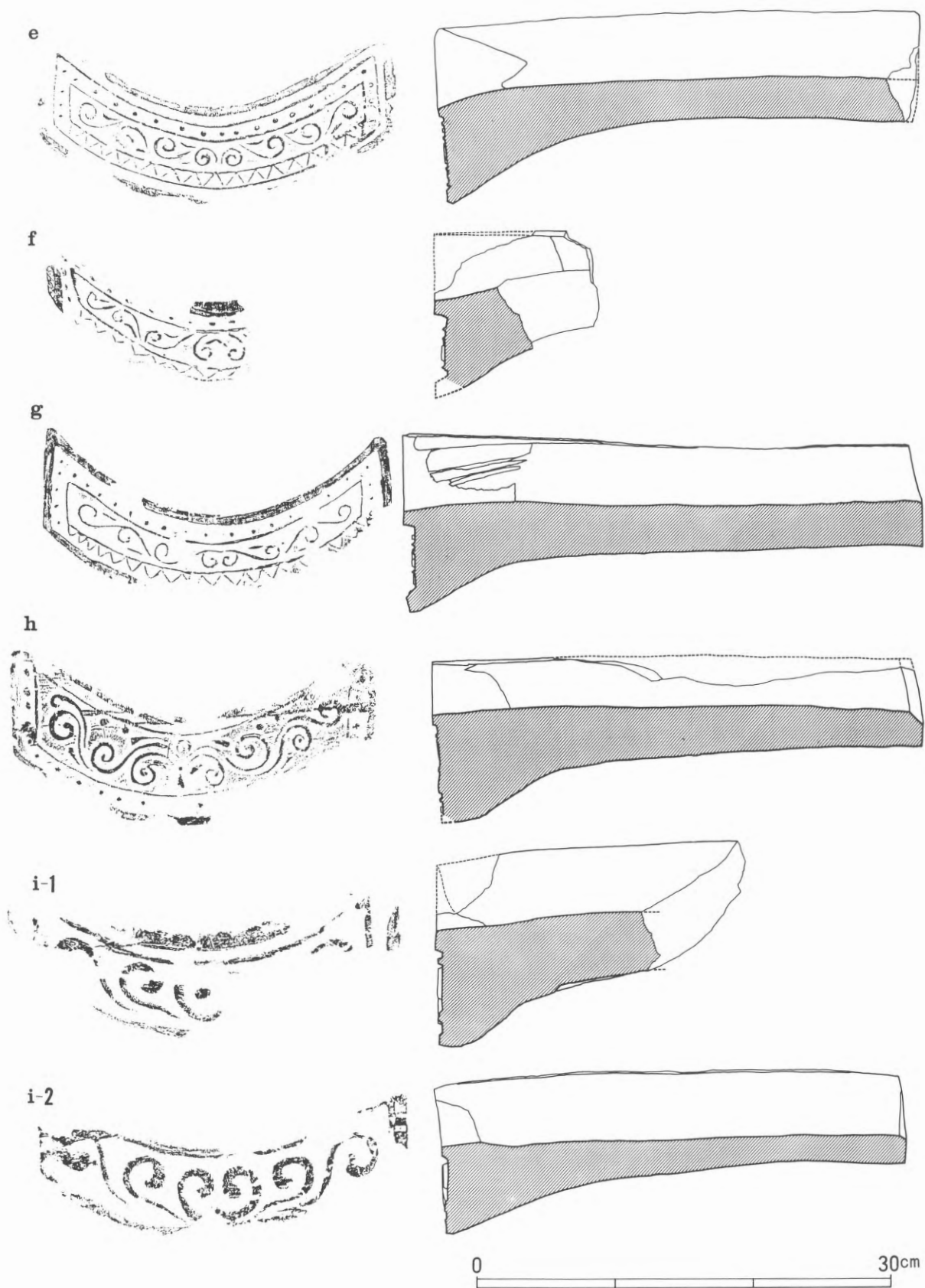
第29図 紀伊国分寺跡 軒丸瓦拓本・実測図（1）



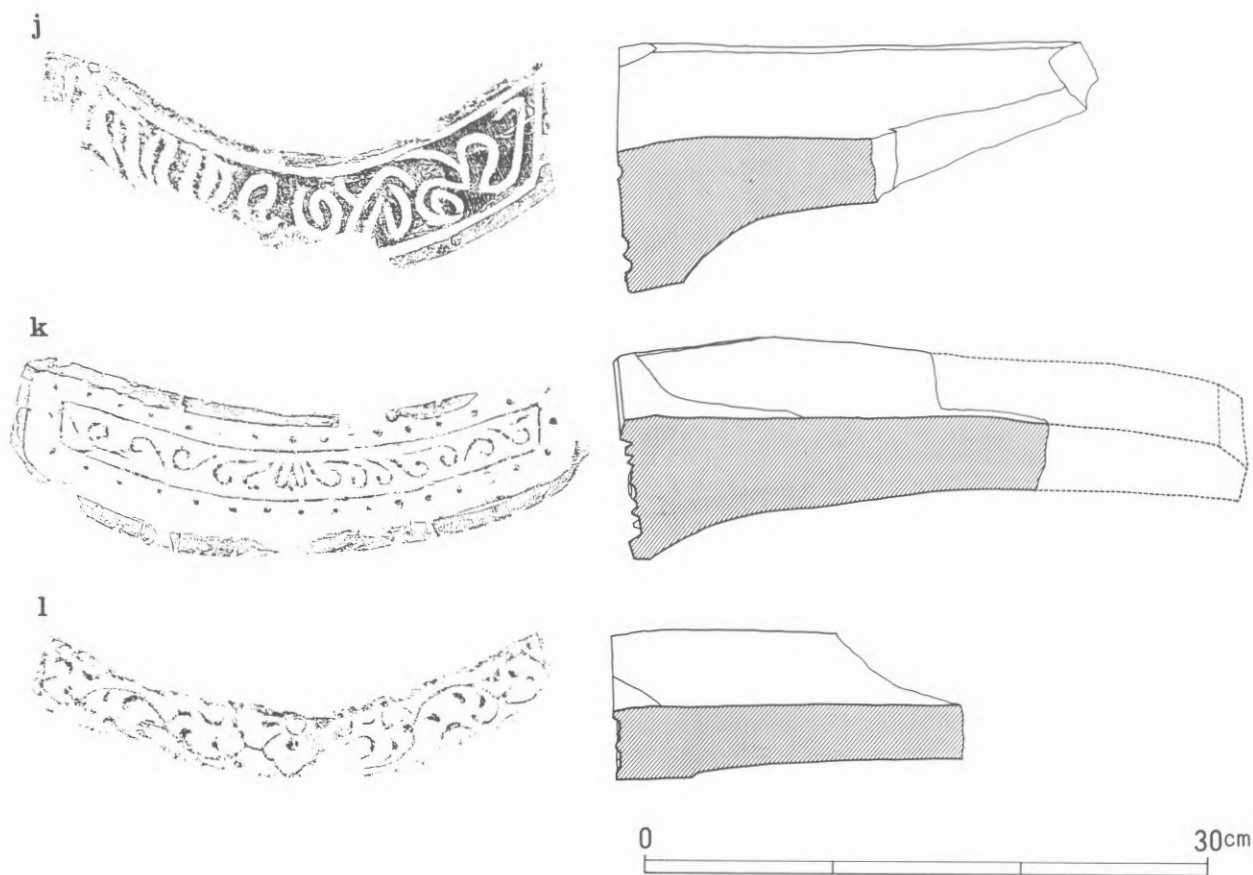
第30图 紀伊国分寺跡 軒丸瓦拓本・実測図(2)



第31図 紀伊国分寺跡 軒平瓦拓本・実測図(1)



第32図 紀伊国分寺跡 軒平瓦拓本・実測図(2)



第33図 紀伊国分寺跡 軒平瓦拓本・実測図(3)

第1表 紀伊国分寺跡 軒丸瓦分類表(巴文瓦の出現まで)

	全長	瓦当径	瓦当の厚さ	内区径	蓮弁	中房径	中房の形状①	蓮子	瓦当面と丸瓦の接合②	瓦当裏面の布痕	瓦当外周の鋭削り	瓦当外縁端面の鋭削り	備考
	cm	cm	cm	cm		cm							
A-1	34.3	17.4	2.5	11.9	複8	5.5	A	1+4+8	A	無	無	無	外縁内面に隆線鋸齒文あり淡路国分寺瓦と同範
A-2		17.4	2.35	12.0	々	5.2	々	1+5+8	々	々	々	々	
A-3		(18.4)	3.2	12.4	々	5.1	々	1+5+(8)	々	々	々	々	
B		16.9	2.0	12.05	々	5.1~5.4	々	1+8	々	々	々	々	
C		15.8~16.3	2.15	10.9	々	4.0	々	1+6	不明	々	有	有	
D		(18.0)	3.8	13.0	複7	5.2	々	1+4	A	々	不明	々	範の型押しが特にあまい
E		(17.0)	3.8	12.5	複5	5.5	々	1+4	々	々	々	々	
F-1	39.6	16.7	2.3	10.5	複8+単1	4.5	B	1+5	B	有	有	々	
F-2		15.7	3.7	9.9	複6	4.1	々	1+6	々	々	々	々	
G		16.5	2.9	13.5	複4	5.1	々	1+4	々	々	不明	々	
H-1		17.4	4.0	10.7	複8	3.45	C	1+4	々	々	無	無	
H-2		17.4	4.0	10.7	複8	3.45	B	1+4	不明	無	有	有	
I		不明	不明	11.5	単16	4.8	々	蓮座に佛	々	不明	不明	不明	

① A 凸レンズ状
B 平滑
C 突出

② A 瓦当へ丸瓦の差込み 計画数の()印は推定値
B 一本づくり

第2表 紀伊国分寺跡 軒平瓦分類表 (巴文瓦の出現まで)

	全長	瓦当前幅	瓦当の高さ	上外区文様①	脇区文様②	下外区文様③	頸の形状	上弧面の施調整(瓦当面より)	上弧端のカット④	粘土切りの弓痕	頸下面の施調整(瓦当面より)	備考	
	cm	cm	cm					cm			cm		
a-1		(28.5)	7.6	A	A	A	曲線頸	9.1	A	×	11.0	A・A' 不明 全長33.5cm 淡路国分寺瓦と同範	
a-2		(28.5)	7.7	A	A	A	々	5.5	A	×	11.5		
a-3	33.5	(28.0)	7.7	A	A	A	々	9.6	A	○	12.7		
a-4	31.0	(29.5)	8.3	A	A	A	々	6.1	A	×	10.5		
b		(27.0)	(8.0)	A	A	A	々	6.5	A		5.5		
c		(28.3)	9.0	A	A	A	々	10.6	A	×	10.0		
d		不明	不明	A	(A)	(A)	(々)	不明	不明	不明	不明		() は西国分塔址出土瓦による 上弧端のカットがないものもある
e	35.2	(26.7)	7.0	B	B	A	々	4.0	B	○	全		
f		(25.0)	(7.5)	A	A	A	々	9.5	B		全		
g	37.5	23.9	6.1	B	B	A	々	13.0	A	×	全		
h		(26.2)	7.6	C	B	B	々	7.5	B	○	全		
i-1		28.2	(8.9)	C	C	C	々	4.5	A	○	14.5		
i-2	34.0	(26.0)	6.4	C	C	C	々	5.5	C	×	全		
j		26.85	6.5	C	C	C	々	11.0	A	×	全		
k	34.3	28.5	7.5	B	B	B	々	13.5	A	×	15.5		
l		26.5	3.8	C	C	C	々	3.0	A	○	全		

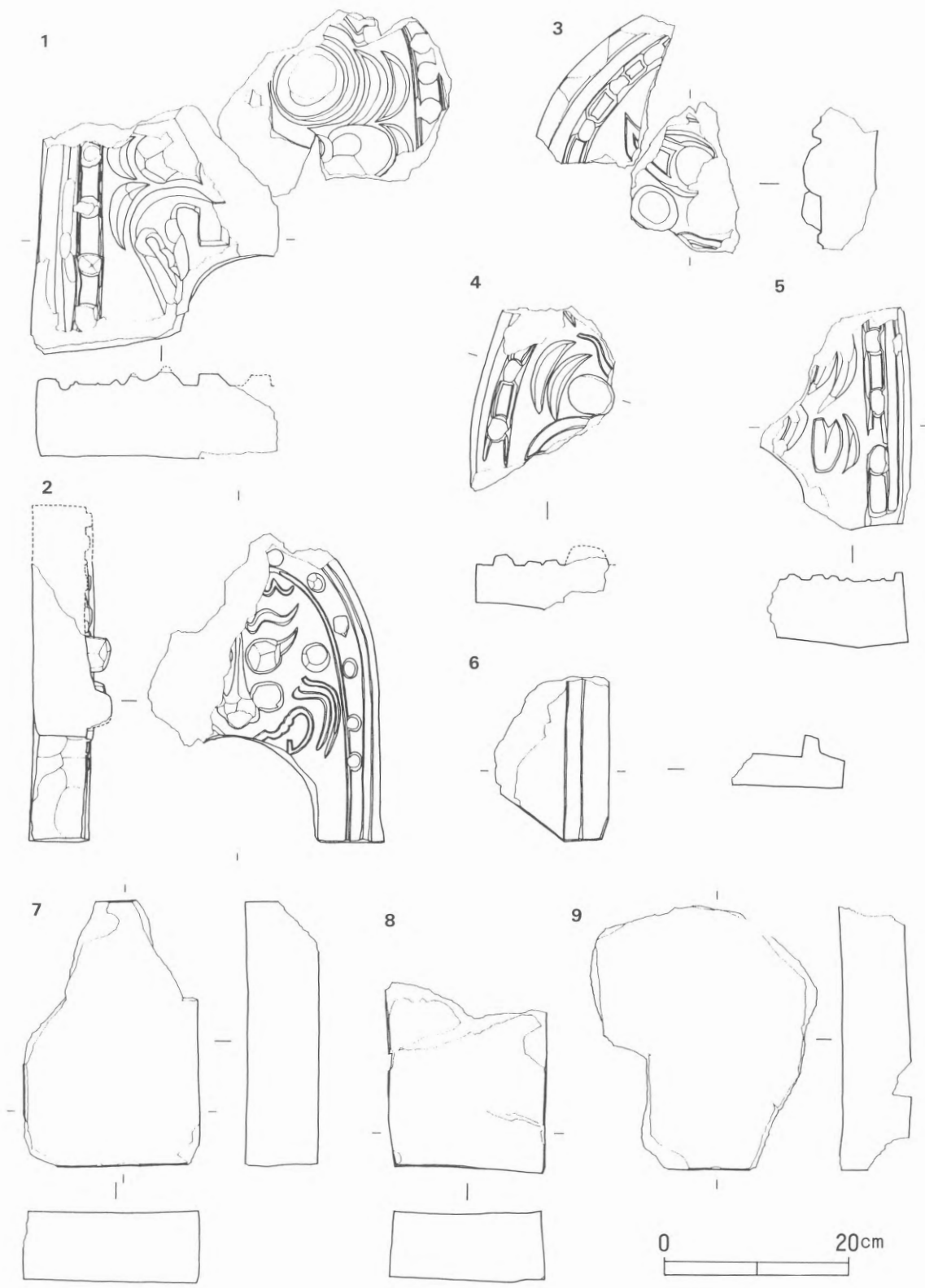
- ①② A 長円珠文 B 珠文 C なし
 ③ A 隆線鋸歯文 B 珠文 C なし
 ④ A 脇区に対して45°の切込み B 脇区に対して直角に近い切込み C 切込みのないもの
 計画数の()印は推定値

第3表 紀伊国分寺跡 軒丸瓦遺構別出土点数一覧

	金堂		講堂		塔		僧房		中門		軒廊		廻廊		南門		鐘樓		計		
	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率			
A-1	45	33	14	10	1	1	48	35	7	5	3	2	3	2	8	6	7	5	136		
A-2	1	1			4	44	2	22	1	11					1	11			9		
A-3	3	43			1	14	2	29										1	14	7	
B	6	29	3	14			7	33			1	5			3	14			1	5	21
C	3	75	1	25																4	
D	1	33					1	33					1	33						3	
E	1	100																		1	
F-1	3	25			3	25	4	33			1	8							1	8	12
F-2	1	14					3	43											3	43	7
G	1	25			2	50	1	25													4
H-1							1	50	1	50											2
H-2	14	66					5	24					1	50					1	5	21
H-1、H-2不明	13	68	3	16			3	16													19
I			1	100																	1
	12種	92点	5種	22点	5種	11点	11種	77点	3種	9点	3種	5点	3種	5点	3種	12点	6種	14点		248	

第4表 紀伊国分寺跡 軒平瓦遺構別出土点数一覧

	金堂		講堂		塔		僧房		中門		軒廊		廻廊		南門		鐘樓		計		
	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率			
a-1 A	2	66											1	33						3	
a-2 A'	6	66							2	22									1	11	9
a-1・a-2不明	21	28	6	8	9	12	25	34	3	4	2	3			2	3			6	8	74
a-3	6	55	1	9			1	9	1	9			1	9	1	9					11
a-4	3	10	3	10			3	10	3	10	1	3			5	17	12	40			30
b							1	14							6	86					7
c							2	50			2	50									4
d	1	100																			1
e	4	27			1	7	8	53											2	13	15
f	1	50					1	50													2
g	1	9			4	36	3	27			1	9	1	9					1	9	11
h	2	13			1	6	12	75			1	6							1	6	17
i-1	1	50											1	50							2
i-2							5	50	4	40									1	10	10
j	3	75					1	25													4
k	52	75	2	3			8	12					6	9					1	1	69
l	3	75					1	25													4
	14種	106点	4種	12点	4種	15点	13種	71点	5種	13点	5種	7点	5種	10点	4種	14点	7種	25点			273



第34図 紀伊国分寺跡 道具瓦実測図

隅木先瓦 6は隅木の上部に蓋としてのせたもので、その瓦尻にあたる部分の断片である。その端は茅負にはめ込むように直角に矢羽根状の切り込みを入れている。また、隅木からはずれないように隅木方向にそって凸帯をつくりつけている。創建期のものとみられる。

塙 大・中・小と3種類のものがみられたが、原位置をとどめているものはなく、多くは、僧房跡の整地層より出土した。縦横それぞれ、29以上×不明、30×20、20以上×18cmのもので、厚みは約8cmのものが多い。創建期のものであろう。

(3) 丸瓦・平瓦 (図版第32～34、第35～37図)

丸瓦は行基葺の丸瓦と玉縁をもった丸瓦2群に大別できる。行基葺瓦としては3タイプがみとめられ、101・103は塔跡のみで出土した。大型のもので、粘土帯巻上げ技法が観察されるが、その製作・整形技法は丁寧である。出土点数が少ないところから道具瓦として、塔の各層屋根の四方の下り棟に用いられた創建期の雁振り瓦とみられる。104・105は通例の大きさを呈するもので出土点数が少なく、やはり道具瓦の一種とみられるが、時期の設定は困難である。

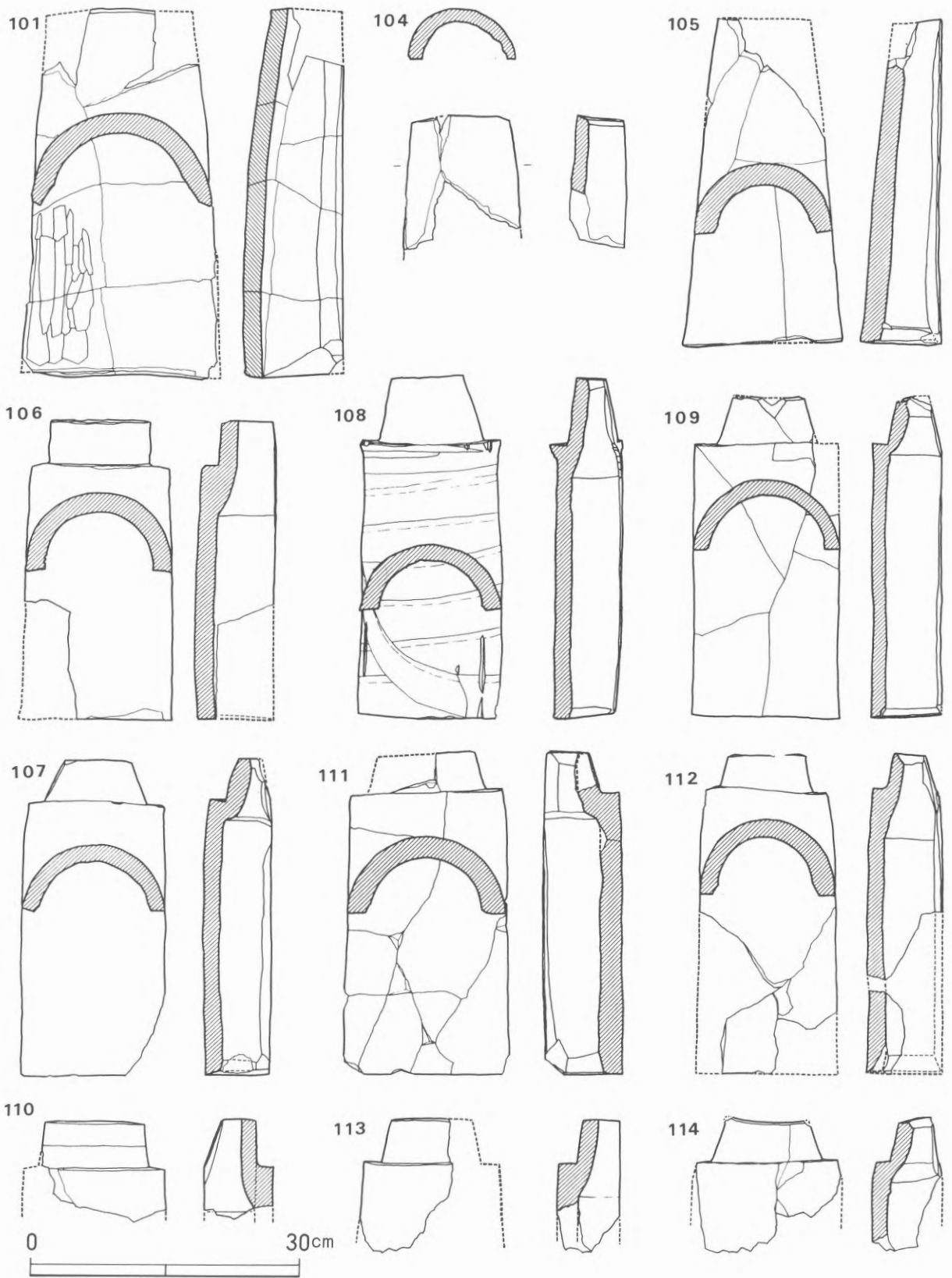
玉縁を有する丸瓦は数タイプに分類でき、106・107は創建期のものとみられ、玉縁下面を切り下げた107は軒丸瓦かもしれない。創建期の106のグループの丸瓦が全長33.6cm、そのうち5cmの玉縁をもち、円筒形の模骨より半截したままで、玉縁の角度も本体に対して平行にとられているのに比較して、第2次差し替え用軒瓦類とともに使用されたとみられる108のグループは、全長38.5cmを計り、これにつれて長くなった玉縁は7.7cmを占める。玉縁は、模骨より2枚どりしたうえ、その下面を切り上げており、両側面も篋削りによって端部側を狭くつくっている。さらにその角度は本体に対して端部が低くなる。そのほか、創建期のものに比べて各所で篋削り整形が顕著となる。これに類似する109～112は第3次差し替え瓦の一群とみられる。また、113・114は再建期の金堂に用いられた丸瓦である。

平瓦は創建期、第2・3次差し替え用平瓦、元慶3年以降再建金堂にもちいられたものの4群に大別できる。いずれも1枚づくり技法によるもので、側面に布目痕がみとめられるものも多い。

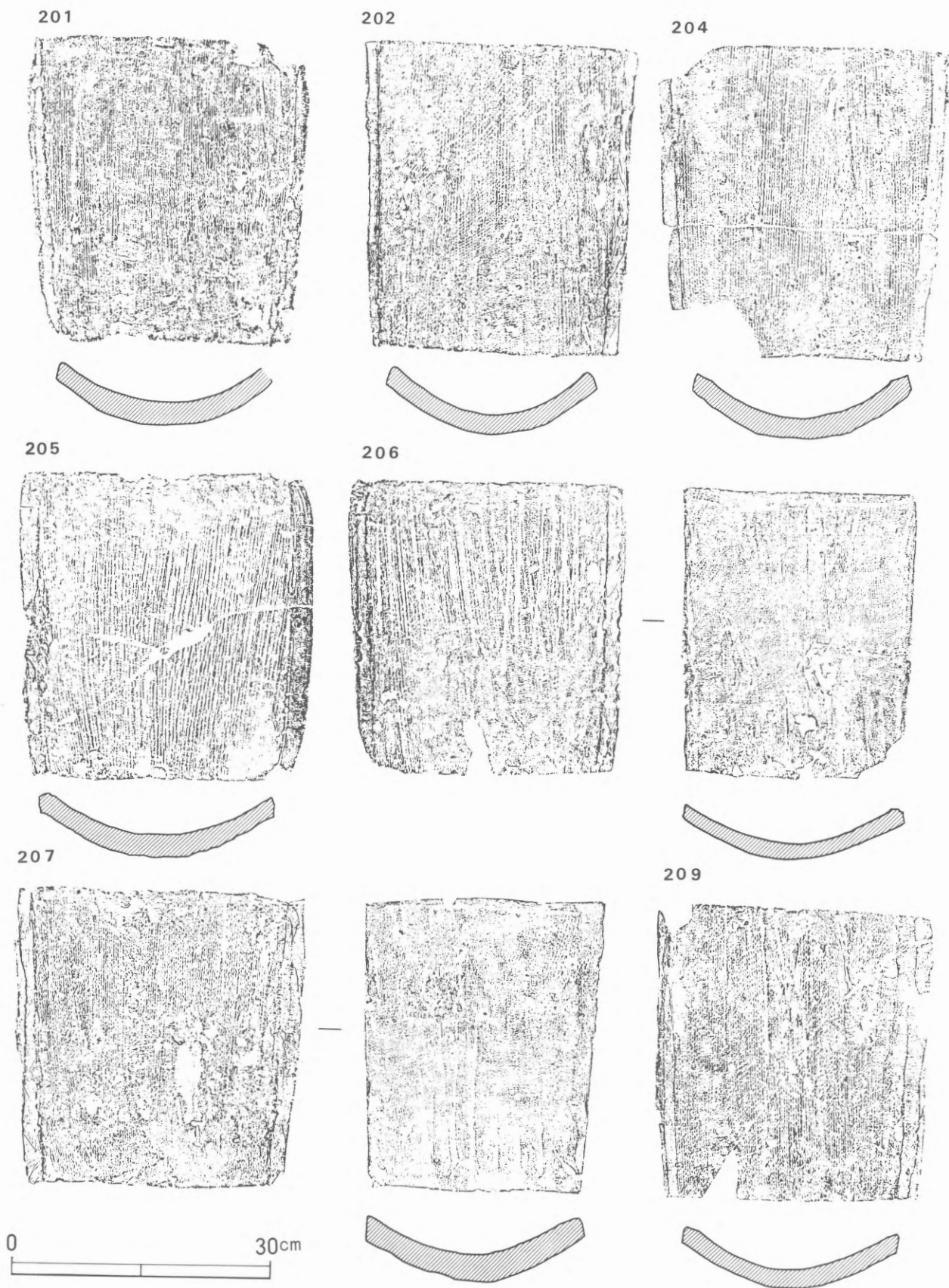
創建期平瓦201のグループは、凸面に細かい縄目叩きを施し、側面は篋切りによらず、やや丸く仕上げている。また凹面の布目痕からも後出の瓦に比べて細かい布を用いていたことがわかる。第2次差し替え瓦として使用された平瓦202～205のグループは長さ36cm前後のもので、凹面の弧の直径が小さいもの202と大きいもの204・205に分かれる。塔跡の北側階段に用いられたものなどである。第3次の差し替え瓦として用いられた平瓦206～217はいずれも、33cm前後のもので、篋切り仕上げの側面に深く押しつけられた布痕・指頭痕の顕著なものが多い。元慶3年以降再建された金堂に用いられた平瓦218・219はそれまでの平瓦に比較してやや小型で、218のグループは扁平な感じをうける須恵質焼成のものが多く、縄目叩きは細かい。219は軒平瓦Nに用いられた胎土と同一粘土を用いたものとみられ、縦方向の反りかえりが顕著である。なお、218は国分寺の東約2.5キロメートルに位置する島遺跡出土品に似る。

(4) 瓦類の時期

創建期の軒丸瓦A-1～A-3、軒平瓦a-1～a-3はいわゆる興福寺式の軒瓦である。平城宮跡の調査成果によれば、平城宮跡出土の興福寺式軒瓦は、養老4年(720)の興福寺円堂院建立を契機にして「造興福寺仏殿司」が設置され、同時に造瓦組織が官窯またはその系列から瓦や技術などの供給をうけたことが考えられている^{注(7)}。軒丸瓦A-1～A-3、軒平瓦a-1～a-3を用いて着

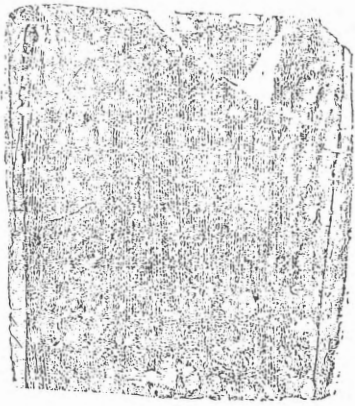


第35図 紀伊国分寺跡 丸瓦実測図

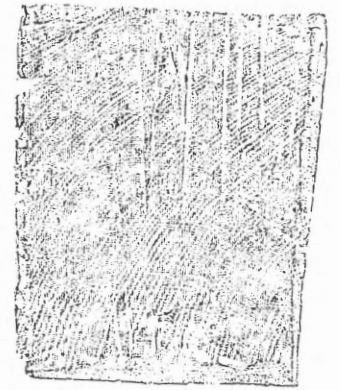


第36図 紀伊国分寺跡 平瓦拓本・実測図(1)

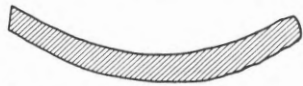
212



214



215



216



217



218



219



第37図 紀伊国分寺跡 平瓦拓本・実測図(2)

手した、紀伊国分寺の建立を天平13年以降とするならば、興福寺式軒瓦の採用は、平城宮でそれを使用した時代より20年以上の開きがあることになる。

紀伊国分寺において、鐘楼・南門に用いられた軒丸瓦B・軒平瓦a-4・bは軒瓦の項で示したとおり創建期よりやや時期の下るものである。天平13年（741）以降に造営に着手し、天平勝宝8年（756）に瀧頂幡などの配布とうけ、寺院としての体裁をほぼ整えたとみられる時期までは、最大15年間の時間差がある。この時間差については、金堂をはじめ主要伽藍の建立に要する時間を考えたとき、鐘楼・南門に用いられた軒丸瓦B・軒平瓦a-4・bは天平勝宝8年前後のものとして考えられる。

さて、第1次差し替え用軒瓦の生産年代にふれてみたい。軒丸瓦Cの類例を求めれば、奈良市歌姫町所在の歌姫西瓦窯出土軒丸瓦に類する。この瓦は平城宮で使用されたもの（平城6285A）で、外縁部は、軒丸瓦Cが外区珠文帯より直立縁となるのに比べて、外区珠文帯と外縁を区切る圏線をもち、外縁は線鋸歯文をもった傾斜縁をもつ。こうした外縁部の違いはあるが、内・外区の文様構成は類似点が多い。平城宮では神亀6年（729）前後として、西暦721年から同745年間の生産、使用と考えられている。^{注(10)}

紀伊国分寺では、第1次差し替え用軒瓦に先行する鐘楼・南門に用いられた軒丸瓦類を天平勝宝前後としたことより、これらの使用は、天平勝宝8年を溯らないが、類似瓦の歌姫西瓦窯での生産、平城宮での使用を考慮に入れば、天平勝宝8年以降、これに近い時期、すなわち、神護景雲元年（767）の那賀郡司の献稲から推察される堂塔の補修等の時期のものであろう。

第2次差し替え瓦を検討してみよう。第2次差し替え軒瓦と比較して、特に大きな変化を示したのは軒丸瓦である。いわゆる一本作りの技法をもつもので、瓦当裏面に布目がみられる。また、一本作りにともない、瓦当文様の笥型押しが浅く、瓦当側面外周の篋削りによって外縁幅が不定であること、外縁端面の篋削りが行なわれている点などである（第1表）。

平安京より出土する一本造りによる軒丸瓦製作技法は9世紀中ごろから10世紀にかけて盛行するものと考えられている。さらに平安京に供した瓦窯発掘調査の最近の成果によれば、9世紀中ごろまでの軒丸瓦製作技法は、一本づくり技法を採用していないとされている。^{注(12)}

さて、紀伊国分寺で用いられた第2次差し替え用の瓦類は概して軒瓦・丸瓦・平瓦ともに淡褐色を呈し、それより前段階の瓦類とは趣きを異にしている。これをもって、直ちに、平安京周辺の瓦窯での生産であるとはできないにしても、造瓦組織の瓦生産が平安京を中心に展開されたこととはいうまでもなく、よってその影響下にあったとすべきである。

ここで、第2次差し替え用軒丸瓦の生産年代を決定するには、平安京での軒丸瓦一本づくり技法の初見を求めねばならないが、『類聚三代格』承和元年（834）の太政官符「瓦之脆弱、無師之所致也」から『延喜式』（927年完成）卷第18式部上の規定による官窯の編成までの記事と、それに示された、栗栖野・小野両瓦屋の軒丸瓦一本づくり技法を含めた操業年代について統一的な見解が出されておらず、実年代をおさえがたいきらいがある。^{注(13)}

よって、紀伊国分寺における初見についても、その実年代を決定しがたいが、その下限を、元慶三年以前におけること、第3次差し替え用軒瓦がその間に設定できることが大きな手がかりとなる。

第3次差し替え用軒丸瓦Gの類似資料、一本造りによる複弁四葉蓮華文軒丸瓦が、平安京貞観



第38図 紀伊国分寺跡 巴文軒瓦拓本

寺跡と推定される遺跡より出土している。貞観寺は貞観4年(862)から元慶6年(877)ごろの成立と考えられている⁽¹⁴⁾。軒丸瓦Gと比較した場合、平安京出土のこれらとは、製作された范型が陰陽逆であるが、そのモチーフや製作技法の類似から軒丸瓦Gは貞観寺造営期に近いものとして西暦860年から870年ころのものと考えたい。

第2次差し替え用瓦はこれに先行するものであり、前述の西賀茂瓦窯より出土の丸瓦・平瓦と比較したとき、その製作技法や形状に類似がみられる。一方、軒丸瓦F-1は、軒丸瓦の一本づくり技法の採用まで

の操業として、官窯造瓦組織の充実を図った承和元年の太政官符を目安に、その下限を承和元年(834)から9世紀中ごろまでとされた同窯より後出のものであろう。これらを考え合わせると、西賀茂瓦窯より新しいものの、これに近い時期として、第2次差し替え瓦の生産は、西暦850年前後と考えられよう。

軒丸瓦H-2、軒平瓦kは再建金堂に用いられたものである。軒丸瓦は、元慶3年以前の差し替え用のものとした軒丸瓦H-1の范を改変したもので、中房部・外縁部のみ相違がみられる。また、軒平瓦の破損断片は基壇縁の化粧としても用いられている。三度建立された金堂に用いられた軒丸瓦Iと軒平瓦lの組合せは、平安京六角堂⁽¹⁵⁾などで用いられた類例より11世紀から12世紀にかけてのものであろう。

2 土器類

(1) 土器類の出土地点

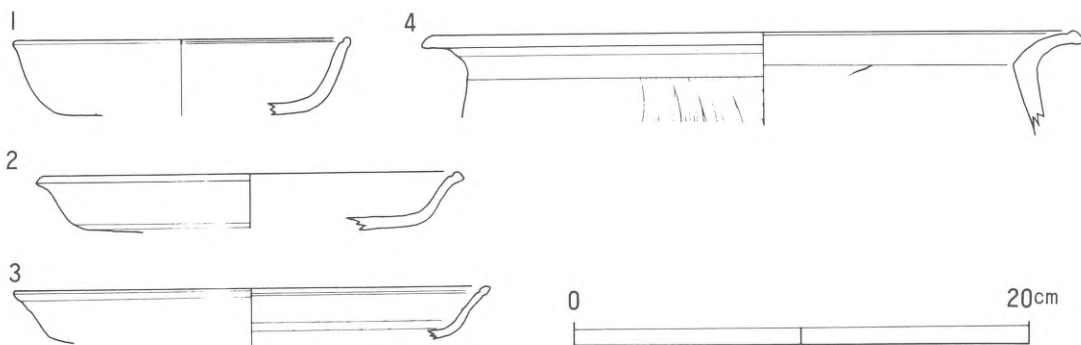
土師器・黒色土器・須恵器・三彩・緑釉・灰釉陶器などの使用年代にもかわりが大きいので、これらの出土地点等の概要を記しておこう。

回廊に囲まれた伽藍中枢部からの土器類の出土は非常に少なく、須恵器壺109(第44図)、平安時代土師器埴1(第40図)などがある。奈良時代の土師器1~4(第39図)及び三彩火舎(第45図301)は東側廻廊の外側の溝から出土したもので、その他の土器のほとんどが、僧房跡より出土したものである。僧房跡遺構の説明でもふれたごとく、第2期の僧房(建立は創建期僧房焼失の元慶3年以降で、基壇に埋納された延喜通宝より10世紀初頭の再建、焼失時期不明)の雨落溝、および焼失後の雨落溝堆積土より出土のものが大多数で、1部のものは第3期僧房(建立・廃棄の実年代は不明)の床面より出土した。よって、これらの多くは10世紀から11世紀代、約200年間の遺物が中心である。

2 土師器(図版第35、第39~41図)

奈良時代 第39図に示した1~4は奈良時代の杯・皿・甕である。8世紀代のものとみられ、いずれも、口縁部の内面端には一条の沈線が施され、3は斜放射暗文がみられる。

平安時代 第40・41図に示した。4～28は埴で、27・28は大型品で28は鉢というべきものである。小型の4・6～8・20・21・24・25は台付皿に近い器形を示している。これら埴類及び後述の坏、皿類26～45は一部を除いて口縁立上がり部外側を横ナデによって外面をそれぞれ一周する数条の段（以下、f手法と^{注(16)}呼ぶのみられるのが特徴である。4は塔跡北階段部出土のもので、元慶3年の国分寺焼失前の土器であり、9世紀後年代にこうした手法を示す土器の出現が確認できた。6～12・46は僧房南側の方形土壇からの一括出土遺物である。これらは第2期僧房が10世紀から11世紀のものと考えられるところから、この時期の土器としたい。やや口径が小さく、浅い埴がみられ、13～16の埴とは高台形態にも差異がみられる。一般的に古い要素と考えられる、埴身が高く、みこみの部分（埴底）が平らで高台径の大きい13～16を10世紀代のものとし、一括資料である6～12を10～11世紀にかけての土器と考えたい。埴がさらに浅くなる19や24・25を含む19～25が瓦器出現前の11世紀のものとして推定できる。なお24・25は第2期僧房焼失後の柱根抜きとり穴出土のものである。甕（49～51）・皿類は形態的な変化が乏しく、それぞれの時期設定が困難であるが口縁部が内彎する皿26～28は10世紀代とした土師器埴の口縁部に類似点がみられ、また、口縁部が外反する皿38・44に近い形態のものは、10～11世紀代とした一括資料の46と似るところから新しい形態にむかうものとみられる。47は火舎と考えられる大型品、48は竈の断片である。時期設定は今後の資料をまちたい。

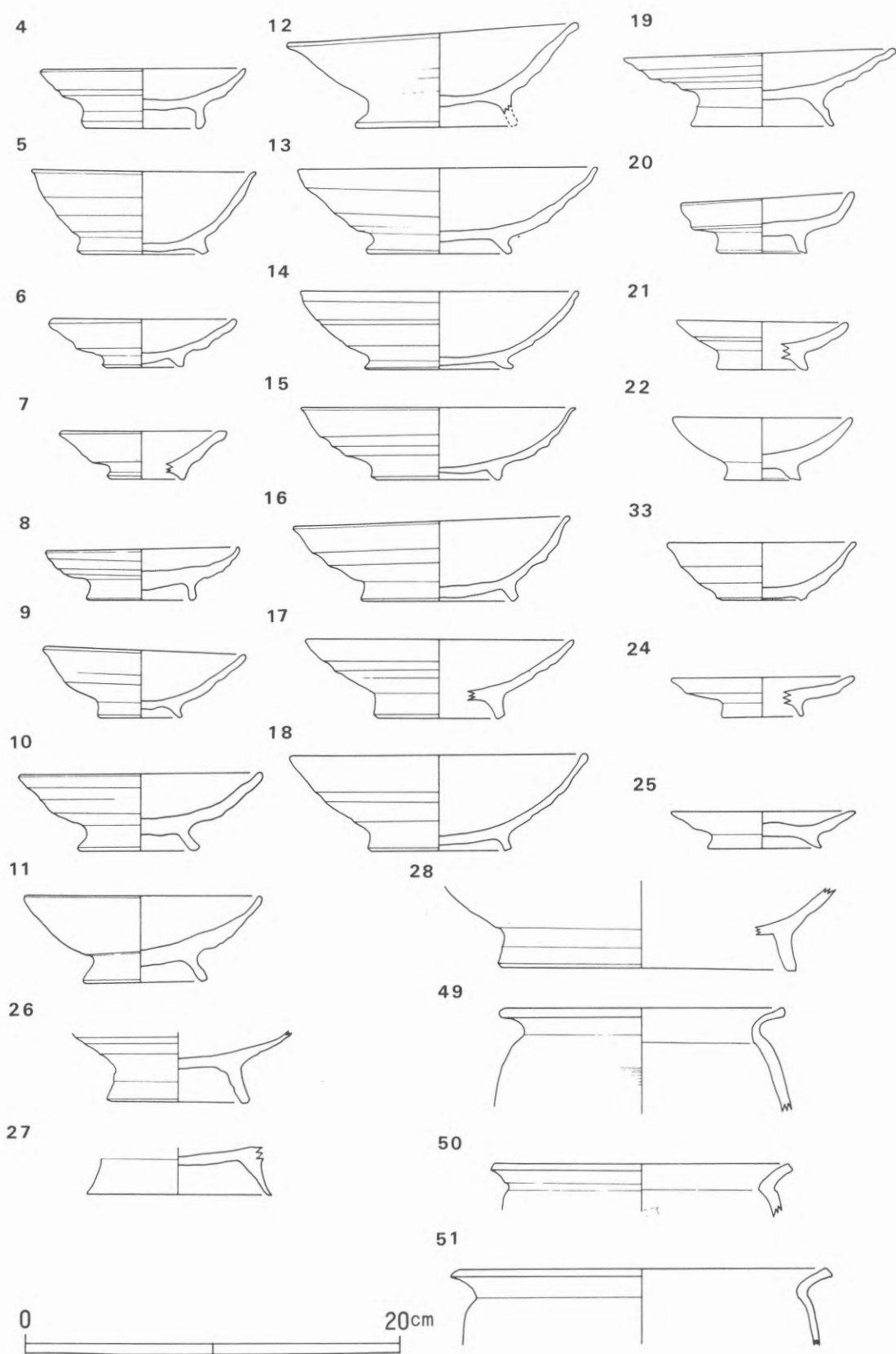


第39図 紀伊国分寺跡 土師器実測図（1）

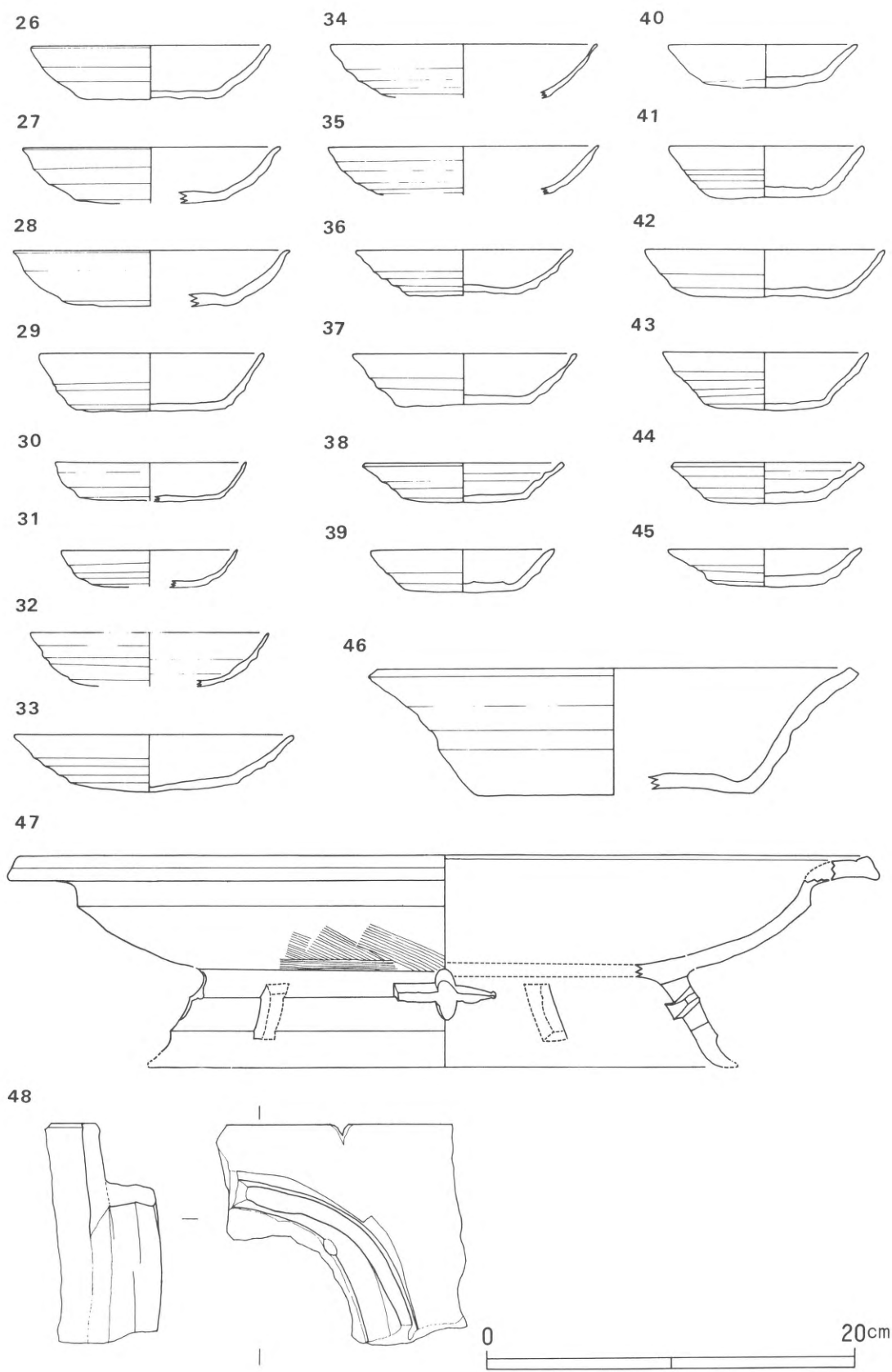
3 黒色土器（図版第35・第42・43図）

黒色土器は内面黒色土器（黒色土器A）と外面を含む両面黒色土器（黒色土器B）がある。埴類が主体を占めその他の器形の皿・壺形土器などは少ない。埴は土師器埴の変遷とほぼ系譜を同じくする。

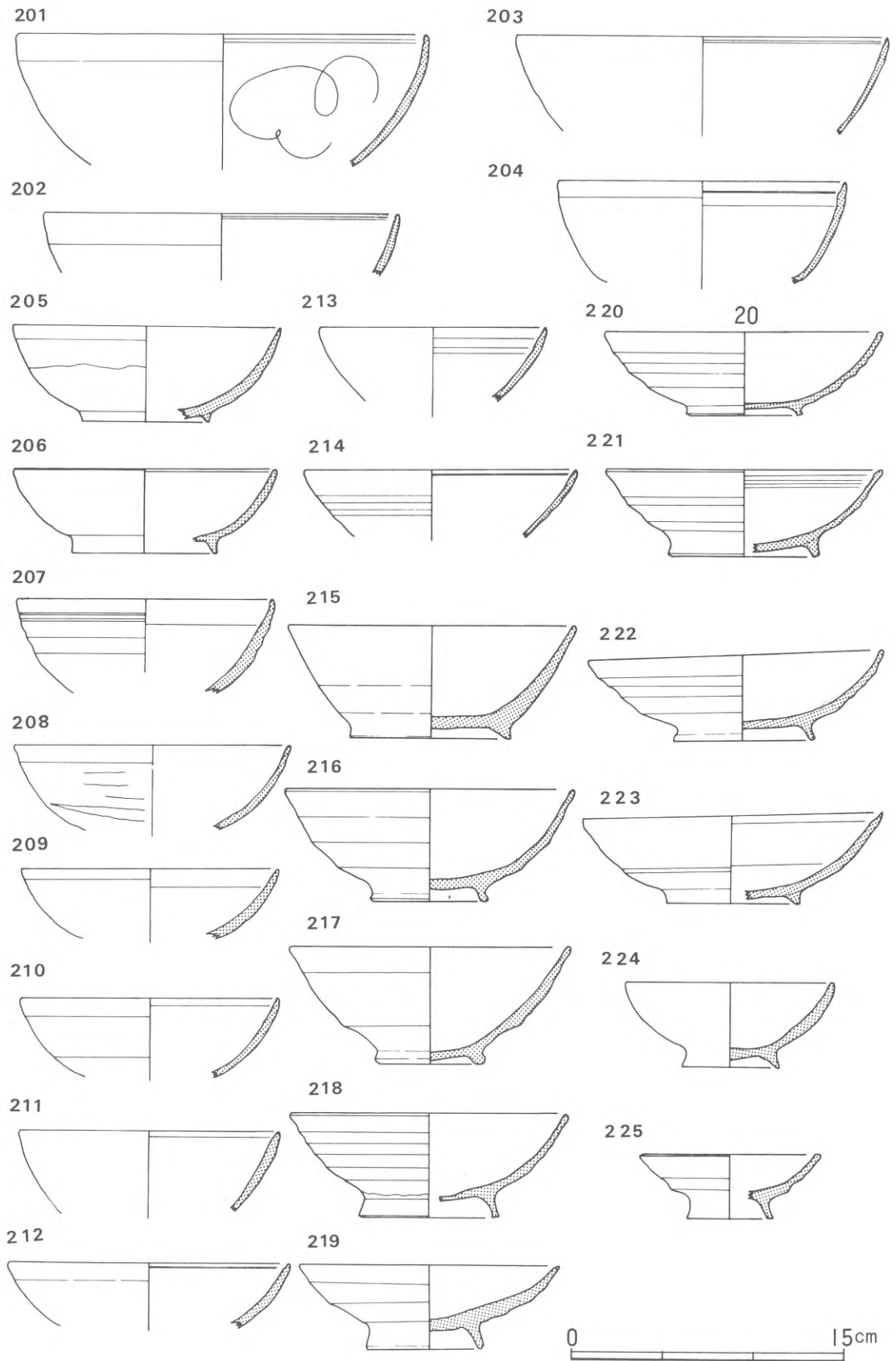
平安時代 もっとも古い形態をもっとみられる201は大型品で鉄鉢状の器形を呈する。内面はよく篋磨きされ、螺旋状の暗文が施されている。口縁部端内面には一条の沈線が施されている。外面は篋削りが顕著である。201の系統をひく、やや大型の202～204は埴身の内彎がつよく、口縁部端内面に沈線またはその痕跡を残し、その角度から三角形の断面をもち、径の大きい高台のつく扁平な底部226～230をもつものとみられる。f手法はみられない。215を含めて9世紀代から10世紀にかけてのものと考えられる。f手法のみられない内彎気味の黒色土器205～213は、口



第40図 紀伊国分寺跡 土師器実測図(2)

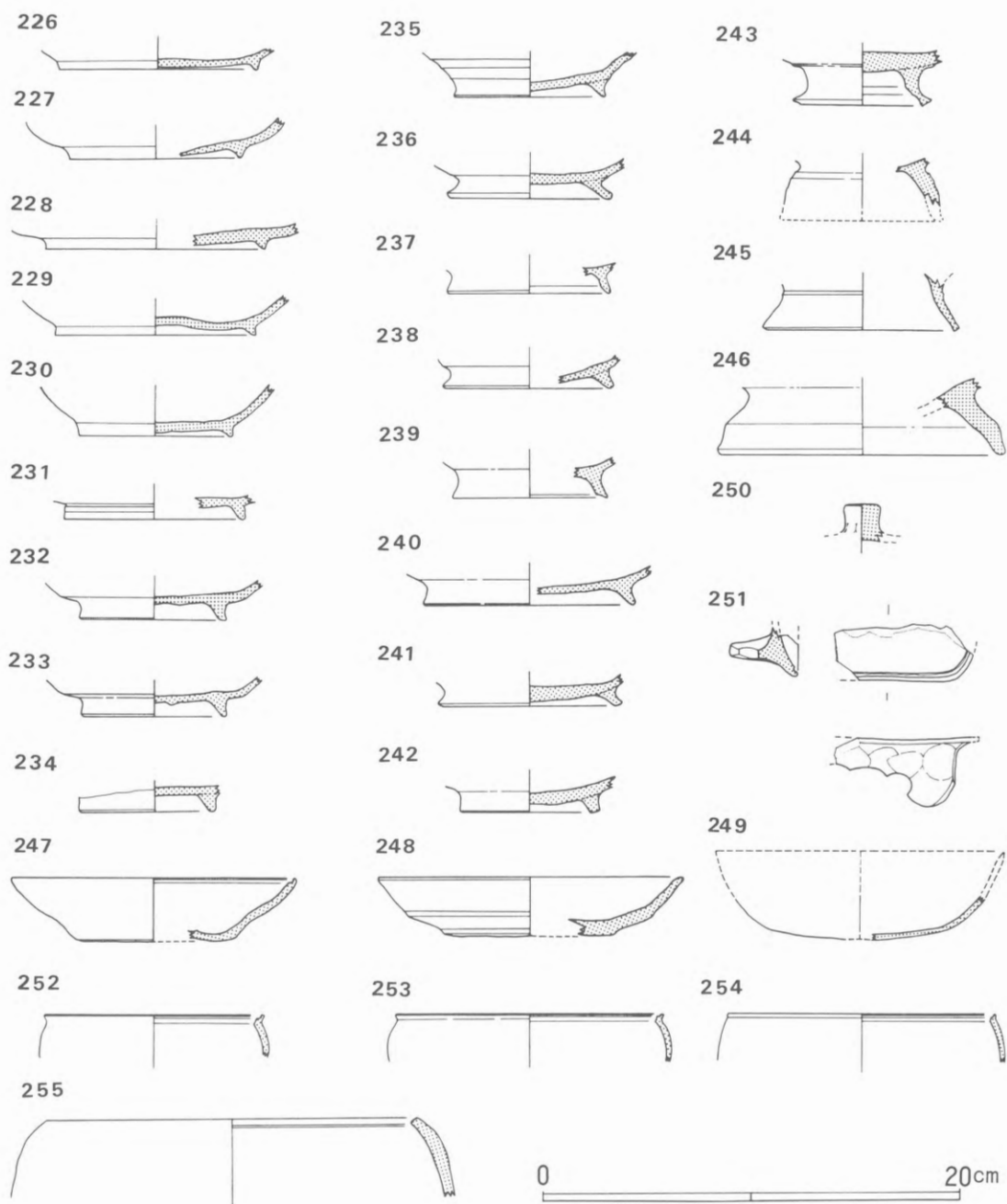


第41図 紀伊国分寺跡 土師器実測図(3)



第42図 紀伊国分寺跡 黒色土器実測図(1)

縁部内面に沈線の名残りをもつもので、三角形断面を呈する高台、またはやや高めの高台をもつが、その径は大きい部に属する。なお、12は創建期僧房焼失後の柱根抜取り穴出土もので9世紀末のものである。213・214は両面黒色土器で、塚部外面にf手法の傾向がみられ、土師器と軌を同じくする。第2期僧房の雨落溝出土の10世紀代の塚は220～230がありf手法を用いている。方形土壙出土一括資料の中に含まれた216・217は塚身がやや内彎ぎみで深いものであるが、一括土器として10世紀末から11世紀のものと考えたい。このほか、須恵器の高台をおもわせる243・244～246は大型の鉢、250は蓋のつまみ、251は四隅にくり方を入れた脚台をもつ角皿、247～249は皿、252～255は壺形土器であるが実年代はおさえがたい。



第43図 紀伊国分寺跡 黒色土器実測図(2)

(4) 須恵器 (図版第36、第44図)

奈良時代 回廊跡出土の杯107・108のほか103～106と、その蓋101・102、講堂跡前庭出土の壺口縁109以外は僧房址出土のもので、子持壺117を含む8世紀代の須恵器はこれらに限られよう。

平安時代 9世紀の遺物がほとんどで、9世紀後半以降は後述する灰釉陶器にとってかわられるようである。9世紀代とみられるものには壺110～114、鉢115、小壺118・119、大甕134～137が考えられる。10世紀代のもので鉢(いわゆる鉄鉢)124～131・133が多量に出現するが他の器種は皆無としてよい。また、これより新しいものと考えられる、焼成硬度が軟かく、粘土のしまり具合も粗な小壺120・121、壺122、鉢132がある。

(5) 三彩陶器 (図版第37、第45図の301)

東回廊外側溝底より出土したもので、4本の獣脚をもつものと考えられるが、約5分の1個体の断片であるためその全容は計り知れない。復原口径約27cm、体部の高さ約6cmを計る。口縁部はやや下向きに強く外方へ張り出させ、その端部はわずかに上方へもちあげた独特の口唇部を形成している。ほぼ直立する体部には2条からなる沈線を2単位施している。胎土は水越しで精撰された、焼成色が乳濁色を呈する軟質陶器である。器表には、その多くが剥落しているが、わずかに褐色釉・緑色釉が認められるところから三彩陶とするものである。類例は近江神宮蔵の火舎が求められる。8世紀後半代のもものとみられる。

(6) 緑釉陶器 (図版第37、第45図351～369)

壺・皿・壺・香炉蓋・火舎獣脚片が出土した。第1類=淡緑色を呈するものと、第2類=光滑の乏しいやや暗い緑色を呈するもの、第3類=あざやかな光滑をもった緑色を呈するものがある。このほか、黄緑色を呈するものもみられる。

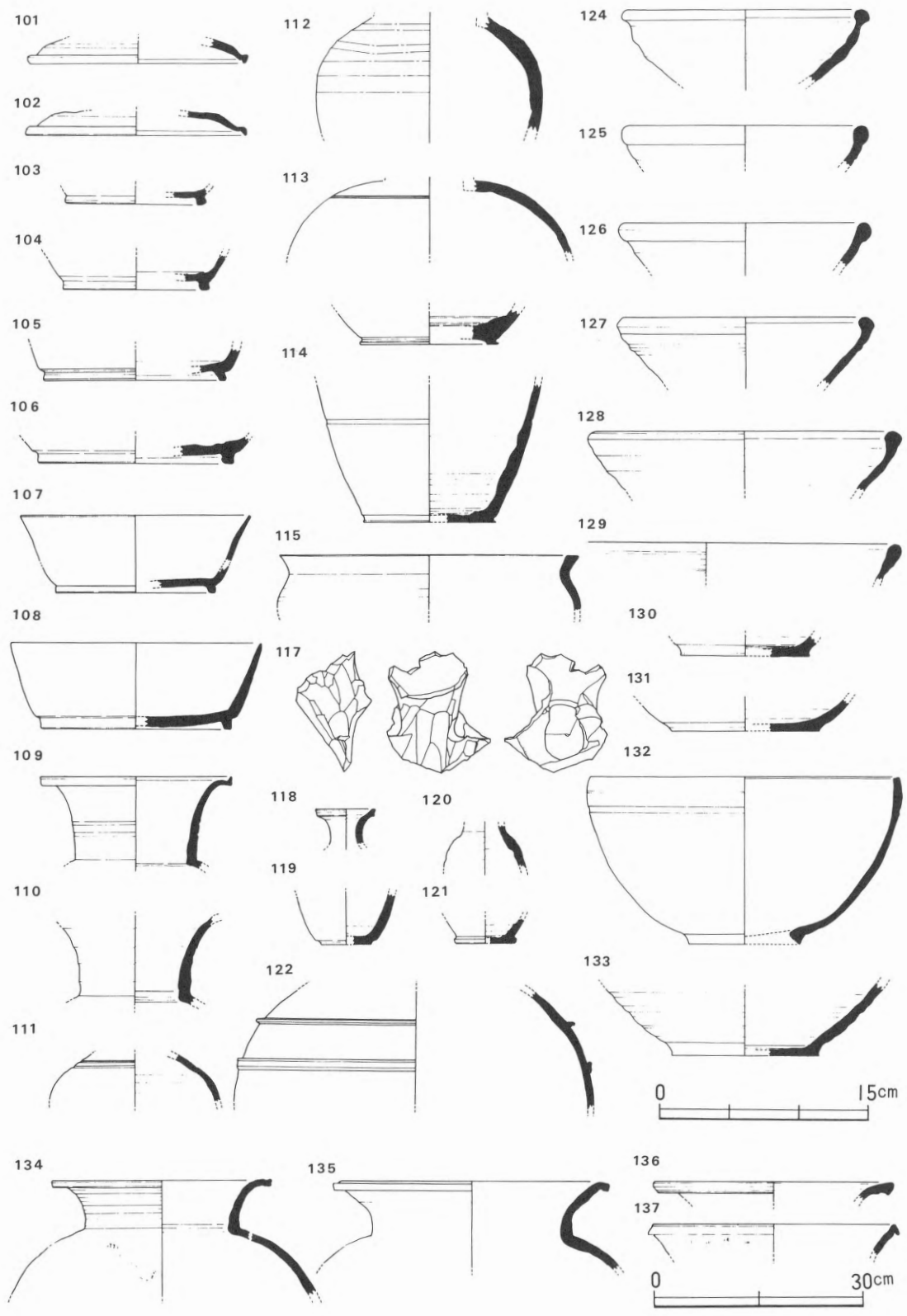
第1類として、器内に立ち上がりをもつ皿状の托361は重ね焼の痕跡を残し、つけ高台内面の段は顕著でない。これと同様の高台をもつ壺359、平高台をもつ皿363、透し孔をもち、篋描きによる画花文をもつ香炉蓋364・火舎獣脚367はやや光沢のにぶい淡緑色を呈し、胎土は灰褐色の焼成色を示す。概して焼成硬度はあまりよくない。黄緑色を呈する釉薬を施し、輪花をもたせた壺部下半に稜壺12や第2期僧房雨落溝出土の361・364を含むこれらの第1類は、平安時代前期のもので9世紀後半ないし10世紀前半代の所産であろう。10世紀代のもものとみられる第2類は、暗緑色を呈する壺356・壺365(唾壺)などで須恵器質焼成を呈し、その胎土は青灰色を呈する。

第3類の351～353は輪花をもたせた壺で、内面に段をもった貼付け高台のつくりは354～358に共通する。いわゆる近江系と呼ばれるものである。口縁部端を外方へ反らせ高台に近い壺部下半は篋削りが顕著である。また同様の高台をもつ360は皿とみられ、これらはいずれも滑沢のみごとな緑色をもち、胎土は褐色ないし灰褐色(焼成色)を呈し、焼成硬度は良好である。なお、352は鹿子状の淡褐色斑点をかもし出し、第3次僧房床面かとみられる層位より出土の353はみこみ部輪花円圈内は黄褐色を呈する。

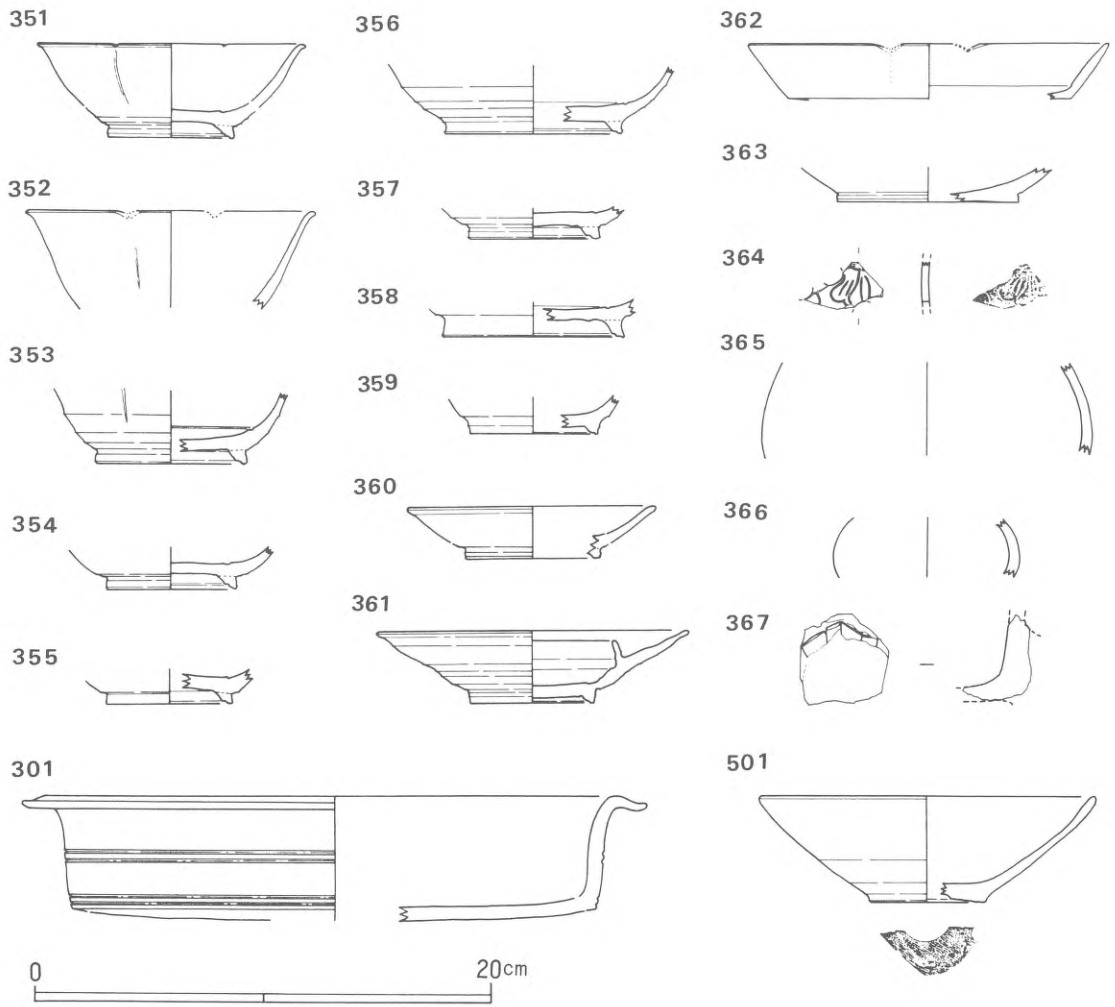
10世紀後半から11世紀前半代のもものと考えられよう。

(7) 灰釉陶器 (図版第36、第46図401～426)

壺・段皿・壺・おろし皿などが出土した。中でも、バリエーションの豊富な壺は時期設定の足がかりとなろう。口縁部端を外反させた壺401～403、高台405～409は緻密な乳白色の胎土を用いたもので、同じく410～412及びその他の器種、段皿413・414、壺415・416・421などの灰色ない



第44図 紀伊国分寺跡 須恵器実測図

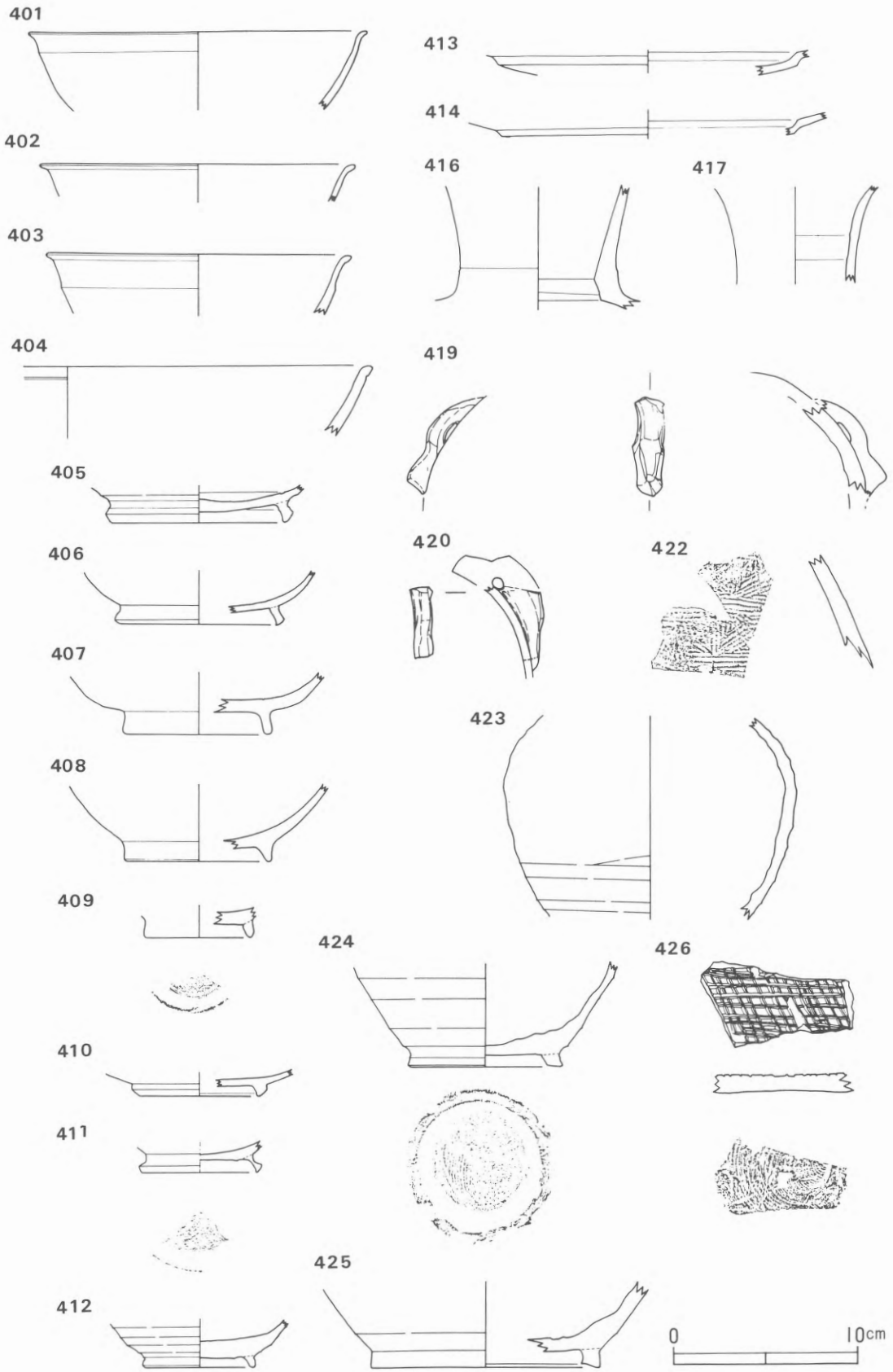


第45図 紀伊国分寺跡 三彩・緑釉陶器、青磁実測図

し灰褐色を呈するきめの粗い胎土をもつものと明確に区別できる。塚の高台の変遷は、高台405～412へ新しくなるものとみられ、胎土の選別が良質胎土から質のよくない胎土へ遷ったことが考えられる。段皿の出現、また、底部の回転糸切り技法の出現なども新しい要素としてとらえられよう。このほか、出土状況などから、第2期僧房雨落溝出土の402・404・408・416を含む、塚401～408壺417～422を10世紀前半代、段皿ほかを10世紀後半から11世紀にかけての所産と考えたい。これよりやや新しいものとして篋先によって荒々しく斜格子の刻目を入れた、淡黄褐色の胎土をもつおろし皿426がある。

(8) 越州窯青磁 (図版第37、第45図501)

削り出しの蛇ノ目高台をもち、復原口径約14.5cm、高さ4.5cmを計る中国(浙江省付近の越州窯青磁塚で、ややすんだ緑色を呈する。約5分の1の断片であるが、類例は平城宮や太宰府などで出土しており、わが国の中央官衙や寺院などで用いられた高級輸入品であろう。8世紀末から9世紀初めのもの^{注(17)}であろう。



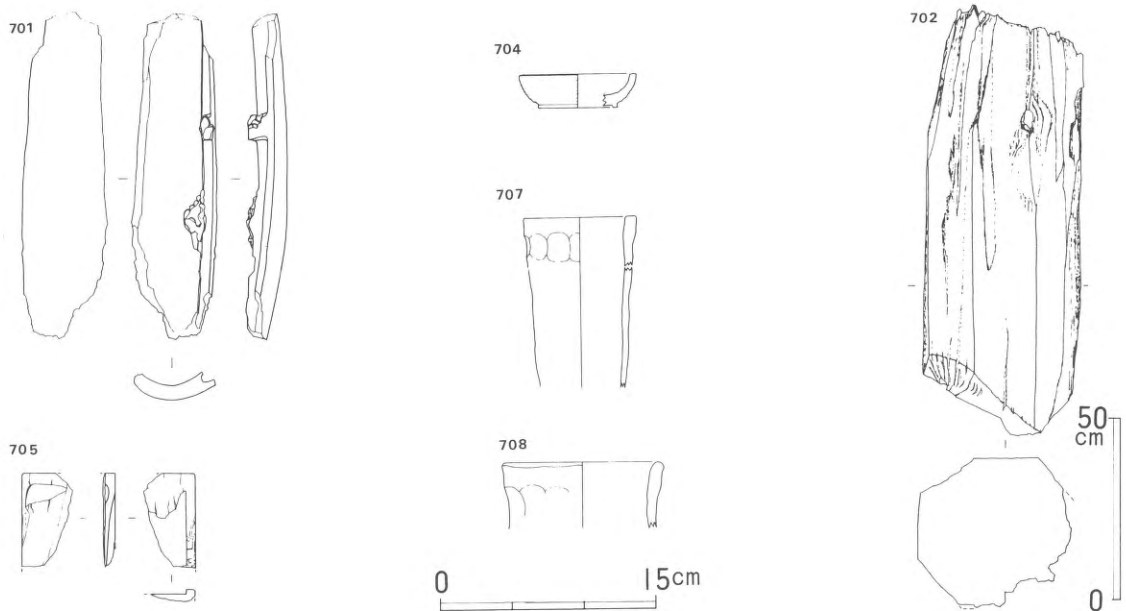
第46図 紀伊国分寺跡 灰釉陶器実測図

3 その他の遺物 (図版第38、第47図)

701は金堂基壇上より出土した青銅製品で、仏像の腕部断片のようであるが速断しかねる。破片長辺の縁辺に凹状の溝がみられ、これに他の部分をはめ込んだようで、その二ヶ所には溶接のあとがみられることから製作技法として仏像とするには躊躇をおぼえる。元慶3年以降の金堂に伴うもので平安時代のものであろう。

704は僧房跡出土のもので、滑石を轆轤曳きした石製碗である。細く低い高台をもつもので、口縁部は一度割れたものを磨り込んで再利用したものである。707・708は製塩土器である。丸底の砲弾形を呈する厚手の土器で、口縁部下には指おさえが顕著である。705は粘板岩を利用した風字硯で両面の使用がみられ、端部にあたる面には「海」が認められている。702は、西回廊が廃棄された後、2基の大型土壇内に埋め込まれた、径60cmを計る八角柱の断片で、裁断痕が顕著である。推察は許されないが、特に重要な建物の柱を、焼部などの処分をせずにむしろ埋納したものかと考えられる。

僧房跡出土の延喜通宝(706)約70枚は先にもふれたごとく、第2期僧房身舎柱筋より検出された(第25図)。紐に通して埋納したとみえ、数枚ずつ錆着した状態で出土した。一般に、後期の皇朝12銭は銅質が悪いが、本出土資料は比較的保存状況が良好で、現在の一円アルミ硬貨大で中央に正方形の窓をもち、その名称も明確に読みとれるものである。



第47図 紀伊国分寺跡 その他の遺物実測図

第3章 ま と め

昭和48年度から3ヶ年にわたる紀伊国分寺の発掘調査は、これまで、先学の論争となっていた当寺と岩出町西国分に所在する西国分廃寺のいずれが僧寺・尼寺であるかという論争について、那賀郡打田町東国分所在の八光山医王院国分寺の前身が紀伊国分僧寺すなわち聖武天皇勅願の金光明護国寺である結論を導き出した。

それは、天平勝宝8年(756)に国から紀伊・阿波・讃岐・土佐の南海道の国々等26ヶ国に灌頂幡1具、道場幡49首、緋綱2条が頒下され、周忌にはこれらをもって荘飾する金光明寺の寺物とせよとの記事に合致するように、養老4年(720)の「造興福寺仏殿司」設置を契機として興福寺の堂塔を飾った興福寺所用軒瓦の系統を引く興福寺式軒瓦(軒丸瓦3種・A-1～3、軒平瓦5種・a-1～4、b)で主要堂宇を飾った伽藍が建立されていた状況が発掘調査により明らかになったのである。また、神護景雲元年(767)、那賀郡司の献稲に伴い堂塔の補修が行われたと推察できる軒瓦(主として軒丸瓦C、軒平瓦e)が確認された。これら出土瓦などに加え、第I期僧房の焼失後再建された第II期の僧坊建立に際して埋納された延喜通寶(延喜7年907)の年代からも『三代実録』元慶3年(879)焼失の条にも発掘調査から得られた知見は合致するものであった。

調査の成果は文献史料との整合性のほか紀伊国分僧寺の実態についても多くの知見を得た。2町四方をもつ寺域と伽藍配置については90尺単位で基盤目状に8等分し西側8分の6を伽藍区域にあてその真中を伽藍中軸線とし諸堂塔を配置するという創建期の計画をほぼ復原することができた。また、創建期から平安時代後半にわたる伽藍の変遷、すなわち元慶3年の焼失後は金堂の復興と僧房が規模の縮小を余儀なくされるなかで2度にわたって再建されたことは律令制の崩壊、また、仏教政策の変移の過程で紀伊国分僧寺の盛衰を明確に示すとともに、僧坊跡の発掘調査から得られた資料は僧侶の実生活の一端を如実に物語るものであった。

これら発掘調査で得られた知見は、関連調査によって、紀伊国分僧寺に用いられた軒瓦(軒丸瓦A-2、軒平瓦a-3)が、その後、淡路国分寺で使用されている同範関係や讃岐国分寺との伽藍配置の類似性から、国分寺の造営が古代地方制、つまり、紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐国で構成される南海道を一つのグループとして進められたことをも推察可能とした。

なお、今後は、雑舎区域などの発掘調査を継続実施することにより紀伊国分僧寺の経済・組織などの考古学的解明が欠くことのできない課題であるとともに、現在の国分寺の宗教活動と整合性を持ちつつ、寺域の公有化と整備を図り、紀伊国分僧寺の保存と活用が一刻も早く実現されるべきである。

註

- (1) 井上 薫「国分寺の造営」(『奈良朝仏教史の研究』後篇第五章国分寺の成立 第二節 東京 昭和四十一年)に国の等級の基準につき詳細な研究がなされている。また天災や疫病の流行は、その国の国勢に、ひいては国分寺の造営に大きな影響をあたえたであろう。ここでは単に『延喜式』卷第二十二 民部上 の国の等級によった。
- (2) 園田香融「名草郡の古代氏族」(4) 那賀・伊都両郡(末永雅雄篇『岩橋千塚』第四章第三節 和歌山市教育委員会 昭和四十二年)。
- (3) 伊藤只人は、註(2)前掲書で郡司の献稲を国分寺造営料と考えておられる。
- (4) 石田茂作博士による伽藍の分析に合致する。ただ、講堂基壇の奥行き、鐘楼基壇対角線の実数は確認できなかったが、塔基壇対角線に近いものとみられる。石田茂作『東大寺と国分寺』(昭和四十一年 東京)。
- (5) 石田博士は一辺三〇・五尺(10+10.5+10尺)とされているが訂正を要する。註(4)前掲書。
- (6) 坪井清足編「近年発掘調査された諸国国分寺Ⅱ」(『仏教藝術』一〇三号 昭和五十年)では、創建期僧房の梁間について八・九・九・八尺としたが訂正する。
- (7) 森 郁夫「古代における地鎮、鎮壇具の埋納」(『古代研究』一八 昭和五十四年)では地鎮の可能性を指摘されている。
- (8) 東大寺の軒丸瓦に似るとの見方もある(註(4)前掲書)が、軒平瓦との組合せから興福寺式とみるものである。とくに、軒丸瓦₂は、直立する外縁ではあるが、文様構成は興福寺式軒丸瓦そのものである。
- (9) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』(昭和五十年)。
- (10) 奈良県教育委員会『奈良山・平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』(昭和四〇八年)。
- (11) 註(10)前掲書。
- (12) 古代学協会『平安京跡研究調査報告』第四輯「西賀茂窯跡」(昭和五十三年)。
- (13) 註(12)前掲書。
- (14) 平安博物館編『平安京古瓦図録』(昭和五十二年)。
- (15) 註(14)前掲書。
- (16) 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅳ」(昭和三十七年)。
- (17) 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』4 昭和五十三年)。

Ⅲ 西国分廃寺

第1章 西国分廃寺の概要

西国分廃寺は和歌山県那賀郡岩出町西国分494・511番地ほかにあつて、同郡打田町東国分にある紀伊国分寺跡の西方800メートルに位置する。

この東西国分村の二寺跡については、古くは、例えば天保10年刊の『紀伊続風土記』巻元三十に記されているように、西が国分僧寺、東が国分尼寺と考えられていた。しかしながら、昭和48年度から同50年度にかけて、本県教育委員会が行った東国分の発掘調査によって、紀伊国分僧寺は、西国分廃寺ではなく東国分の国分寺跡であることが明らかとなった。したがつて西国分廃寺は国分尼寺と考えてよいのであるが、今、にわかには尼寺とは決め難い。というのも西国分廃寺塔跡から出たと伝えられている瓦には、国分寺の時期よりも古い、奈良前期（白鳳時代）の特徴を示すものが多いからである。また塔をもつ尼寺となれば全国的にも特異な例となるので調査が待ち望まれていたため、和歌山県教育委員会が紀伊国分寺の発掘調査の一環として、昭和50年12月から同51年3月（第1次調査）、同51年12月から同52年3月（第2次）、同52年11月から同53年3月（第3次）、同53年7月から同年8月（第4次）にわたり発掘調査を実施した。

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査方法（図版第39、第48図）

調査実施にあたり、そのベンチマークは、塔心礎が原位置でないため、紀伊国分寺跡と同時に実施した空測に際し、埋設した永久点（真北基準）から測量し、現在の塔心礎付近に置いた。この点（NSO EWO）を通る真北線を基線とし、当地域を1メートル方眼に地区割してトレンを設定した。

まず、第1次調査は主要伽藍の検出と寺域の範囲を確認する目的で、塔跡を中心に南から北へ設置したA～J区計2000平方メートルを平面及びトレンチ発掘した。その結果、水田耕作等による後世の削平が著しく、寺域の範囲は確認できなかった。わずかにC、F、I地点で、掘立柱建物跡群と、F区で二条の溝を検出した程度で、伽藍としそは、次に述べる塔跡を確認したにとどまった。

第2次調査は西国分511番地の塔跡および塔跡北西部のG・H区において伽藍配置を確認するためトレンチを東西に設定した。塔跡では、基壇縁の一部と心礎の据石跡を検出し、G・H区では掘立柱建物跡が確認されたので拡張し調査した。

第3次調査は塔跡の東北部での伽藍検出をもくろみ、J・K・L・M・Nの5区に南北と東西に十文字に幅3メートルのトレンチを設け、L・N区の一部は拡張して調査した。

第4次調査はP区において、塔跡東部の伽藍あるいは寺域等を示す遺構の存否を調査した。



第48図 西国分廃寺 調査区全体図

第2節 遺 構

1 塔跡 (図版第40・41、第49～53図)

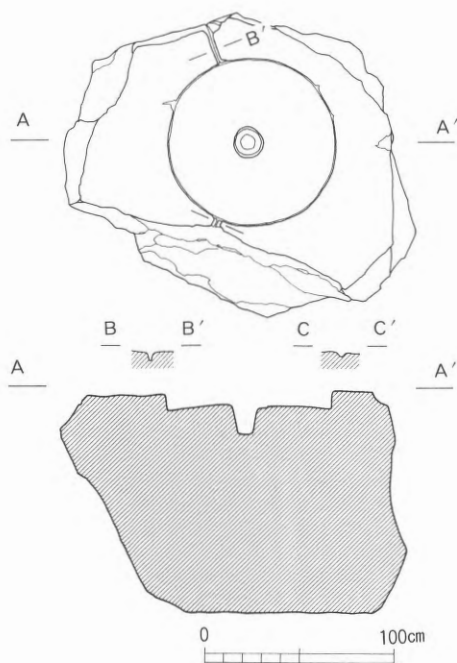
発掘前の状況 岩出町大字西国分字西野々は古来西国分廃寺の塔跡であると推定されてきた。その根拠は、この地点に多量の古瓦が散乱し、また巨大な砂岩製の塔心礎が残存していることによる。この心礎は、長径185センチ、短径120センチ、高さ120センチを測る。その上面に直径87センチ、深さ9センチの正円形の柄穴を彫り、さらにその中心部に深さ15センチ、直径14センチの舍利孔を穿っている。しかしながら、他の礎石はすでに散逸し、またこの心礎自体も攪乱土の上に転がっており原位置を保つものではない。仮りにこの心礎が塔の中心部からさほど動いていないとして塔の範囲を推定すると、北部は町道で断たれ、南部はミカン畑に侵されているので、わずかに望みを持ったものの基壇は全面にわたって削平され、その上に厚さ約150センチの攪乱土が堆積していた。特に北半部と西半部は地山の下1メートル以上削られており、東部と中央部の一部に基壇の底部が残るだけであった。東部では基壇縁を化粧する瓦積みの一部を、中央部では心礎の据え石及び根石を検出した。



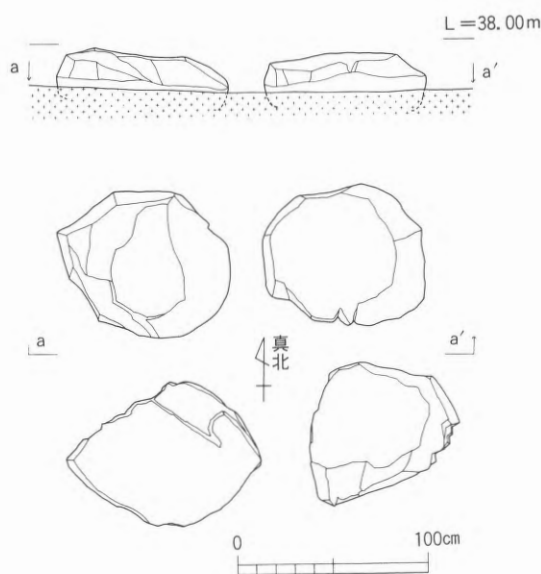
第49図 西国分廃寺 塔跡平面実測図

化粧瓦積み 基壇東辺を縁どる化粧瓦積みを長さ約7メートル検出し得た。しかし予想どおり、北は道路で、南は排水路及び畑で削平され、基壇コーナーは残っていない。半截平瓦と丸瓦を伴用して積んでいるが、残りの最も良好な部分でも下から三段が原位置を保つだけで、その上部数段は崩れ重なっており、他の部分は最下段が残るだけなので、積み方の詳細は不明である。基壇の方向は真北より東へ約1度40分ふっている。この瓦積みは外側へ崩れ落ちているが、その最下層からはほぼ完形の単弁四葉蓮華文軒丸瓦が出土した。

心礎据え石 四個の平坦な大石を四方に等間隔に接近して配し、その中間に根石を敷いている。



第50図 西国分廃寺 塔心礎実測図



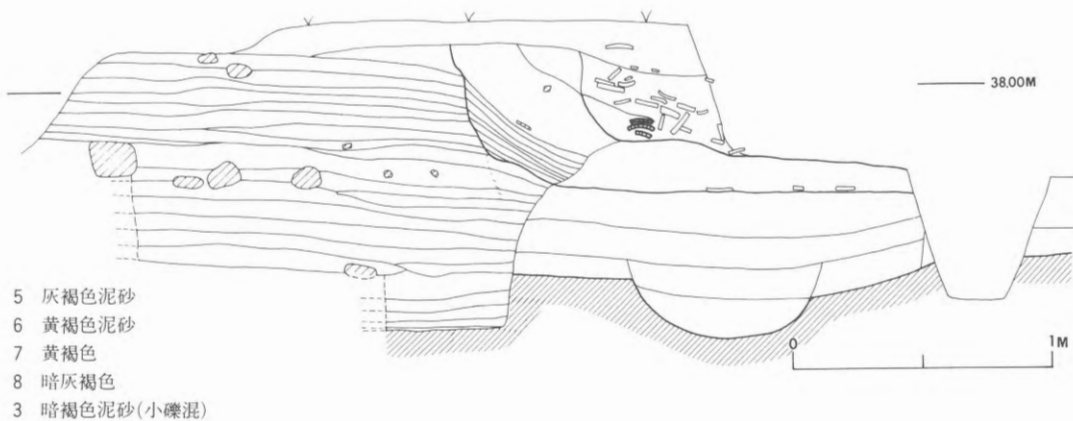
第51図 西国分廃寺 塔心礎据え石実測図

大石は長さ70センチ、厚さ30センチで、四個ともほぼ同じサイズである。掘り方はなく、断面を見ると版築しながら埋め込んだ様子うかがえる。四個とも上端部を同一レベルに整えている。この上方は削平されているため心礎の抜取痕は確認できなかったが、四石の配置から考えて心礎下の支えに使ったものしか考えられない。

版築の特徴 削平のため、基壇上部に関しては一切不明であるが、下半部の築成をつぶさに観察することができた。すなわち、まず青灰色粘土質の軟弱な地山を整地し、径15cm大の栗石を敷く。その上を、同じサイズの栗石をまばらに埋めながら版築して盛り固め、厚さ約7cmの暗褐色と黄褐色の互層を数枚重ねる。ここで再び栗石を敷き、版築を順次薄く3、4cmの層にして重ね上げている。このように基壇の版築土の下部に栗石を混ぜた例は、西大寺の塔にみられるという。

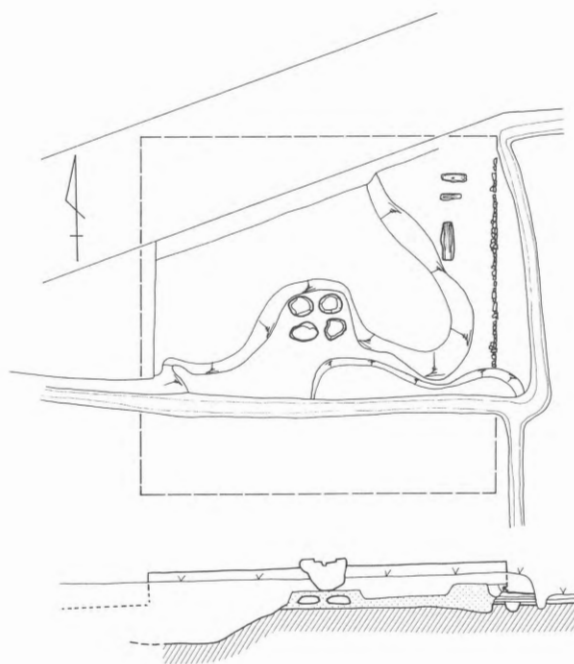
出土遺物 遺物は多量の瓦が主で、他に須恵器と土師器の小片が若干含まれる。瓦には7種類14点の軒丸瓦、1種類1点の軒平瓦がある。軒丸瓦のうち、重弁八葉蓮華文（5点）と複弁八葉蓮華文（4点）は奈良前期（白鳳時代）に属し、他の5種、5点の軒丸瓦は奈良後期と考えられる。出土層は、先に述べた瓦積み崩れ部から検出した四葉単弁蓮華文軒丸瓦以外は、すべて攪乱土である。

以上のように塔跡からは、基壇東縁の化粧瓦積みと心礎据え石を検出した。塔中心部と瓦積みまでの距離は6.9mを測るから単純に



第52図 西国分廃寺 塔跡基壇版築土層図

計算すれば塔基壇の大きさは1辺13.8mとなる。しかしながら基壇瓦積みを断ち割って調べたところ、心礎据え石部分の版築土と瓦積み部分の版築土とは直結せず、瓦積みから塔の中心部へ約80cmのところ一度切り込んで別の版築土を重ね、その外側40cmで再び切って現在残っている瓦積みを造っているのが確認された。すなわち瓦積みと心礎据え石とは同時期のものではない、が塔基壇の大きさはほぼ変わらなかったと考えられる。



第53図 西国分廃寺 塔復原図

2 掘立柱建物・溝およびその他の遺構 (図版第42・43、第54～60図)

掘立柱建物は、C・F・G・L・N・P地区で17棟以上を検出したがいずれも遺存状況はよくない。溝遺構についてはB・F・J・K・Lで東西・南北方向の溝を検出している。これら遺構については、土壌などその他の遺構とともに各調査での説明とする。

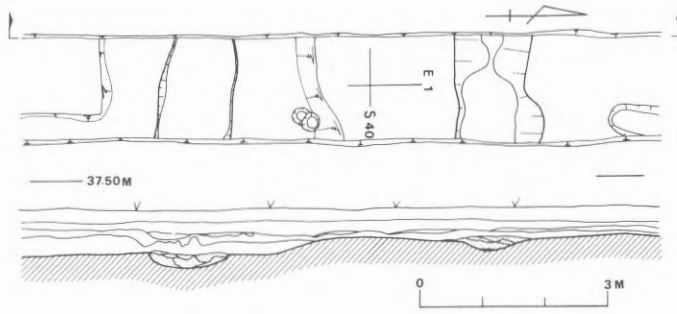
A区

原点より東16メートルの割り付け線上で南へ52～86メートル地点に幅2メートルのトレンチを調査したのみであるが、S79～83にわたって河原礫敷を検出した。礫敷は整然としていないが、格子目叩きの平瓦片や須恵器片が礫と礫との間に埋まっている。

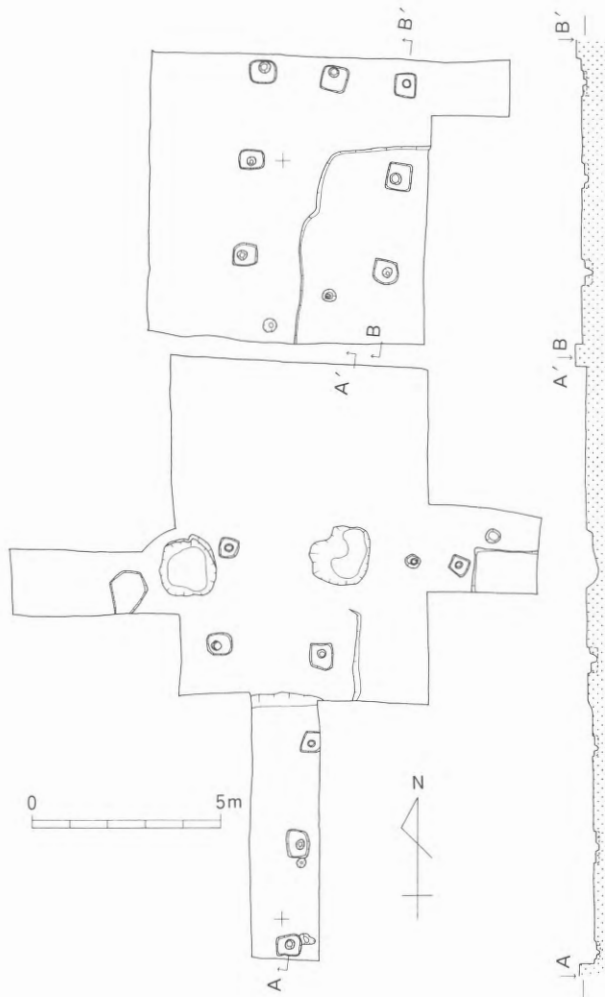
この礫敷を狭んで北と南に溝状の落込みがみられたが、遺物が全くなく、また地層を観察したものはいまひとつ決め手がなく今後の課題である。

B区 (第54図)

原点の南16～53メートルに幅2メートルのトレンチを設定し調査した。S37.6～38.6、EOで東



第54図 西国分廃寺 B区溝1・2実測図



第55図 西国分廃寺 C区実測図

西へのびる溝SD2が1条あり、これより南へ5メートル離れて（S42.6～43.6 EO）同じく東西へのびる溝SD1が1条ある。南の溝肩に近接して柱穴を1個検出した。これの対になる北の溝肩の柱穴はトレンチの東壁よりも東にあると思われる。北の溝からは格子目叩きの瓦片が出土している。

なおS32.6～36.6 EOで両すほまりの溝状遺構（長4メートル、幅0.4メートル、深0.3メートル）があり、この中から3重弧文軒平瓦が1点出土した。またS22 E1の地点で軒丸瓦Aが遺構面（ベース）に張りつくようにして出土した。

C区（図版第42、第55図）

塔から道路を隔てたすぐ北のところである。柱穴がなるが、削平によって一部の柱穴はすでに消失し、どういう建物になるのか不明である。建物は東西2間（柱間は1.9メートル）南北は6間以上（柱間は2.4メートル）ある。

この地区で出土している遺物はほとんど瓦片であり、すべて奈良前期のものである。柱穴の掘り方（埋め土）からは遺物は

出土していない。

なおこれらの柱列の方位は真北からやや東寄りである。

D区

幅2メートルのトレンチを調査したのみであるが、N43～44 EOで東西へのびる溝SD3が1条あり、格子目叩きの瓦片が多量出土した。

E区

N63.6～64.5 E2地点とN69.4～70.4 E2地点に各々溝1条SD4・5があって共に東西にのびて

いる。両溝の肩に近接して柱穴が各1個あったので、この部分のトレンチを拡幅して隣接する柱列を探したが、攪乱もあって今のところ確認できていない。

この溝からも多量の瓦片が出土した。特に北の溝からの出土が多かった。軒丸瓦Bがこの北の溝から出土した。

F区 (図版第42、第56図)

この地区では掘立柱建物跡5棟以上、溝4条以上を検出した。

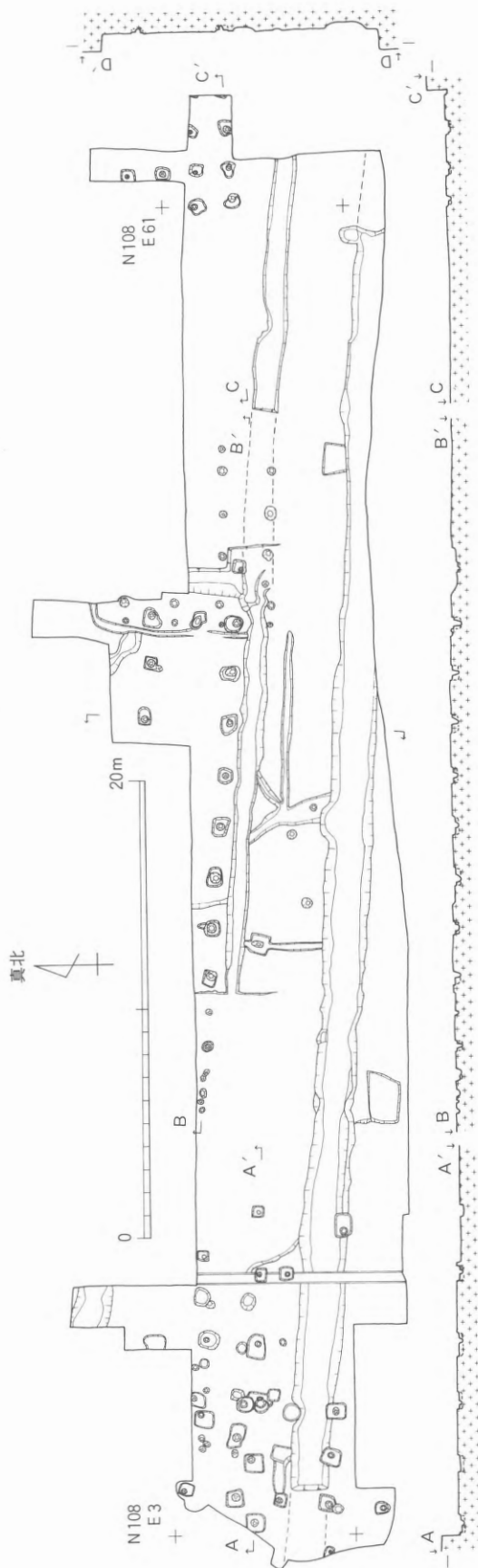
建物1 (SB1) 桁行3間以上、梁行2間、柱間は桁行8尺、梁行9尺を計測する。柱穴からは格子目叩きの瓦片が出土した。建物の方位は真北よりやや東寄りである。

建物2 (SB2) 桁行7間、梁行2間、柱間は桁行7尺、梁行6尺を計測する。SB1と同様、柱穴から格子目叩きの瓦片が出土する。建物の方位も真北よりやや東へ振る。

建物3 (SB1) 桁行4間以上、梁行2間の総柱建物、柱間は桁行、梁行ともに7尺を計るこの建物はSD2の溝が廃絶した後に建てられたものである。柱穴の埋め土内から時期のわかるような遺物が出ていないのでこの建物が廃絶した時期は不明である。

建物4 (SB4) 桁行3間、梁行3間の総柱建物、西面に廂がつく。柱間は桁行7尺、梁行6尺を計測する。この建物はSD9の溝が廃絶した後に建てられたのは勿論のこと、この付近では田の床土の直下に厚さ約5センチの瓦器包含層があり、この包含層を切り込んで柱が掘込まれている。従ってこの建物は、平安時代以降の建物である。

建物5 (SB5) 桁行3間、梁行3間の総柱建物。柱間は桁行、梁行ともに5尺である。柱穴からは遺物が出土していない。また建物の方位も他のそれと違っている。SB5の北に近接して幅0.2メートル、深0.1メートルの小溝があるがこの溝から須恵器片が出土した。



第56図 西国分廃寺 F区実測図

溝6 (SD6) 幅1.5～2メートル、深0.5メートルを測る。この溝からは多量の須恵器と瓦片、土師器が出土した。須恵器は7世紀後半のものが大部分を占め、8世紀に入るものも一部ある。

溝7 (SD7) 幅0.4～1メートル、深0.1～0.4メートルを測る。この溝からも須恵器、瓦片が出土した。量のうえではSD2と比較にならないが、時期的にはSD6と差程変わらない頃と思われる。

溝8 (SD8) 幅0.2メートル、深0.1メートルを測る。瓦器の包含層を切込んであり、SB4の建物のころと思われる。

溝9 (SD9) 幅0.2メートル、深0.1～0.2メートルを測る。この溝はSB4の雨落ち溝と思われる。

溝10 (SD10) 幅0.2メートル、深0.1メートルを測る。この溝はSD7とSD6とつなぐ。途中で樋のような構造物があったのか方形の落込みがあり炭化物が多量に入っていた。

その他、性格不明の遺構 a、b、cがある。aからは須恵器片、瓦片が出土し、上層で軒丸瓦も出土した。bからは、須恵器片、土師器片、瓦片が出土した。羽釜片が数点出土した火を受けた石等も10数個出土している。

cからは上層で黒色土器1個が出土し、下層からは高台付の土師器椀1個が出土した。a、bの時期は8世紀初頭までの遺構と思われるが、cは平安時代のものであろう。

G区 (図版第43上、第57図)

本区は後世の削平が著しく掘立柱掘り方の底まで削去されているものが多く、建物の全容を計り知るのは困難であるが、およそ5棟の建物跡が想定できる。掘り方、柱穴内から若干の瓦片が検出されたが、時代判定は決め難い。掘り方の大きさ(大きいもので一辺0.6メートル、小さいもので径0.3メートル)から判断して大きな伽藍の遺構とはしがたい。

建物6 (SB6) 梁行2間、4.6メートルを計測するが、桁行は未調査区へのびるため不明である。桁行は約2.75メートルを計測する。

建物7 (SB7) 南面に庇をもつ建物で桁行3間、7.9メートル、梁行は7.3メートルで、3間とみられる。庇を受ける柱の掘り方は母屋のそれよりも小さい。

建物8 (SB8) 桁行4間、約10.1メートル、梁行2間、約3.7メートルの建物と想定できるが、さらに東西に長い廊下状の建物になるかもしれない。南面の掘り方が他に較べて大きい。

建物9 (SB9) 東西方向に6.4メートルを測る3間分の柱痕を検出した。梁行の規模、方向は不明である。

建物10 (SB10) 東西方向に7.6メートル、4間の柱痕とこれに直交する柱痕1ヶ所を確認した。桁間約2.0メートル、梁間約1.8メートルを計測する。

これら5棟の方向は、真北に対し西へ約7度振っており磁北に近い方位に建設されている。真北より東へ約1.4度振って建立された塔とは時期差を考えねばならない。

溝11 (SD11) 掘立柱建物SB-6～10がこみあって建つ地点を東西方向に検出された素掘り溝で幅約0.6メートル、深さ0.2～0.35メートルを計る。なお、この溝を境に南北で段差があり、北側が、平均約15センチメートル高くなっている。

溝12 (SD12) 建物群の南側で検出された素掘り溝である。幅約1.5メートル、深さ10センチメートル弱の浅い溝である。

溝13 (SD13) 溝12の南約5メートル地点で、溝11、12と平行するものである。幅約0.6メートル、深さ0.2メートルの小溝である。

以上の3溝は真北に対し98度30分東へ振る東西溝で塔の方向にあうものである。

H区

G区の南側の畑地である。部分的な調査であったが遺構の残存状況は極めて悪く、小さなピット群を検出しただけである。調査区の北東部で検出された4柱穴は1棟の建物となりそうである。

建物11 (SB11) 方向を真北よりやや東に振る建物で柱間は南北1.8メートル、東西1.9メートルを計測する。掘り方は径0.3メートルと小さい。

I区

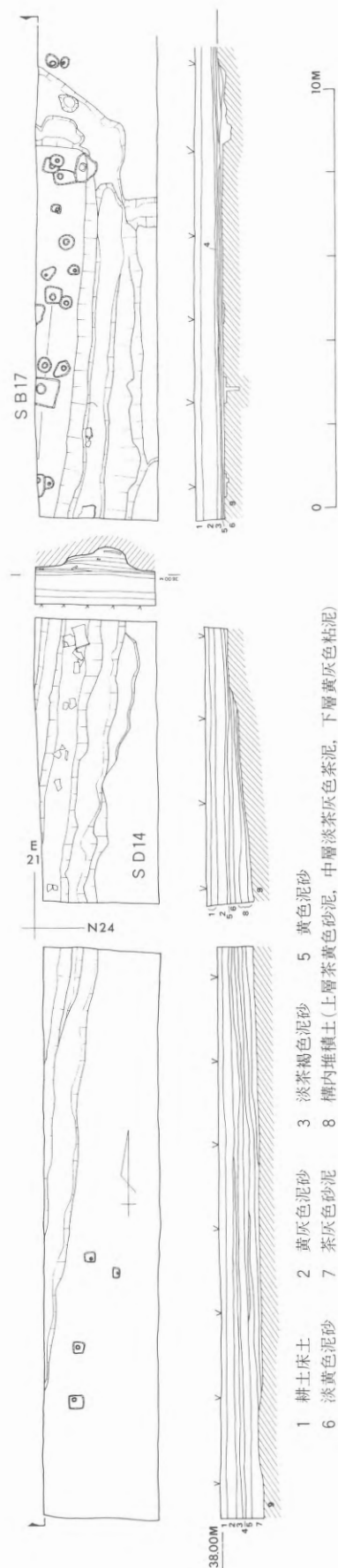
塔跡とは道をはさんだ西側地点で農業用倉庫の建設に先立ち発掘調査と実施したが顕著な遺構は検出されなかった。本廃寺が法起寺式伽藍配置をもつものなら金堂跡に比定されるべき地点であるがこれを証する資料は得られなかった。

J～N区 (図版第43下・第58・59図)

塔跡の東北部での伽藍検出をもくろみ、J～N区の5区に、南北と東西に幅3メートルのトレンチを設けた。ここでは、各地区を切り離しては説明が困難であるため一括記述とする。



第57図 西国分廃寺 G区実測図



第58図 西国分廃寺 J・K・L区実測図

地層調査の結果次のことがほぼ明らかとなった。旧地形は北から南へなだらかに低くなっており、後世水田を作る際に高所を削平し低い所に土を盛って現状の段を呈するに至ったものである。しかし、東西は現地形と様相を異にしている。Nトレンチ東端から西へ行くに従い旧地形は漸次レベルが下がり、Lトレンチ中央部から西は逆に高くなって、Lトレンチ西端に達している。つまりL区中央部が浅い谷を形成してこの谷が南へ注いでいたことが判る。そしてこのいわば谷底ともいえる地区に遺物包含層が厚く堆積し、北及び東西両端には遺物はほとんど残存しない。これを南北トレンチでみると、地層は上から順に①耕土、床土、②灰黄色泥砂（近世陶磁器含）、③淡茶褐色泥砂（黒色土器含）、④暗茶褐色泥砂（黒色土器含）、⑤黄色泥砂（奈良時代瓦、土器含）、⑥淡黄色泥砂（奈良時代瓦、土器含）、⑦茶灰色泥砂（奈良時代瓦、土器含）、⑧地山が認められ、南のJ区ではこれらの層は厚く、特に第⑦層はJ区にのみ堆積している。瓦、須恵器、土師器は各層に含まれるが特に第④層に多量に認められた。

建物12 (SB12) L区西トレンチで3間×2間以上の建物1棟検出している。東西5.3メートルで1間は1.75メートル、南北は1.9メートルを計測する。柱間、掘り方及び柱のサイズから小規模な建物と思われる。検出面の上下に遺物包含層が認められないので確実な構築年代を知ることは難しいが、建物の方位から推して、F区の瓦器包含層を切り込んだ建物との関連から、平安時代以降のものかも知れない。

建物13 (SB13) L区東トレンチで検出した東西2間3.6メートルを計測する。南北間は1.75～1.8メートルで、その間数は不明である。建物12とは逆にやや東へ振る。

建物14 (SB14) 建物13の東で検出されたが東西方向8.1メートル3間分が確認された。南北間については不明。建物13と同様やや東へ振る方向をとる。

建物15 (SB15) 建物14の東で東西2間3.55メートルが確認された。東側の柱間がせまく約1.5メートルを計る。掘り方は小規模で真北方向におく。

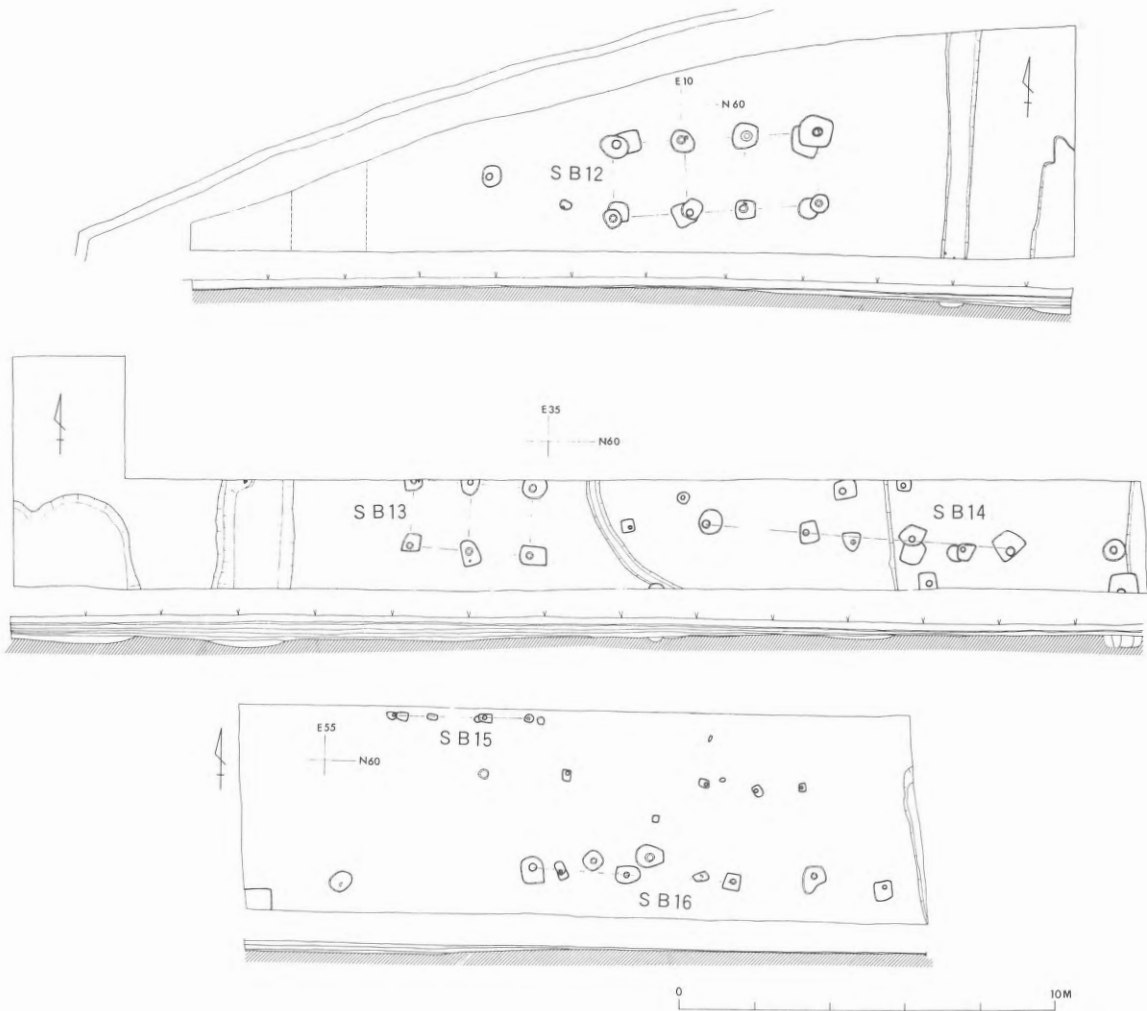
建物16 (SB16) 建物15の東南で東西方向に2間分

5.26メートルが確認された。南北間は不明。やや東へ振る方向をとる。

建物17 (SB17) L区南北トレンチ南半で検出されたもので、しっかりとした方形の掘り方をもつ建物の東側柱を2間4.4メートルにわたって確認した。後述の溝14と平行するもので、真北に対し東へ約6度振る方向をとる。

溝14 (SD14) K区及びL区南トレンチにまたがる溝で、幅約1.8メートル、深さ約40センチメートルを測る。L区南トレンチ中央付近 (N44、E22.5) で、西へ直角に曲がっており、再び西に曲って、B区の二つの溝のいずれかに連なる可能性もある。この溝からは多量の瓦と、須恵器、土師器が検出された。瓦には軒丸瓦A・B・Dの三つのタイプを含む。また、鴟尾の破片を1個検出した。これらの遺物によってこの溝の廃絶年代を定めるならば、8世紀はじめ頃と推定される。

溝15 (SD15) L区東トレンチで確認された南北方向の素掘り溝である。幅約2.0メートル、深さ0.2メートルを計測する。溝内からは瓦片が出土する。方位は真北からやや東へ振るもので、溝14と同方位をとる。



第59図 西国分廃寺 L・N区実測図



第60図 西国分廃寺 P区実測図

P区

耕作土の直下に地山がみられ、多くのピットが検出されたが、やはり、削平が著しかったせいか全容のわかる建物は無い。

建物17 (SB17) 調査区の北半で確認された建物で、現況では東西2間、3.95メートル、南北2間、4.0メートルを計測するもので、方形の掘り方は一辺が0.8メートル前後としっかりしたものである。ほぼ、真北方向に配置している。

建物18 (SB18) 建物17の南側で南北2間分4.1メートルを確認したが、東西間、南北

間についても明らかでない。方向は真北に対しやや東へふる。

第3節 遺物

遺物には瓦類・須恵器・土師器・瓦器・金属製品・石器などがある。木製品はない。瓦類は量的に最も多いが、大部分は二次堆積層から出土したものであり、完形品ないし保存状態の良好なものは少なく、磨滅した小片である。瓦類に次いで多いのは須恵器・土師器であるが、その大半はF地区の溝から出土したもので、7世紀後半の遺物である。瓦器は数量は少ないが、塔跡を除く遺跡全域に散在している。

1 瓦類

瓦類は丸瓦と平瓦が大多数を占め、ついで軒平瓦と軒丸瓦が多く、その他道具瓦としては鴟尾片・隈木蓋瓦・鬼板が数点ある。

(1) 軒丸瓦 (図版第44A～I、第61図A～I)

軒丸瓦は総計67点検出した。そのうち同一個体と思われる破片は、数片だけで、個体数にして、60個体余りある。A～I類の9種類に区別できる。各種軒丸瓦の計測値、地区別出土数、類似瓦の出土遺跡は別表に示した。

軒丸瓦A類

内区に単弁8弁蓮華文を配し、外区外縁は素文で、外縁形態は直立縁である。中房経は37ミリと、瓦当径174ミリに対して小さい。蓮子は1+8で蓮弁の中心線延長上に整然と配し、中房縁に細い界線をめぐらす。中心の蓮子は大きく、囲りの8個は小粒である。蓮弁、子葉、間弁は肉厚く、中心に稜をもち、弁と子葉の尖った先端は鋭く反り上げて、力強く深い彫りである。この種の軒丸瓦Aは計15点出土した。そのほとんどは瓦当部分のみ残存し、丸瓦部は欠失しているので、全体の形状あるいは瓦当部と丸瓦部との接合方法の詳細については不明である。しかし瓦当裏面に丸瓦離脱痕を残すものがあり、これによって若干の接合法が覗える。丸瓦の凸面先端を少し削って、瓦当裏面のほとんど上端に近い位置に接合する。接合部外面は非常に薄く粘土をあてており、このため瓦当上端と丸瓦凸面はほぼ一直線に連なる。接合部内面もまたわりあい薄くし

かも丸瓦の接着部分附近だけ粘土をあて、接合線は高い円弧をえがく。瓦当は非常に薄く、図示した例はその下端を厚く仕上げで特異な断面を示しているが、他の例は下端部も薄い。胎土は緻密で焼成は極めて堅緻で灰白色を呈するものが6点、他は黄褐色で焼きがあまり。

このA類に類似した瓦は、当西国分廃寺の南々西4.4kmに位置する北山廃寺^(注1)、その東2.3kmの最上廃寺^(注2)から出土している。北山廃寺採集品は蓮子が大きく、その数が1+4である点を除けば非常によく似ている。また最上廃寺ものは蓮弁の先端がやや丸味を帯び、子葉は小さく、間弁の形も異なる。中房径は大きく蓮子は1+6である。しかしながらこれまた同じ系統に属するものと思われる、いわゆる山田寺式単弁蓮華文軒丸瓦の流れをくむものである。

軒丸瓦B類

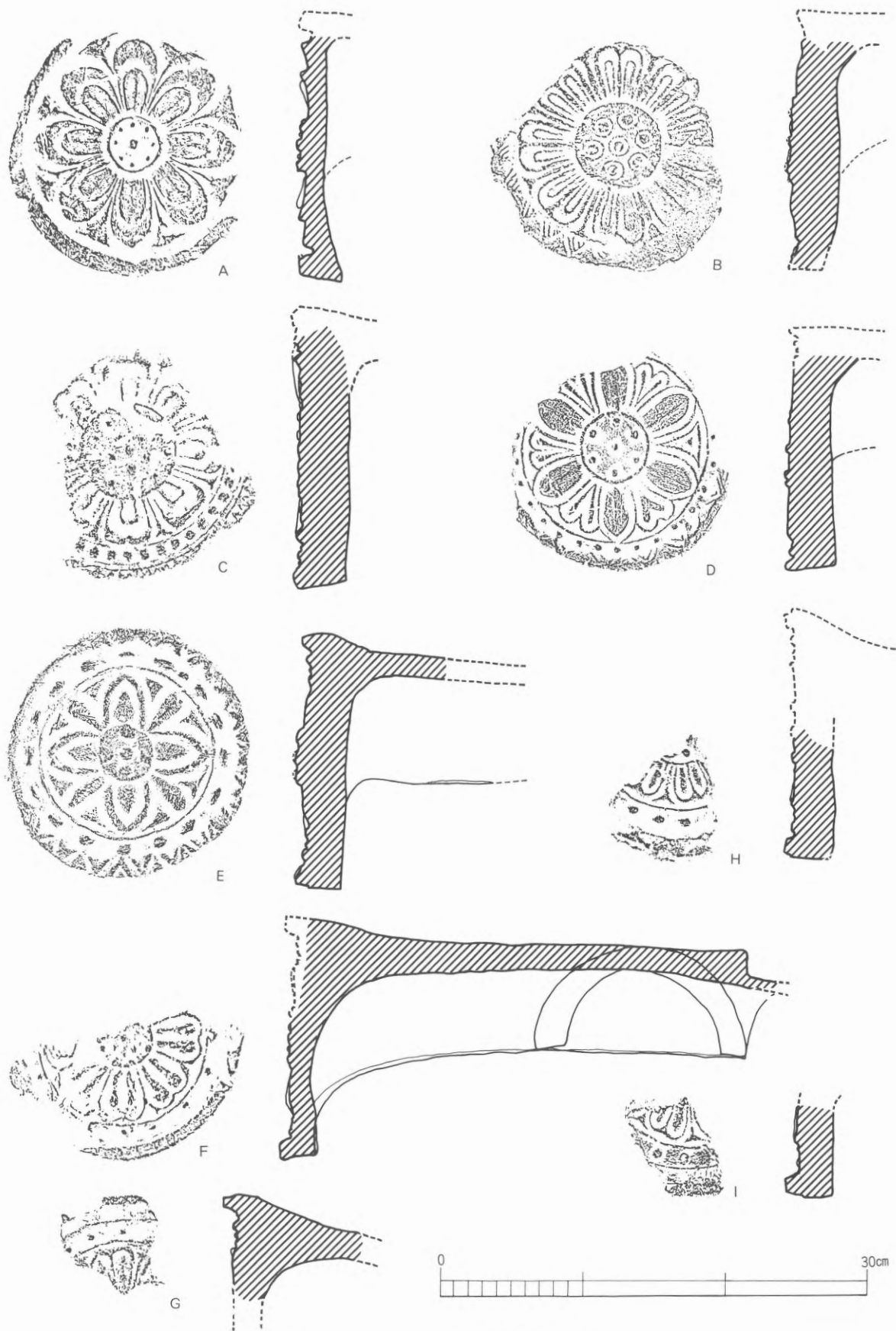
いわゆる川原寺式の複弁蓮華文軒瓦の一種である。内区に複弁蓮華文を配し、外区外縁に鋸歯文をめぐらす。中房と内区中央部は外縁より盛り上がる。1+6の蓮子は扁平で、各蓮子の周囲に円圏をもつ。蓮弁と間弁の先端は反り上がる。子葉は輪廓線を盛り上げ、中央部分を凹ませており、この瓦の特徴の一つである。いま一つの特徴は外縁の文様にある。これは一つおきの鋸歯の中に複線を刻す面違え線刻鋸歯文とでもいうべき特異な鋸歯文である。外縁の形態は三角縁である。

このB類は軒丸瓦の中では最も多く、計19点検出したが完形品はなく、瓦当部のみ残る。そのうちで、接合部内外面の粘土に挟まれて丸瓦部先端がわずかに残っている例がある。これをみると、丸瓦の先端は凹面と凸面の端縁をとともに削り落とさずにそのまま瓦当に接合しているものと、端縁を1.5cm間隔にヘラで長さ2cmのきざみを入れて接合しやすいように工夫したものがある。きざみの痕をもつものは2例確認したが、2例ともにきざみの方向は丸瓦長軸に対して平行でなく、約10°斜めにつけている。接合部内面粘土の、離脱した丸瓦凹面と接していた面に残る痕から、離脱した丸瓦凹面は不調整で布圧痕を残していたことがわかる。内外面接合粘土はともに厚くなく、接合線は高い円弧を描く。胎土は緻密で、焼成は軟質のものが多く、黄色を呈するが、4個体は焼成が堅緻で表面は灰青色、内部は淡い褐色を呈す。

この軒丸瓦B類に類似した瓦は、当寺西方5.8kmの山口廃寺^(注3)、そのさらに西方1.4kmの上野廃寺^(注4)で採集されている。山口廃寺の軒丸瓦は特に酷似しており、ただ内区と外縁との境界に凸線を一条めぐらしている点が異なる。上野廃寺例は中房の蓮子数が1+5+8で当寺とは相違するが内区、外縁の文様はよく似ている。

軒丸瓦C類

内区に単弁8弁蓮華文を配し、外区外縁に凸線鋸歯文を、外区内縁に珠文を密にめぐらす。外縁の形態は三角縁である。中房は大きく、周縁に細い凸線をめぐらす。蓮子は一部剥落しているが、残存蓮子の間隔から推して1+5+(9)と思われる。弁、子葉は輪廓線で表し、その端部はともに少しくびれた特異な形を呈する。内区と外区および外縁と内縁を区する界線をめぐらす。出土した三個体とも丸瓦部との接合部は欠失している。胎土は緻密で焼成はやや軟く、赤褐色を呈する。この種類の瓦は、本薬師寺から出土している^(注5)。その一例は、奈良国立文化財研究所の型式番号6121Aと設定されている。文様形態は同範とみまちがうほど同一である。しかし、各部寸法が異なり、直径で2cm、中房径で1cm、薬師寺例が小さく、同範ではない^(注6)。しかしながら、薬師寺と直接の関連を示す瓦である^(注7)。



第61图 西国分庵寺 軒九瓦拓本·実測図

軒丸瓦D類

平坦な内区に単弁6弁蓮華文を配し、外区内縁に鋸歯文をめぐらす。外縁形態は傾斜縁。中房は盛り上がり割りと小さく、中房周縁に凸線をめぐらす1+6の小粒の蓮子を蓮弁の中心線延長線上に配す。蓮弁の中央に稜をつくり、端は尖っているがあまり反転しない。間弁は独特のもので、二つの子葉を輪廓線で囲む「複弁状」を基本とするが、一つは子葉がくっついて細長いハート形に、いま一つは三角形に変形し、それを撥形の輪廓でかこんでいる。外区内縁に小粒の珠文、外縁に二重の凸線鋸歯文をめぐらす。全体に素朴な地方的趣を呈すが、彫り自体は丁寧である。接合部内外面ともに比較的厚く粘土をあて、内面は指頭でおさえナデで調整し、接合線はやや低い円弧を描く。接合部外面には焼成時のひびわれがある。丸瓦先端には何らの加工はなく、そのまま挿入している。接合は雑で、瓦当部との間にすき間のあいているものあり。丸瓦凹面に布圧痕が残る。計6点出土。胎土に砂粒を含み、焼成はすべて堅監緻で灰青色を呈す。他に類別を知らない。

軒丸瓦E類

内区に単弁四弁蓮華文、外区内縁に珠文、外縁に鋸歯文を配す。中房にポツテリとした蓮子(1+4)をつける。瓦当は部厚い。外側の蓮子は中房縁端に接する。各蓮弁の間に子葉状を配し、その両脇に三角形を配す。珠文は大振りの楕円形で、その間隔はまちまちで形も雑である。鋸歯文はV字形を内外交互に向きを変えて配した特異なもので、珠文と同じくその間隔は整然とせず、粗い彫りである。接合部外面にあてた粘土は厚くない。縦にヘラケズリで整形する。接合部内面もうすく粘土をあて指でおさえしている。丸瓦凹面に布圧痕が残る。瓦当裏面はヘラケズリで平坦にし、接合線は高い円弧をえがく。接合部側面は直角でなく曲線的である。計10点検出した。胎土に砂粒を含む。焼成は軟く、黄褐色を呈す。この瓦は他遺跡からは出土していないが、大正年間に当寺で採集されている^(注1)。大正12年に報告された和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告第二 所収の第8図の軒丸瓦はこのE類である。

軒丸瓦F類

複弁8弁蓮華文を内区に、外区内縁に珠文を配し、外縁は素文で形態は直立線である。蓮子は大部分剥落しているが、1+(4)+(8)と推定され最も外側の蓮子は、中房の縁端に沿うめざらしいものである。弁は輪廓線で連なり間弁はない。子葉を分ける境界線がない。珠文の位置は弁の中心と弁の中間延長線に16個配す。内区外区を分ける界線をめぐらす、外縁と内縁とを画す線はない。外縁は中房よりも高い。全体に彫りは弱々しい。接合部内外面ともに厚く粘土をあて、接合部内面は指でおさえたままでナデも削りも施していない。接合部はやや低い円弧。接合部側面は曲線的である。丸瓦凸面はヘラで調整、凹面は布圧痕残す。計7点出土。すべて焼成は軟く、黄灰色を呈す。胎土に砂粒を含む。このF類と同じ瓦は当寺東3.2kmの粟島遺跡から出土している^(注8)。このF類は、平城京出土、軒丸瓦6316、軒平瓦6710に対応する^(注9)。

軒丸瓦G類

複弁蓮華文。中房は欠失していて不明。8弁と思われる。内外区及び外区内外縁を画す界線をめぐらす。珠点は小粒であるが突出している。その間隔より18個前後。外縁は素文であろう。直立縁で狭く高い。丸瓦部は瓦当端よりやや中心寄りにつく。接合部内外面に厚く粘土をあてる。丸瓦端部は未加工。胎土に大粒の砂を混え、焼成は軟く、表面、黒灰色、内部は黄灰色で磨滅は

著しい。1個体のみ検出。

軒丸瓦H類

複弁蓮華文。弁間弁端はともにやや盛り上がる。中房の大部分は欠失し、蓮子は1個だけ残る。中房外側に界線をめぐらせ、それに接して弁と間弁がのびる。珠文は大粒である。3点出土、胎土に小粒砂を混え、焼成は軟く、表面黒灰色、内部は黄灰色を呈す。この瓦は紀伊国分寺塔金堂から出土している。

軒丸瓦I類

複弁蓮華文。瓦当文様はH類とほぼ同じ。ただし、外区外縁と内縁を画する界線を持ち、外縁はH類よりやや高い。小片3点出土。焼成はあまく、黄灰色を呈す。この瓦は紀伊国分寺金堂からも出土している。

(2) 軒平瓦 (図版第45A~D、第62図A~D)

軒平瓦は総計13点で、軒丸瓦の出土量に対して非常に少ない。A~Dの4種に区別できる。

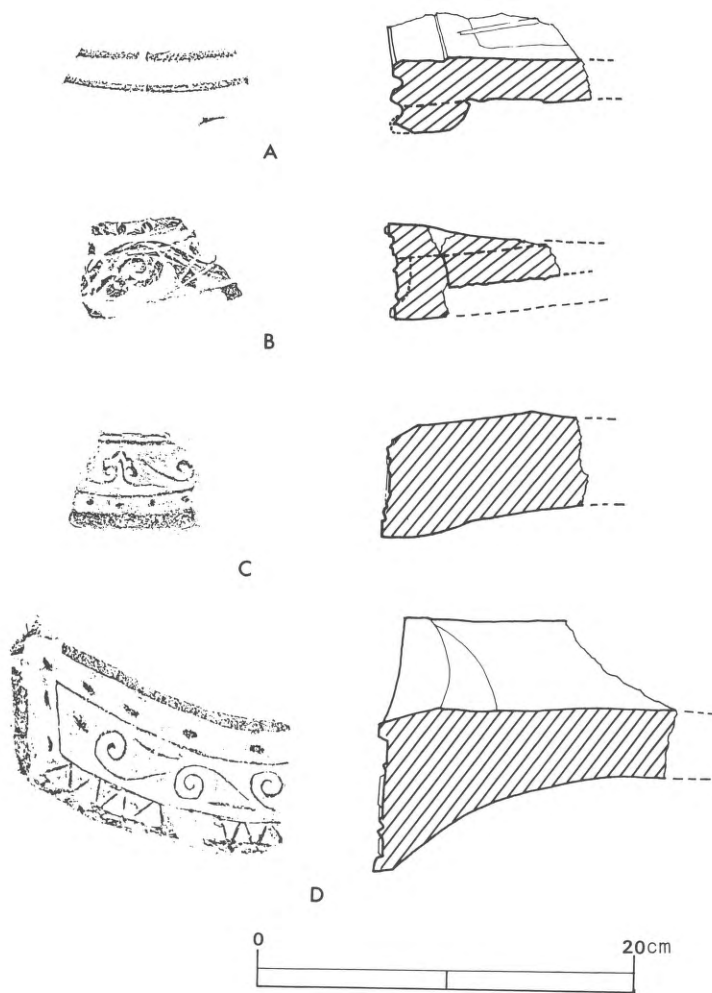
軒平瓦A類

三重弧文軒平瓦。出土3点ともに小片で平瓦端に二重弧をつけ、平瓦凸面の線部に幅4cm厚1.5cmの粘土帯を貼りつけて下の弧をつくる。この場合粘土帯を貼りつける部分はヘラケズリを施してタタキ目を消した後で貼る。重弧は範で型取りしたものではなく、一本のヘラないし大歯

の櫛状のもので引き削ったと思われる。平瓦凹面縁部は端から3cm巾で布圧痕を消して低い段になる。三点出土。胎土は緻密、焼成堅緻で自然釉がかかる。暗灰色、灰青色を呈す。

軒平瓦B類

唐草文軒平瓦。外区はなく、上外縁端面に連珠を配す。下外縁は剥落しているが、ここにも恐らく連珠をめぐらしたものであろう。内区は、範に十分粘土を押し込んでいないので不透明な唐草文となっているが、紀伊上野廃寺出土軒平瓦と同類である。この瓦の接合法は、まず範の内区部分に厚さ1cmの粘土を押し入れ、次に2.5cm厚の粘土を押し重ねる。そこへ平瓦端部をあてると同時に接合部上面(平瓦の凹面側)に約1cm厚、接合部下面(平瓦の凸面側)に



第62図 西国分廃寺 軒平瓦拓本・実測図

2cm厚の粘土をあてて押える。つまり、軒丸瓦と同じ製作法を用いている。平瓦の瓦当裏面と接着する端面にはキザミ等の加工はみられない。なお下面接合粘土は大部分剥落しており、もとの平瓦凸面が露出している。そこに格子目タタキ痕が残っているので、瓦当と接合する以前に平瓦部が作られていたことがわかる。

軒平瓦C類

中心部のみ残る。中心飾りは特異な花文で表す。他に類例をみないが、これにやや似た飾りは奈良平松廃寺にある^(注1)。下外区に蓮珠を配すが上外区は中央部から上を削ぎ落し、平瓦凹面に連なる^(注2)。この瓦の接合法は詳ではないが、断面をみるかぎり瓦の上下巾と平瓦の厚さがほとんど変わらないので、平瓦の広端近く少し折り下げ、その端面にそのまま範をあてたものであろう。ただし、平瓦部の厚さが普通の平瓦とは異なり5cmと極めて部厚く、軒平瓦のための特別製の平瓦と考えられる。平瓦部凹面には布圧痕、凸面には綿タタキ目が残る。凹凸両面とも端近くはヘラケズリで調整してある。1点のみ出土。焼成はあまく、表面薄墨色、内部黄灰色である。

軒平瓦D類

興福寺系の均整唐草文軒平瓦である。上外区脇区に長円形の珠文、下外区に線鋸歯文をめぐらす。顎は曲線顎で、顎面と平瓦凹面瓦当寄りには縦方向のヘラケズリを施す。平瓦部凹面に布圧痕凸面には綿タタキ目が残る。胎土に砂を含み、焼成は軟質、黄灰色を呈す。

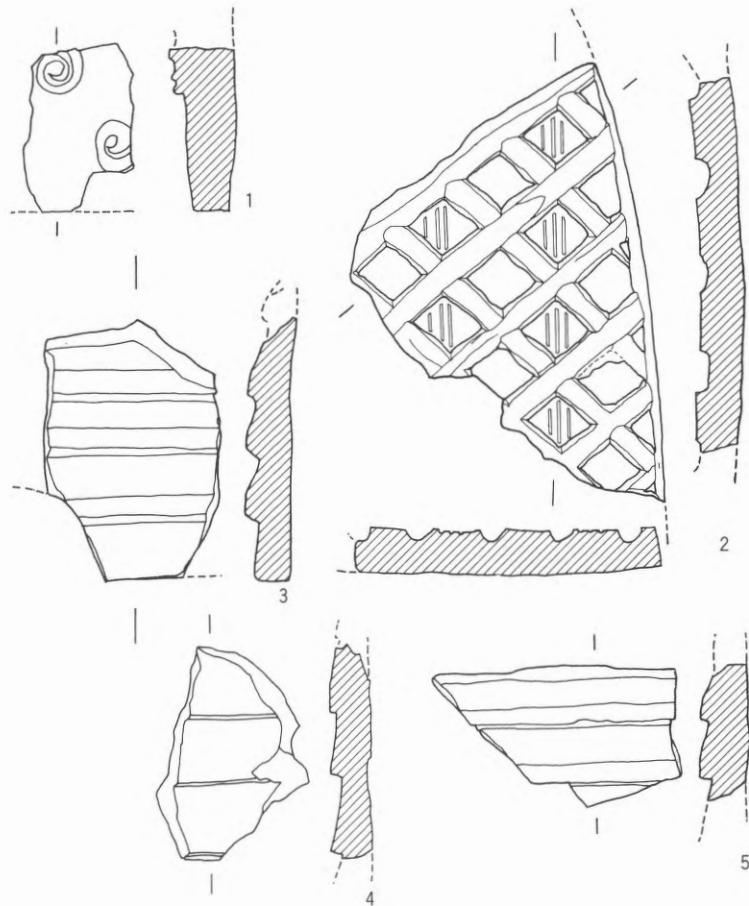
以上、軒丸瓦、軒平瓦の概要を示した。次に4次にわたる発掘調査で出土した軒丸瓦・軒平瓦を遺構別・地区別に出土点数を示せば、塔跡が13点、J区が23点、K区が5点、その他の地区が13点であり、J・K区が圧倒的に多いことがわかる。詳細は次表のとおりである。

(3) 道具瓦 (図版第45図1~5、第63図)

鴟尾3片(3~5)、隈木蓋瓦2片(1)、鬼版1(2)片ある。

鴟尾

いずれも段型を刻んだ鰭の部分の小片。厚さ2.4cmと薄手でうち1片は下端を半円形に切取ってある。焼成は2片はやや堅いが1片はあまいので同一個体とは思われな



第63図 西国分廃寺 道具瓦実測図(1:4)

い。J、K、L区出土。

隅木蓋瓦

2片出土。小片であるが、蕨手状の火焰文を飾る。^(注10)紀伊上野廃寺から類品が採集されている。隅木蓋瓦の一部であろう。厚さ3.6cm。焼成はやや軟く赤褐色を呈す。両片とも塔跡より出土。

鬼板

菱形文鬼板。厚さ20～25mm、現存長25cm。幅12mm深9mmと幅10mm深6mmの溝を斜めに交差させて、一辺25mmの菱形を浮彫りにしている。平たい板ではなく、やや反って文様面が凹面となっている。菱形上面に一列おきに縦に浅く細い三条の沈線を施す。側面のカーブから高さ30cmほどの鬼板の一部と思われる。それにしても非常に薄い。焼成はあまく、黄灰色を呈す。胎土に砂粒をほとんど含まない。^(注11)J区出土。

(4) 丸瓦 (図版第45の6・7、第64図の1・2)

丸瓦には行基丸瓦(1)と玉縁丸瓦(2)の二種が出土した。前者は粘土紐巻きつけ技法、後者は粘土板巻きつけ技法を多く用いている。両者ともに凸面は丁寧にナデて調整し、二次成形時の叩き目を残さないものが多い。しかし、凸面調整が不完全で叩き目の残存するものも若干ある。因みに任意に抽出した丸瓦116片中、8片(6.9%)に叩き目が残る。うち4片は縄巻叩き目、2片は平行刻線叩き、1片は正格子叩き目、他の1片は斜格子叩き目であった。なお、注目すべきことに、確認した限りでは玉縁丸瓦は縄巻叩き、行基丸瓦は刻線叩き板を用いている。縄叩き目の縄の撚りはすべて撚紐1段Lである。凹面は未調整で布圧痕が残る。布は縦に縫い合せ、布目は1cmあたり10×10～8×8である。行基丸瓦は長さ40cm内外のものが多く、側面は丁寧にヘラケズリ調整を施す。概して焼成はあまく、黄灰色を呈す。胎土は砂粒を含まず精良である。玉縁丸瓦は長さ30cm内外で行基丸瓦より一回り小さい。焼成はやや堅く、暗灰色を呈すものが多い。

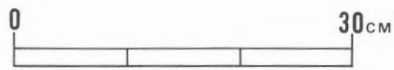
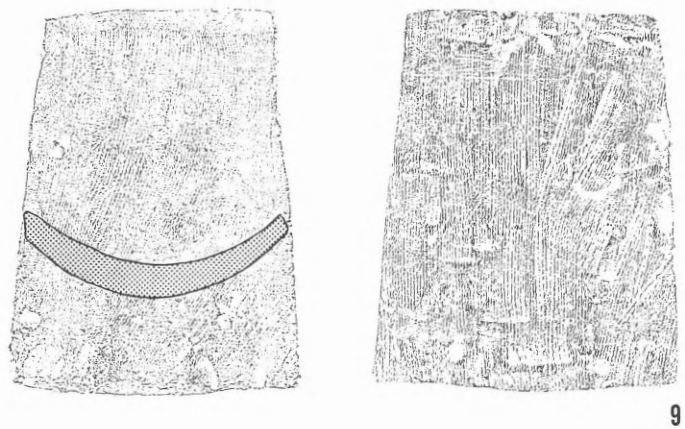
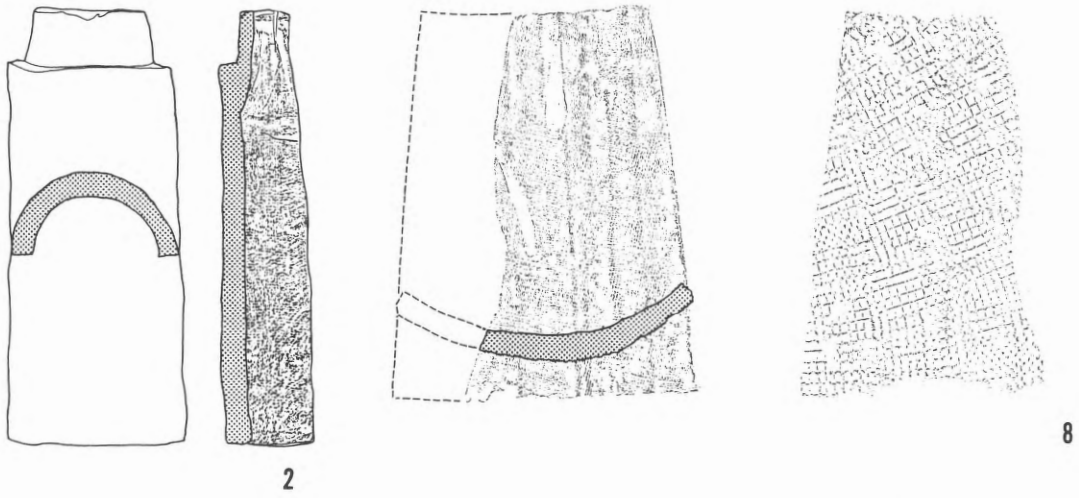
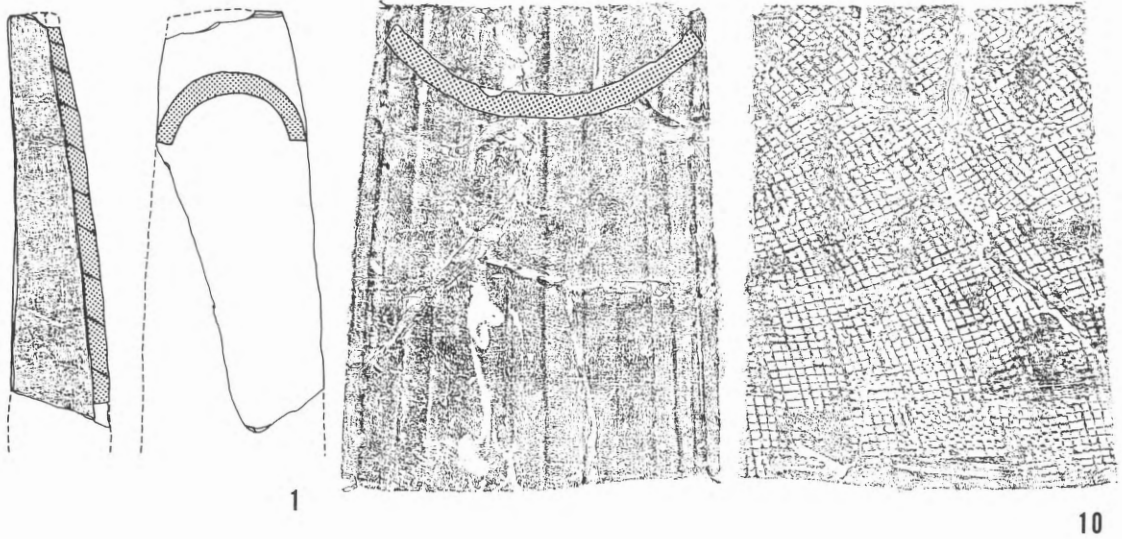
(5) 平瓦 (図版第45の8・9、第64図8～10、第65図)

出土瓦のうち数量が最も多く、塔跡、J、K区の溝に集中している。当廃寺の平瓦はすべて槌巻作りの特徴を示し、一枚作りの痕跡を残すものは確認できない。また粘土板巻きつけ技法を示す糸切り痕の残るものが多数あり、なかには粘土板の合わせ目の確認できる瓦も数例ある。しかし粘土紐巻きつけ技法の痕跡を残すものはない。凹面は槌の板と布圧痕が残り、その端数と側縁はヘラケズリで調整する。槌の板は巾4cm前後である。布目はすべて平織りで1cmあたり10×10～8×8内外で、極端に粗いあるいは細かいものはない。凸面は刻線叩き板と縄巻叩き版によって叩きしめている。数量的には刻線叩きが約7割、縄叩きが約3割を占める。^(注12)刻線叩き目はA～Nの14種に区別できる。このうち最も多いのは格子目で、平行刻線は少ない。^(注13)刻線叩き平瓦は大型(長40cm巾30cm前後)のもの(10)と小型(長30cm巾25cm前後)のもの(8)がある。最大のもは長43cm巾33cmを測る。縄叩き瓦は大型のものではなく、小型(長32cm巾25cm)である(9)。凸面に残る叩き目縄の撚りは、すべて撚紐圧痕が右上がり左下がりの傾向を示し、撚紐1段Lに属する。

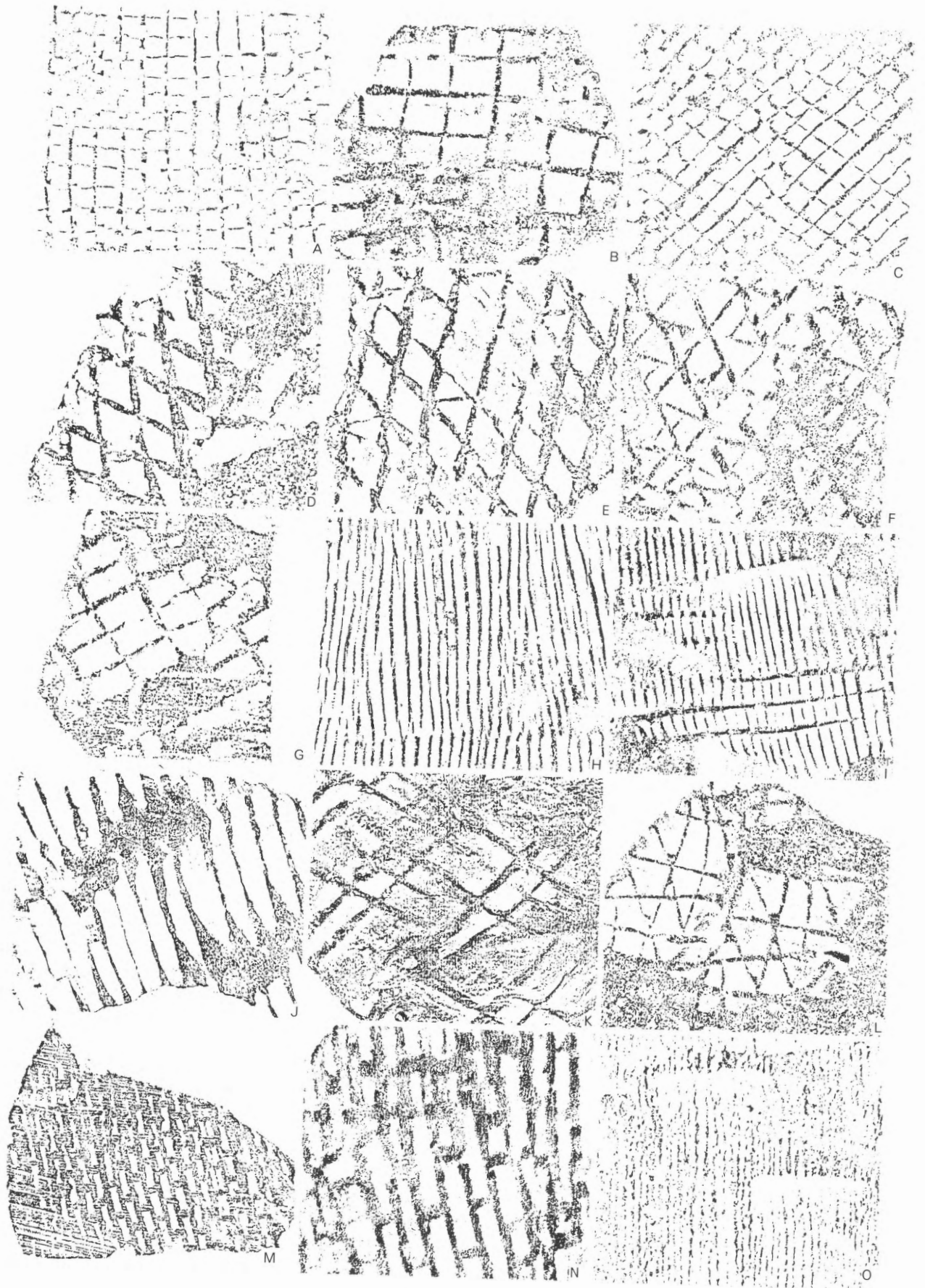
2 土器類

(1) 塔跡出土の土器 (第66図)

土師器 甕(13)は口縁部径31.3センチメートルを計測する。矩く屈曲外反する口縁部を横ナ



第64图 西国分磨寺 丸瓦、平瓦拓本・实测图



第65図 西国分庵寺 平瓦叩き目拓影 (1:2)

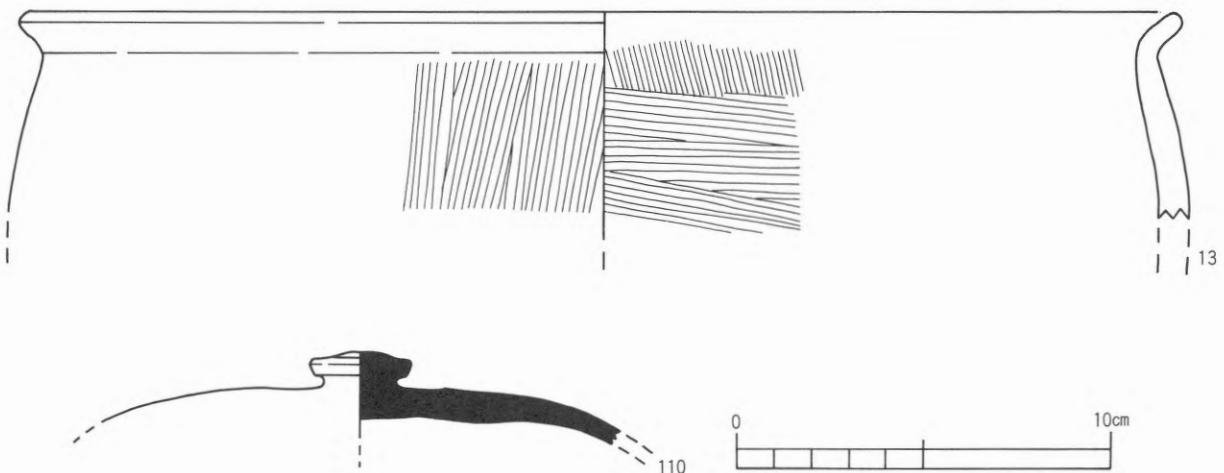
デ仕上げとする。体部の内外面に刷毛目を施す。瓦落下層より出土し、軒丸瓦Vを伴う。

須恵器 坏蓋(110) 平扁に退化した宝珠つまみをもつ蓋天井部断片である。口縁部を欠くが、返しをもつ口唇部をもつものとみられる。南部の版築土中出土である。7世紀末頃のものである。

(2) **F区溝6出土の土器** (図版第47・48・49の3・4・7・8・12、第67・68図)

土師器 坏・高坏・皿・蓋・甕などが出土した。坏には口径11.6センチメートルのもの(3)と18.0センチメートルのもの(4)がある。(3)の口縁内面には沈線状の段がかろうじてみとめられる。(4)の口縁端はやや外反ぎみである。いずれも、器表の剥落が著しい。高坏には碗状の坏をもつ(8・9)と盤状の坏部をもつ(10)がある。いずれも口縁部と脚台裾を欠失している。(8)は器高約11センチメートル、口径約15センチメートル、脚台裾径約10センチメートル程度とみられる。(10)の脚柱部は12面の面取りを施している。皿(7)は大型品で口径約27センチメートル、器高3.2センチメートルを計る。口唇部内面に幅広の段をもつ。暗文は不明。蓋(6)はとくに磨滅が著しく、頂部のつまみも原形をを残さない。口径13.2センチメートル、高さ3.5センチメートルを計る。甕(12)は口径21センチメートル、器高31センチメートルを計る。砂粒を多く含み磨耗が著しいが体部には刷毛目を施し、強く外反する口縁端はわずかにもち上げている。

須恵器 坏・同蓋・皿・高坏・甕・柑・平瓶・鍋・鉢・円面硯・盤甕・短頸壺などが出土した。坏は高台のつかずに口径の小さいもの(111~118)と高台をもつ口径の大きなもの(132~148)とに大別できる。小型の坏のなかには(118)などのように碗形に近いものも含まれる。高台はいずれも外方へ力強く広がるものが主体を占めている。皿(126・128)は口径それぞれ16.2センチメートル、19センチメートルを計る。下半篋けずりが顕著である。高坏は碗状の坏部をもつもの(155)、皿状の坏部をもつもの(154)とがある。甕(152)は底部と口頸部を欠失している。口頸部は強く外反する。柑は胴の張りが体部のやや上位にあり、直立する短い口縁部をもつ。肩部に重ね焼きの痕がみられる。平瓶(162)は体部の上半に肩をもつ丸みのつよい体部に大きく



第66図 西国分廃寺 塔跡出土土師器・須恵器実測図

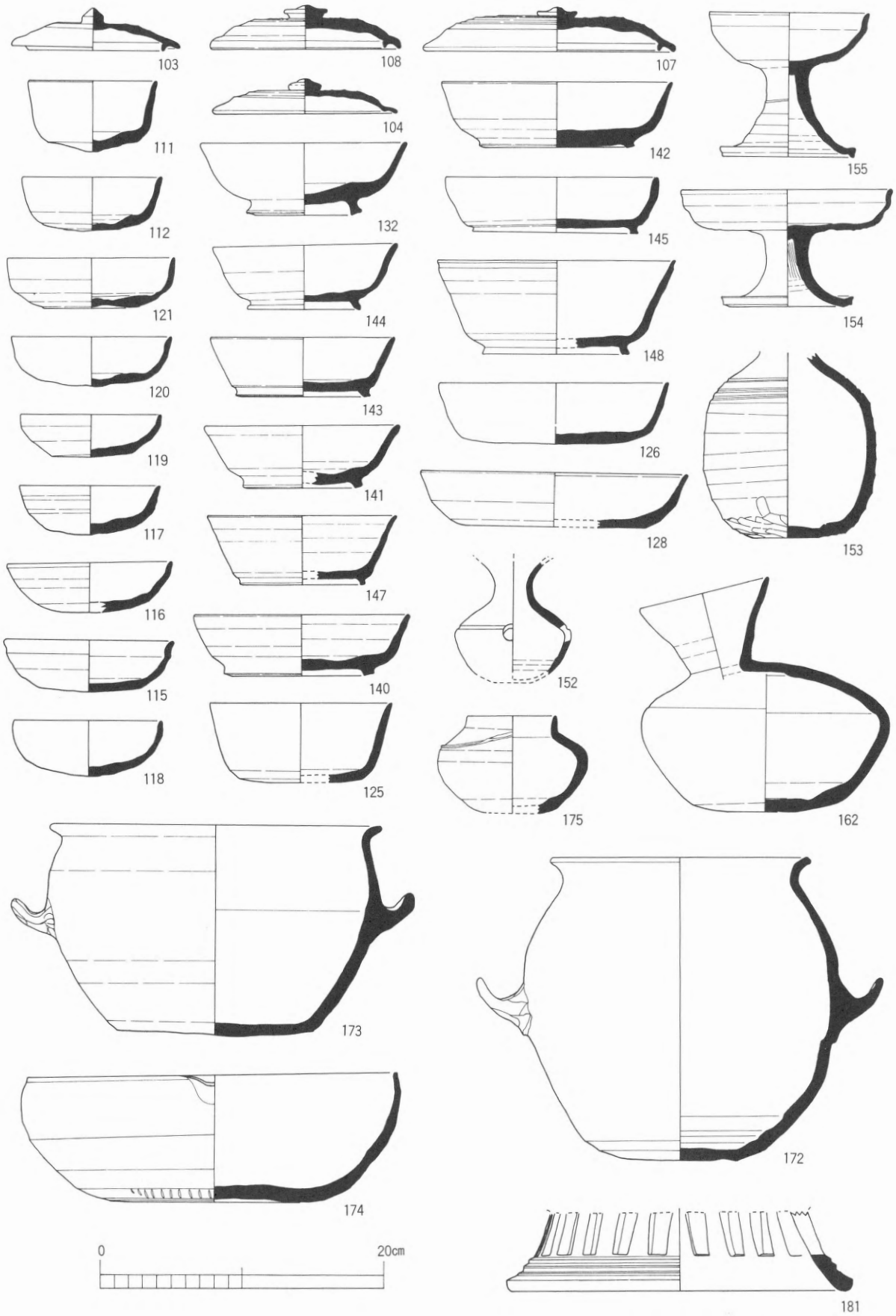
外反する大きな口頸部をもつ。鍋は浅鍋（173）と深鍋（172）がある。いずれも、短かい口縁部を外反に屈曲させたもので2ヶ所に把手をもつ。鉢（174）は底部が平らな浅いもので口縁部をひねり出して片口をつくっている。（51）は小型の鉄鉢かもしれない。下半を欠失する。（50）は碗状のものである。円面硯（181）は脚台部片で裾の径25.1センチメートルを計測する。短い脚柱部には方形の透し穴を密に入れる。なお、L区では上面の破片が出土している。盤は底面から緩やかに立ち上る口縁部をもつもの（179）と屈曲して上方へ立ち上がる口縁部をもつもの（180）がある。口径はいずれも約27センチメートルである。短頸壺は2点みられ、狭口壺（170）と広口壺（171）がある。なお、細頸壺（153）は長頸のものか短頸のものか判別し難い。甕は2点みられた（176・177）。（176）はやや尖り気味の底部をもつもので、器高43.5センチメートル、口径21センチメートルを計測する。器表の叩き目は体部上半は右下さがりの方向に、同下半は左下さがりの方向に叩かれている。

以上、これらF区溝出土の土器類は溝内堆積土上層・下層の出土層位により若干の時期はばを認めるべきであろうが、いずれも7世紀後半代の所産であるといえよう。

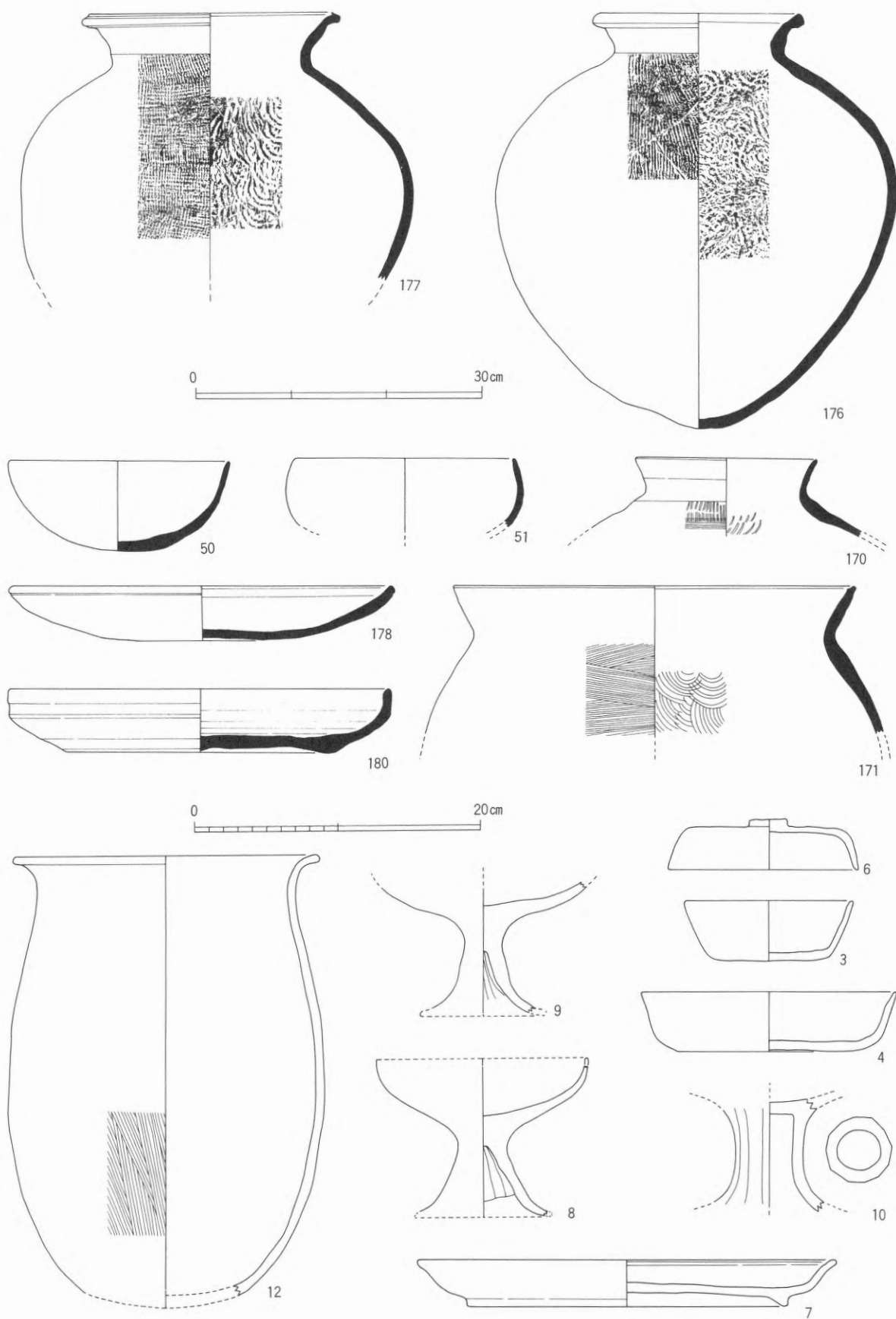
（3） その他の地点出土の土器（図版第49の1・2・5・101～601、第69図）

土師器 口縁端部をわずかに外反させる坏（1）は器表の大部分が剥落しており、調整手法等不明である。坏（2）は口唇部内側に細い凹線状の段もち内面には放射暗文がみられる。口径14.8センチメートルを計る。高坏（10）は盤状の坏部をもつものであるが台裾部とともに欠失している。脚柱は12面の面取りを行う。

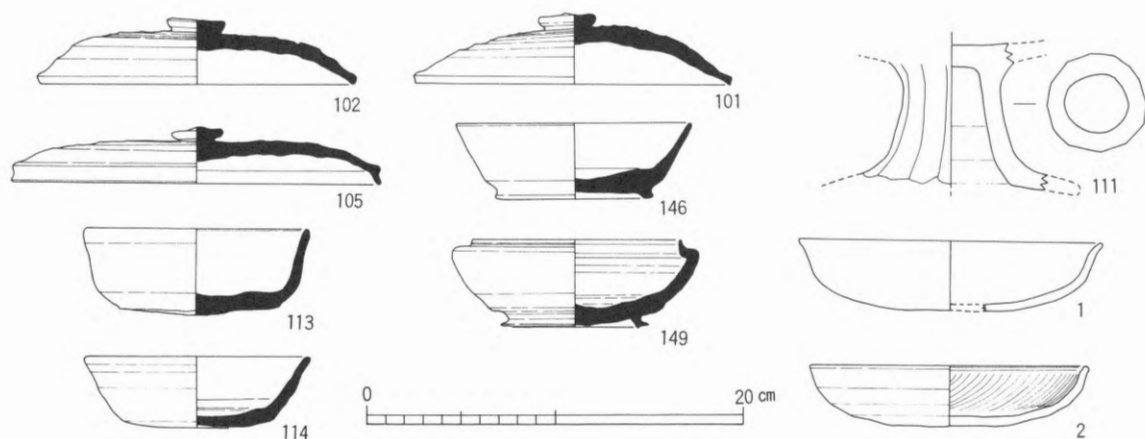
須恵器 坏（113、114）は高台をもたないもので、（113）は口縁部の立ち上りが強い。底外面はヘラ切り痕が顕著である。（114）は口縁部の立ち上りが緩やかで底外面は雑なヘラ削りが残る。ともに口径12センチメートルを計る。高台をもつ（146）は肉厚つの底部から直線的に外方へひらく口縁部をもつ。口径13センチメートルである。坏蓋（101・102・103）はいずれも大型坏の蓋で、ともに口縁部内面には返りがみられない。（101・102）は口縁径16.5センチメートル、（105）は19.5センチメートルを計測する。（149）は合子と報告例のある土器で肩部を体部の上端をもち直立する短い口縁部と高台をもつもので、口径11.1センチメートル、器高4.8センチメートルを計る。高台の形態から7世紀後半のものであろう。



第67图 西国分庵寺 F区沟6出土須惠器实测图



第68図 西国分廃寺 F区溝6出土須恵器・土師器実測図



第69図 西国分廃寺 各地区出土須恵器・土師器実測図
 B区 (No.114) I区 (No.149, 146) L区 (No.102・15・113) M区 (No.11) N区 (No.2)

第3章 ま と め

西国分廃寺の4次にわたる発掘調査の成果については前述のとおりであるが、残念なことに、古代寺院の伽藍としては塔跡だけの確認に終わった。今後は塔跡北部周辺の掘立柱建物群、7世紀後半代の溝跡などをいかに理解して古代寺院の諸施設としてとらえていくかが課題である。

このように、塔跡のみの確認で伽藍配置、寺域等も決め手に欠く結果となったが、断片的な遺構・遺物の資料ではあるがJ～L区で検出された溝14とこれに含まれていた瓦類と土器類から西国分廃寺の伽藍と盛衰が推定される。塔跡の北東部で検出されたこの溝14はそのまま南へ延びるものとみられ、塔の東12メートル付近をとおり、再び西へ曲がってB区の溝1あるいは溝2へとつらなるものと推定される。そして、このJ～L区より鴟尾片3点出土している。また、鬼瓦片と思われる資料もJ区から出土している。さらに4次にわたる調査によって発見した軒瓦総数54点の出土地点を調べてみると、塔跡が13点J区が23点・K区が5点、その他地区が13点となり、塔跡を除けばJ・K区が圧倒的である。

以上、軒瓦の分布等から金堂の位置を推定すれば、J・K区近くに、すなわち、塔の北に建立された可能性が最も高い。しかし、C地区の調査によって、金堂基壇の一部さえ検出されなかったということは、後世の削平によって跡かたもなく消失したものと考えざるを得ない。また、溝16は塔北約45メートル付近で西へ折れ、また塔南40メートル±3メートルの溝1・2につらなるものとすれば、この間85±3メートルの南北幅が主要伽藍区域として想定できるのである。

なお、溝16の埋没の時期は出土土器から8世紀初め頃と推定できる、塔跡基壇の修築を考慮に入れた場合、本寺は奈良時代前期（白鳳時代）に創建され奈良時代後期に再建もしくは改修され、平安時代以降は廃絶したものと考えられる。

註

- (1) 紀の川の支流貴志川左岸、和歌山県那賀郡貴志川町丸栖字北山にある。丸栖廃寺ともいう。塔心礎は残存する。現在までに発掘調査はなされていないが軒瓦が数点採集されている。参考文献・和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所編『特別展・紀伊国、奈良・平安時代の生活と文化』昭和52年10月 P.13 同編『紀伊風土記の丘年報第5号』昭和53年3月、P.15 図7の45・48-50、P.31図23の46・49 奈良国立博物館編『飛鳥白鳳期の古瓦』昭和45年11月、No106・107
- (2) 貴志川の右岸、那賀郡桃山町最上字小林にあり、塔心礎、礎石の一部が残存している。未調査。参考文献 和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所編『特別展・紀伊国、奈良平安時代の生活と文化』昭和52年10月、P.8、P.14、同編『紀伊風土記の丘年報 第5号』P.15、図7の45、47 P.31 図23の45 45'。
- (3) 里廃寺ともよばれる。和歌山市の東北端に位置し、和泉国から紀伊国に入る峠の一つ、雄山峠を下ったところにある。ここは古代の交通の要路で、雄山峠から遠く熊野へ至る熊野参詣道と大和国から紀の川北岸を西へ走る南海道とがちょうど交差する地点にあたる。この廃寺は未調査であるが、塔心礎が現存し、瓦類もいくつか採集され紹介されている。奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』昭和45年11月 No.234-1、同-2。和歌山県立紀伊風土記の丘資料館編『特別展、紀伊国、奈良平安時代の生活と文化』昭和52年10月、P.8の1、同館編『紀伊風土記の丘年報第5号』昭和53年3月、P.16図8の52、53、P.31図23の52。
- (4) 紀伊薬師寺とも、薬師壇廃寺とも呼ばれる。国鉄阪和線紀伊駅北東約1km、和歌山市上野薬師壇にある。薬師寺式伽藍配置をもつ。東西両塔と金堂の基壇、礎石が残存。中門跡は昭和42年に発掘調査された。奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』昭和45年11月、No.225の1、同-2、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館編『奈良・平安時代の生活と文化』P.13 同館編『紀伊風土記の丘年報第5号』P.16図8の54
- (5) 日本古文化研究所編『薬師寺伽藍の研究』昭和49年12月復刊 図版16の1 奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』No.158、奈良国立文化財研究所編『平城宮出土軒瓦型式一覧』昭和53年3月、P.5 6121A型式、京都国立博物館『瓦埴図鑑』
- (6) 森郁夫氏のご教示によれば、この6121Aタイプは軒平瓦6641H1とセットになるという。
- (7) 和歌山県下で薬師寺の瓦を出土する寺院址には他に、橋本市古佐田廃寺がある。薬師寺出土軒平瓦6641H1、軒丸瓦6276-Aが採集されている。
- (8) 和歌山県立紀伊風土記の丘資料館編『紀伊風土記の丘年報第5号』昭和53年3月、P.25 図17の126 P.35 図27の126
- (9) 奈良国立文化財研究所、森郁夫氏にご教示を得た。なおこの軒平瓦6710型式は和歌山県日高郡川辺町道成寺から出土している。
- (10) 和歌山県立紀伊風土記の丘資料館編
- (11) 幾何学文鬼板の例としては、高知県比江廃寺の菱形文があるが本例とは相当異なる。奈良国立博物館編『飛鳥白鳳の古瓦』
- (12) 例えば塔跡出土瓦のうち任意抽出した平瓦249片中176片(約70.7%)が刻線叩き目、73片(29.3%)が縄叩き目である。
- (13) 任意抽出した刻線叩き目の残る瓦228片の内訳は、A-70片(30.7%)、B-4(1.8)、C-56(24.6)、D-38(16.7)、E-23(10.1)、F-6(2.6)、G-2(0.9)、H-11(4.8)、I-6(2.6)、J-3(1.3)、K-2(0.9)、L-3(1.3)、M-2(0.9)、N-2(0.9)である。

圖 版

図版第一 紀伊国分寺・西国分廃寺周辺の平野部



紀ノ川南よりの



1 紀伊国分寺周辺航空垂直写真



2 発掘前の近景



1 金堂址正面階段部

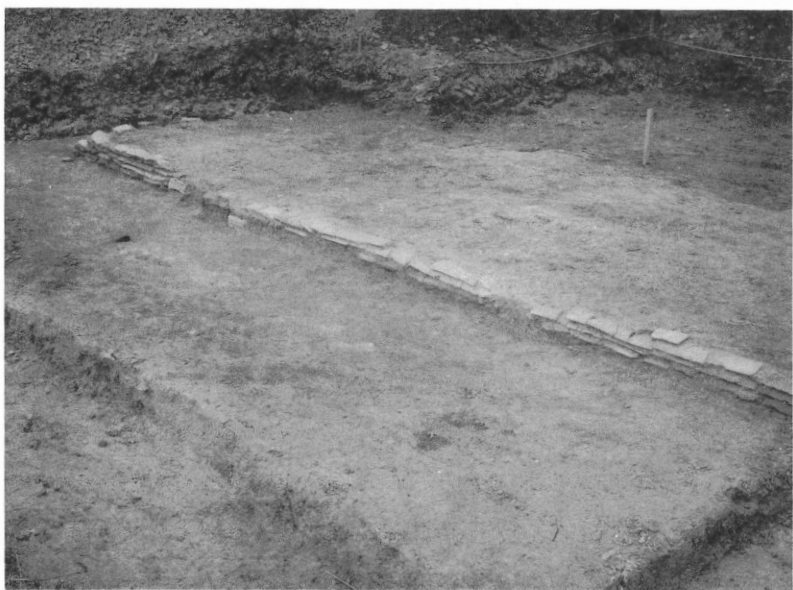


2 同 上

1 金堂址
基壇北西隅



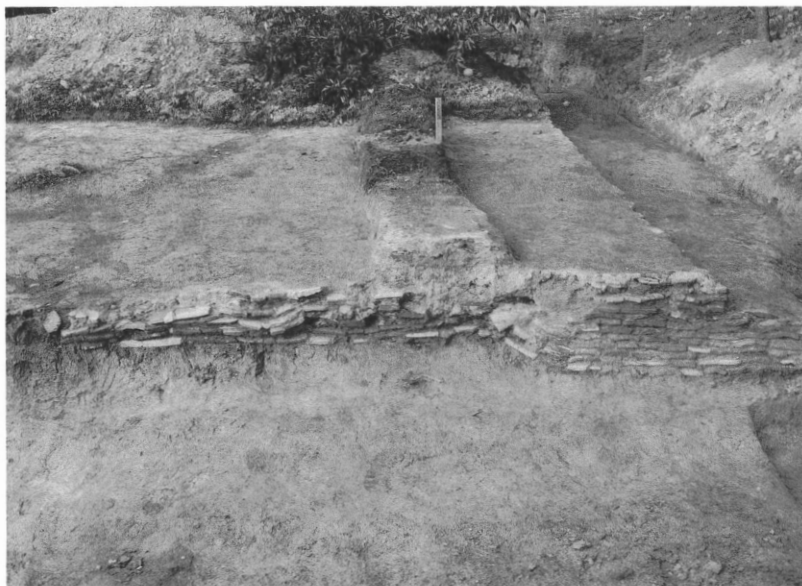
2 同 西面



3 同 北面



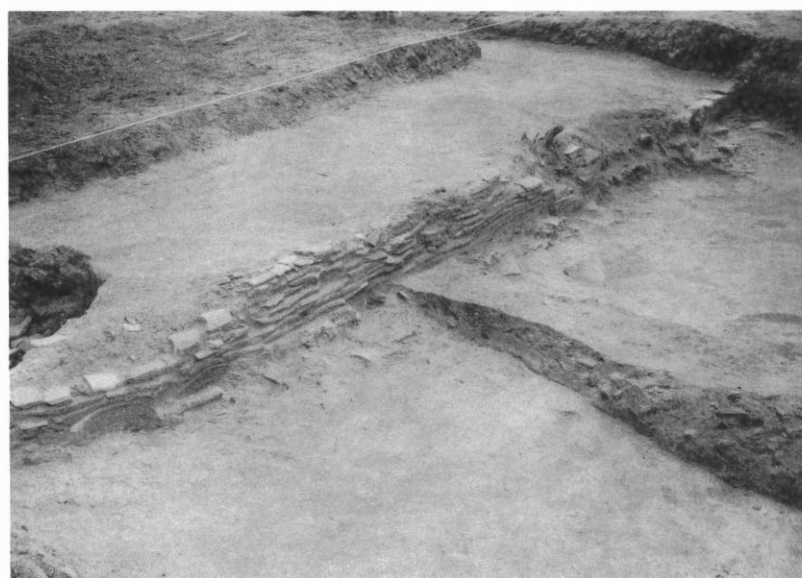
1 金堂址
基壇南面



2 同 上



3 同 東面



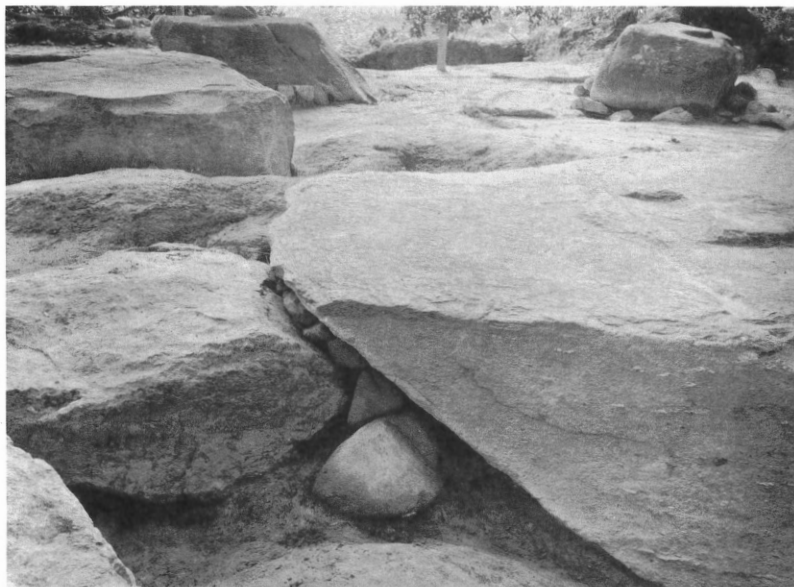


1 塔址全景（西より）

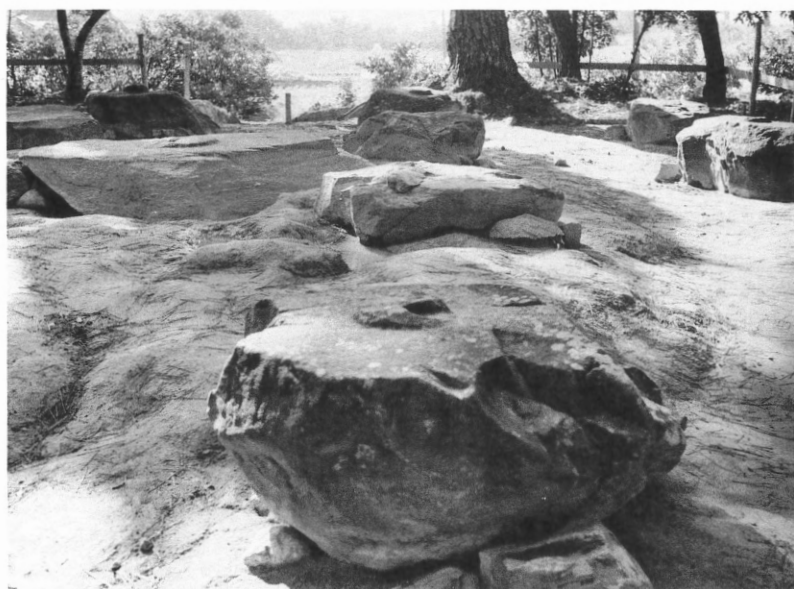


2 同上（北より）

1 塔址心礎
細部



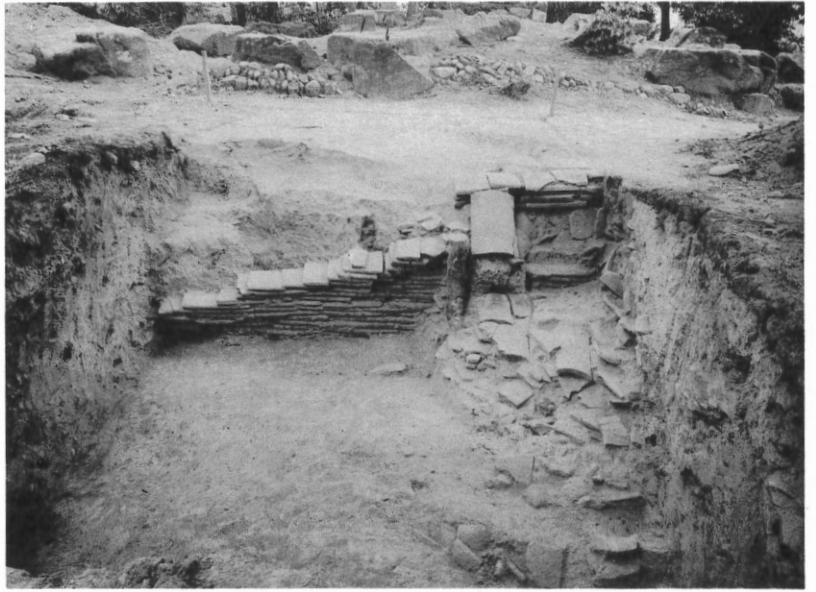
2 同 礎石残存状態



3 同 礎石細部



1 塔址北階段部
試掘状態



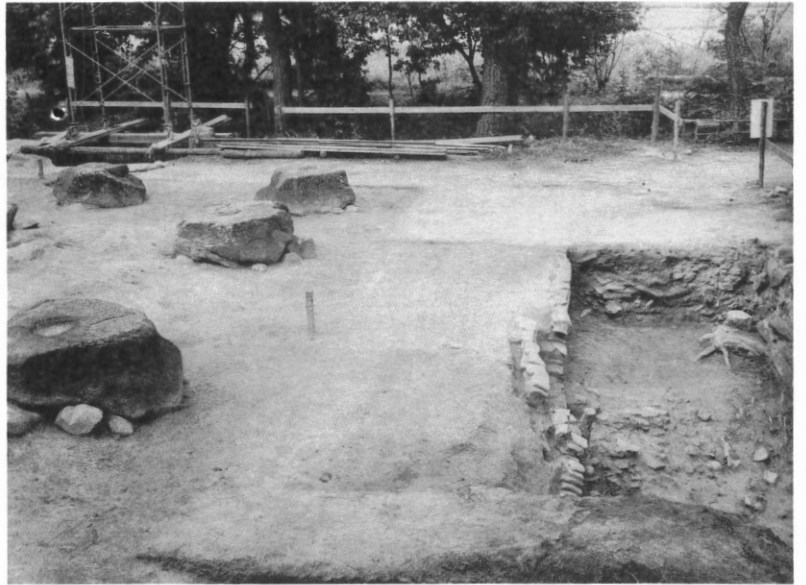
2 同上 細部



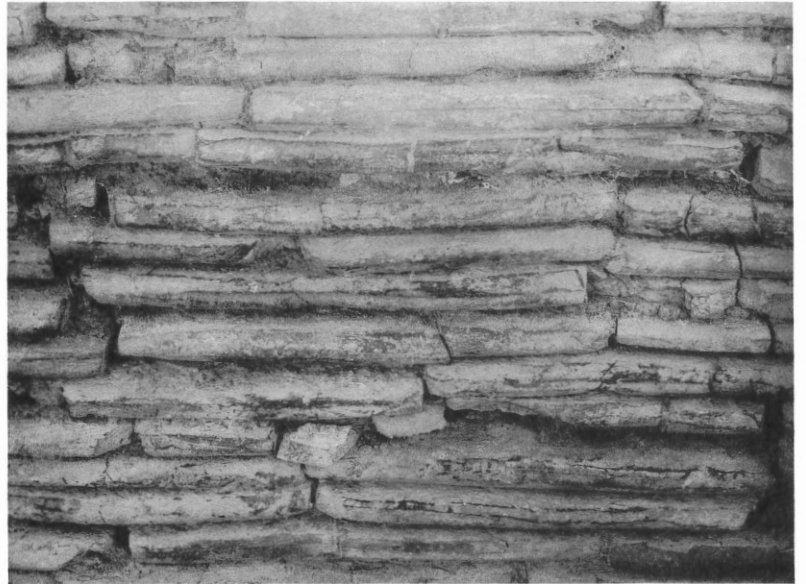
3 同 北階段部
全景



1 塔址北階段部と
基壇縁



2 同上 瓦積細部



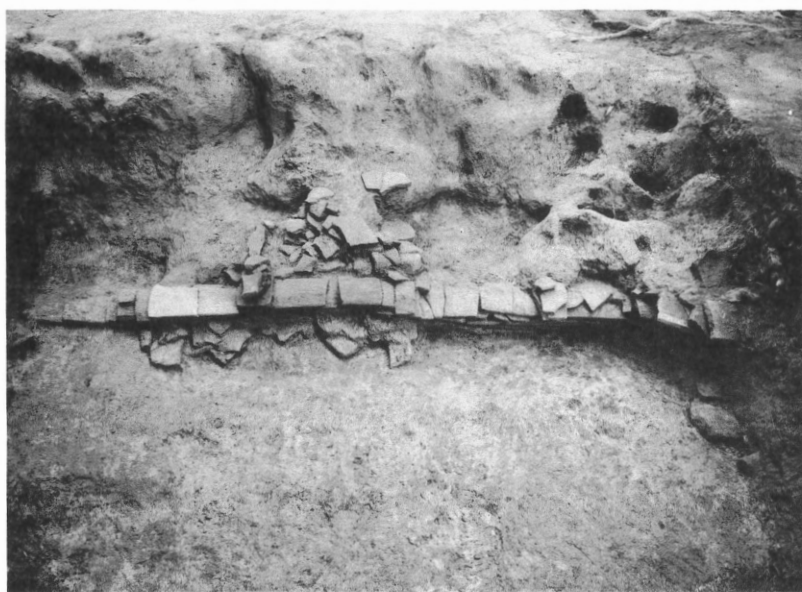
3 同上 階段瓦積細部



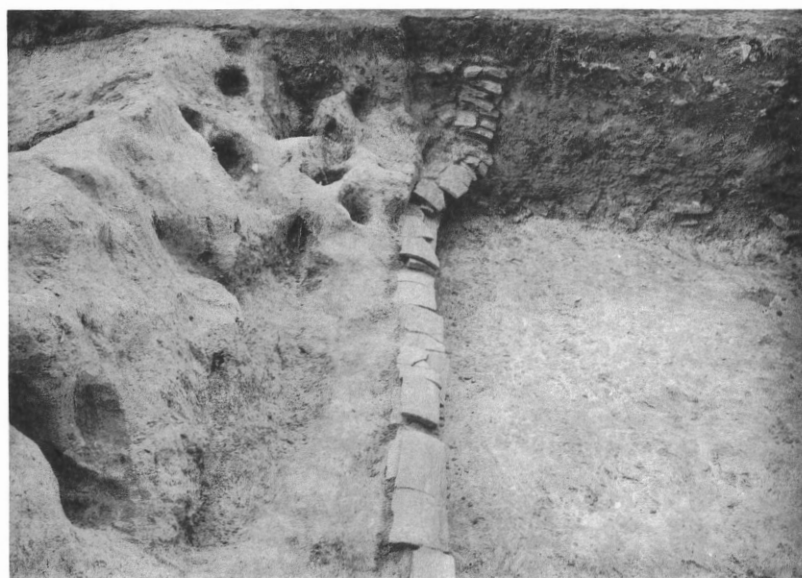
1 塔址基壇縁南面



2 同 西面



3 同 上



1 塔址北階段部
瓦堆積状態



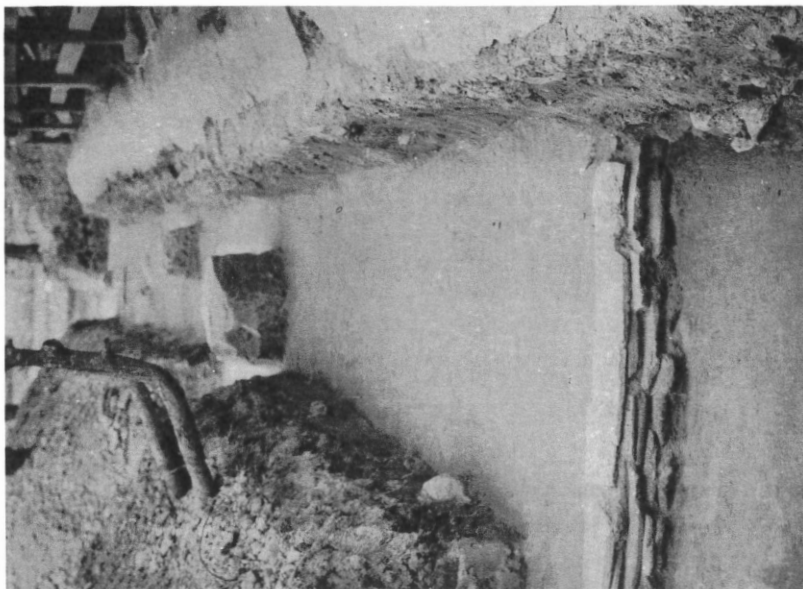
2 同上 細部



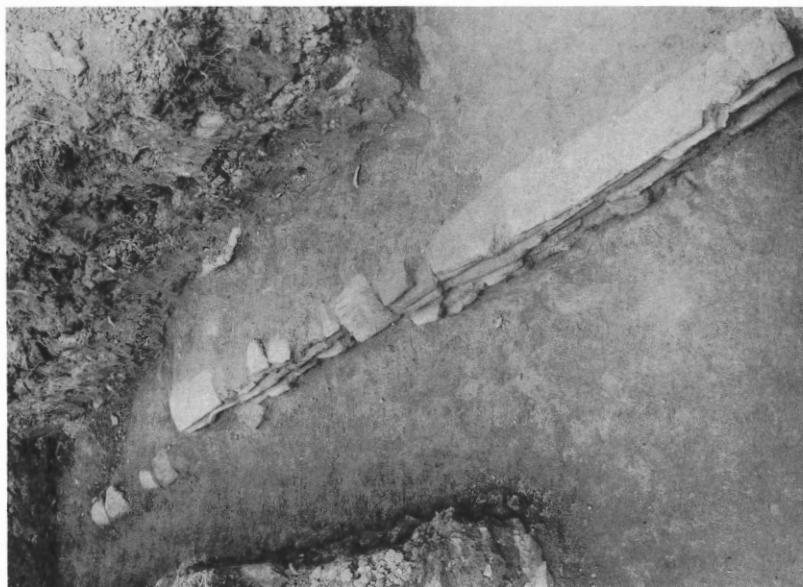
3 同 上



1 講堂址基壇縁南面

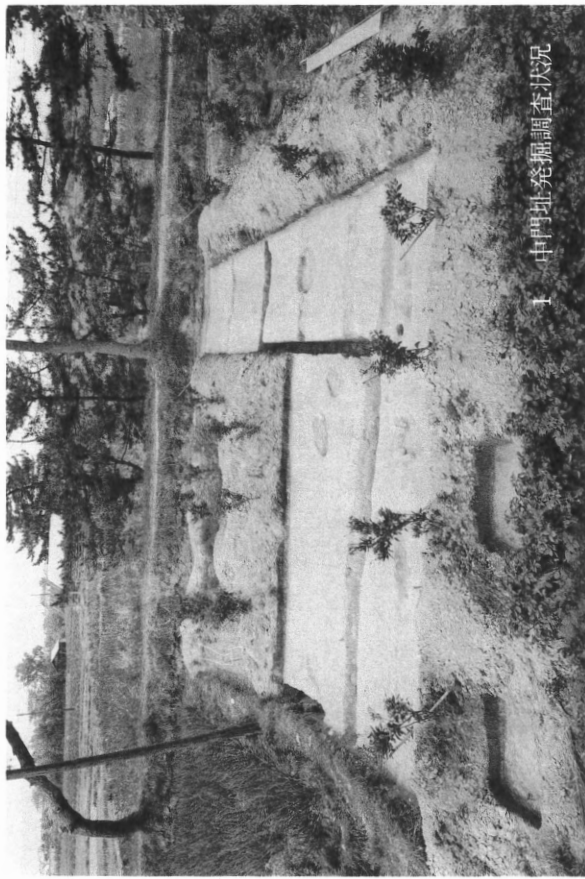


2 同上

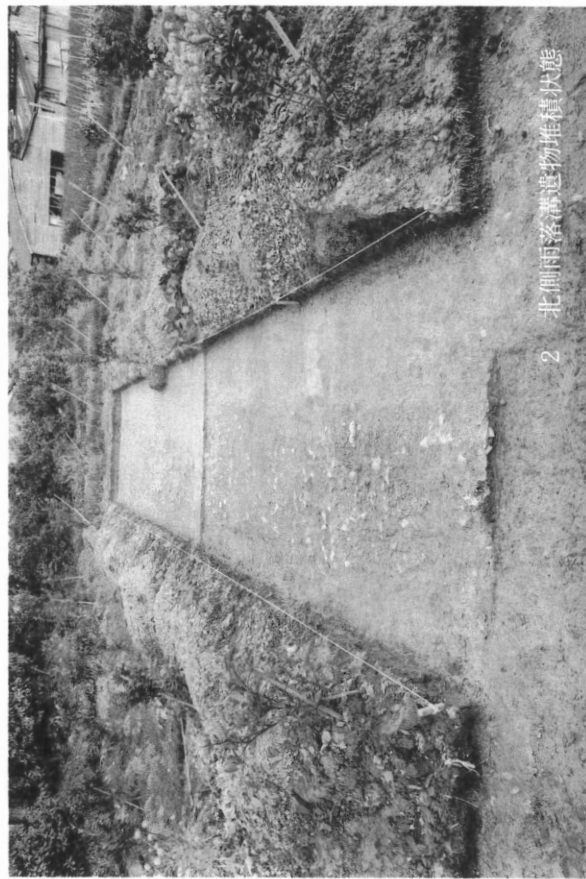


3 同 鬼瓦
出土状態





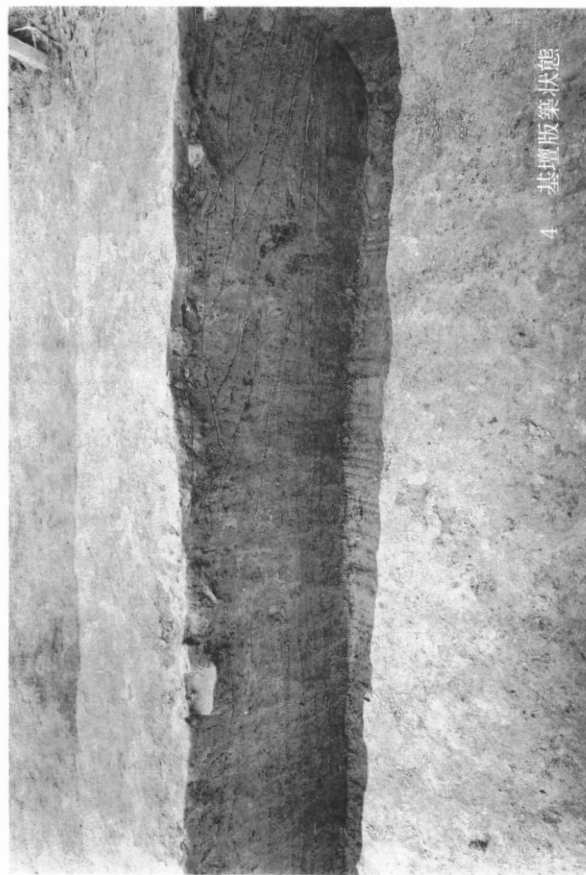
1 中門址発掘調査状況



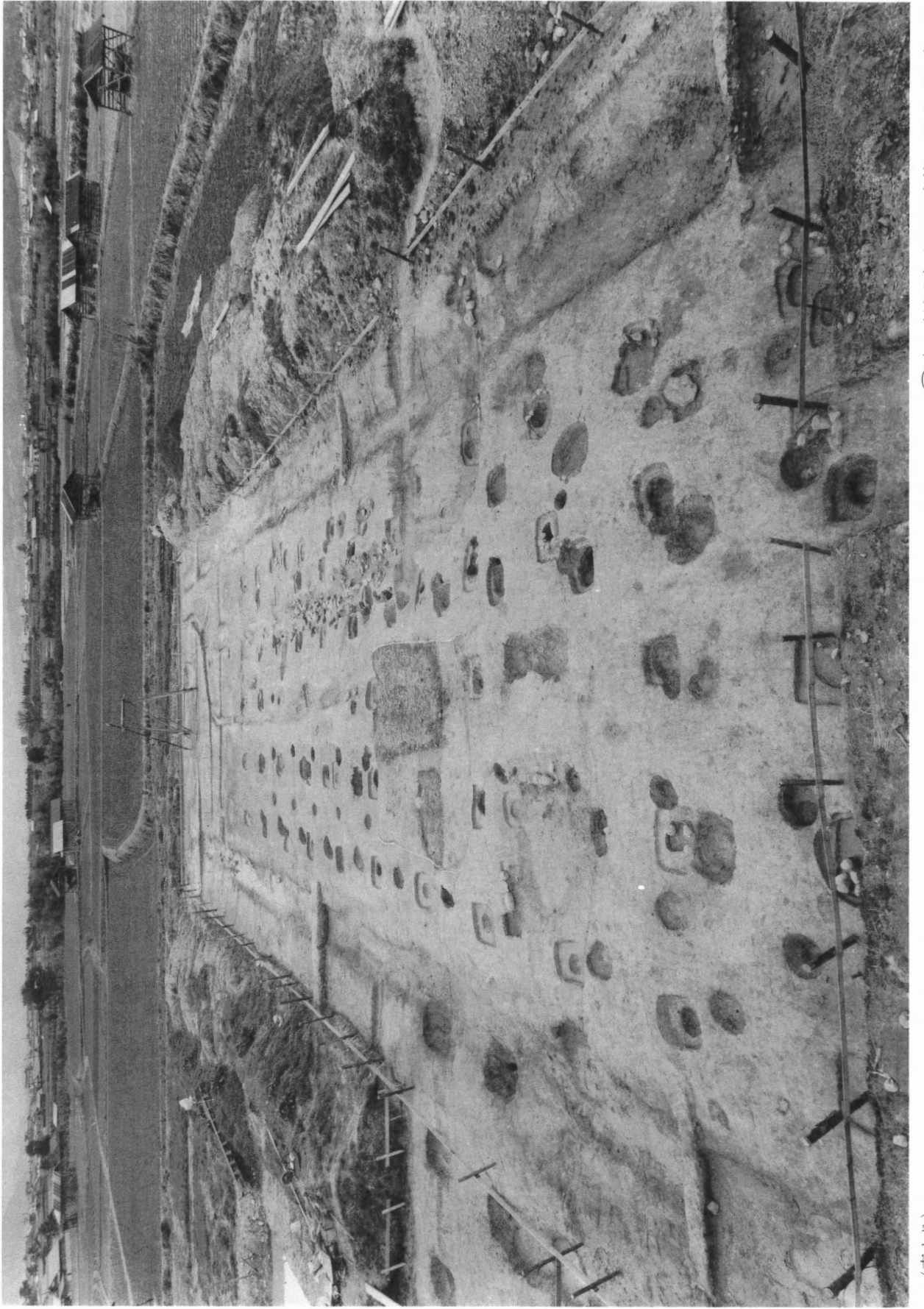
2 北側雨落溝遺物堆積状態



3 南側雨落溝瓦堆積状態



4 基礎版築状態





1 僧房址全景 (西より)

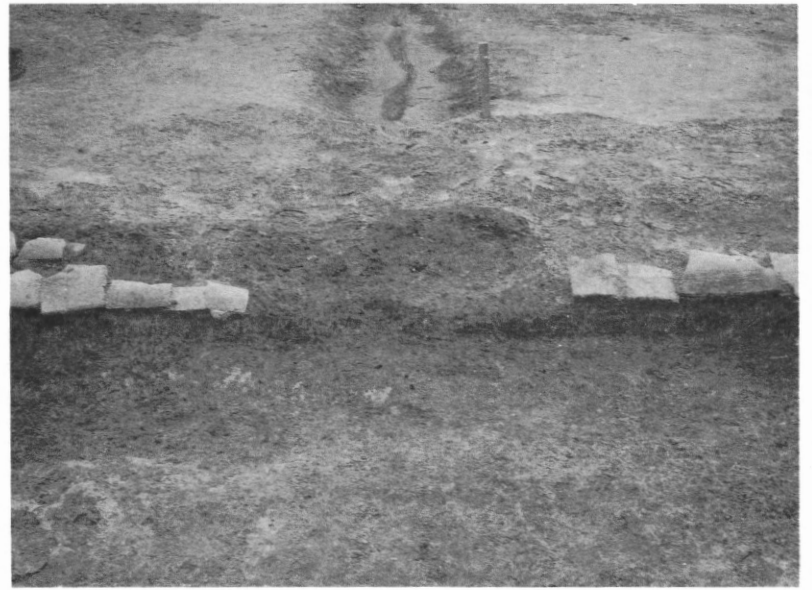


2 同 東部トレンチ状態

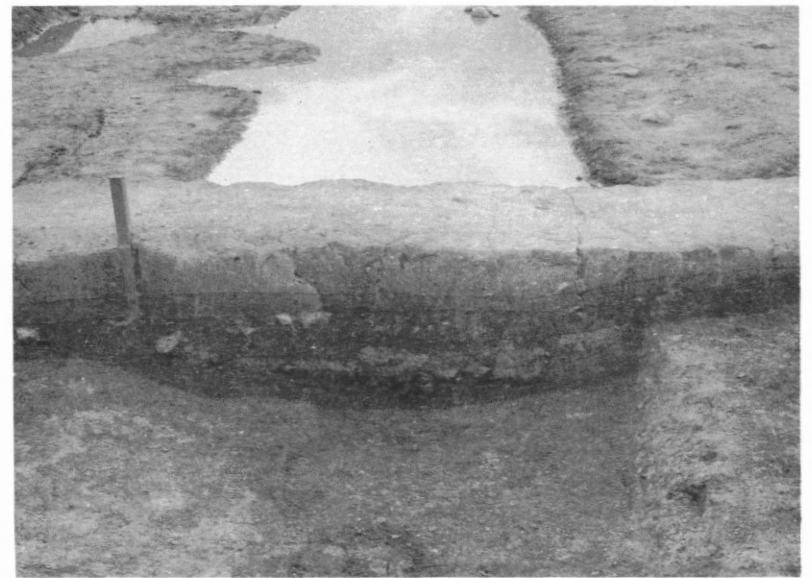
1 僧房北面の
瓦積



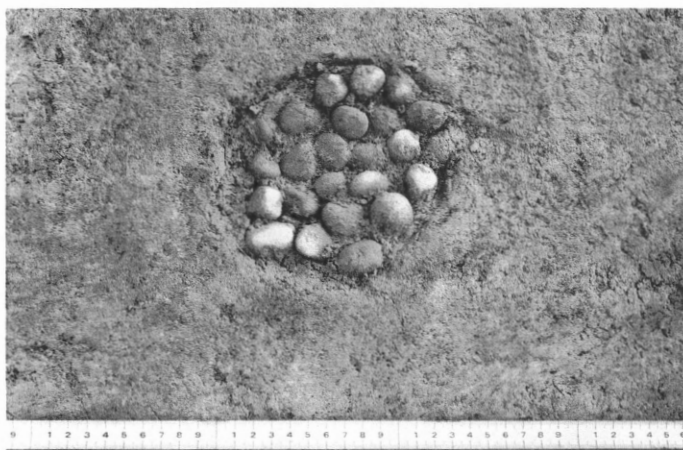
2 同 上



3 同 南側雨落溝の
堆積状態



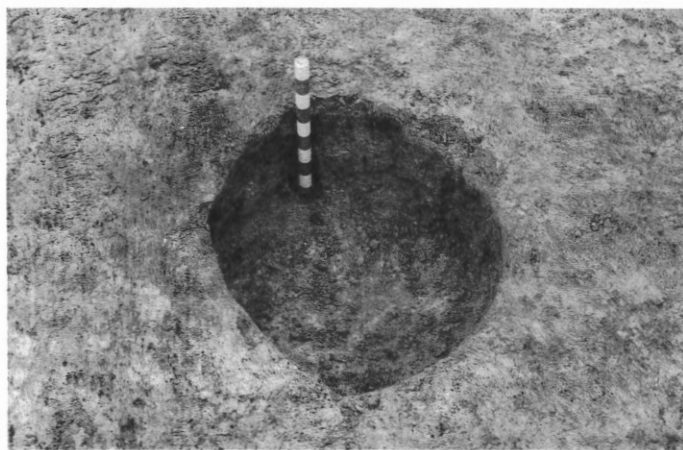
1 延喜通宝埋納状態



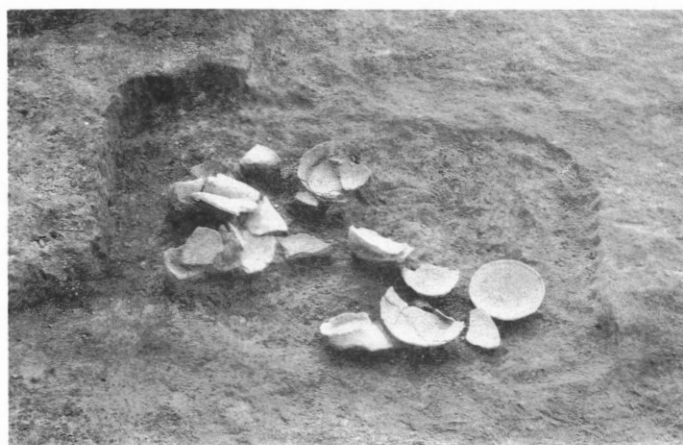
2 同 上



3 同 埋納穴

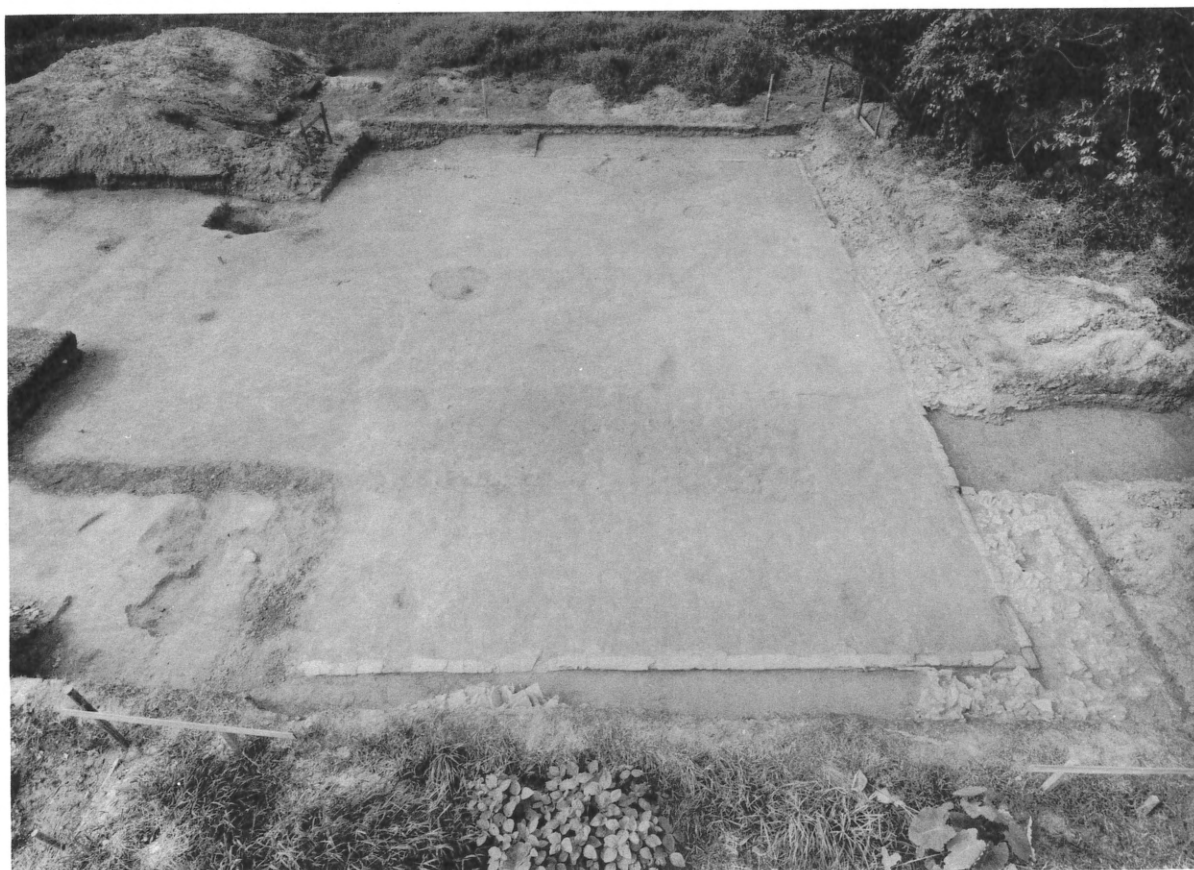


4 土壙内土器出土状態





1 鐘楼址全景（西より）



2 同上（南より）

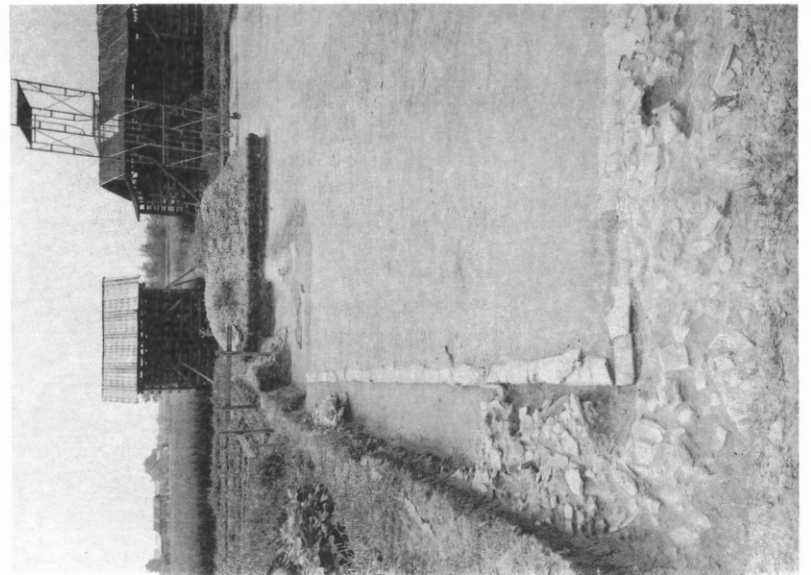
1 鐘楼址東面基壇縁瓦積



2 同 北東隅



3 同 南西隅



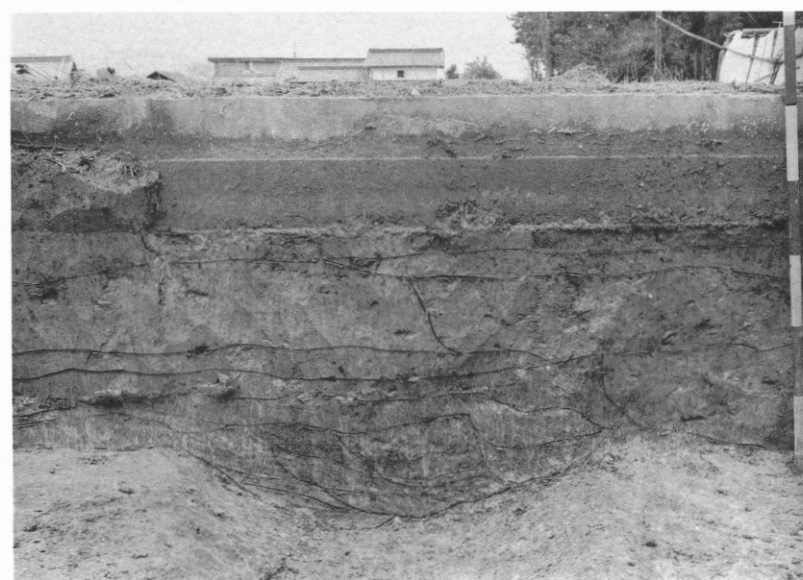
1 回廊址南西隅

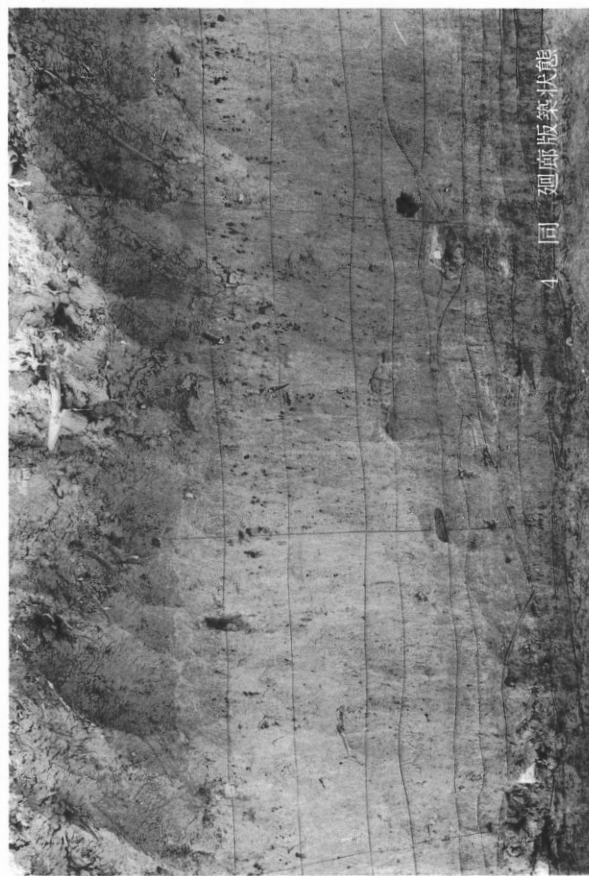
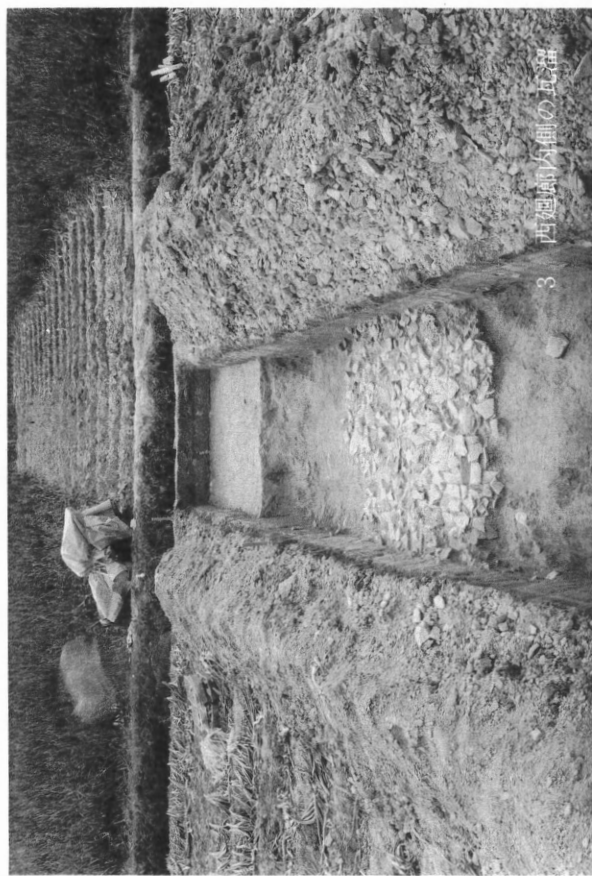
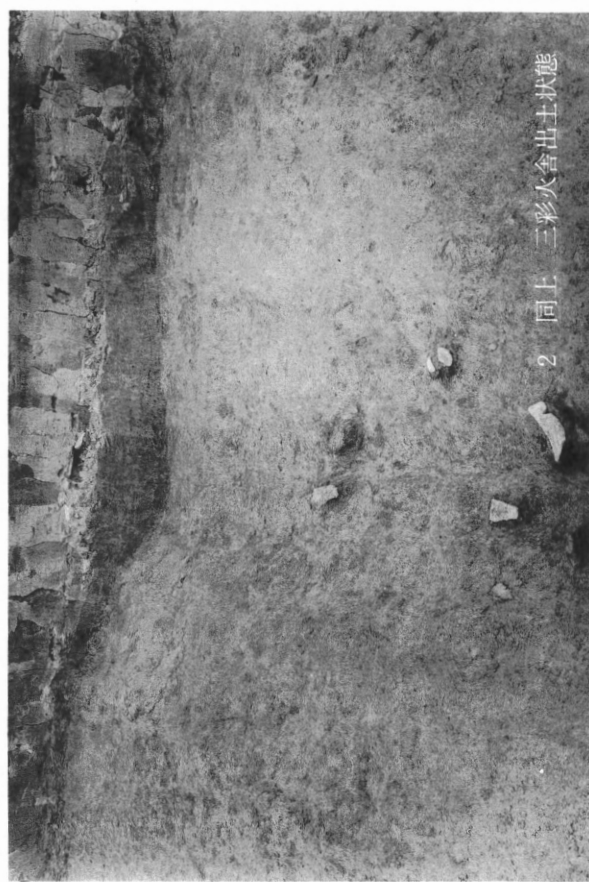
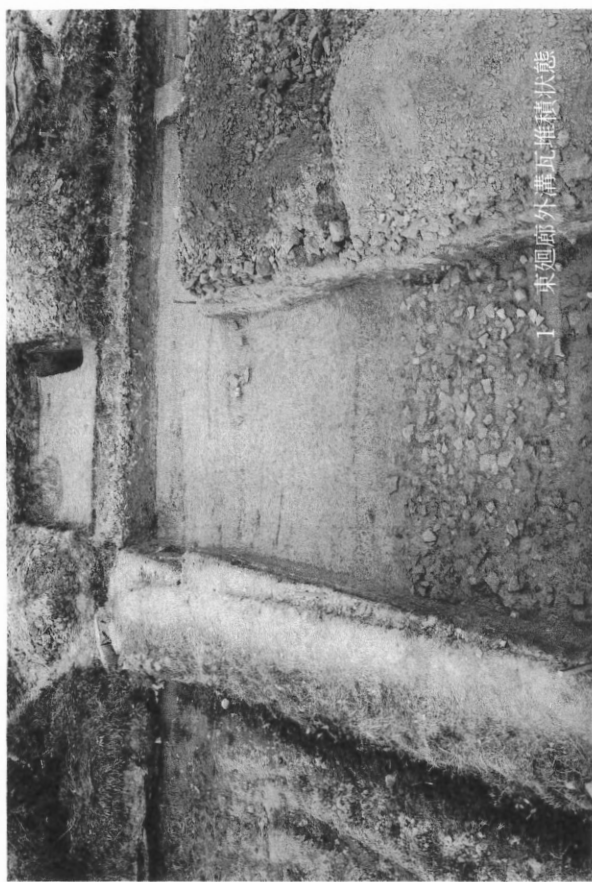


2 同 北東隅



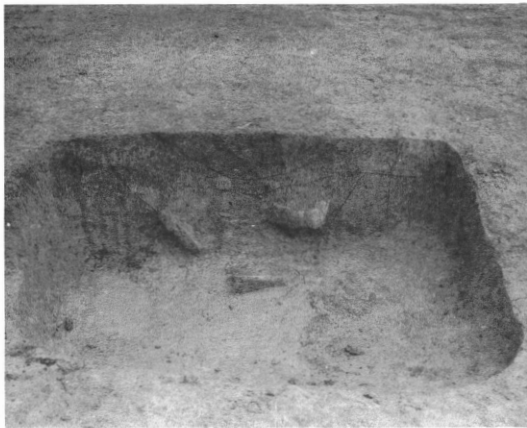
3 同上 溝堆積状態



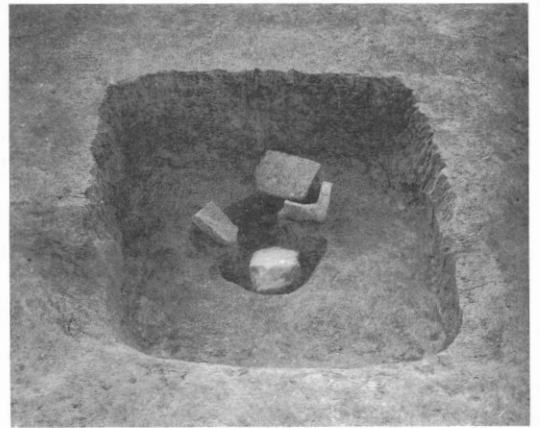




1 軒廊全景（僧房側より）



2 掘立柱址細部



3 同 左

1 南門址調査
トレンチ



2 西側寺域調査
トレンチ



3 北西部寺域調査
トレンチ



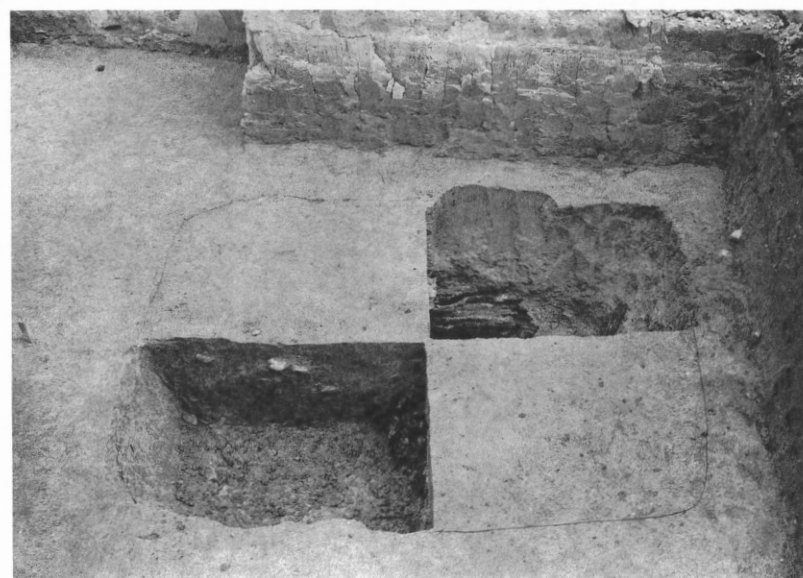
1 埋木土壙
北土壙の
検出状態



2 同 北土壙
と南土壙の
調査
(北より)



3 同 南土壙



1 (A-1・a-2)



2 (A-2・a-3)



3 (A-1・a-4)



4 (C・e)



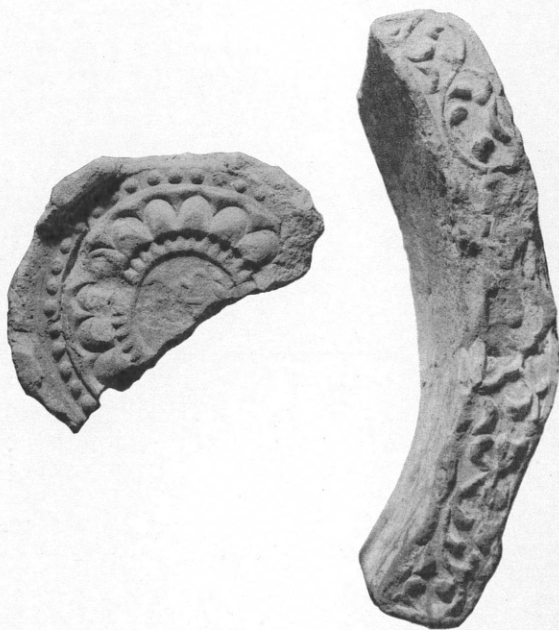
6 (G・I)



5 (F・g・1)



8 (I・I)



7 (H・2・k)





1 (A-3)



2 (B)



3 (D)



4 (E)



5 (F-2)



6 (H-1)



7 (a-1)



11 (f)



8 (b)



12 (h)



9 (c)



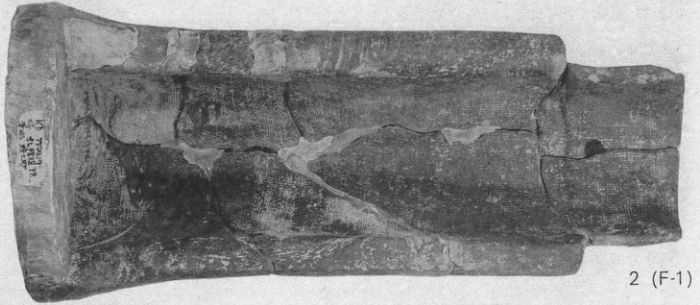
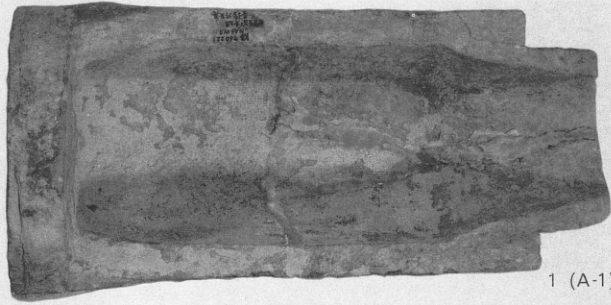
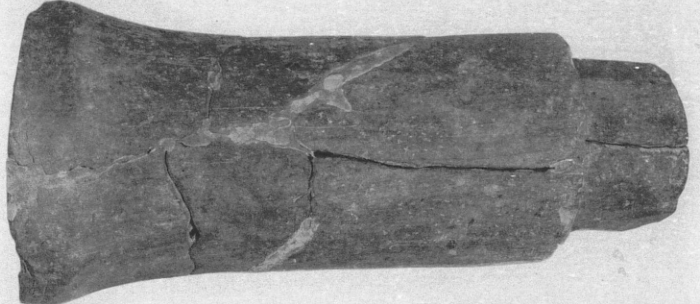
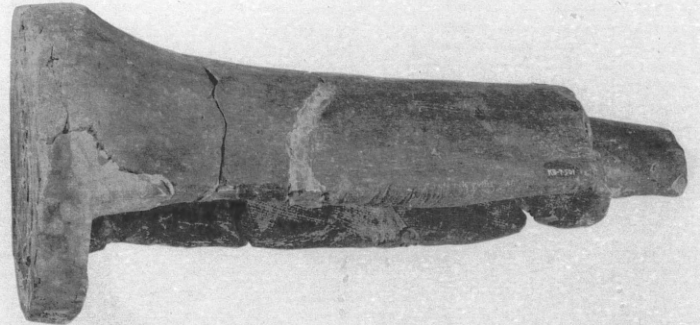
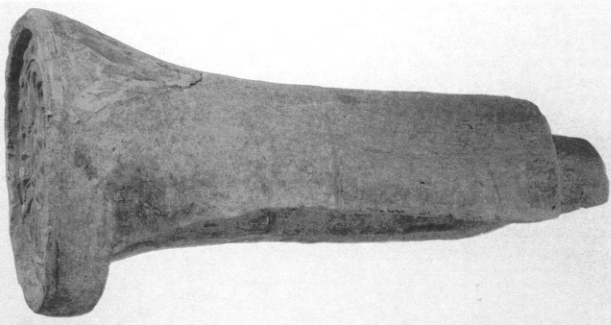
13 (i-1)



10 (d)

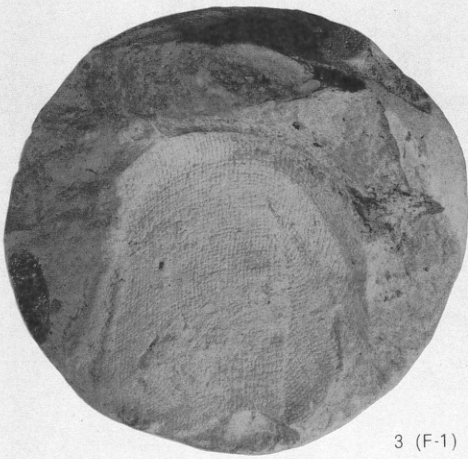


14 (i-2)



1 (A-1)

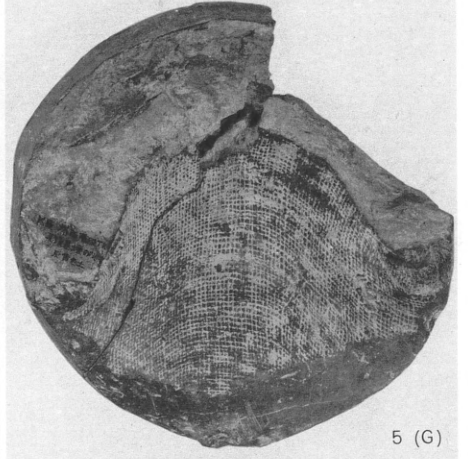
2 (F-1)



3 (F-1)



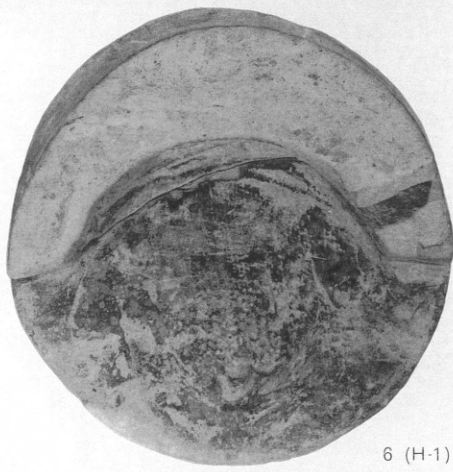
4 (F-2)



5 (G)



KB-7-201
KB-750716
坪面階段TK
35.5cm



6 (H-1)



KB 76015
CU 226 27
30cm

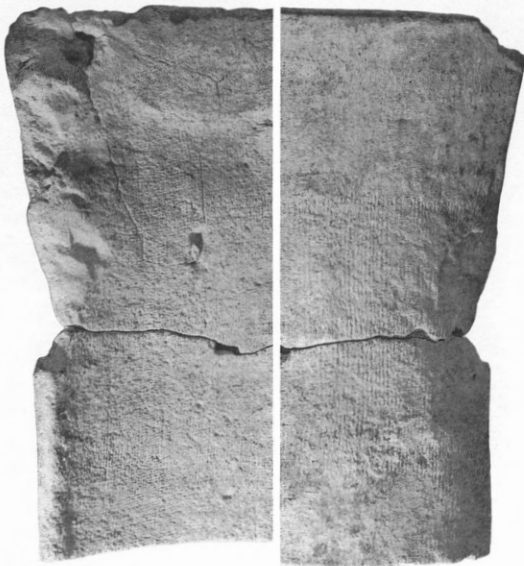
7 (H-2)



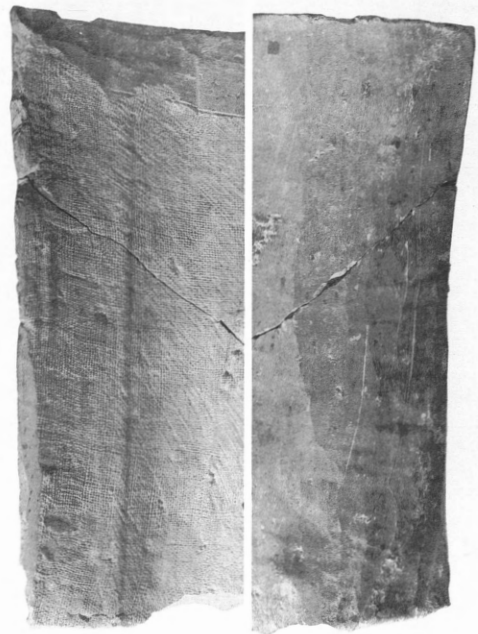
1 (a-2)



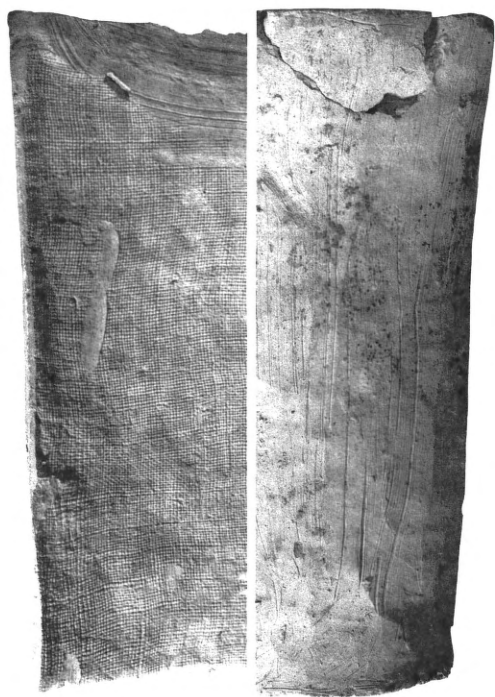
2 (a-3)



3 (a-4)



4 (e)



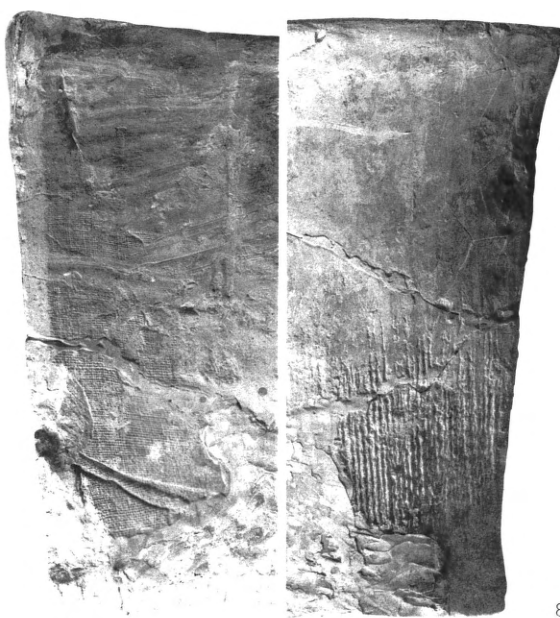
5 (g)



6 (i-2)



7 (h)



8 (k)



1

2



3

4

5



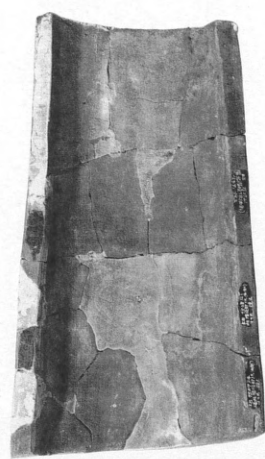
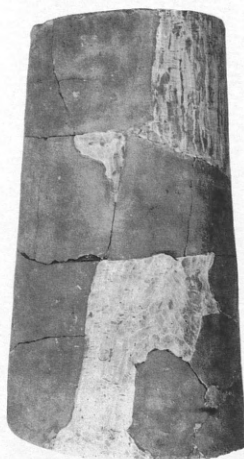
6

7

8



101



103



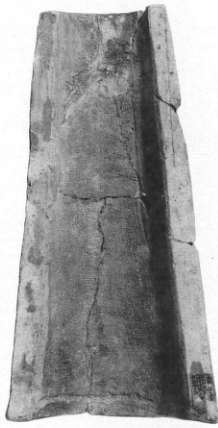
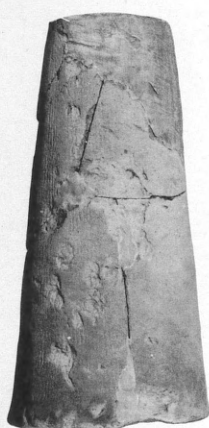
104



107



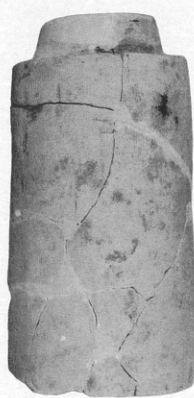
110



105



108



111



106



109



108



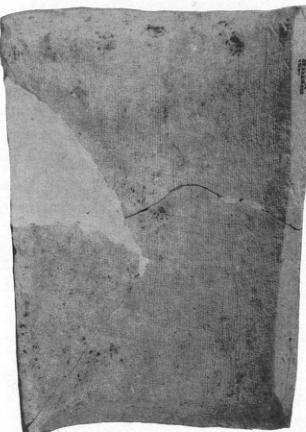
201



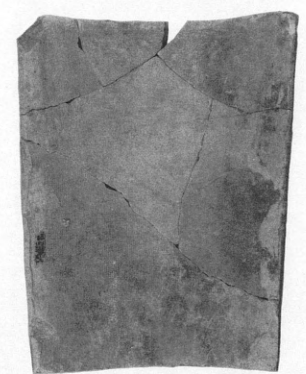
202



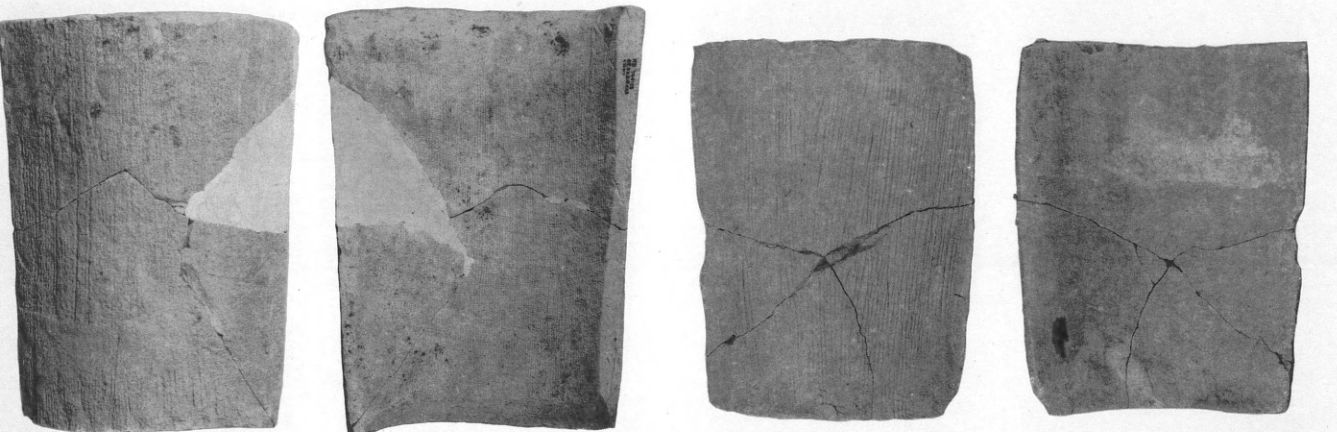
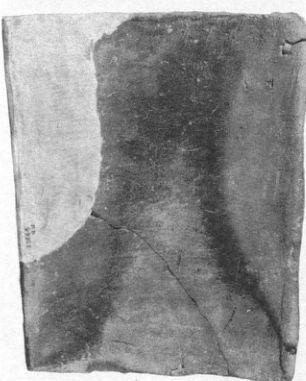
203



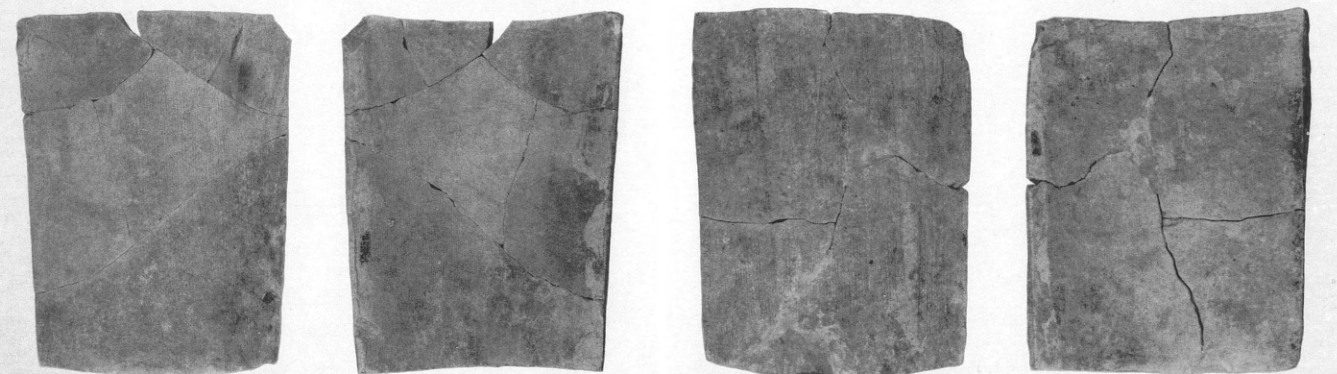
212



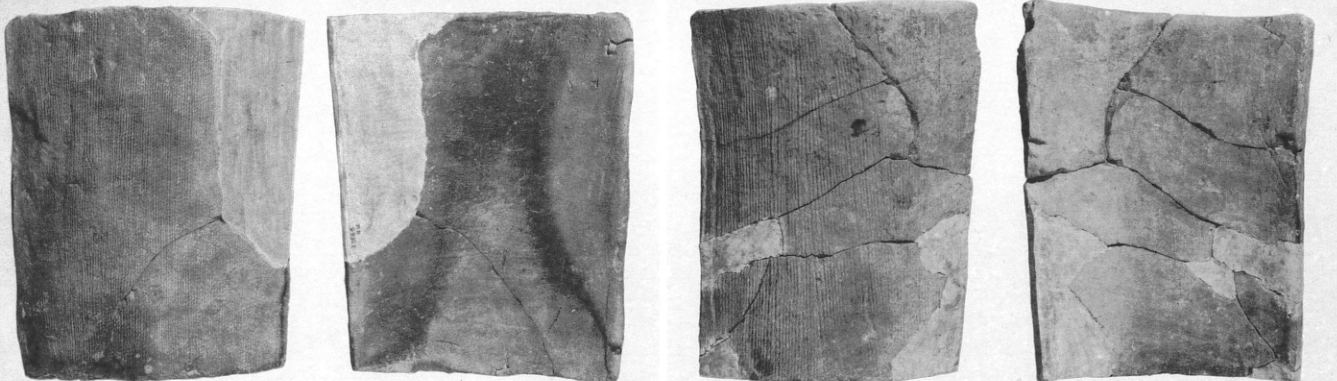
218



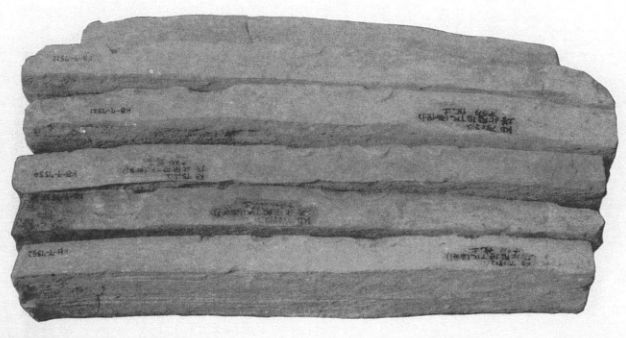
205



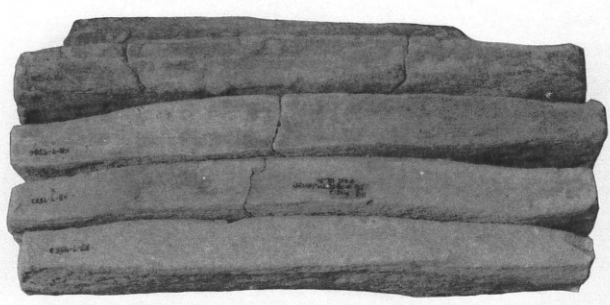
216



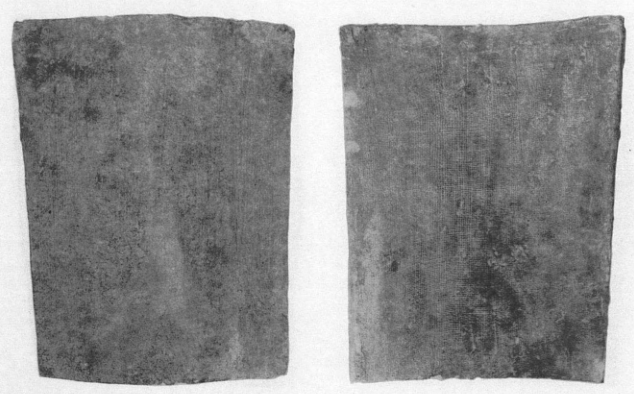
219



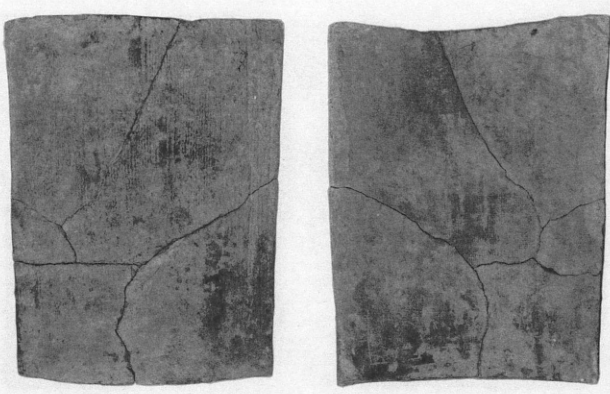
1



2



207



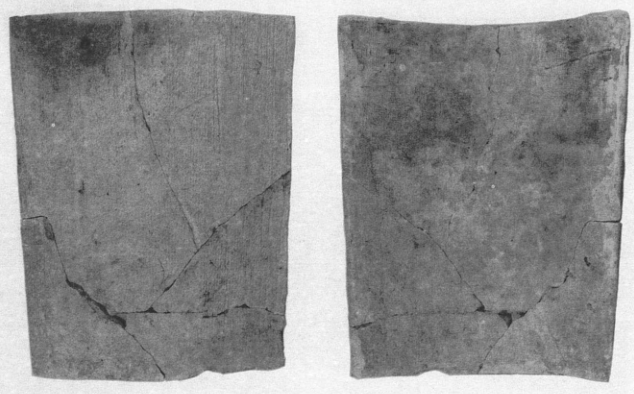
208



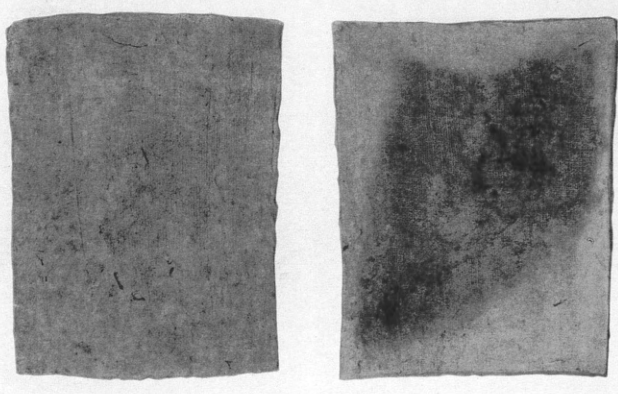
3



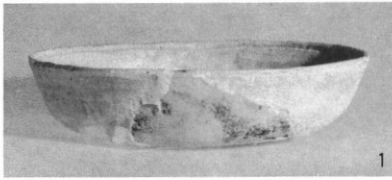
4



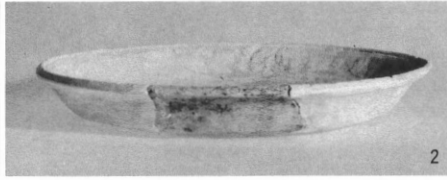
211



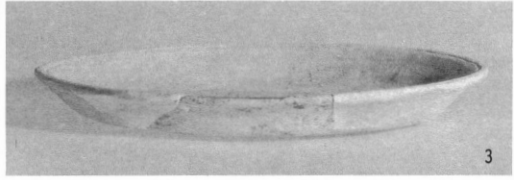
214



1



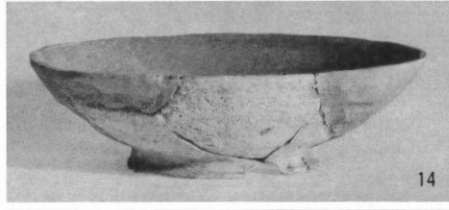
2



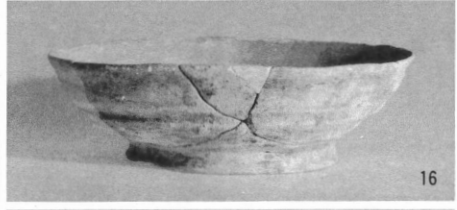
3



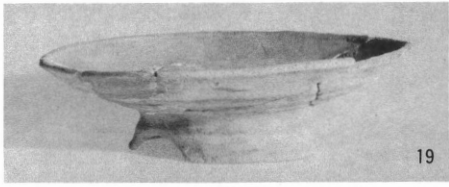
8



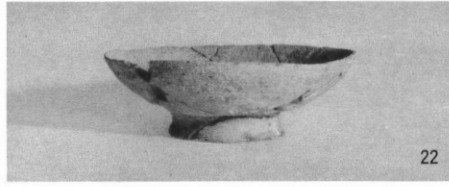
14



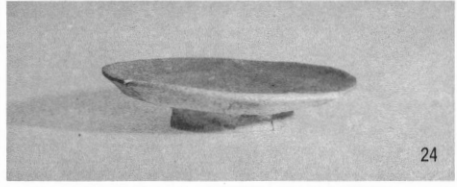
16



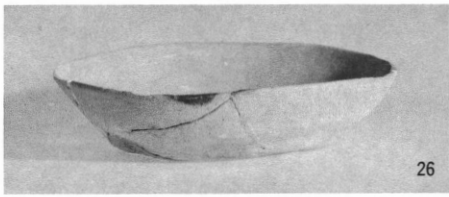
19



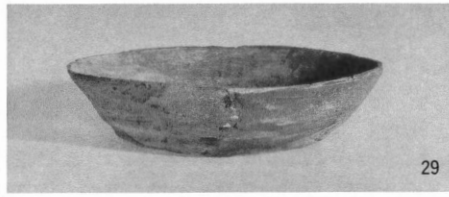
22



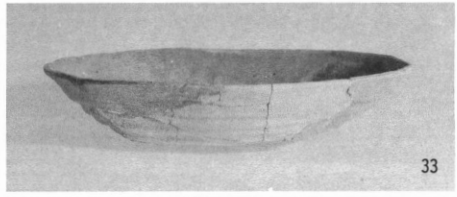
24



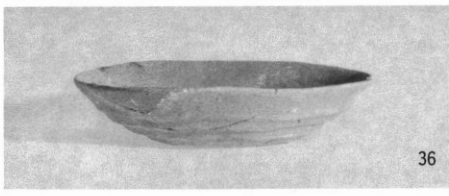
26



29



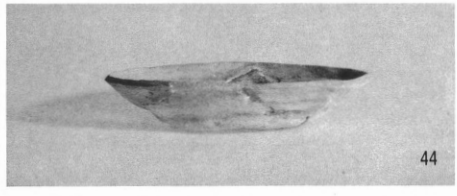
33



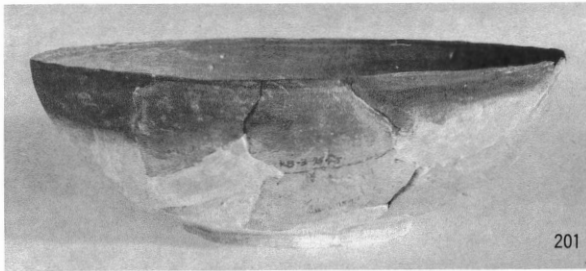
36



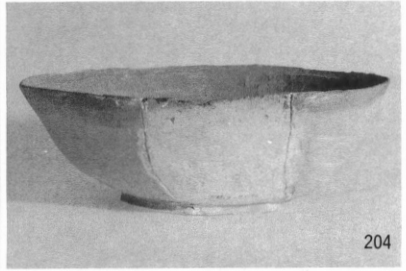
41



44



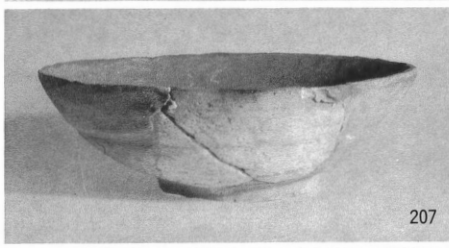
201



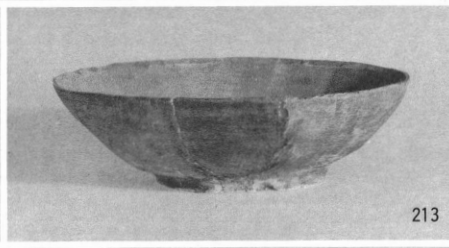
204



206



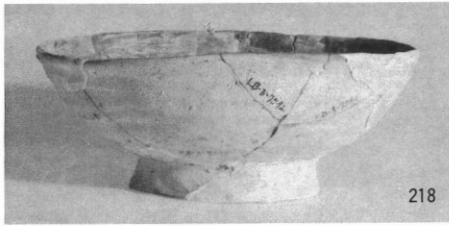
207



213



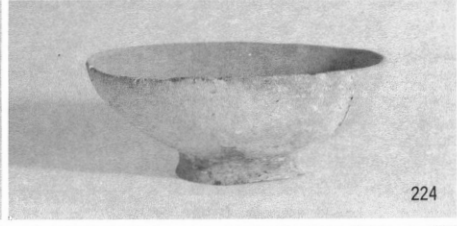
215



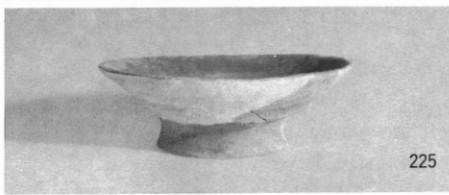
218



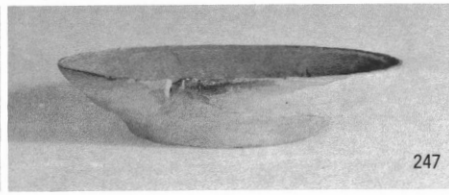
223



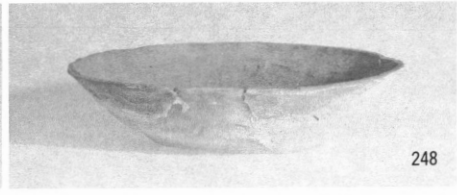
224



225

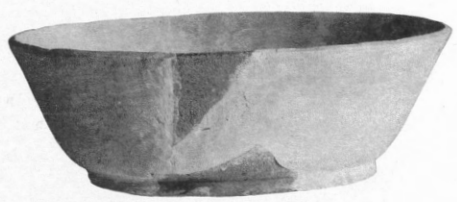


247

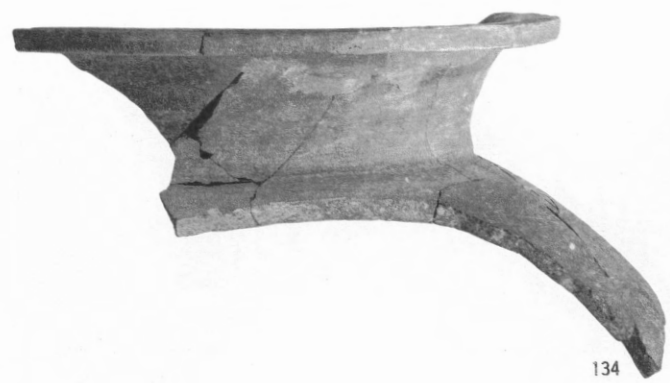


248

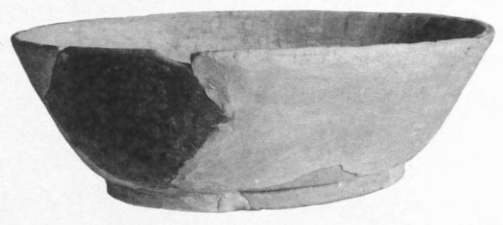
1:4 (1~3) 1:3 (8~248)



107



134



108



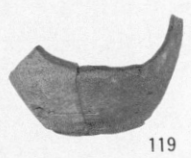
117



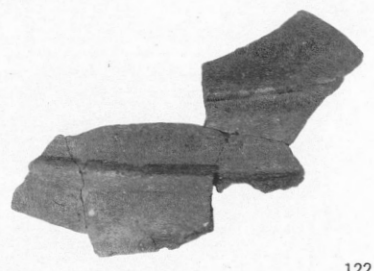
106



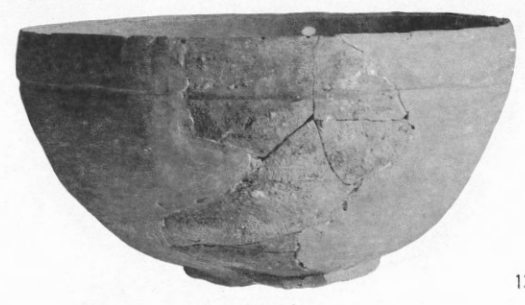
118



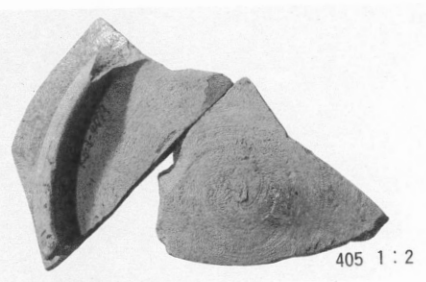
119



122



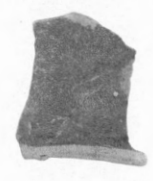
132



405 1:2



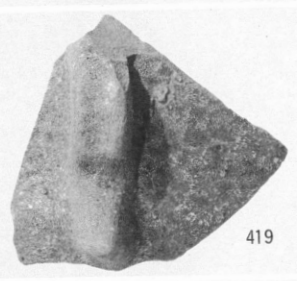
413



416



417



419



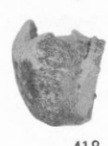
420
1:2



414



415



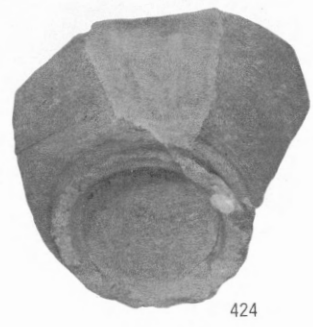
418



423



426
1:2



424



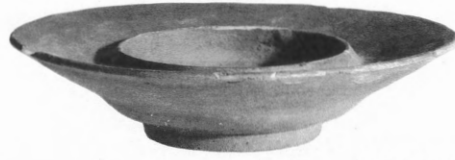
425



301 1 : 2.5



351 1 : 2.5



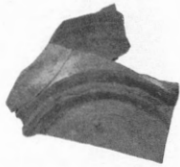
361 1 : 2.5



364 1 : 1



352



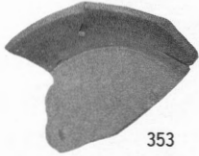
356



360



365



353



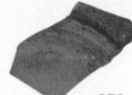
357



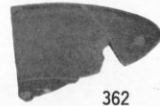
366



354



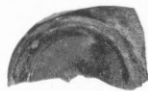
358



362



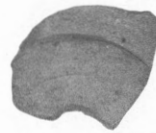
367



355



359



363



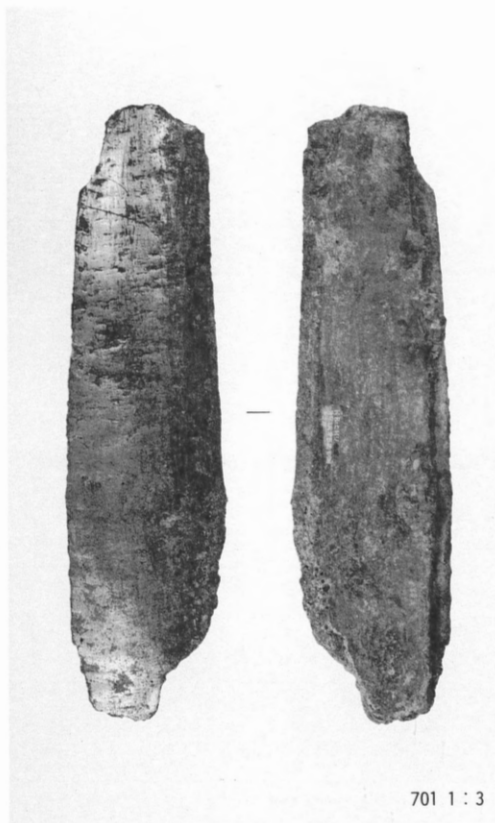
368



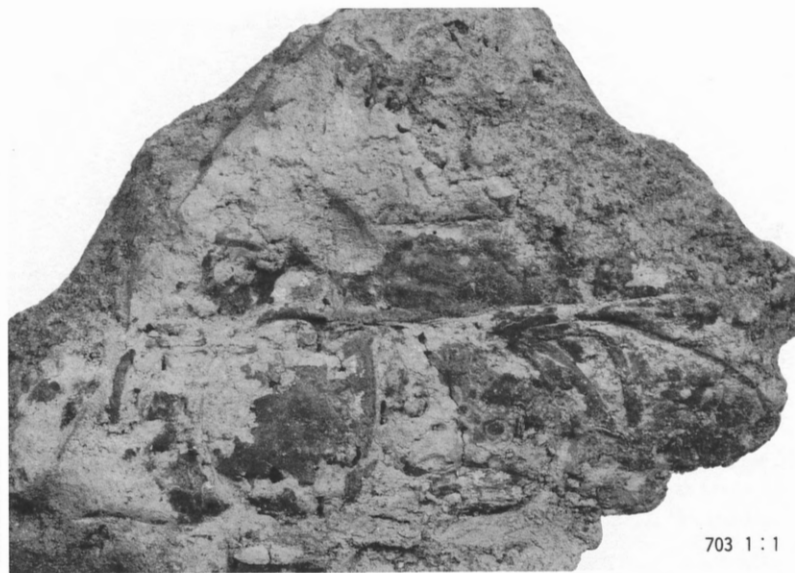
369



501 1 : 2.5



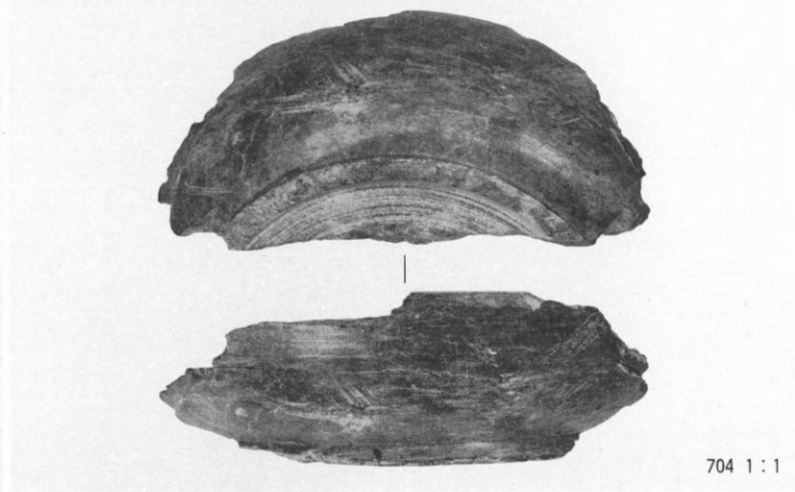
701 1:3



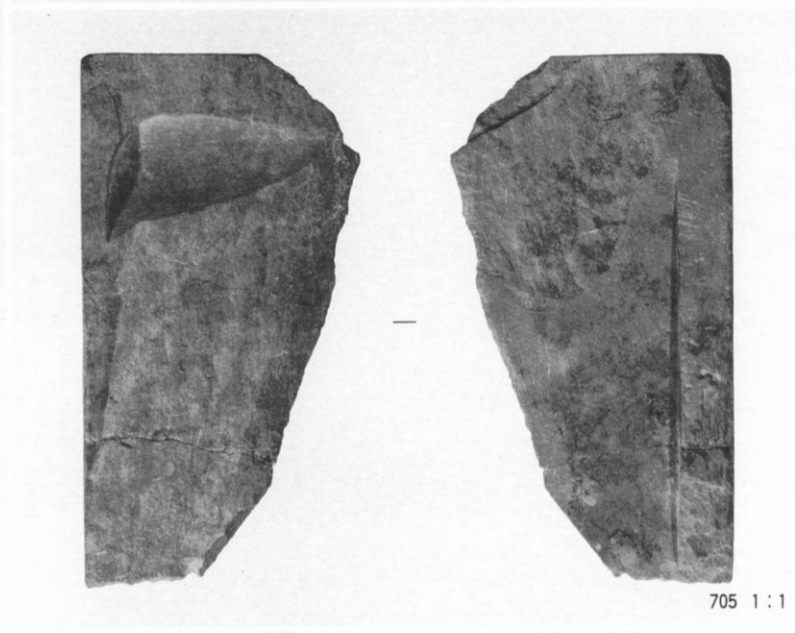
703 1:1



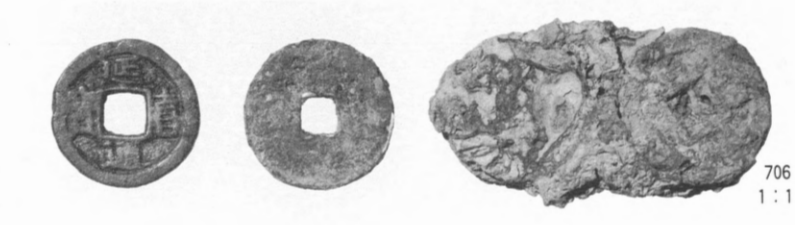
702 1:10



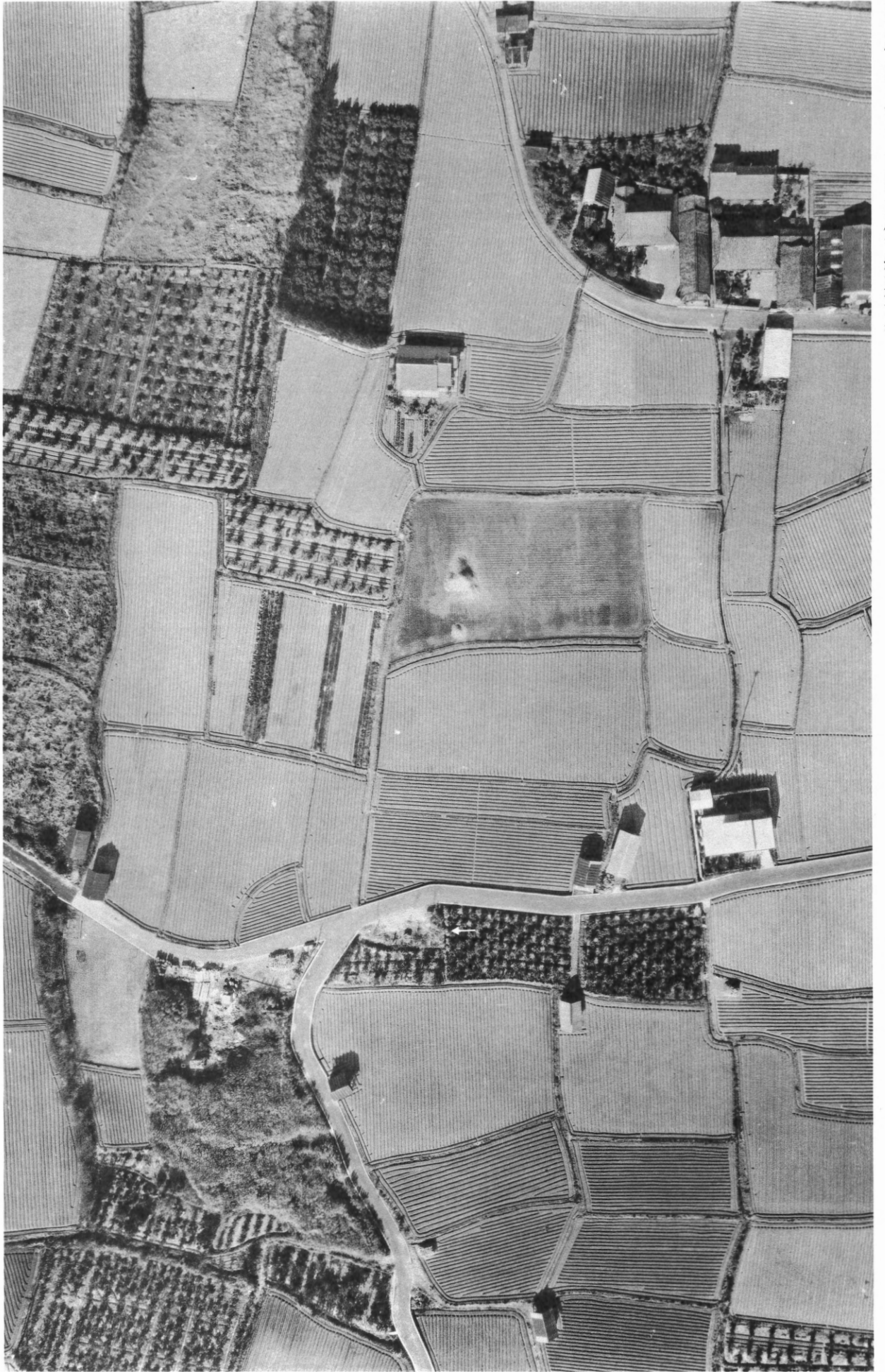
704 1:1



705 1:1



706 1:1



矢印は塔跡



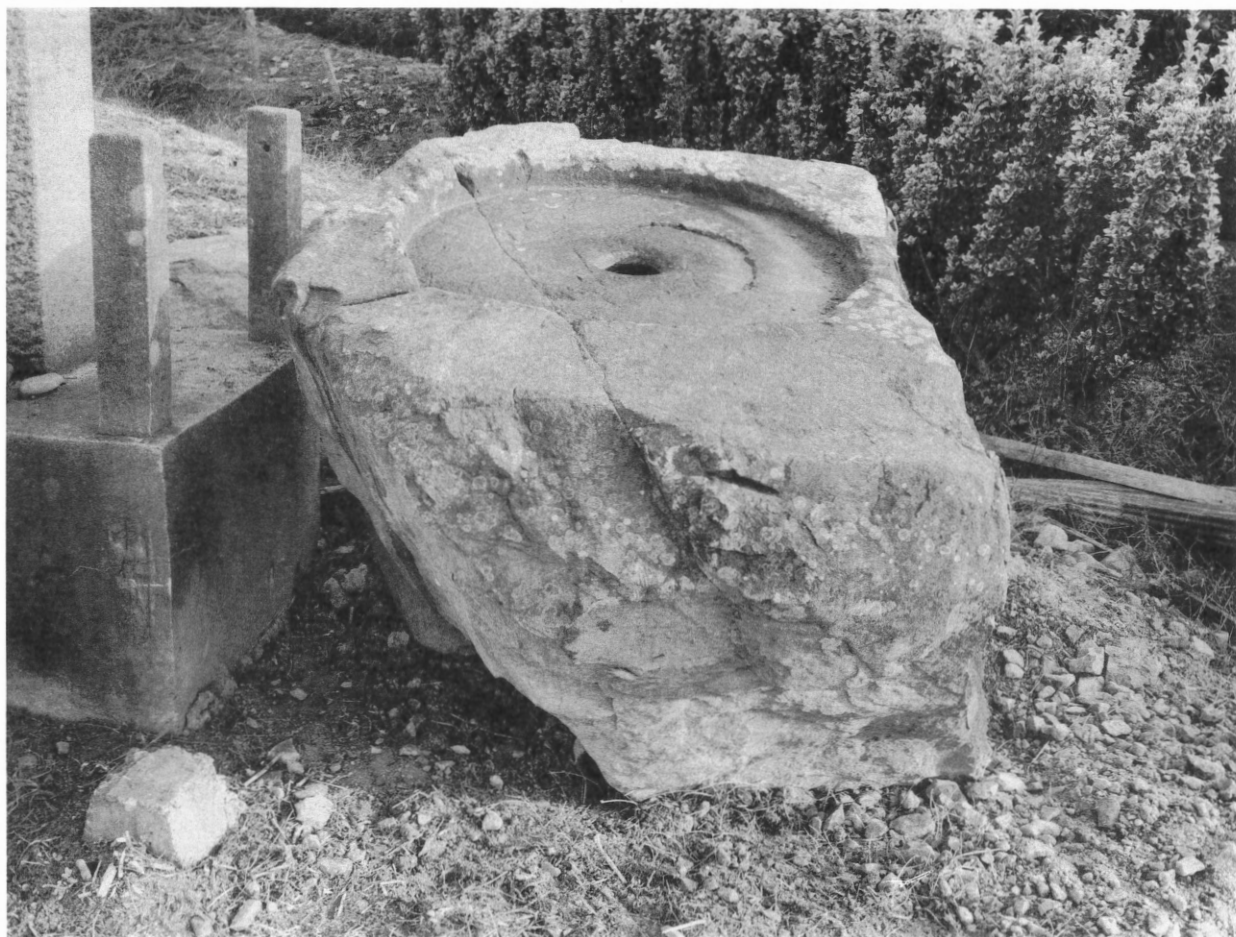
1 塔跡全景



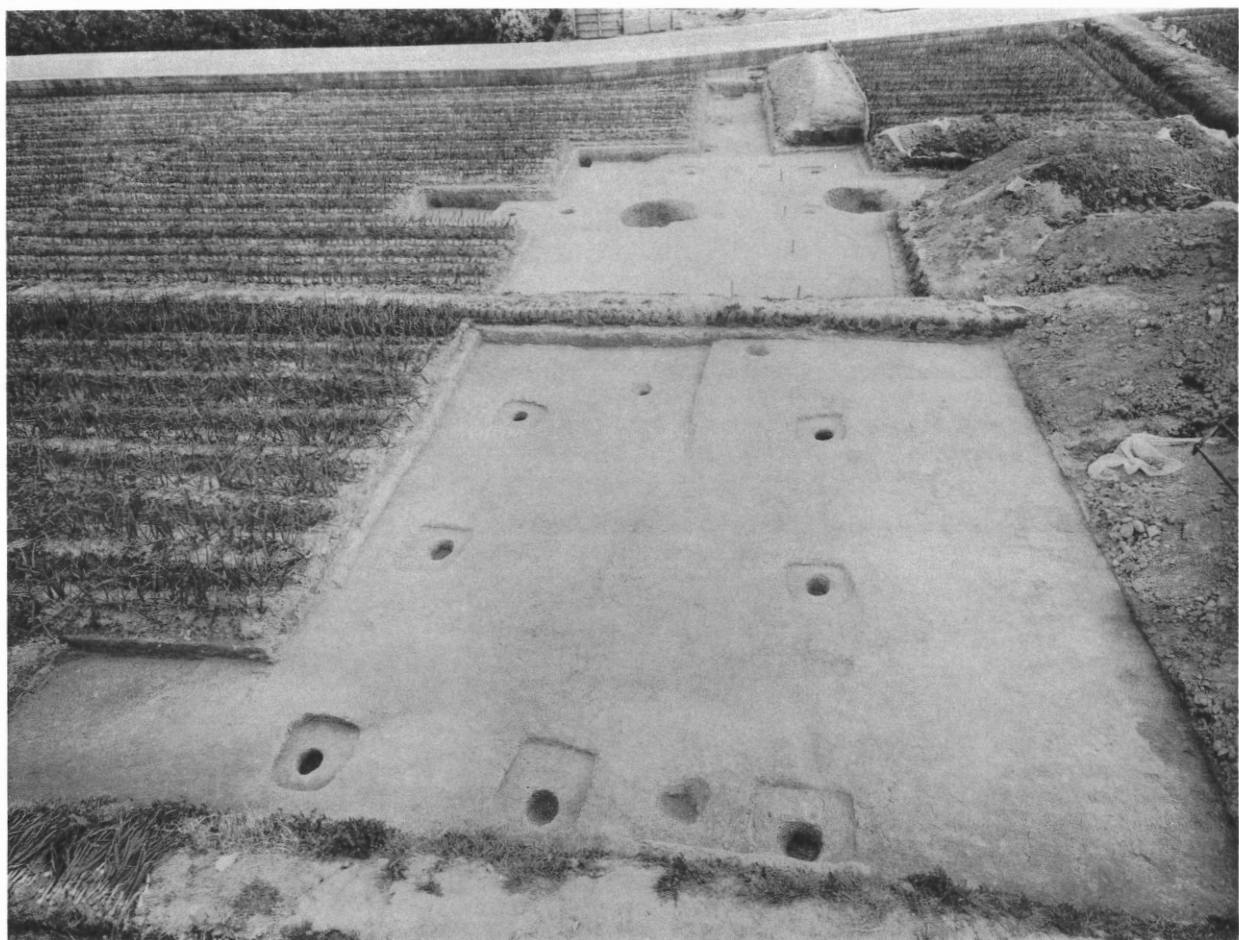
2 塔心礎据え石



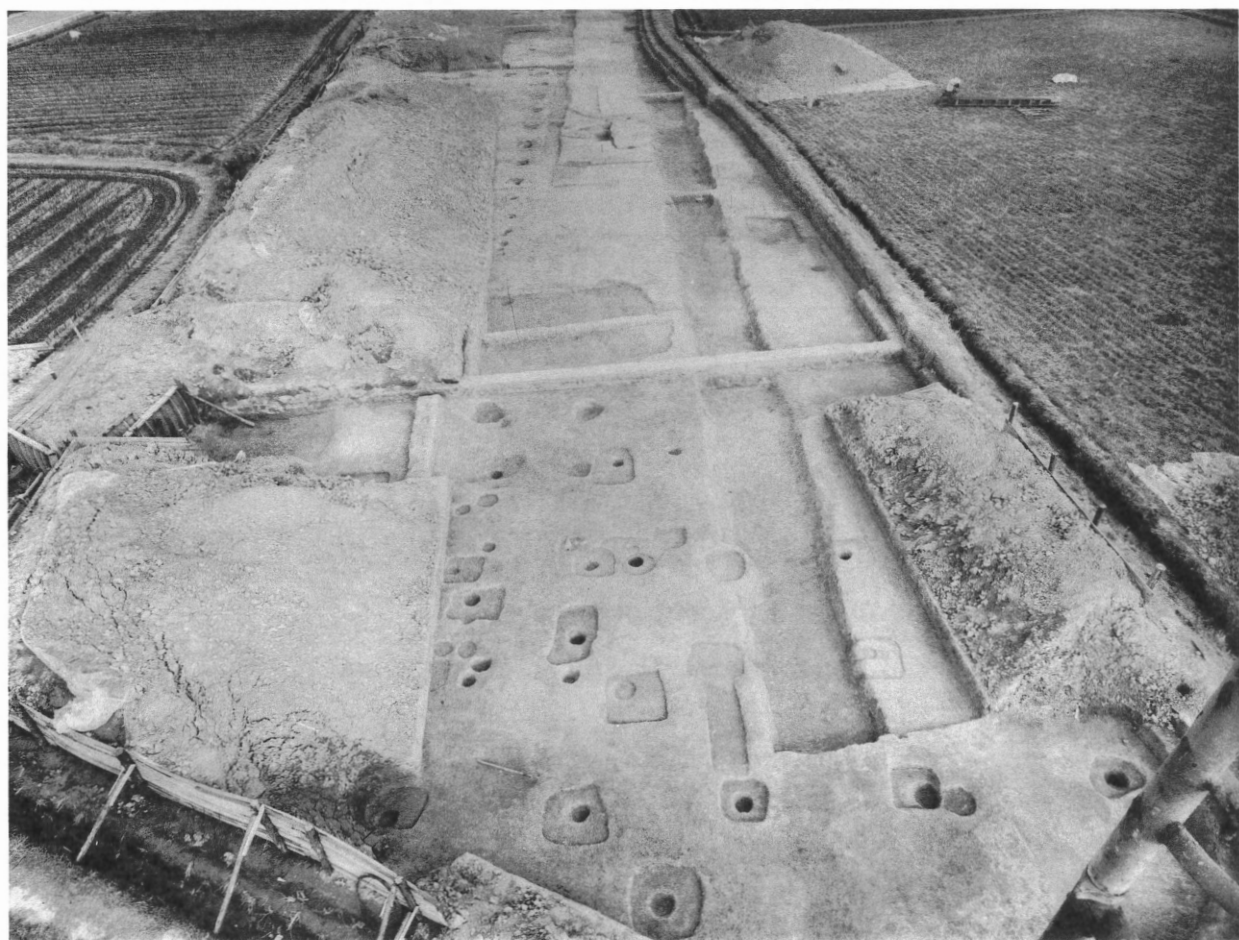
1 塔瓦積基壇



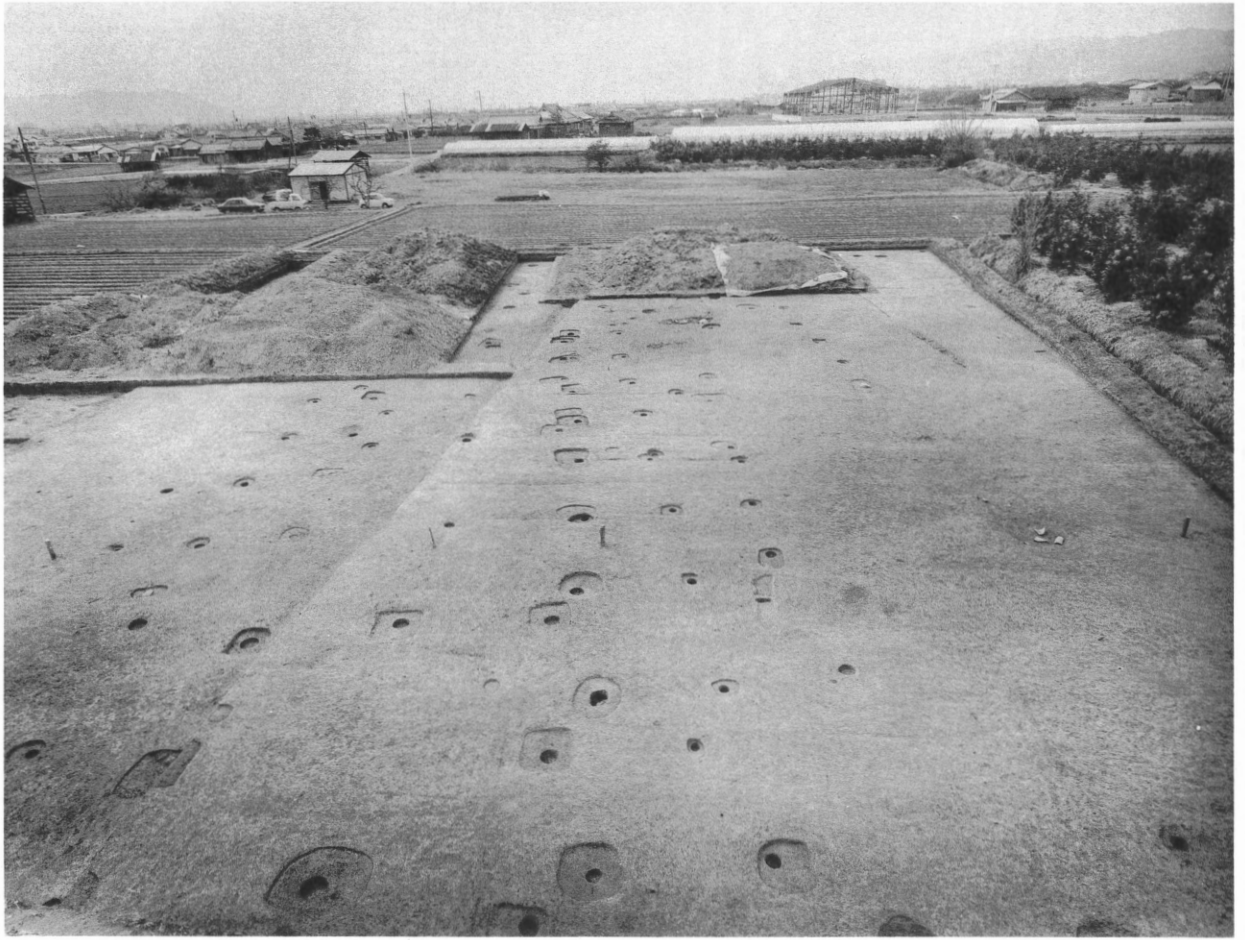
2 塔心礎



1 C区全景



2 F区全景



1 I区全景



2 L · K区



A



B



C



D



E



F



G



H



I



A



B



C



D



1



3



4



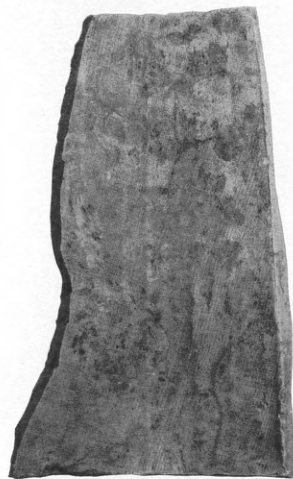
2



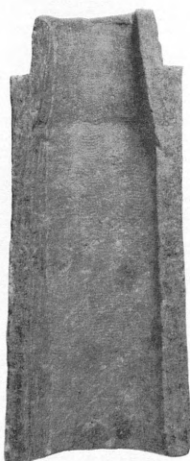
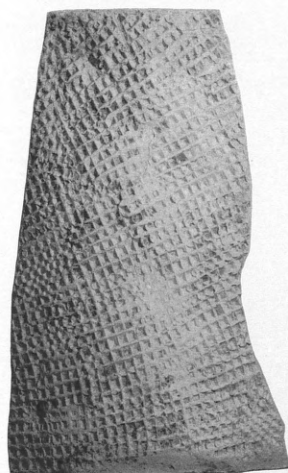
5



6



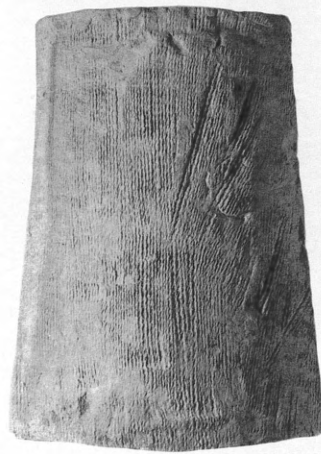
8

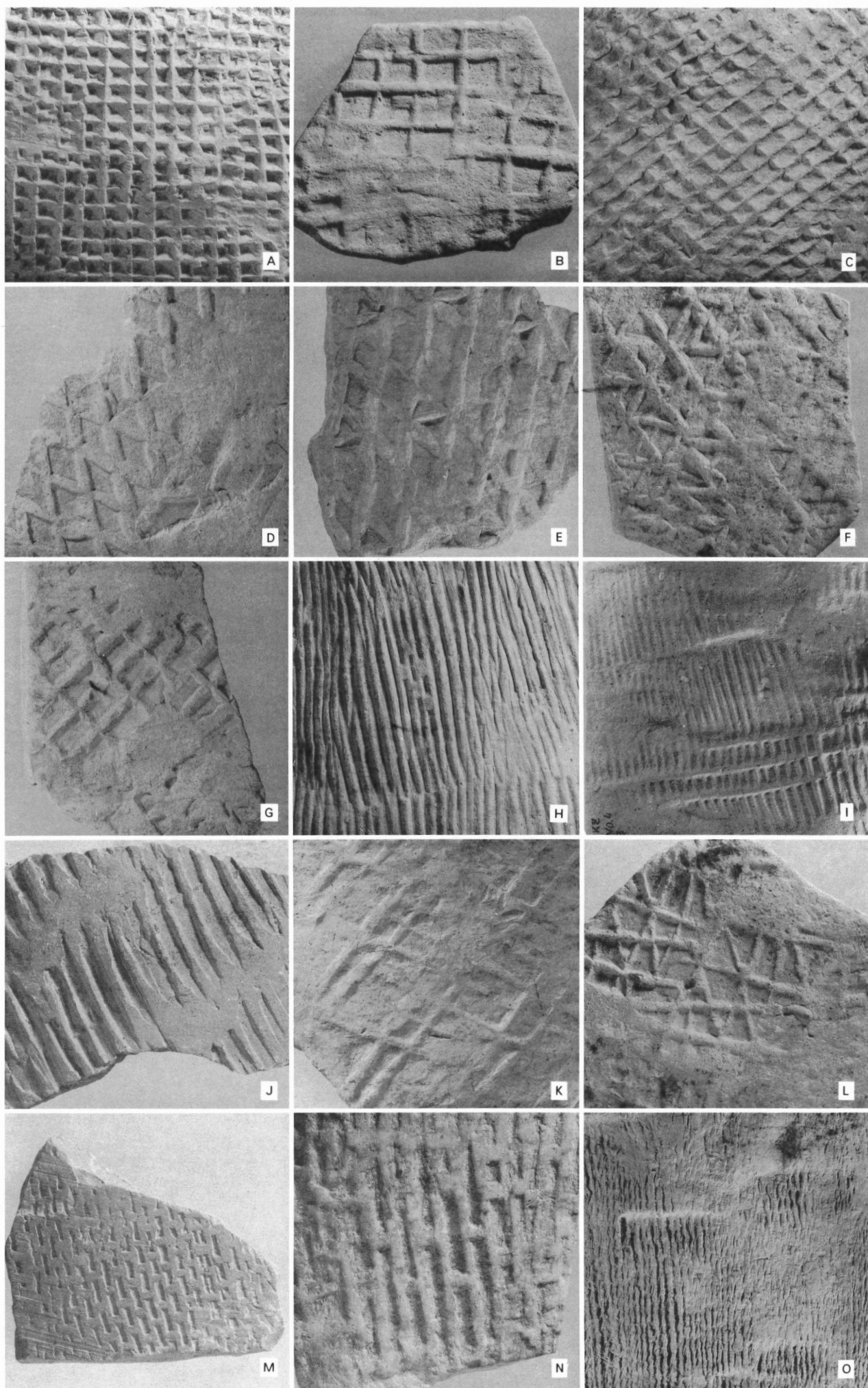


7



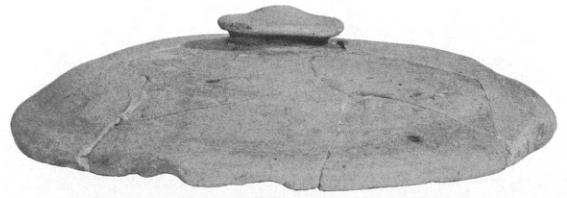
9



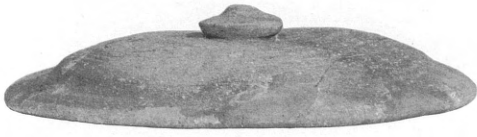




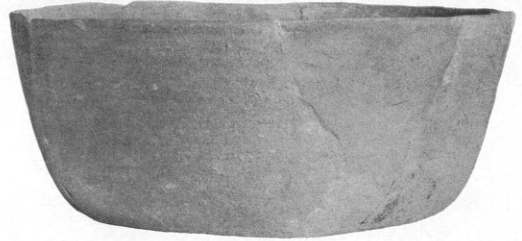
103



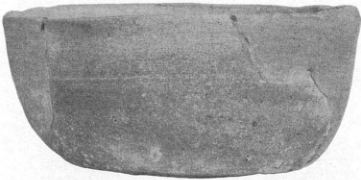
108



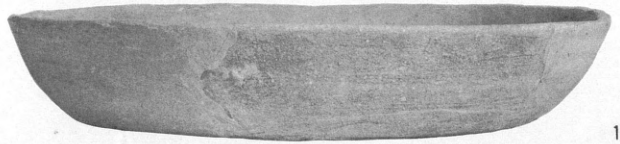
104



125



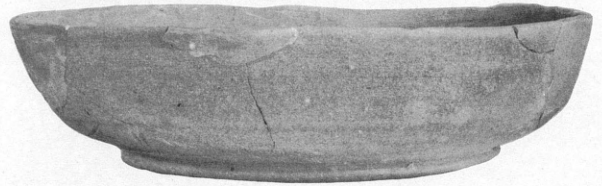
111



128



112



142



118



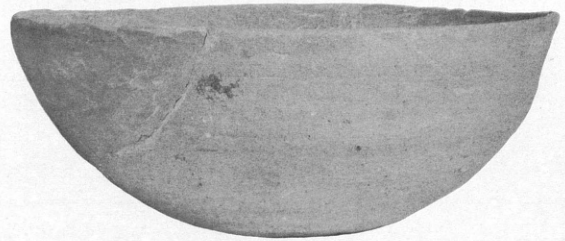
148



132



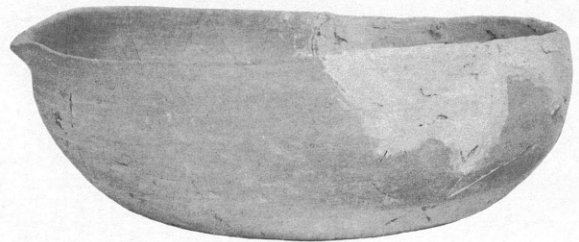
175



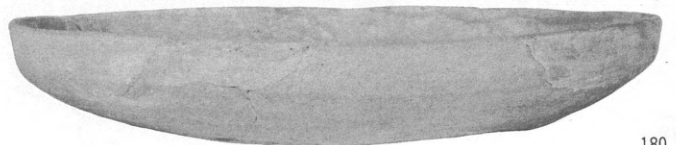
150



153



174



180



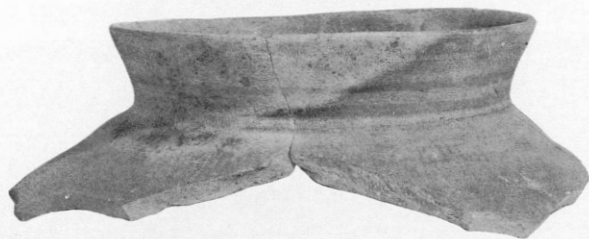
155



154



162



170



176



172



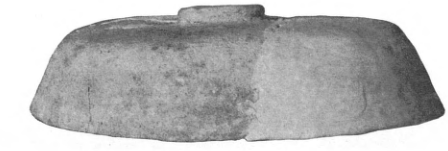
173



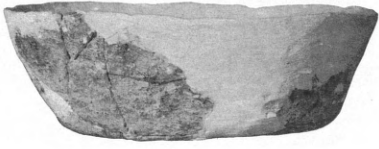
177



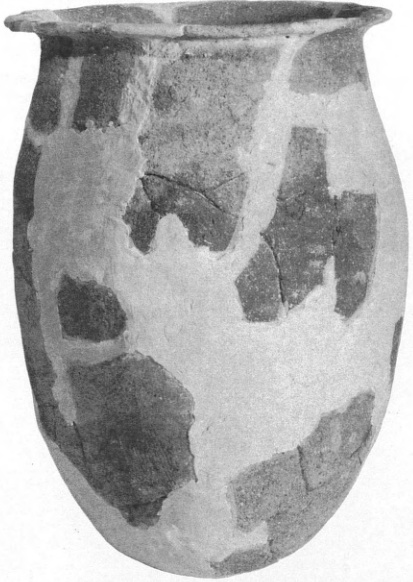
181



6



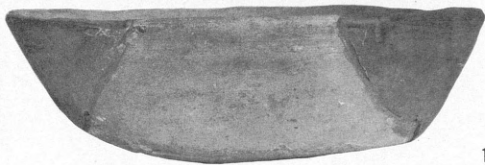
3



12



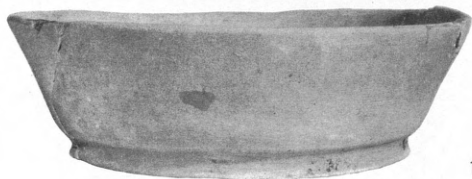
2



114



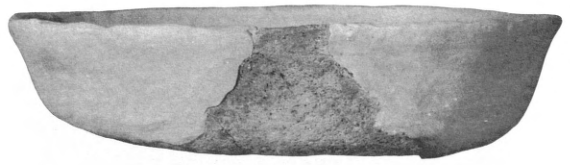
113



143



149



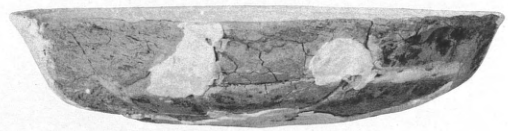
4



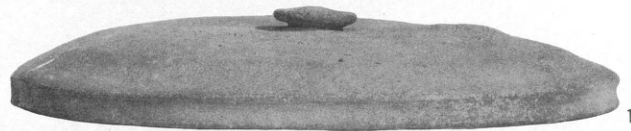
8



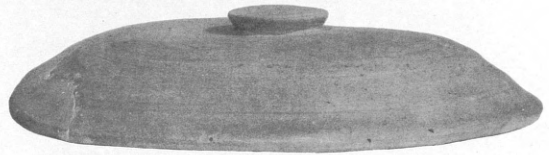
7



1



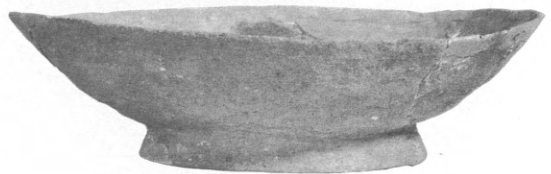
105



102



101



5



601

昭和54年3月25日 印刷

昭和54年3月31日 発行

紀伊国分寺

—紀伊国分寺跡・西国分廃寺の調査—

著作権
所有者 和歌山県教育委員会

発行者 和歌山県教育委員会

印刷者 有限会社 真陽社